

# 東北学院大学 教養学部論集

第156号

2010年7月

## 〔論 文〕

- モラトリアム人間の就職事情……………片 瀬 一 男…… 1
- 高度経済成長期の階層帰属意識  
—— 戦後日本における階層帰属意識に関するノート (1) ——  
……………神 林 博 史…… 25
- Tilesius und Japan (3. Teil)  
Allgemeine Bemerkungen zu Japan und Bibliographie seiner Schriften  
……………Frieder SONDERMANN und Günther STERBA…… 55
- ひな形方式に対する (見かけ上の) 反例……………高 橋 直 彦…… 95
- 中国における労働力市場に関する考察 (2)……………楊 世 英…… 105
- セース・ノーテボームを読む2『熱帯物語』と『騎士の死』 ……吉 用 宣 二…… 119
- The Dao of Clamming ……………Scott WATSON…… 163
- 強磁場による荷電ベクトル場不安定とカオスパターン II 散逸系  
……………高 橋 光 一…… 169

## 〔研究ノート〕

- Context Dependent Linguistic Development :  
Notes from an Elementary School English Program  
……………Tomoko WATANABE & Manabu WATANABE…… 197

## 〔翻 訳〕

- ロバート・スコット, アーノルド・ショア共著  
社会学はなぜ応用されないのか—— 公共政策における  
社会学利用の一研究 (部分訳前半) ……………久 慈 利 武…… 209

東北学院大学学術研究会



目次

〔論文〕

- モラトリアム人間の就職事情……………片瀬一男…… 1
- 高度経済成長期の階層帰属意識  
——戦後日本における階層帰属意識に関するノート(1)——神林博史…… 25
- Tilesius und Japan (3. Teil)  
Allgemeine Bemerkungen zu Japan und Bibliographie seiner Schriften  
……………Frieder SONDERMANN und Güther STERBA…… 55
- ひな形方式に対する(見かけ上の)反例……………高橋直彦…… 95
- 中国における労働力市場に関する考察(2)……………楊世英…… 105
- セース・ノーテボームを読む2『熱帯物語』と『騎士の死』……吉用宣二…… 119
- The Dao of Clamming ……………Scott WATSON…… 163
- 強磁場による荷電ベクトル場不安定とカオスパターンII 散逸系  
……………高橋光一…… 169

〔研究ノート〕

- Context Dependent Linguistic Development :  
Notes from an Elementary School English Program  
……………Tomoko WATANABE & Manabu WATANABE…… 197

〔翻訳〕

- ロバート・スコット, アーノルド・ショア共著  
社会学はなぜ応用されないのか——公共政策における  
社会学利用の一研究(部分訳)……………久慈利武…… 209

●印の著作は東北学院大学学術研究会のホームページから読むことができます。  
 <<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/index.html>>  
 東北学院大学学術研究会のホームページには  
 東北学院大学 <<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/index.shtml>> から,  
 図書館・教育研究施設か, 研究・産官学連携を開き,  
 図書館・教育研究施設 →学術研究会  
 研究・産官学連携 →学術誌 →学術研究会(紀要, 論集)へとお進み下さい。

執筆者紹介（掲載順）

|              |              |
|--------------|--------------|
| 片瀬 一男        | （本学教養学部 教授）  |
| 神林 博史        | （本学教養学部 准教授） |
| フリーダー・ゾンダーマン | （本学教養学部 教授）  |
| 高橋 直彦        | （本学教養学部 准教授） |
| 楊 世英         | （本学教養学部 准教授） |
| 吉用 宣二        | （本学教養学部 教授）  |
| スコット・ワトソン    | （本学教養学部 教授）  |
| 高橋 光一        | （本学教養学部 教授）  |
| 渡部 友子        | （本学教養学部 准教授） |
| 渡部 学         | （本学非常勤 講師）   |
| 久慈 利武        | （本学教養学部 教授）  |

# モラトリアム人間の就職事情

片 瀬 一 男

## 1. 大衆教育社会における「モラトリアムな季節」

### 集団就職から大学進学へ

SF作家を夢見る岩淵和也は、2年の浪人生活後、東京の私大受験を終えて上野駅のホームに立っていた。まだ東北新幹線は開通しておらず、上野から仙台へは特急「ひばり」に乗っても4時間半かかった時代のことである。集団就職列車の運行は彼が高校3年の春に終了し、東北から東京をめざす若者は、中卒の集団就職者から大学受験をめざす高校生や浪人生に代わっていたのである。しかし、まだ改築前の上野駅には、「鈍行列車に揺られ、不安に押しつぶされそうになりながら上野駅に降り立った」多くの中学生たちの「魂の残滓<sup>ざんし</sup>」が漂っていた。和也は上野駅のホームでこの時代をこう考える。

「金の卵」という彼らに与えられた呼称は、彼ら自身のことを指す誉め言葉でもなんでもなく、あくまで雇い主から見て重宝する労働力を形容したものであることを、当時の僕を含めた一般の人々が、現実問題として知るようになってきた時代だった。高度経済成長とともに育った僕らの世代において、急激に高校進学率が上がり、学歴重視の風潮が広まって受験戦争が過熱しだしたのは、それが理由だと思う。中卒じゃどうにもならない、最低でも高校くらいは卒業しておかなきゃ話にならない、と皆が考え始めた時代に生まれ、その波に吞まれて成長してきた最初の世代が、僕たちだったかもしれない。(熊谷, 2010: 255)。

これは、仙台在住の作家・熊谷達也の自伝的小説『モラトリアムな季節』(熊谷, 2010)の一節である。1958年生まれの熊谷自身、宮城県北部の高校を卒業したのち、仙台での浪人生活を経て、東京の私立大学を卒業している。そして、中学校教師などを務めた後、東北のマガギを扱った『邂逅の森』で2004年に直木賞と山本周五郎賞を受賞して作家として認められた。この『モラトリアムな季節』は、熊谷自身の仙台での浪人生活をモチーフに書かれたものと思われるが、ここに引用した一節にもあるように、高度経済成長を経た1970年代後半には、地方にも高学歴化の流れが押し寄せ、地方から東京(あるいは大都市圏)に移動する若者の目的も、集団就職から大学進学に替わっていった。

## 大衆教育社会の成立

荻谷（1995）によれば、1950年代から70年代は日本の「大衆教育社会」が成立した時代であるという。ここでいう「大衆教育社会」とは、いわゆるメリトクラシーの価値が浸透して、大衆的規模で高等教育機関への進学率が上昇した社会を意味する。とりわけ、戦後日本の「大衆教育社会」においては、教育機会の形式的平等が追求された結果、欧米とは異なっており、明確な文化的アイデンティティをもたない学歴エリート、すなわち大衆と文化的に連続したエリートが創出されたという。そして、欧米とは異なり、とりわけ出身階層による教育の機会の実質的な不平等が不問に付せられるという形で「平等信仰」が生まれてきたという。

荻谷（1995：200-201）はまた、こうした日本の「大衆教育社会」は、平等主義を基調としながらも、能力主義の徹底により大衆的規模で業績主義的な心情をもつ協調的な労働者を創出することによって、「高度で柔軟な経済運営」を可能にした、という。さらに、「大衆教育社会」は人々に学歴の重要性も「誤認」させた。すなわち、学歴が社会的地位の達成において果たす役割が、客観的に見て、日本社会では他の先進国にくらべて高いわけではないが、他の国以上に学歴を獲得するか否かによって人生が決定されるかのような「学歴信仰」を生むことで、人々をかえって学歴獲得競争に駆り立てていった。その一方で、「大衆教育社会」はまた、学校を通じて業績主義的に形成される不平等を人々に受容させ、社会の階層性を正当化した。すなわち「大衆教育を通じての大衆社会の誕生が、学校の場で生まれる社会的な不平等を正当的なものとして受容する心理的基盤をつくりあげた」（荻谷、1995：201）という。こうして、1970年代には、いわゆる「中流意識」が大衆的規模で形成されることになったのである。SF作家を夢見た青年・岩淵和也もまた、こうした「大衆教育社会」で学歴獲得に煽られた「最初の世代」として、結果的には3年間の浪人生活という「モラトリアムな季節」を体験し、東京の私立大学へと進学して行ったのである。

## 2. 戦後における高学歴化と学歴インフレの進行

### 高学歴化の局面

こうした「大衆教育社会」の成立をもたらした戦後日本の教育拡大については、尾嶋（2002）が4つの局面に区分して記述している。それによると（図1参照）、まず第Ⅰ期（高等教育進学年が1954-64年）は、戦前生まれのコーホートが進学時期を迎えた時代で、高校および大学・短大進学率が緩やかな上昇を続けたが、男女間の格差が比較的にみられた時期にあたる。第Ⅱ期（同1965-79年）は、「団塊の世代」を先頭にして、急激に進学率が高まる「進学率上昇の第1局面」（尾嶋、2002：128）である。この時期の終わりには、高校進学率は男女

とも9割を越え、高等教育進学率も男子で4割、女子で3割を超えた。その背景には、高度経済成長にともなう労働力需要の高まりや、「団塊の世代」の進学期を迎えた高等教育政策の転換があった<sup>1</sup>。ただし、この時期における女子の高等教育進学率の上昇を支えたのは、大学進学よりも短大進学であり、「短大＝女子向き進路」というジェンダー・トラックが確立した時期である。これに対して、第Ⅲ期（同1980-89年）は、高等教育の抑制政策のもとで進学率が停滞する時期である。高等教育進学率は、とくに男子で停滞もしくは低下の様相をみせたが、女子では緩やかに上昇傾向を示した。最後の第Ⅳ期（同1990-99年）は、第二次ベビーブーム世代が大学・短大へと進学する時期に当たり、臨時定員増や大学・学部の新設により、大学の収容定員が急増している。そして、とくに1995年までは女子の高等教育進学率が高まるが、「それをリードしたのは第Ⅱ期とは異なり、四年制大学への進学であった」（尾嶋、2002：129）とされる。これが戦後日本における高学歴化の第2の局面である。

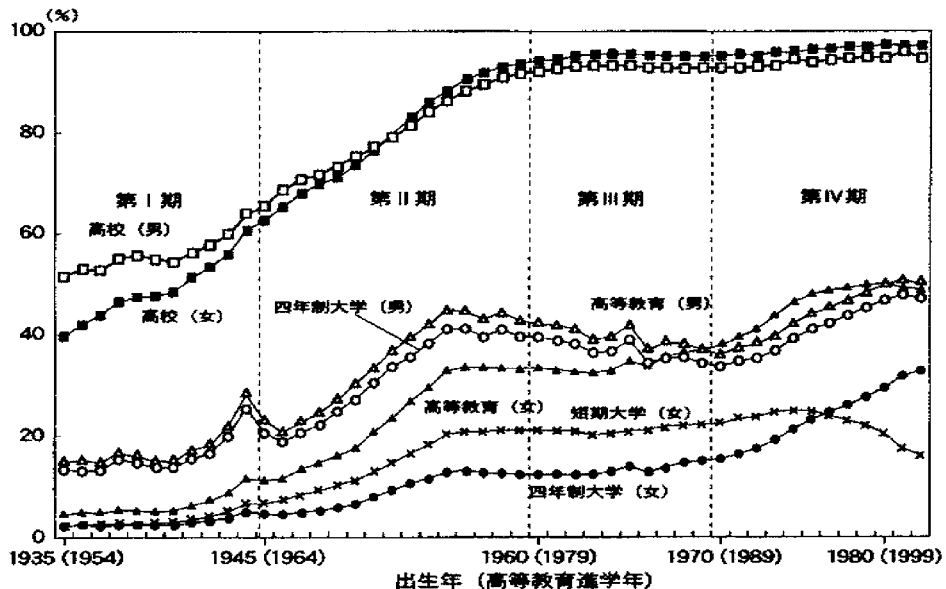


図1 進学率の推移  
出典：尾嶋（2002）：128

<sup>1</sup> 具体的には、ベビーブーマーの進学対策として、1962年に私立大学・短大の学部・学科の新増設が許認可制から届出制になったうえに、国がこうした私立大学・短大に対して定員増を求めたことが指摘されている（米澤、2008：121）。こうして戦後の高等教育の拡大は、政策的にも私学セクターを中心に成し遂げられることになる。

## 学歴インフレの進行

こうして戦後の日本社会は、1970年代を通じて急速な高学歴化を実現してきたが、その一方で、高等教育卒業者の過剰供給による学歴の希少価値の低下、すなわち学歴インフレの進行も、「戦後における進学率上昇の第1局面」(尾嶋, 2002: 128)である第II期(高等教育進学年が1965-79年)の頃から指摘されてきた。たとえば、潮木(1978)によれば、1960年当時、全体で290万人いた大卒労働力は、1970年には554万人と増加している。そして、各職業の学歴構成が60年代当時とまったく変わらなかったとした場合、職業構造の変動によってもたらされる大卒者の雇用機会の拡大は159万人にとどまり、現実が発生した大卒者の増加分の6割程度しか吸収できなかった。その結果、日本の大学卒業者の入職先を1960年と70年で比較してみると、従来の大卒者の入職先であった専門的・技術的職業や事務的職業が減少し、販売的職業が大幅に増加した。そして、1970年代には増加する大卒者のうち専門的・技術的職業や、将来的に管理職に昇進しやすい事務職に入職できた者は6割程度に留まっている。さらにこの時期、急増した大卒者のなかには、従来は中卒者や高卒者が占めていたブルーカラー的職業に吸収される者も現れ始めた。実際、1960年にはブルーカラー的職業のうち大卒者の占める比率は1.3%にすぎなかったが、ブルーカラー的職業における大卒者比率がこのままだったと仮定すると、70年までの10年間で「絶対数で172万人増加したとしても、この程度の増加では、せいぜい2万人程度の大卒者しか吸収されなかったはずである。ところが現実には、その16倍の33万人の大卒者が、この職業で吸収されている」(潮木, 1978: 97)。

また所得の点でも70年代には高等教育卒業者と非卒業者の賃金格差は縮小している。さらにアメリカと学歴別生涯賃金を比較してみても、日本の学歴間の格差は小さく、かつその縮小の進行も早い。その結果、日本の高等教育の学歴収益率は、日本の高等教育の拡大が学費の高い私学セクターを中心に拡大してきたこともあり、1960年代の時点ですでに9.0%と低い(アメリカは13.6、イギリスは12.0)<sup>2</sup>。

こうした大卒者の伝統的な労働市場の崩壊にともなって、大卒者の職業観も変容せざるを得なくなった。そして、高学歴社会における新しい職業観の方向性の1つとして、潮木(1978: 133-144)は、「脱学歴化」もしくは「学職分離」とでも呼ぶべき志向性を指摘して

<sup>2</sup> なお、潮木(1978)によれば、高等教育の収益率は、国民一人当たりの国民所得や高等教育普及率と関連を示し、経済発展が遅れて所得の少ないガーナ(37.0)、メキシコ(29.0)などで高く、また人口10万人当たりの高等教育在籍者が多いノルウェー(7.7)やイスラエル(8.0)で低い。つまり、大学在籍者の少ない発展途上国ほど、学歴の希少価値によって経済収益率は高くなる。しかし、実際には高等教育の収益率は各社会の学歴観・平等観にも影響され、北欧のように再配分政策によって平等化がはかれる場合には高等教育の収益率が低下するが、個人が教育で獲得した知識・技能が私有財産とみなされ、個人に帰属される社会ほど収益率も高くなるという(潮木1978)。



いる。それは、大卒学歴が自動的な昇進を保障するという可能性に見切りをつけ、大学での専攻分野とはまったく関係ないが、何らかの形で自律性を確保できる仕事に就いて満足感を得るという選択肢（たとえば、大学で哲学を専攻したがタクシー運転手になる）である。こうして、学歴インフレが進行すると、ある種の「学歴離れ」が進行することが、すでにこの時点で予想されていたのである。

### 解体する教養主義

こうした大学の大衆化や学歴インフレの進行が「学生界」にもたらしたものは、竹内（2003）によれば、規範としての教養主義の「没落」であった。竹内（2003）によると、そもそも「教養主義」は日本では戦前（とくに大正期）の旧制高校に起源をもつが、この旧制高校に教師を供給したのが、主として帝国大学の文学部であった。竹内（2003）は、この帝国大学文学部学生の出身背景を検討した結果、他学部にくらべて農村出身者の割合が高かったことに注目する。このことからわかるように、日本の文学部は伝統的に「地方の農村に親和性が高い学部」であった。そのため、彼らは農民的な刻苦勉励のエートスを背景に、西欧的教養を身につけることによって、大衆との差異化を図ろうとした。ところが、帝国大学文学部卒業生の就職先は、法学部や経済学部、工学部等に比べても制約されており、地方の旧制高校の教職が主たる就職先であった。そのため、教養主義への志向の強い文学部出身者が、旧制高校の教員として地方の旧制高校へと教養主義を伝播させたという。つまり、日本の教養主義とは、地方出身の青年が都市部において西欧的知識の受容することで、地方の農民や都市部の大衆に対して文化的に卓越化する戦略となっていたのである。こうして西欧文化を志向する「教養主義の輝きは農村的なエートスを前提にしながらの飛翔感であった」（竹内、2003：170）のである。

したがって、日本の教養主義は、ヨーロッパのように階級的基盤をもつ「相続文化資本」ではなく、学校文化に基盤を置く「獲得文化資本」であった。しかし、それは高田（2005）も指摘するように、「ブルジョアの視点からは、身のほど知らずの上昇志向の落ち着きのなさ」と否定的にとらえられ、また「庶民的存在には、自分たちを置き去りにする裏切り者のエゴイズムが非難」されるという不安定な位置を占めるものであった。こうした不安定な基盤ゆえに、戦後、教養主義は「没落期」を迎える。竹内（2003）によれば、戦後の高度経済成長は、地方の全般的都市化を推し進めた結果、都市と農村の文化格差が消失し、学生がエリートでなくなったとき、教養も意味を失ったとする。実際、教養主義の出自たる農業人口は、昭和初年には5割を超えていたが、1960年には33%、78年には14%となった。また、1965年には第二種兼業農家の割合が専業農家を超えた。そして、この時期、大衆消費財の普及に

より農村と都市の生活様式の格差は縮小し、またメディアの普及によって日本と西洋との文化格差も消滅しつつあった。こうした状況では、当時、マルクス主義や全共闘世代から、教養主義の非政治主義的な文化主義が糾弾されたこともあって、もはや西洋的知識を身につけることは文化的な卓越化戦略とはならなくなったのである（竹内, 1999）。

くわえて、先にもみたように、70年代に学歴インフレによって大学卒業の学歴が希少価値を失ったことが教養主義の解体を加速した。大卒者は、学歴貴族（竹内, 1999）すなわち官庁や企業の幹部候補生として期待されるエリートから、一般職員として大量に採用され、下位の職位に滞留した後に徐々に昇進していく大衆的サラリーマンになった。このように大衆的サラリーマンが予定された学生にとって、学歴エリート文化である特権的な教養主義は、もはや収益を見込んで投資すべき文化資本ではなくなったのである。竹内（1999, 2003）によれば、日本でも60年代末の学生叛乱は、こうした大衆化しつつあった学生が教養主義に向けたルサンチマンの捌け口になっていたという。しかし、60年代末の「全共闘世代」が教養主義に対するアンビバレンスを抱えた「家庭内（大学内）暴力」世代であったら、1970年代以降のポスト全共闘世代— 当時は「しらけ世代」「モラトリアム人間」とも呼ばれた— は、そもそも教養書や思想書には初めから眼を向けない「家出」世代であった（もっとも大卒の学歴だけは必要としていたから「家庭内別居」世代とも言われる）。竹内（1999）は、この時期の東京大学・京都大学の学生読書調査の分析から、いわゆるエリート大学でも70年代後半に明確に教養書・思想書から娯楽書・情報誌へと読書傾向の移行が生じたことを指摘した。こうした教養主義的志向を欠いた青年文化が、都市部の大学生を中心に成立していったのである。

### 3. 語られ始めた「青年問題」

#### 「モラトリアムの制度化」としての高学歴化

こうして1970年代は、進学率の上昇と若年層の進学移動によって、都市部を中心に「青年文化」が形成された時期に当たる。しかも、学歴インフレによって大学生もエリート意識を喪失し、大衆的なメディアの影響をつうじて消費文化を受け入れていった。しかし、その一方で、この時代はまだ1960年代後半に日本の大学を席卷した「学生叛乱」の残滓も漂っていた。1970年代は青年層自体が「政治の季節」から「消費の季節」の移行途上にあったとみることができる。

こうした青年層が置かれた状況を背景に、この時期はまた、社会学において本格的に「青年問題」が語り始められた時代である。この問題が日本の社会学で語られ始めた嚆矢として

は、1970年の第43回日本社会学会大会におけるシンポジウム「現代の青年問題」がある。このシンポジウムをもとに、翌71年には日本社会学会の機関誌『社会学評論』（第22巻2号）において、小特集「青年問題への視角」が組まれた。

この特集の序論は、「青年問題は論争的なテーマである」（塩原、1971：2）という一文で始まる。「青年問題」がとくに論争的にならざるをえない理由の1つとして、塩原（1971）があげているのは、1960年代末から1970年初頭の「青年問題」が世代闘争によって政治的に先鋭化しつつあることである。その結果、「階級を階級闘争から過程的に定義しうるように、世代闘争から対自的な世代を定義しうる」（塩原、1971：2）という状況が当時はあったのである。そして、理念だけでなく利害状況においても、青年世代は年長世代に闘争を挑みつつある、という。ただし、ここで塩原（1971）が主として念頭においている「青年」とは大学生であり、世代闘争も実際には60年代後半に日本の大学を席卷した大学叛乱であったと考えられる。

そして、前年のシンポジウムで仲村祥一が提示した青年論の3つの類型に依拠しながら、塩原（1971）は青年問題へのアプローチの仕方を考察している。それによると、青年研究へのアプローチは、① 労働の問題としての青年論（階級論的青年論）、② 文化の問題としての青年論（世代論的青年論）、③ 政治の問題としての青年論（時代論的青年論）に類型化可能であるという。このうち、① 労働の問題としての青年論（または階層・階級問題としての青年論）は、1960年代から70年代にはリアリティを帯びていた。高度経済成長がもたらした社会的な歪みは公害問題にとどまらず、若年労働者の生活にも及んでいたのである。実際、見田（1979）は、高度成長期に地方（青森）から東京に集団就職で上京した青年N・Nが、無差別殺人に至る生活史を「まなざしの地獄」としてリアルに描き出している。したがって、この時期は「青年理解において、労働の末端に位置づけられる勤労青年を射程に入れない「青年問題」は逆にリアリティを欠く」ことになっていたのである（岩佐、1993：10）。また③ 政治の問題としての青年論（時代論的青年論）もまた1960年代的問題であろう。1968年の東大闘争をピークとする青年の異議申し立ては、「政治の季節」とも言うべき様相を青年問題に与えていた。しかし、70年代に入って学生運動が退潮に向かうと、青年論は、「異議申し立て」の嵐が過ぎ去ったあとに」（小谷、1993：2）という問題設定を迫られることになる。

こうした課題の転換は、小谷（1993）の表現を借りると、「青年」研究から「若者」論への視座の転換でもある。すなわち、「青年（adolescence）」とは発達段階の1つで、青年期が子ども段階から成人段階への移行期としてとらえられるのに対して、「若者（youth）」とは、そうした発達段階というより、消費社会や情報化社会のなかで成人世代とは異なる独自の文

化（若者文化）の担い手としてとらえられる。これは塩原（1971）の類型化で言えば、②文化の問題としての青年論（世代論的青年論）という問題設定である。1970年代の青年論は当初、精神分析的自我論に依拠する発達心理学者エリクソン（Erikson, 1968=1973）のアイデンティティ論の枠組みにもとづく青年論として出発したが（片瀬, 1993）、やがて若者文化論として展開していくことになる。

そもそも、この時期に青年問題へ注目が集まった背景には、先に触れた1970年代の高等学歴化、とりわけ高等教育進学率の急増があった。エリクソン（Erikson, 1959=1973）によれば、かつての「モラトリアム」は、一部の優秀な青年（たとえば、ルターやバーナード・ショウ）自らの修練の期間を「遍歴」という形で自前で作り出すものであったが、この時期の高等学歴化の進展（大学のマス化）は、高等教育を通じて大衆的規模で経験されるモラトリアム——いわば高等教育によって「制度化されたモラトリアム」を準備したのである（小谷, 1993: 56）。しかし、このモラトリアムは、1970年代を通じて変容し、これによって青年問題は若者文化の問題として捉えられるようになったのである。

#### モラトリアムの変容言説

当時、こうした日本社会における「モラトリアム」の質的転換を指摘したものに、エリクソン（Erikson, 1968=1973）のアイデンティティ論を日本に紹介した1人でもある小此木（1978: 8-75）の「モラトリアム人間論」があった。小此木（1978）は、エリクソンの発達理論を日本の若者研究によって換骨奪胎し、発達論的な青年研究を世代文化論的な若者論へと転換していった。エリクソンにとって「モラトリアム（心理社会的モラトリアム）」とは青年期の発達課題とされるアイデンティティを確立するための「猶予期間」を意味していた。この「モラトリアム」期に青年は、さまざまな役割実験（社会的遊び）を試行することで、自分にふさわしい成人役割を見出し（たとえば職業の選択）、自己のアイデンティティを確定していくものとされた。そして、アイデンティティを確立できない「アイデンティティ拡散」または「役割混乱」の状態は、エリクソンによって「病理状態」として記述された。

ところが、こうした「古典的モラトリアム心理」は、小此木（1978）によれば、1960年代後半から70年代の日本社会において、「新しいモラトリアム心理」へと変容していったという。それは、いわば「アイデンティティ拡散」が常態化した心理である。しかも未決定もしくは不関与の状態が多く若者のスタイルとして共有され、変動しつつある社会に対応するのに適合的なものと肯定的に評価されたという点で、フロム（1941=1951）らのいう「社会的性格」となったという。ここでは自立していないという「半人前意識」は新しいものを受容する「全能感」に、禁欲的な修業感覚は解放的な遊び感覚に、また自己探求や自立への

渴望は意欲の欠如や「しらけ」の態度へとって代わった。しかも未決定でいることが、エリクソン理論を継承したリフトン (Lifton, 1970=1971) のいう「プロテウスの人間」<sup>3</sup> と同様、変動著しい現代社会に適合的な社会的性格であることから、それは成人世代にも浸透していった、とされる (小此木, 1978)。

こうした「モラトリアム心理」の変容をもたらした要因として、小此木 (1978) は2つのものに注目する。1つは消費社会や情報化を背景とした若者文化の成立であり、もう1つは高学歴化に伴う青年期の延長すなわち「制度化されたモラトリアム」である。

まず若者文化 (小此木は青年文化に代えて若者文化と呼び、この時期以降、この用語が定着する) についてみると、エリクソン (Erikson, 1968=1973) のいう古典的な「モラトリアム」概念が社会的現実から一步距離をおいて (これがエリクソンのいう「社会的遊び」のニュアンスでもある)、将来に向けて自我を確立する「猶予期間」であったのに対して、新しい「モラトリアム」意識では、こうした将来への志向性や目的意識は希薄化し、社会的現実と対峙するというより、これを受動的に受け入れるようになった。その背景にあったのは、産業化の進行によって、未決定という「モラトリアム」の状態が新しいものを受け入れ、創造するものとして価値が上昇したことであり、豊かな消費社会において青年層が商品の消費者として注目されたことである、という (小此木, 1978: 21-23)。

他方、高学歴化はかつては一部のエリート青年の特権であったモラトリアムを高等教育への進学という形で大衆の規模で実現し、制度化した。この時期はまた高等教育進学率の上昇によって受験競争が深刻化した時代でもあった。そして、受験競争が終わると、大学の大衆化によって豊かな消費文化を享受できる大学生活がまっていた。小此木 (1978: 31) の表現を借りると、そこには「高学歴社会における大学入学までの過酷な進学競争と、大学時代の平和なモラトリアム (猶予期間)」の「相反並存」があった。こうしたなかで、当時、注目されたのが過酷な受験競争への反動としての「五月病」や「スチューデント・アパシー」であったという。過酷な受験競争から「居心地のよい」モラトリアムに移行すると、再び企業社会という選抜社会に出るのを嫌がり、留年を繰り返す学生たち、また社会に出たとしても企業の中で「内なるモラトリアム」を抱えたまま当事者意識をもたない若者たち——こ

<sup>3</sup> プロテウスとは、ギリシア神話に登場する海神・ポセイドンの従者で、予言と変身を得意とする老人である。エリクソン門下のリフトンは、日本の全共闘世代のライフコースを研究する中で、彼らがその後、政財界や学界で成功していったことに着目し、変動著しい現代社会にあっては、プロテウスのように変幻自在に姿を変える「プロテウスの人間」こそ、適応的な自我のあり方であるとした (Lifton, 1970=1971)。小此木 (1978) は、こうした「プロテウスの人間」を「自己実現型のモラトリアム人間」と呼んだ。そして、1977年の参議院選挙で躍進した社会市民連合や革自連などが無党派層の支持を得たことを念頭に、これからはこうしたプロテウスのな心性をもった無党派層によって政治状況が流動化すると予測している。

うした「モラトリアム人間像」が精神分析語を用いた言説によって構築されたのである<sup>4</sup>。

#### 4. 「モラトリアム人間の時代」の実相

##### モラトリアムな季節の雇用調整

では、こうした心理主義的な「モラトリアム人間」言説は、この時代の若者の実像をどれだけ正確にとらえていただろうか。たしかに1960年代後半から70年代は、いわゆる「団塊の世代」の大学進学期を迎えて大学入学定員の大幅増によって、先にみたように急速な高等教育進学率の増大期であった。したがって、大学生活という「モラトリアム」が大衆的規模で「制度化」された時期には間違いない。しかし、そこからたとえば就職しない若者、留年する大学生が「モラトリアム心理」を社会的性格といえるほど広範に共有していたと結論づけることができるだろうか。

というのも、1970年代はドルショックと2度にわたるオイルショックによって高度経済成長が終焉を迎え<sup>5</sup>、生産設備や労働力の過剰を抱えた日本企業が利益率の確保のため、「減量経営」の名のもとに「雇用調整」を行ってきた時期にもあたるからである（中村1986=2007, 武田2009）。この「雇用調整」は、まずは定年退職者の後任を採用しないで労働者数を減らしていくという方法で行われた。これ以外にも中村（1986=2007: 328）によれば、「雇用調整」のために、早期希望退職による人員整理、人員過剰となった工場の労働者の配置転換や関連会社への出向、パートタイマーなど期限つき雇用者の雇い止めといった方法がとられたが、やはりもっとも効果的な方法は新規雇用の削減であった、という。このことは、当然のことながら、おりしも増加してきた新規大卒者の就職難をもたらす。たとえば、この当時、潮木（1978）は次のように述べている。

1973年のオイルショック以来、日本経済はにわかに変調をきたし、それとともに新卒者の採用を手びかえる企業が続出しはじめた。労働省の調査でも、ここどころ大卒者の採用を中止した大企業はかなりの数にのぼり、求人数はひとところに比べ大幅に減少してしまった（潮木, 1978: 85）。

<sup>4</sup> また笠原（1977, 1984）による「アバシー・シンドローム」という議論も、高学歴化によって延長された青年期にある若者の「しらけ」「態度未決定」を「精神病理」として論じた。そこで問題になったのは、進路や目標を決定しないまま就職を先延ばしし、留年を繰り返す大学生たちであった。

<sup>5</sup> 1970年代は、1971年のニクソン声明によるドルショックとその後、構築されたスミソニアン体制の崩壊によって、外為市場が変動相場制に移行したために、日本は円高による輸出の不振＝国際収支の悪化、経済不況を経験した。さらに、当時の田中角栄内閣による積極政策（「日本列島改造論」）や金融緩和政策に加えて、輸入物価の上昇によるインフレも続いていた。ここに2つのオイルショック（1973, 76年）が重なり、これによって日本の高度経済成長が終わった、とされる（中村, 1986=2007, 武田, 2009）。実際、1974年の実質成長率はマイナス（-1.4%）を経験している。また1972年のローマクラブ・レポートは、それまでの世界がたどってきた高度成長路線に対し、頻発する公害問題を踏まえて、地球環境の制約という観点から疑義を提起した。

ここで、この引用の冒頭部分「1973年のオイルショック以来」を「1992年のバブル崩壊以来」と変えてみても違和感がないことに注目しておこう。本田（2006）が明らかにしたように、2000年代の「モラトリアム人間」とも言うべき「ニート」の実態が、「働く意欲のない若者」ではなく「求職型無業者＝失業者」であって、そのなかには少なからぬ「進学・留学準備」「資格取得準備」中の者が含まれている。彼らの多くはバブル経済崩壊後の長期不況による「雇用調整」——それは日本型長期雇用の恩恵を受けている先行世代の「既得権益」を守るものでもあった——の結果として「働けない」のであって、働く意欲を欠いているのではなかった。それにもかかわらず、現代の若者には「人間力」が欠如している（厚生労働省、2006）、依存性や自己愛が強いために就職を怖がる（香山、2004）といった心理主義的な言説による「若者バッシング」（後藤、2006）がなされているのである。この点からすると、こうした2000年代の「ニート」と同様、1970年代の「モラトリアム人間」論も、長期不況による労働市場の逼迫という経済問題から生じた就職難を若者の「心」の問題に帰責し、社会経済問題を個人化した「はしり」である可能性もでてくる。そこで、以下では当時の大卒者のデータから改めて「モラトリアム人間の就職事情」を検討してみよう。

### 大学卒業者の就職状況

まず、図2には1963年から2009年までの有効求人倍率の推移を示した。これによると、有効求人倍率は高度経済成長期後期の1967年から1倍を超えて上昇し続け、1973年に戦後最大の1.76倍を記録した後に急低下し、1978年には0.56倍で底を打っている。その後、1986年までは0.60～0.67という低い水準に停滞したのち、87年から上昇に転じ90年には1.43という戦後2番目のピークを迎える。いわゆる「バブル経済」の到来である。しかし、その後は求人倍率は再び反転し、1999年に0.49と底を打ち「超氷河期」を迎える。その後、2004年から07年までは景気の一時的な回復と「団塊世代」の大量退職期（いわゆる「2007年問題」）を向かえ、回復基調にあったものの、2008年秋の「リーマンショック」による世界同時不況によって急転下落し、2009年には0.45を記録して、「超氷河期の再来」を迎えているのである。ここで確認しておきたいことは、「モラトリアム人間の時代」ともいうべき1970年代後半の実質有効求人倍率は、ドルショックやオイルショックの直撃による不況期を反映して、バブル崩壊後の長期不況とほぼ同じ水準すなわち0.5から0.7倍程度で停滞していたことである。

他方、図3には、1955年度から2008年度までの大学卒業者の進路構成の推移をみたものである。この図からは、まず1955年には卒業後進路が「無業・その他」<sup>6</sup>という者が17.6%あ

<sup>6</sup> 就職者計は、1955年度から69年度までは就職者+就職進学者+インターン、70年度から2001年

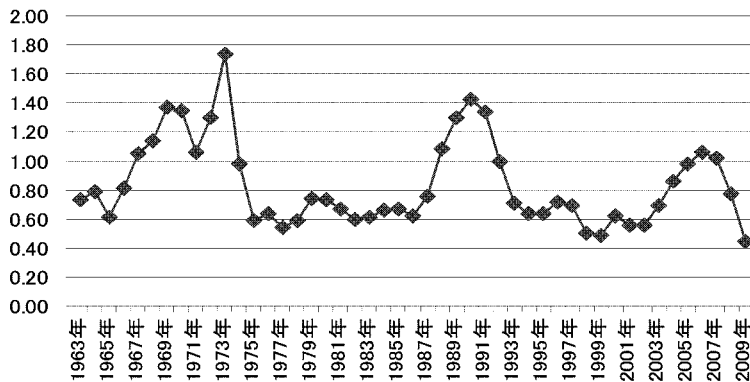


図2 有効求人倍率の推移  
 出典：厚生労働省「政府統計の総合窓口」  
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001063675>

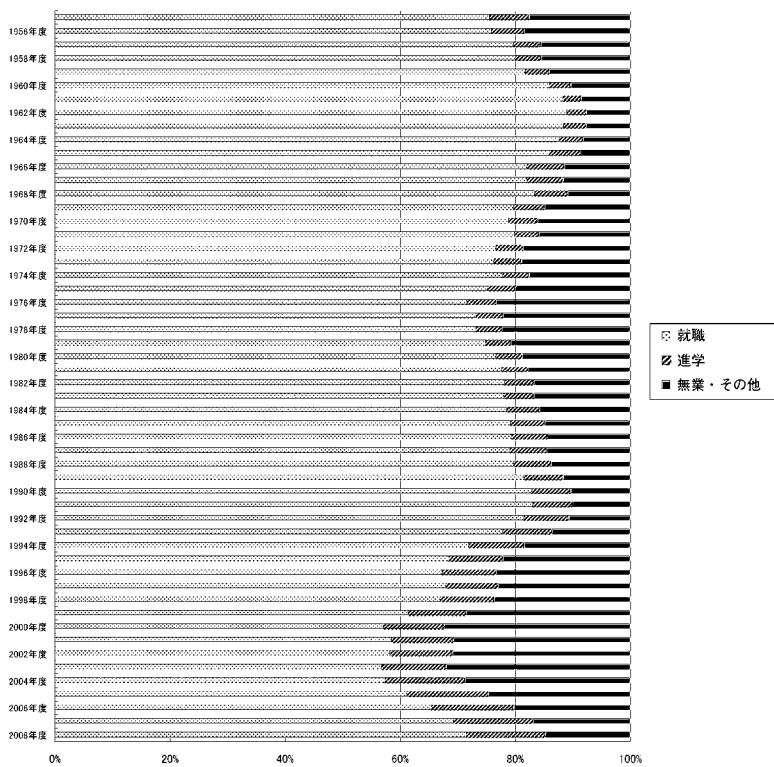


図3 大卒者の進路類型の推移  
 出典：文部科学省（文部省）『学校基本調査 高等教育編』各年次

度までは就職者+就職進学者+臨床研修医，2002年度以降は就職者+就職進学者+臨床研修医+「進学者」のうち就職している者をそれぞれ意味する。また「無業その他」は，1955年度から87年度までは無業者+死亡者+不詳，88年度以降は無業+一時的就業+その他を意味している。一時的就業が加わっているため，88年度以降は「無業その他」が多くなっていると考えられる。



たが、これが高度経済成長期の1962年までに7.7%まで減少していることがわかる。また、この間、「就職」という者が75.5%から89.0%まで急増している。その後は、この就職率は漸減傾向にあったが、ドルショックの翌年（1972年）頃から低下傾向が顕著になる一方で、「無業・その他」が増加してくる。そして、2つのオイルショックに挟まれた1976年にはこの当時の最高23.4%を記録している。その後は、1990年のバブル経済に向けて就職率の上昇、無業率の低下が続いたが、やはりバブル崩壊後は無業率が増え、2000年度には32.0%と戦後最大を記録している。そして、その後の一時的な景気回復によって無業率は2008年度には14.8%まで低下している。こうしてみると、戦後の大卒者における就職率・無業率は、景気動向と軌を一にしていることがわかる。そして、「モラトリアム人間の時代」と称される1970年代後半はやはり不景気を反映して、2000年代ほどではないが、就職が決まらないまま大学を卒業していったものが4人に1人近くいたことになる。

### 大学生の留年

ただし、1970年代後半と2000年代の大卒無業率は単純に比較できない面がある。実は「モラトリアム人間論」でも「モラトリアム心理」の表れとされていた留年率が1970年代後半には高かったことである。図4には1975年度以降の大学における留年率<sup>7</sup>の推移を示した。これによると、留年率は就職状況の悪化がみられた1977年度頃から増加し、79年度までは15%程度で推移し、その後は長期にわたって漸減傾向を示している。つまり、1970年代後半の不況期に卒業時を迎えた者で就職が決まらなかった者のなかには、「留年」という形で就職の先送りあるいは次年度の再チャレンジを試みていた者が少なからずいたと推測され

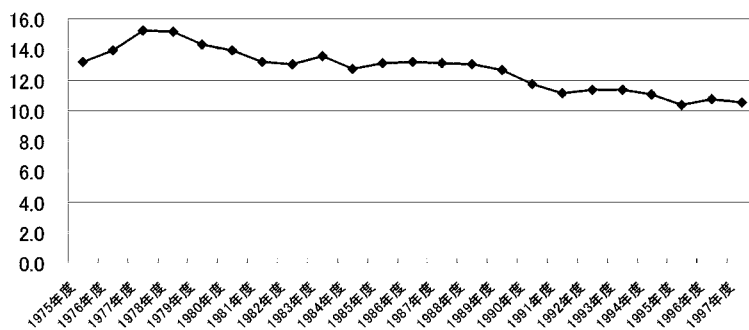


図4 大学における留年率の推移

出典：文部科学省（文部省）『学校基本調査 高等教育編』各年次

<sup>7</sup> ここで留年率は、『学校基本調査 高等教育編』各年次の「卒業後の進路」で、「1年超過」から「4年超過」にあたる者までの合計から算出している。

る。

このような「無業卒業自衛策=(留年)」ともいべきモラトリアム戦略が可能だったのは、1975年度までの入学者（卒業年度は78年度以降）はとりわけ授業料が格安であったことによる。表1には、1975年以降の大学授業料の推移を示したものである。1975年まで国立大学の授業料は年間36,000円（月額にすると3,000円で、当時の平均的な幼稚園の保育料より安かった）に据え置かれてきた。そのため私大との格差は5倍以上あり、その格差への批

表1. 国立・公立・私立大学の授業料及び入学料の推移（円）

| 入学年度 | 国立大学    |         | 公立大学    |         | 私立大学    |         | 授業料格差 |
|------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|-------|
|      | 授業料     | 入学料     | 授業料     | 入学料     | 授業料     | 入学料     |       |
| 1975 | 36,000  | 50,000  | 27,847  | 25,068  | 182,677 | 95,584  | 5.07  |
| 1976 | 96,000  | ↓       | 66,582  | 74,220  | 221,844 | 121,888 | 2.31  |
| 1977 | ↓       | 60,000  | 78,141  | 80,152  | 248,066 | 135,205 | 2.31  |
| 1978 | 144,000 | ↓       | 110,691 | 90,909  | 286,568 | 157,019 | 1.99  |
| 1979 | ↓       | 80,000  | 134,618 | 104,091 | 325,198 | 175,999 | 1.99  |
| 1980 | 180,000 | ↓       | 157,412 | 119,000 | 355,156 | 190,113 | 1.97  |
| 1981 | ↓       | 100,000 | 174,706 | 139,118 | 380,253 | 201,611 | 1.97  |
| 1982 | 216,000 | ↓       | 198,529 | 150,000 | 406,261 | 212,650 | 1.88  |
| 1983 | ↓       | 120,000 | 210,000 | 167,265 | 433,200 | 219,428 | 1.88  |
| 1984 | 252,000 | ↓       | 236,470 | 178,882 | 451,722 | 225,820 | 1.79  |
| 1985 | ↓       | ↓       | 250,941 | 179,471 | 475,325 | 235,769 | 1.79  |
| 1986 | ↓       | 150,000 | 252,000 | 219,667 | 497,826 | 241,275 | 1.79  |
| 1987 | 300,000 | ↓       | 290,400 | 230,514 | 517,395 | 245,263 | 1.72  |
| 1988 | ↓       | 180,000 | 298,667 | 261,639 | 539,591 | 251,124 | 1.72  |
| 1989 | 339,600 | 185,400 | 331,686 | 268,486 | 570,584 | 256,600 | 1.68  |
| 1990 | ↓       | 206,000 | 337,105 | 287,341 | 615,486 | 266,603 | 1.68  |
| 1991 | 375,600 | ↓       | 366,032 | 295,798 | 641,608 | 271,151 | 1.71  |
| 1992 | ↓       | 230,000 | 374,160 | 324,775 | 668,460 | 271,948 | 1.71  |
| 1993 | 411,600 | ↓       | 405,840 | 329,467 | 688,046 | 275,824 | 1.67  |
| 1994 | ↓       | 260,000 | 410,757 | 357,787 | 708,847 | 280,892 | 1.67  |
| 1995 | 447,600 | ↓       | 440,471 | 363,745 | 728,365 | 282,574 | 1.63  |
| 1996 | ↓       | 270,000 | 446,146 | 371,288 | 744,733 | 287,581 | 1.63  |
| 1997 | 469,200 | ↓       | 463,629 | 373,893 | 757,158 | 288,471 | 1.61  |
| 1998 | ↓       | 275,000 | 469,200 | 375,743 | 770,024 | 290,799 | 1.61  |
| 1999 | 478,800 | ↓       | 477,015 | 381,271 | 783,298 | 290,815 | 1.64  |
| 2000 | ↓       | 277,000 | 478,800 | 383,607 | 789,659 | 290,691 | 1.64  |
| 2001 | 496,800 | ↓       | 491,170 | 387,200 | 799,973 | 286,528 | 1.61  |
| 2002 | ↓       | 282,000 |         |         |         |         |       |

注 1. 公立大学及び私立大学の額は平均額である。また、公立大学の入学料は、他地域からの入学者の平均額である。

2. 年度は入学年度である。

3. 授業料格差は私立大学授業料/国立大学授業料である。

出典：文部科学省 HP

([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/005/gijiroku/011201/011201e1.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/005/gijiroku/011201/011201e1.htm))

判や受益者負担の議論もあって、その翌年の1976年には実に2.27倍の96,000円に引き上げられ、その後も1年おきに数万円規模の値上げがおこなわれた。その背後には、1973年の連合赤軍事件によって新左翼＝全共闘が一般学生の支持を失い、学費をめぐる大学闘争が困難になったこともあった。もちろんこれによって私立大学との格差は縮小し、教育機会の平等化は達成されていった。しかし、2000年代の「ロスジェネ世代」は、「モラトリアム世代」のように就職浪人＝留年というモラトリアム戦略をとることが困難になったことも事実である。

このように「モラトリアム人間の時代」は、1960年代前半に大学進学期を迎えた「団塊の世代」のために大学入学定員が増員された結果、大学進学率が急増していた一方で、70年代の高度経済成長の終焉に伴う不景気が増大した大卒者の就職難をもたらしていた時期であった。その結果、格安な授業料の恩恵を受けて就職浪人という形で大学に残った者がいる一方で、無業のまま大学を去った者も2000年代と同程度の水準であった。2000年代の「ニート」が、渡部（2005）や内藤（2006）も指摘するように、先行ヒットした「オタク」「パラサイト」「ひきこもり」といった若者への「いいがかり資源」をもとに社会的に構築され、結果的にバブル崩壊後の長期不況の所産であった就職難を個人に帰責したたものであったと同様、「モラトリアム人間論」も経済不況と大学の大衆化の結果であった就職難に対する社会経済的視点を欠いた精神科医が精神分析や心理学のタームによって構築したものとみてもよいだろう。というより、不況によって生じた経済問題である若年層の就職問題を若者の「心」の問題として構築する「まなざし」の起源はこの「モラトリアム人間論」にあったということもできる。

## 5. 「モラトリアム人間論」の検証

### 「モラトリアム人間」の初期キャリア

このことをさらに確かめるために、1975年から2005年の「社会階層と社会移動に関する全国調査（SSM調査）」データから大卒男性のみを取り出し、5つのコーホート（大学卒業時コーホート）ごとに初職と第2職の従業上の地位をみた（表2、表3）。その結果、1970年代に大学卒業期を迎えた1948-57出生コーホートの初職および第2職の従業上の地位では、バブル崩壊後に卒業時を迎えた1968-77年出生コーホートに次いで非正規雇用が多いこともわかる。とくに先行する1938-47年出生コーホートと比べると、非正規雇用が初職で2.4ポイント、第2職でも2.9ポイントほど多くなっている。ここにも70年代不況が大卒男性の就職状況の悪化をもたらしていたことを窺い知ることができる。

表 2 コーホート別にみた初職従業上の地位 (大卒男性) 1975-2005 SSM 調査

| コーホート                     | 常時雇用<br>・経営 | 自営<br>・家族 | 非正規  | 合計 (実数)      |
|---------------------------|-------------|-----------|------|--------------|
| 1928-37 年出生 (1950-59 年卒業) | 91.9        | 3.6       | 4.5  | 100.0 (111)  |
| 1938-47 年出生 (1960-69 年卒業) | 94.3        | 3.3       | 2.4  | 100.0 (420)  |
| 1948-57 年出生 (1970-79 年卒業) | 91.1        | 4.1       | 4.8  | 100.0 (587)  |
| 1958-67 年出生 (1980-89 年卒業) | 92.7        | 3.8       | 3.5  | 100.0 (317)  |
| 1968-77 年出生 (1990-99 年卒業) | 84.8        | 2.2       | 13.0 | 100.0 (223)  |
| 全体                        | 91.4        | 3.6       | 5.0  | 100.0 (1658) |

注)  $\chi^2=39.081^{***}$

表 3 コーホート別にみた第 2 職従業上の地位 (大卒男性) 1975-2005 SSM 調査

| コーホート                     | 常時雇用・経営 | 自営・家族 | 非正規  | 合計 (実数)      |
|---------------------------|---------|-------|------|--------------|
| 1928-37 年出生 (1950-59 年卒業) | 89.9    | 7.1   | 3.0  | 100.0 (99)   |
| 1938-47 年出生 (1960-69 年卒業) | 92.4    | 3.5   | 4.1  | 100.0 (344)  |
| 1948-57 年出生 (1970-79 年卒業) | 89.1    | 3.9   | 7.0  | 100.0 (431)  |
| 1958-67 年出生 (1980-89 年卒業) | 93.1    | 3.0   | 3.9  | 100.0 (233)  |
| 1968-77 年出生 (1990-99 年卒業) | 83.7    | 3.6   | 12.8 | 100.0 (196)  |
| 全体                        | 89.9    | 3.8   | 6.2  | 100.0 (1303) |

注)  $\chi^2=24.777^{**}$

ただし、2005 年 SSM 調査には学校から職業の移行期間に関する設問があるが、これをみると「卒業後すぐ仕事についた」という者の比率は、1948-57 年コーホートでも 89% ほどあり、前後のコーホートに比べても特に低いわけではない。やはり卒業直後の就職が少ないのは、バブル経済崩壊後の長期不況期の卒業者を含む 1958-67 年出生コーホートで 83% と低くなっている。その意味では 1970 年代の大卒男性においては「間断のない移行」(荻谷・菅山・石田, 2000) が保証されていたとみることができる。しかし、その一方では先にも示唆したように、この時期の国立大学の学費の安さを活用した大学生の就職モラトリアム戦略(就職浪人=留年) がとられていた可能性も否定できない。

表 4 コーホート別にみた学校-職業移行期間 (大卒男性) 2005 SSM

|                           | すぐに仕事<br>についた | 少ししてから<br>仕事についた | だいぶしてから<br>仕事についた | 合計 (実数)   |
|---------------------------|---------------|------------------|-------------------|-----------|
| 1938-47 年出生 (1960-69 年卒業) | 89.1          | 4.7              | 6.2               | 100.0 129 |
| 1948-57 年出生 (1970-79 年卒業) | 88.9          | 1.7              | 9.4               | 100.0 180 |
| 1958-67 年出生 (1980-89 年卒業) | 90.1          | 3.5              | 6.4               | 100.0 172 |
| 1968-77 年出生 (1990-99 年卒業) | 83.2          | 8.4              | 8.4               | 100.0 190 |
| 全体                        | 87.6          | 4.6              | 7.7               | 100.0 671 |

注)  $\chi^2=12.02+$

## 「モラトリアム人間」の初期キャリア

では、この当時の若年層は意識の面でもモラトリアム意識をもっていたのであろうか。このことを確認するために、1975年のSSM調査における意識項目への回答をコーホート間で比較してみよう。ここで「モラトリアム意識」として取り上げるのは、1975年SSM調査で社会的性格を聞いている設問のうち、仕事などへの関与を聞いた質問「遊びでも仕事でも、やりだすと、とことん熱中して、まあまあものにするほうだ」「すこし無理だと思われる位の目標をたてて、がんばる方だ」「なにごとによらず、あまりガツガツやるのはきらいで、気ままにのんびりやる主義だ」、およびリーダーシップについて尋ねた「リーダーになって苦勞するよりは、人に従っているほうが気楽でよい」「他人のめんどうをみるのが好きなほうで、他人から頼られるほうだ」「小さい頃から、お山の大将になるのが好きなほうだった」の6項目である。表5には、3つのコーホート別に高等教育卒業者がこの6つの問いに「はい」と答えた比率を示した。

これによると、関与を示す「とことん熱中してものにする」「目標をたててがんばる」や、非関与の「気ままにのんびりやる」についてはコーホートによる有意差がみられ、「モラトリアム世代」である1948-57出生コーホートにおいて関与からの撤退や非関与を選好する傾向がみられる。ただし、この項目は1975年SSM調査のみの項目なので、これが年齢効果なのか、それとも世代（コーホート）効果なのかは、峻別できない<sup>8</sup>。これに対してリーダーシップに関する「人に従っているほうが気楽でよい」「人から頼られる」「小さい頃からお山の

表5 コーホート別にみた社会的性格（大卒男性）1975年SSM調査

|                        | 熱中する    | がんばる     | きままにのんびり  | 人に従うほうが気楽  | 人から頼られる    | お山の大将      |
|------------------------|---------|----------|-----------|------------|------------|------------|
| 1928-37年出生（1950-59年卒業） | 86.9    | 73.8     | 45.1      | 33.6       | 72.8       | 39.5       |
| 1938-47年出生（1960-69年卒業） | 84.6    | 68.9     | 43.3      | 31.3       | 65.5       | 34.2       |
| 1948-57年出生（1970-79年卒業） | 73.6    | 55.7     | 64.7      | 39.2       | 60.4       | 30.6       |
| $\chi^2$ 値             | 9.412** | 10.952** | 15.634*** | 1.970 n.s. | 4.478 n.s. | 2.392 n.s. |

<sup>8</sup> 高橋（2007）によれば、年代別の平均値に差のあるデータから時代変化による影響を読み取る時間比較は誤っており、そうした歴史的变化の方向性は、少なくとも2時点以上にまたがった縦断的調査が行われていなければ、判断できない。ただし、2時点以上のデータがあっても、回答比率の変化が、時代（社会）が変わったことが影響しているのか、対象者の加齢による変化が影響しているのか、特定のコーホート（年齢集団）のもつ特性であるのか、判断することは容易ではない。時代の変化が、どの年代の対象者にも大きく影響を与えている場合には、調査年次ごとの結果に平行関係が見られるはずである。これに対して、年齢（加齢）効果だけがある場合には、調査年次による違いは見られず、年代ごとの違いだけが見られる。また、コーホート効果がある場合には、ある調査時点での30代のグループが、10年後の調査時点での40代のグループになるので、調査年次とともに、特徴のある年齢集団が動いていくことになる。ただし実際には、それぞれの効果が重複したり、交互作用がみられたりする場合もあるので、さらに慎重な判断が必要になる、とされる。

将」といった項目についてはコーホートと有意な関連はみられない。こうしてみると、いわゆる「モラトリアム世代」にも部分的にモラトリアム心理がみられるのみで、これがこの世代特有で、広く共有された「社会的性格」となったと言うには無理があると考えられる。

以上のことからして、1970年代の若者について展開された「モラトリアム人間論」は、ドルショックやオイルショックの直撃による新卒学卒労働市場の逼迫によって入職機会を奪われ、就職浪人というモラトリアム戦略（文字通り金融危機における「支払い猶予」にあたる）をとっていたこの時期の大学生に貼り付けられた精神分析の「ラベル」であった可能性も高い。それは、本田（2006）らが指摘したように、2000年代の「ニート」の実態を軽視して心理主義的な「物語」が構築されたことと酷似している。その意味では「モラトリアム人間論」は、内藤（2006）の指摘する若者への心理主義的な「いいがかり」言説——その後、「オタク」「ひきこもり」「パラサイト」などヒット商品が続く——の幕開けであったともみることができるだろう。

## 5. 語られ続けた「若者」

### 元祖ニートとしての「高等遊民」

実は、こうした若者言説は以前からもみられた。たとえば、明治期の「高等遊民」である。すなわち、夏目漱石の『それから』は、明治42（1909）年から「朝日新聞」紙上に連載され、翌43年に刊行された。この小説の主人公・長井代助は、東京帝国大学を卒業した後も、実業家の父親から経済的支援を受け、自分は働くこともなく、安逸な日々を送っている。再会した旧友の平岡に「なぜ働かないのか」と問い詰められて、彼はこう答える。

「何故働かないって、そりゃ僕が悪いんじゃない。つまり世の中が悪いのだ。もっと、大袈裟おおげさに云うと、日本対西洋の関係が駄目だから働かないのだ。」  
 「働らくいのも可いが、働らくなら、生活以上の働はたらきでなくっちゃ名誉にならない。あらゆる神聖な労力は、みんな麵麩パンを離れている」  
 「つまり食う為の職業は、誠実まことにゃ出来悪いと云う意味さ」

夏目漱石『それから』新潮文庫，pp. 87-90。

こうした代助のような青年たちは、当時、「高等遊民」と呼ばれた。いわば元祖「ニート」である。代助の場合、自分から働こうとしないのだが、実はこの時期、同様の生活をしている若者は少なくなかったと思われる。ちょうどこの時期は、日露戦争（明治37～38年）の軍需バブルがはじけた不況期にあたる。表6に示した明治44年の東京帝国大学の卒業生の

表6 東京帝国大学（明治44年）の卒業生進路

| 種 別        | 人(%)       |            |           |           |           |           |            |
|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|
|            | 法科大学       | 医科大学       | 工科大学      | 文科大学      | 理科大学      | 農科大学      | 合 計        |
| 行政官吏       | 56 (14.5)  | 0          | 0         | 0         | 0         | 0         | 56 (6.2)   |
| 司法官吏       | 39 (10.1)  | 0          | 0         | 0         | 0         | 0         | 39 (4.3)   |
| 学校職員       | 0          | 1 (0.8)    | 8 (4.7)   | 29 (35.8) | 12 (33.3) | 14 (13.5) | 64 (7.1)   |
| 官庁技術員      | 0          | 1 (0.8)    | 57 (33.3) | 0         | 6 (16.7)  | 44 (42.3) | 108 (12.0) |
| 官庁及病院医員    | 0          | 101 (82.1) | 0         | 0         | 0         | 9 (8.7)   | 110 (12.2) |
| 弁護士        | 8 (2.1)    | 0          | 0         | 0         | 0         | 0         | 8 (0.9)    |
| 会社等技術員     | 0          | 0          | 84 (49.1) | 0         | 2 (5.6)   | 3 (2.9)   | 89 (9.9)   |
| 銀行及会社員     | 45 (11.7)  | 4 (3.3)    | 0         | 0         | 0         | 0         | 49 (5.4)   |
| 外国政府又会社招聘者 | 0          | 0          | 0         | 0         | 0         | 1 (1.0)   | 1 (0.1)    |
| その他の業務者    | 52 (13.6)  | 0          | 1 (0.6)   | 0         | 0         | 11 (10.6) | 64 (7.1)   |
| 大学院学生      | 37 (9.6)   | 7 (5.7)    | 5 (2.9)   | 19 (23.5) | 7 (19.4)  | 7 (6.7)   | 82 (9.1)   |
| 外国留学生      | 1 (0.3)    | 1 (0.8)    | 0         | 0         | 0         | 0         | 2 (0.2)    |
| 他分科大学生     | 0          | 1 (0.8)    | 0         | 1 (1.2)   | 2 (5.6)   | 2 (1.9)   | 6 (0.7)    |
| 職業未定又は不詳者  | 148 (38.3) | 5 (4.1)    | 16 (9.4)  | 32 (39.5) | 7 (19.4)  | 11 (10.6) | 219 (24.3) |
| 死亡者        | 0          | 2 (1.6)    | 0         | 0         | 0         | 2 (1.9)   | 4 (0.4)    |
| 総計         | 386 (100)  | 123 (100)  | 171 (100) | 81 (100)  | 36 (100)  | 104 (100) | 901 (100)  |

出典：竹内（2005：98）より作成

進路をみると、法科大学（法学部）、文科大学（文学部）では「職業未定又は不詳者」が4割近いことがわかる。

ここからは、いつの時代も経済不況は新規学卒労働市場の悪化によって学生たちの進路を奪ってきたと言えるだろう。ただし、この時期は長井代助のように大学生自体が「学歴貴族」（竹内, 1999）であり、一部の富裕層の子弟であったから「高等遊民」と羨望のまなざしで見られていたのである。

こうした就職困難期の「高等遊民」のあり方は、その後、明治45年1月から「朝日新聞」紙上に連載され始めた『彼岸過迄』では、二人の青年の対比を通じて示される。まず田川敬太郎は、大学を出て職探しに奔走するが折からの不況でなかなか仕事がみつからない<sup>9</sup>。彼は大学を出ればしかるべき地位が保証されると考えていたのである。これに対して、友人の須永市蔵は、軍人（主計官）だった父親が残した財産で母親と二人で衣食に不自由しない暮らしをしており、軍人の子どもでもあるにも関わらず軍人を毛嫌いし、大学で法律を修めながら役人にも会社員にもなる気がない。親戚からの仕事の斡旋も断っている。須永は敬太郎に

<sup>9</sup> この作品は、「敬太郎はそれほど**げん**の見えないこのあいだからの運動と奔走に少しいや**き**がさして来た」という一文で始まるが、この冒頭部分について田口・瀬崎（2005：6-7）は、次のような註釈をつける。「語り手は、敬太郎の「運動と奔走」の目的を明示していないが、当時、すでに広範な社会問題と化していた「高等教育を受けた者の就職難」を連想した読者は少なくなかったと推測される」。そして、竹内（1999）が作成した表6や啄木の「時代閉塞の現状」（明治43年）などにも言及しつつ、この作品が「明治末の「時代閉塞」が生んだ「職業未定」の「遊民」の宙ぶらりんな日常から始まる」としている。

こう言う。

僕は去年学校を卒業してから今日まで、まだ就職という問題についてただの一日も頭を使った事がない。……（中略）……もとより自慢でこういう話をするのではない。真底を打ち明ければ寧ろ自慢の反対で、全く信念の欠乏から来た引込み思案なのだから不愉快である。が、朝から晩まで気骨を折って、世の中に持てはやされた所で、どこがどうしたんだという横着は、無論断る時から付けまっていた。僕は時めくために生まれた男ではないと思う。……（中略）……法律など修めないうで、植物学か天文学でもやったらまだ性に合った仕事为天から授かるかもしれないと思う。僕は世間に対しては甚だ気の弱い癖に、自分に対しては大変辛抱の好い男だからそう思うのである

こういう僕のがまをわがままなりに通してくれるものは、言うまでもなく父のがのこして行つたわずかばかりの財産である。もしこの財産がなかったら、僕はどんな苦しい思いをしても、法学士の肩書きを利用して、世間と戦わなければならないのだと考えると、死んだ父に対して改めて感謝の念をささげたくなると同時に、自分のわがままはこの財産のためにやっと存在を許されているのだからよほど腰のすわらない浅はかなものに違いないと推断する。

夏目漱石『彼岸過迄』岩波文庫, pp. 210-211.

この作品について、芹沢（2005）は、「高等遊民」と「モラトリアム人間」を対比するなかで、モラトリアムを脱して大人になるためには、就職するか、結婚することのいずれかが満たされればよいが、この時期の富裕層にとっては就職よりも結婚の方が重みをもっていたのではないかと推測する。実際、『彼岸過迄』で焦点になるのは、須永がその「わがまま」から就職しないことではなく、彼を自分の遠縁にあたる娘・千代子と結婚させようとする母親との確執であった（その背後には須永の「出生の秘密」があるのだが）<sup>10</sup>。そして、「わがままよりもっと鋭い失望を母に与えそうなので、僕が胸を痛めているのは結婚問題だ」という須永の告白を引きながら、芹沢（2005）は「就職しないということは結婚しないということより親を悩ましていない。財産があり、親が子どもをその存在において愛情を注いでいるのならば、就職しないことは問題ではないといっている」という。というのも結婚すれば働いていなくても、人が羨む「高等遊民」として社会に受け入れられるからである。しかし、須永は結婚という大人への道も拒絶している。したがって、この物語の主題は、芹沢（2008）の言を借りると、「我儘という批判を受け入れつつも、その我儘の主体である自分という存在を生かす道についてであった」という。

<sup>10</sup> その意味では、須永は千代子との結婚を引き伸ばす点では「モラトリアム」にあるが、まだ「高等遊民」ではない、と芹沢（2005）はいう。真正の「高等遊民」とは、『彼岸過迄』では須永の役割モデルとなる叔父の松本恒三のように（長島，1979）、あるいは『こころ』の「先生」のように結婚して家族を形成しながらも、仕事をせずに親の財産で生活できる「大人」を意味していた。その意味では、須永は「高等遊民」というより今の「ニート」に近い存在でないかと芹沢（2005）は推測している。



## 00年代のフリーター・ニート言説

これに対して、1990年代初頭のバブル経済崩壊以降、若者をめぐる労働・階層問題でにわかになら注目されたのは、先にもみたように、「フリーター・ニート」問題である。このうち、フリーターについては、厚生労働省の『労働経済の分析』で217万人（2003年）、内閣府の『国民生活白書』（2001年）では417万人という数字が公表され、いずれも80年代に比べて増加しているとされる。しかし、両者ではフリーターの定義が違うために、その数値が大きく異なっている。前者の定義では、フリーターという立場を選択している人（正社員になりたくない人）だが、後者の定義では、フリーターにならざるを得ない人（正社員になれない人）や派遣・契約社員も含むという違いがある。まず、こうしてフリーターは、その操作的定義からして恣意的・政治的に「物語」られている。

そもそも「フリーター」なる語は、1987年にリクルート社のアルバイト情報誌『フロム・エー』が最初に使ったとされるが、当時は「フリー・アルバイト」の略で、バブル経済のもと「正社員になることを拒否して、自由に好きなアルバイトをして生活をする」という若者の新しいライフスタイルを意味していた。現に大黒麻季は1992年の「恋はメリーゴーラウンド」で「夢見て走れ フリー・アルバイト」と唄っている。そして、そこでは「憂いの Business Man」との対比でその「輝き」が歌い上げられている。それがバブル経済の崩壊後は、「困った若者」「社会的弱者」になってしまったのである（片瀬、2006）<sup>11</sup>。

では、ほんとうにフリーターは90年代から00年代にかけて増えたのだろうか。新谷（2004）は、行政によるフリーター対策が、文部科学省の「キャリア教育」の推進にみられるように、若者個人を対象としていることに疑義を呈し、若年無業者の問題が若者個人の問題であるのか、またそれは近年の問題かという観点から、フリーターに対する問題認識を問い直そうとした。そして、学校基本調査のデータから1970年代の高卒無業者層の比率を再計算し、この時代の無業者率はフリーター問題が顕在化した2000年代とほぼ同じ水準にあったことを明らかにした。ここから新谷（2004：20）は、より長期的スパンでみれば、現在の学卒無業者が著しく多いわけではなく、以前から一定の割合で存在したものであると指摘する。したがって、それにもかかわらず現代の問題としてフリーター問題が注目されるのは、若者が変わったからではなく、若者をみる「まなざし」の変化があったからだとする。その「まなざし」とは、学校から職業への移行の困難化の問題が、本来、労働市場の構造的変動がもたらした「社会問題」であるにもかかわらず、若者個人に帰責されるという心理主義である。そして、この「まなざし」にもとづいて、若者個人を対象としたフリーター対策が立てられ

<sup>11</sup> なお、「モラトリアム」なる語は、フリーターの類型化にも使われている。小杉（2003）はフリーターを「モラトリアム型」「夢追求型」「やむえず型」に分類している。

るが、その妥当性は疑わしいという。このように、1990年代後半の「高卒無業者」数は1970年代とほぼ同じ水準にあり、逆にバブル期の1980年代後半は好景気のため「高卒無業者」数が例外的に低かった時期である。そして、この例外的な時期に比べて、現在「高卒無業者」が増えているという「物語」が構築されているのである。

### 心理主義的若者「物語」の嚆矢としての「モラトリアム人間論」

本稿でもまた、この新谷(2004)と同様、1970年代の大卒労働市場や大学生の入職について検討してきた。その結果、「モラトリアム人間論」が心理主義的に構築された若者「物語」の幕開けであった可能性が示唆された。すなわち、まず1960年代、「団塊の世代」の進学期を迎えて大学の学部・学科の増設・定員増によって進学率が急速に上昇した。そして、高等教育の大衆化によって高等教育の収益率が低下して、学歴インフレが起こった。加えて、70年代のドルショック、オイルショックによって高度経済成長が終焉すると、大学生の就業機会が奪われていった。そして、自己防衛のために留年というモラトリアム戦略を強いられた当時の学生に対して、当時、アメリカから入った青年研究のための精神分析学のターム「モラトリアム」が、その本来の意味を換骨奪胎して当てはめられたのである。

さらに加藤(2005:108)は、「モラトリアム」そのものの変容に着目して、バブル崩壊後の消費社会や若者文化市場の変化を考察している。それによると、1980年代後半以降、「終身雇用制から流動的労働力への依存を強めていった企業が、モラトリアム人間＝フリーターの構造を作り上げる」ことで、消費社会に適合的でしたらあったモラトリアム人間のメリットを削ぐシステムを用意する一方で、オンリーワンを求める「夢市場」が設立されたという。そこでは、実現不可能なオンリーワンの「夢」をメディアが若者に消費させることで、アイデンティティは「十分に時間をかければ達成できるものではなく、追い求めるだけのものへと変質」したという。そして、「夢に対して社会はもはやクーリングアウト……(中略)……はしない」ために、モラトリアムには終わりがなくなった状況は、「モラトリアム人間の搾取」とも呼ぶべきであるという<sup>12</sup>。

しかも、加藤(2005:104)によると、このオンリーワンの「自分探し」は「病的」な様相すら呈してきたという。「オンリーワン」という語が「「唯一性」という「一般的特性」をもつという点で矛盾している」(傍点原文)だけでなく、それは「アイデンティティ」を

<sup>12</sup> こうしたメディアによる「夢市場」の創設は、バブル崩壊後の1990年代後半になると、さらに加速された。荒川(2009)によると、かつては「夢」を追うのは一部の者たちだったが、90年代後半、「夢を追う」若者たちを謳いあげるJ-POP(たとえば、上戸彩「夢のチカラ」2005年、嵐「きっと大丈夫」2006年など)が相次ぐなかで、「夢市場」が広範に行きわたるようになった、という。

求める偏執狂的な志向性を持ち、この時期、アイデンティティの可変性を気づかせる「多重人格」や、アイデンティティの根源に関する「物語」を心理主義的に構築する「トラウマ」への関心が高まっていたことにも、現代の「アイデンティティ探求＝自分探し」は病的になっているという。

こうしてみると、1970年代には、日本社会学会のシンポジウムにおいて青年問題が初めて取り上げられるなど、社会科学的な関心からの青年論も現れはじめたものの、70年代の若者論の主流は「モラトリアム人間論」に代表されるように、心理主義的に構築された若者「物語」であった。そして、それは当時の日本の社会経済状況や高等教育の変容が若者に及ぼした影響を実証的に検討・検証することもなく、メディアや論壇向けに「分かりやすく」若者の心性像を提供していったのである。そして、その構図はその後の「失われた20年」の若者「物語」にも継承されていった。モラトリアム人間の就職事情の検証から浮かび上がってきたのは、こうして心理主義的に構築された若者言説の幕開けであったのである。

## 付記

本稿執筆にあたり、2005年SSM調査研究会よりデータの提供を受けた。

## 引用文献

- 荒川 葉, 2009, 『「夢追い」型進路形成の功罪：高校改革の社会学』東信堂.
- Erikson, Erik H., 1968, *Identity: Youth and Crisis*. W.W. Norton & Company. (=1973, 岩瀬庸理訳『アイデンティティ：青年と危機』金沢文庫.)
- Fromm, Erich, 1941: *Escape from Freedom*. Farrar & Rinehart Inc. (=1951, 日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社.)
- 後藤和智, 2006, 「言説」：「ニート」論を検証する」本田由紀・内田朝雄・後藤和智『「ニート」って言うな！』光文社：219-303.
- 本田由紀, 2006, 「現実」：「ニート」論という奇妙な幻影」本田由紀・内田朝雄・後藤和智『「ニート」って言うな！』光文社：15-112.
- 岩佐淳一, 1993, 「社会学的青年論の視角」小谷敏編『若者論を読む』世界思想社：6-28.
- 荻谷剛彦, 1995, 『大衆教育社会の行方：学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論社.
- 荻谷剛彦・菅山真次・石田 浩, 2000, 『学校・職安と労働市場：戦後新規学卒市場の制度化過程』東京大学出版会.
- 笠原 嘉, 1977, 『青年期：精神病理学から』中公新書.
- 笠原 嘉, 1984, 『アパシー・シンドローム：高学歴社会の青年心理』岩波書店.
- 片瀬一男, 2006, 「フリーター・ニートという「物語」：つくられた若者たちの虚像」『ウラノーヌ』Vol. 22：2-3.
- 加藤隆雄, 2005, 「現代消費社会におけるモラトリアム：リミックスされたアイデンティティへ」渡部真編『モラトリアム青年肯定論』至文堂：103-110.
- 香山リカ, 2004, 『就職が怖い』講談社.
- 小谷 敏, 1993, 「異議申し立て」の嵐が過ぎ去ったあとに」小谷敏編『若者論を読む』世界思

- 想社：2-5.
- 小杉礼子, 2003, 『フリーターという生き方』 勁草書房.
- 厚生労働省, 2006, 『平成18年版 厚生労働白書』 きょうせい.
- 熊谷達也, 2010, 『モラトリアムな季節』 光文社.
- Lifton, Robert, J. 1970 *The Protean Self: Human Resilience In an Age of Fragmentation*. Basic Books (=1971 外林大作訳『誰が生き残るか：プロテウスの人間』 誠信書房).
- 長島裕子, 1979, 「「高等遊民」をめぐって：『彼岸過迄』の松本恒三」『文藝と批評』5(3).
- 内藤朝雄, 2006, 「社会の憎悪のメカニズム」本田由紀・内田朝雄・後藤和智『「ニート」って言うな!』光文社：113-218.
- 中村隆英, 1986, 『昭和経済史』 岩波書店 (=2007, 岩波現代文庫).
- 尾嶋史章, 2002, 「社会階層と進路形成の変容：90年代の変化を考える」『教育社会学研究』70：125-142.
- 小此木啓吾, 1978, 『モラトリアム人間の時代』 中央公論社.
- 芹沢俊介, 2005, 「文学のなかのモラトリアム人間」 渡部真編『モラトリアム青年肯定論』至文堂：191-198.
- 新谷康浩, 2004, 「フリーター対策は妥当か」『横浜国立大学教育人間科学部紀要I』6号：13-22.
- 塩原 勉, 1971, 「青年問題への視角」『社会学評論』22巻2号：2-5.
- 見田宗介, 1979, 「まなごしの地獄：現代社会の実存構造」見田宗介『現代社会の社会意識』弘文堂：1-57 (=見田宗介, 2008, 『まなごしの地獄：尽きなく生きることの社会学』河出書房新社).
- 田口律男・瀬崎圭二, 2005, 『漱石文学全註釈 10 彼岸過迄』若草書房.
- 高田里恵子, 2005, 『グロテスクな教養』筑摩書房.
- 高橋征仁, 2007, 「講義のまとめ：調査報告書や論文の読み方・書き方」片瀬一男『社会統計学』放送大学教育振興会：264-287.
- 武田晴人, 2009, 『新版 日本経済の事件簿：開国からバブル崩壊まで』日本経済評論社.
- 竹内 洋, 1999, 『学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社.
- 竹内 洋, 2003, 『教養主義の没落：変わりゆくエリート学生文化』中央公論社.
- 竹内 洋, 2005, 『立身出世主義 [増補版]』世界思想社.
- 潮木守一, 1978, 『学歴社会の転換』東京大学出版会.
- 渡部 真, 2005, 「「モラトリアム青年肯定論」について」『モラトリアム青年肯定論』至文堂：5-9.
- 米澤彰純, 2005, 「高等教育システムの拡大・分化と教育達成」米澤彰純編『教育達成の構造』(2005年SSM調査シリーズ5)：113-140.

# 高度経済成長期の階層帰属意識

—— 戦後日本における階層帰属意識に関するノート (1) ——

神 林 博 史

## 1. 問題の所在

高度経済成長期に拡大した「中流意識」は、1970年代以降、多くの人々の関心を集めるようになり、「一億総中流」あるいはそこから派生した日本社会の平等イメージが広く共有された。近年では格差問題への関心の高まりと共に、「中流崩壊」や「下流」化が叫ばれるようになったが、そのこと自体が日本社会における中流イメージの浸透ぶりを物語っている。

こうした「中流」イメージの根拠とされるものの1つが、世論調査・社会調査において測定される「階層帰属意識」あるいは「生活程度」と呼ばれる質問への回答である。とりわけ、内閣府が戦後の早い時期から実施している「国民生活に関する世論調査」における生活程度に関する質問（詳細は後述）において「中」と回答する人の比率が、1970年代に9割に達したことが一億総中流言説の誕生のきっかけの1つであった。

中流をめぐる問題が社会的な関心を集めるようになったのは、主に1970年代後半からである<sup>1</sup>。特に、1977年に朝日新聞紙上で展開された「新中間層論争」の影響が大きい<sup>2</sup>。これをきっかけに一般書や学術論文で中流意識あるいは階層帰属意識が取りあげられることが多くなった。

階層帰属意識や生活程度は1950年代には測定がはじまっていた。にも関わらず、1950年代から1960年代にかけて、階層帰属意識はほとんど注目を浴びることがなかった。その理由は、改めて指摘するまでもないだろうが、マルクス主義的な階級論の影響が強大だったことによる。社会を認識し議論するための枠組みとして、政治用語として、「階級」は「階層」よりもはるかによく使われていた。（この時期は、社会学における「階級意識」研究の全盛期でもあった<sup>3</sup>。）

<sup>1</sup> 1960年代初頭には「中産階級」をめぐる問題が政治的なテーマとして注目を集めたが、これは「中流」の問題とはやや性質が異なる。

<sup>2</sup> 村上泰亮の「新中間層の現実性」（1977年5月）で提唱された「新中間層」をめぐる行われた論争。以降、「新中間層論は可能か」（岸本重陳、同年6月）、「社会階層構造の現状」（富永健一、同年6月）、「新中間階層」のゆくえ」（高畑通敏、同年7月）、座談会「討論・新中間階層」（同年8月）と続いた。

<sup>3</sup> 日本の階級意識研究の流れについては坂東（1977）を参照。なお現在では、社会階層研究において「階層意識」という言葉は当たり前に使われているが、そうになったのは1980年代以降である。安田三郎は1973年の著書で「階層意識という言葉はふつう用いられない」（安田1973：4）と述べている。

こうした事情もあってか、1950年代から1960年年代の階層帰属意識については、意外なほど本格的な研究が少ない。しかし「中流意識」が何を意味しているか、それがどのような性質のものであるかを知るためには、その初期から「中流意識」へと拡大していった時期のデータの分析が重要な意味を持つはずである。

本稿の課題は、1950年代から1960年代の階層帰属意識について、階層帰属意識はそもそもどのような目的で使われるようになったのか、この時期の階層帰属意識（および「生活程度」意識）はどのような性質を持っていたのか、「中流意識」の拡大はどのようなメカニズムによって生じていたのかについて、若干の検討を行うことである。

本論文の構成は以下の通りである。第2節では、そもそも階層帰属意識がどのような意図で導入されたのか・何を測定するための道具（質問）として設計されたのかを、当時の資料から確認する。第3節では、本稿で使用するデータを説明し、第4節では、階層帰属意識および生活程度の特性に関する分析を行う。

## 2. 階層帰属意識の起源

### 2.1 「階層帰属意識」の誕生

日本の社会調査において階層帰属意識が測定されるようになったのは、1950年代からである。具体的には、1952年に行われた「六大都市の社会階層」調査（以下「六大都市調査」と略）と、1955年に行われた「社会階層と社会移動」全国調査（以下「SSM調査」と略）が、その端緒であった。

六大都市調査は、1951年に創設された International Sociological Association (ISA) が企画した社会階層の国際比較調査プロジェクトの一環として行われた。当初は全国規模の標本調査となる予定であったが、調査費用の不足から規模を縮小せざるを得なくなり、大都市（東京・横浜・名古屋・京都・大阪・神戸）を対象とする調査に変更された（尾高・西平 1953）。その後、六大都市調査の反省から、調査組織と資金を整えた上で、改めて社会階層に関する全国規模の調査が行われた。これが1955年SSM調査である。

国際比較調査ということで、六大都市調査における主な調査項目はISAによってあらかじめ決められていた。とは言え、担当各国が独自の調査項目を盛り込むことも可能で、主観的な社会的地位に関する質問項目－階級帰属意識と階層帰属意識－は、日本調査における独自項目として導入された（尾高・西平 1953）。

では、当時の研究者たちが階級帰属意識と階層帰属意識の測定を企図した理由は何だろうか。これについては、互いに関連する3つの理由が考えられる。

第1に、当時の社会階級・階層研究では、社会的地位の主観的な判断は回答者の社会的地位を測定する有力な方法の1つであると考えられていた（日本社会学会調査委員会 1958, 尾高 1961）。今日から見るとこのアプローチの限界は明らかだが、当時は階級・階層概念自体に明確なコンセンサスがなく、百家争鳴状態であった。そうした状況を鑑みれば、階級帰属意識と階層帰属意識の測定は、階級・階層研究の黎明期における意欲的な試みと評価すべきだろう。

第2に、当時の日本社会の状況がある。敗戦に伴う政治体制の刷新、経済改革等によって、日本社会は大きな変化を経験した。そのため、日本社会における人々の社会経済的な地位の構造はどのようなものなのか—今風に言えば、日本は階級社会なのか階層社会なのか—は、それ自体が経験的に明らかにすべき重要な課題であった。ゆえに主観的な社会的地位についても、地位集団間の境界が明確な「階級」構造をイメージする階級帰属意識と、地位集団間の境界が曖昧で緩やかな序列構造（「階層」構造）をイメージする階層帰属意識の2つを区別し、その両方を測定する必要があると考えられる。

第3に、これは主に階級帰属意識に関わることだが、マルクス主義的な階級意識論・社会意識論の影響がある。マルクス主義における即自的階級と対自的階級の議論、あるいは「利益集団としての階級」説（Centers 1949）によれば、自分が特定の階級に所属しているという認識は、人びとの価値観や関心・態度に影響する。言い換えると、階級帰属意識は人びとの様々な意識や行為—とりわけ政治に関する意識と行動—を傾向づける核になると予想できる。そのため、主観的な社会的地位を測定することが重視された。

## 2.2 階級・階層帰属意識の質問文の特性

六大都市調査および55年SSM調査の階級・階層帰属意識の質問文は、1940年代前後のアメリカにおける階級帰属意識 class identification 研究を参考に作られている。ただし、それらは先行研究の単なる翻訳に止まるものではなく、日本で調査を行うための独自の工夫が凝らされている。当時の研究者たちが質問文に込めた意図は何だったのか、アメリカの先行研究における階級帰属意識項目と、六大都市調査・55年SSM調査の質問文の比較を通じて検討しよう。

### 2.2.1 アメリカにおける階級帰属意識研究

階級帰属意識・階層帰属意識項目の作成にあたって、当時の研究者たちが参考にしたと思われる先行研究は、大きく3種類に分類できる。アメリカの世論調査、ウォーナーによる社会階級研究、そしてセンタースによる階級意識研究である。

(1) アメリカの世論調査における階級帰属意識

量的な社会調査において、いつから階級帰属意識の測定が行われるようになったか、残念ながら現時点では不明である。筆者が確認しえた最も早い例は、雑誌『フォーチュン』による世論調査 (Fortune 1940: 調査年は不明)、ギャラップによる世論調査 (Gallup and Rae 1940: 調査年は1939年)、キャントリルによる調査 (Cantril 1943: 調査年は1941年) である。

これらの調査における階級帰属意識の質問文および選択肢の形式はそれぞれ異なっているが、階級を upper, middle, lower の3カテゴリーとする点で共通している (middle は下位カテゴリーに細分される場合がある)。例えば、Cantril (1943) は次のような質問を用いている ([ ] 内が選択肢)。

To what social class in this country do you feel you belong -middle class, or upper, or lower ?

[Upper, Upper middle, Middle, Lower middle, Lower]

(Cantril 1943: 75)

これらの文献は「階級」の定義を明確に述べていないので、ここでの class や upper, middle, lower という語が何を意味しているのかは曖昧にならざるを得ない。しかしそれゆえに、このタイプの質問は当時のアメリカ社会における人々の生活実感を素朴に反映していると思われる。

なお、これらの調査における「middle」層の比率は、Fortune (1940) で79.2%、Gallup and Rae (1940) で88%、Cantril (1943) で87.4%と、いずれも高いことは注目に値する。

(2) ウォーナーの社会階級研究

ウォーナーと彼の共同研究者たちは、文化人類学的手法を用いてアメリカ社会における社会階級の研究を行い、以後の研究者に大きな影響を与えた。とりわけ「ヤンキー・シティ」研究 (Warner and Lunt 1941 など) と「ディープ・サウス」研究 (Davis et al. 1941) は、古典として名高い。

ウォーナーは社会階級を、地域コミュニティ内の威信に基づく序列構造として定義する。「アメリカにおける社会階級は、経済階級と同じではない。社会階級は、コミュニティ全体の人びとに見られる一般的な行動や態度のレベルによって決定される。(中略) 社会階級のレベルは、そのコミュニティの価値観によって、優れたもの・上位にあるものから、劣った



もの・下位にあるものへとランクづけされる」(Warner 1952: 2-3, 神林訳)。

その上で、階級を upper upper, upper lower, upper middle, lower middle, upper lower, lower lower の 6 カテゴリーに分類するのが、ウォーナーの流儀である。こうした階級構造はコミュニティに属する人々への詳しいインタビューや相互評価によって決定される<sup>4</sup>。この階級概念はマルクス主義的なそれとは完全に異質で、社会階層のイメージに近い<sup>5</sup>。こうした特性から、ウォーナーの階分類分が 1955 年以降の SSM 調査における階層帰属意識の選択肢の原型になったと考えられる。

ただし、引用からもわかるように、ウォーナーにとって階級とはあくまでも地域コミュニティ内での序列構造であって、アメリカ社会全体のような国家社会レベルの階級は想定されていない点には注意が必要である。

### (3) センタースの階級意識研究

日本における初期の階層研究に大きな影響を与えた文献の 1 つが、センタースの階級帰属意識研究である (Centers 1949)。

センタースは階級を完全に主観的なものとして定義した。「階級は階層とは違い、全く心理的な現象なのである。つまり個人にとって階級とは内在的なもので、自己が何者かに所属しているという感情であり自己を自己以上の何ものと同一視することである」(松島静雄訳 1958: 31, 原文にある傍点は省略)。

センタースが用いた階級帰属意識の質問文は、以下のようなものである。これは、先に述べた世論調査における階級帰属意識項目やウォーナー流の階級概念を批判的に検討した上で - センタースによる改良が妥当かどうかはここでは議論しないが - 作成されている ([ ] 内が選択肢)。

If you were asked to use one of these four names for your social class, which would you say you belonged in ; the middle class, lower class, working class, or upper class ?

<sup>4</sup> ウォーナーの階級測定法には、Evaluated Participation と Index of Status Characteristics の 2 種類がある。前者はコミュニティのフィールド調査を中心に行う方法、後者はいくつかの地位変数を重み付けして一次元的な指標を合成する方法である。詳しくは Warner et al. 1949 を参照。

<sup>5</sup> ウォーナーの class は、日本語文献ではしばしば「階層」と訳されている。また富永健一は「ウォーナーとパーソンズには、完全な理論的一致がみられる。ただし、そのおなじものを、ウォーナーは『階級』(クラス)と呼び、パーソンズは『成層』(ストラティフィケーション)と呼んでいる」(富永 [1957] 2008: 203) と評している。なお、ウォーナー自身は social stratification を「階級のランク付けのシステムの総体」といった意味で、class とは区別して用いている (Warner et al. 1949)。

[Middle, Lower, Working, Upper, Don't know]

(Centers 1949 : 232)

以上のように、1940 年代以前のアメリカにおける階級帰属意識測定の試みは、いずれもマルクス主義的階級論に依拠するものではない。マルクス主義の影響が強かった当時の日本の研究者にとっては、この点は不満であったろう。また素朴に考えても、1940 年代のアメリカ社会を想定した質問を、そのまま 1950 年代の日本で使用するのは無理がある。そこで、アメリカ流の階級帰属意識を、日本社会に適合するように修正する必要が生じる。その結果生まれたのが、階級帰属意識と階層帰属意識である。

### 2.2.2 日本版「階級帰属意識」

まず、階級帰属意識から検討しよう。六大都市調査および 55 年 SSM 調査における階級帰属意識は、以下のようなものであった ([ ] 内は選択肢)。

#### ・六大都市調査

仮に現在の日本の社会を、資本家階級、労働者階級、その他の三つに分けるとすれば、あなたはそのどれにはいると思いますか。

[資本、労働、その他]

(尾高・西平 1953 : 49)

#### ・1955 年 SSM 調査

それでは、仮に現在の日本の社会全体を、この表にある三つの階級にわけるとすれば、あなたご自身は、このどれにぞくするとお考えですか？

[労働者階級、中産階級、資本家階級、その他]

注：調査票には「『どれにもはまらない』と答えた場合は、『それでは、どれが一番近いとお考えですか』と追求すること」との指示がある。

(日本社会学会調査委員会 1958 : 387)

一見してわかるように、ここでの階級概念はマルクス主義的なものに変更されている。ただし、選択肢には差異があり、六大都市調査では「資本」と「労働」の二階級図式が採用されているのに対し、55 年 SSM 調査では、その間に「中産階級」が導入されている。これは、六大都市調査において「その他」を「中間」のような名称で回答する人が多かったことに対

応じた結果らしい<sup>6</sup>。

階級の名称を日本語に翻訳する場合、middle class をどう扱うかは重要な問題である。中間階級、中産階級、中流階級、中間層などの訳が考えられ、それぞれの語が喚起するイメージやニュアンスは異なる（尾高 [1961] 1995）。本稿では「中産階級」が最終的に選択された経緯については立ち入らないが、同様の問題は階層帰属意識でも重要となる。

### 2.2.3 「階層帰属意識」とその意味

階層帰属意識について検討する前に、六大都市調査における社会階層（社会成層）の定義について確認しておこう。「社会的成層（social stratification）とは、その成員の社会的地位の差異にもとづく一全体社会の段階的構造を指し、そしてこの場合、各成員の社会的地位は、本人ならびにその近親者の職業、学歴、収入、財産、生活程度等によって規定されるものと考える」（尾高・西平 1953：3）。当然のことながら、この社会階層観が階層帰属意識の設計に影響している。階層帰属意識の質問文は、以下の通りである。

#### ・六大都市調査

仮に現在の日本の社会を、上流、中流、下流の三つの層に分けるとすれば、あなたはどの層にはいると思いますか。

[上流、中流、下流]

注：「中流」と答えた場合は、以下のどれにあたるかを質問する [中の上、中の中、中の下]

（尾高・西平 1953：49）

#### ・1955年SSM調査

それでは、仮に現在の日本の社会全体を、やはりこの五つの層にわけるとすれば、あなたご自身は、そのどれにはいると思いますか。

[上（上流階層）、中の上（中流階層の上のほう）、中の下（中流階層の下の方）]

下の上（下流階層の上の方）、下の下（下流階層の下の方）]

注：選択肢の（ ）内の語は、質問の際に対象者に示す回答票（調査票リスト）にのみ記載されている。

（日本社会学会調査委員会 1958：386）

六大都市調査の選択肢はアメリカの世論調査に、1955年SSM調査の選択肢はウォーナー

<sup>6</sup> 六大都市調査の階級帰属意識の単純集計表における階級カテゴリーは、調査票に準じた「資本・労働・その他」ではなく、「資本家・中間・労働者」になっている（尾高・西平 1953：20）。

の階級分類に、それぞれ準じたものになっている。注目すべきは、どちらの調査でも、選択肢に「流」がついている点である。

階層帰属意識がそうであったように、階層帰属意識でも選択肢の *upper, middle, lower* をどう訳すが重要な問題となる。階層の場合、階級の *middle class* ほど翻訳の幅はなく、単に「上・中・下」とするか「上流・中流・下流」とするかは二択になるだろうが、当時の研究者たちは後者を選んだ。

では、「流」をつけることとつけないことの違いは何だろうか。安田三郎によれば、六大都市調査当時の SSM 研究会は、階層帰属意識（の「流」をつけた選択肢）を「プレステイジの差を伴った生活様式の差を表すと考えていた」（安田 [1967] 2008 : 242）らしい。

尾高邦雄も、同様の記述を残している。「わたくしがこれまでに参加した調査から得た経験によると、（中略）『中流階級』とか『中流階層』とかいうことばをきいたときには、主として人びとが占めている社会的な地位の高さ、人びとに与えられている社会的な尊敬の度合、プレステイジ（威信）の大きさなどと結びつけて判断する傾向がある」（尾高 [1961] 1995 : 207）。

安田および尾高の発言はいずれも調査後の回顧なので注意が必要だが、基本的な見解は共通している。すなわち、威信のニュアンスが強い序列構造のイメージを喚起することが、選択肢に「流」をつけた意図だったと思われる。六大都市調査および 1955 年 SSM 調査では、社会的地位の「格付け」（職業威信スコアや社会経済指標の作成）による階層構造の把握が重要課題となっていたことも、このことと関係していると考えられる。

一方、「流」を外した場合はどうか。安田は以下のような興味深い指摘を行っている。彼自身の面接経験によれば、階層帰属意識の選択肢を単に上・中・下とすると「生活程度を意味することになってしまって、プレステイジのニュアンスはきわめて薄くなっている」（安田 [1967] 2008 : 242.）。安田は「生活程度」の意味を明確に述べていないが、収入や財産所有などの経済的要因と強く結びついたものを想定していると推測される。もちろん、これらはいくまでも「回答者の反応に対する調査者側の印象」であって、実際に回答者がこうした言葉の違いをどのようにとらえていたのか、今となってはわからないのだが。

ところで、六大都市調査では中流を 3 分割する形式だった選択肢が、1955 年 SSM 調査では中流と下流をそれぞれ 2 分割する形式に変更されている。これは六大都市調査における階層帰属意識の分布の偏りが大きかったことが、その原因ではないかと考えられる<sup>7</sup>。

<sup>7</sup> 六大都市調査については「サンプルの社会的地位を決定する基本的方法である職業の格付けや、その所属階層に関する自己判定の方法が、かならずしも完全なものとはいえなかった」（日本社会学会調査委員会 1958 : 3）との反省があった。ただし、具体的にどのような点が不十分であったのかは詳しく述べられていない。

6 大都市調査の階層帰属意識の分布は、「上流」と「中流の上」の合計比率が4.5%、「中流の中」が25.3%、「中流の下」が28.9%、「下流」が41.3%であった（尾高・西平1953：21）。この結果は、先に触れたアメリカにおける同タイプの調査結果と比較して、大きく下方に偏ったものになっている。下流は回答者の約4割を占めるが、これだけの人びとが下流と回答するのであれば、この層をさらに細分してその特徴を詳しく調べたいのが人情である。他方、中流の3カテゴリーを見ると、中流の上と回答する人は少なく、この層は実質的に中流の中と中流の下に2分されていることがわかる。

こうした結果を踏まえると、ほとんど回答者のいない上流はともかくとして、中流と下流はそれぞれ2つの下位カテゴリーを設定すれば、もっとバランスの取れた分布を得られるのではないかと考えるのが自然であろう。1955年SSM調査の階層帰属意識がウォーナー流の選択肢に変更されたのは、こうした事情が背景にあったのかもしれない<sup>8</sup>。

ところで、すでに触れたようにウォーナーの階級概念は地域コミュニティを想定しており、全国レベルの社会を想定したものではない。しかし、六大都市調査およびSSM調査における社会階層は「一全体社会の段階的構造」を想定していた。このため、測定しようとする対象の範囲に齟齬が生じてしまう。1955年SSM調査では、「日本の社会全体」の階層帰属の直前に、回答者が住む地域（行政市町村）の階層帰属を質問しているが、それはこの点を考慮した結果だろう。

以上のように検討してみると、ウォーナーの階級概念を階層帰属意識の質問文へと転用するのは、良く言えば創造的な読み替え、悪く言えば怪しげな論理の飛躍を伴う強引な借用、ということになるだろうか。

なお、1955年SSM調査における階層帰属意識の選択肢は、調査員が記入する調査票では単に「上・中の上・中の下・下の上・下の下」となっており、調査対象者が回答する際に提示される「調査票リスト」（回答票）には「流」がつけられていた。この方式は、尾高（〔1967〕2008）によると1965年SSM調査でも踏襲されたようだが、実際のところはよくわからない<sup>9</sup>。1975年調査以降は、調査票、回答票とも「流」が外れることになるが、このことは佐藤（2009）が指摘するように1970年代以降の（そして1950年代と60年代の）階層帰属意

<sup>8</sup> SSM調査の階層帰属意識項目については、平松貞実が以下のように回想している。「私は尾高邦雄から大学の講義で『SSM調査』の質問・回答の出来るいきさつを聞いた。『上の上』『上の下』『中の上』『中の下』『下の上』『下の下』の六段階でプリテストを行ったところ、『上の下』と『中の上』とはあまり差が見られなかった。『上』と回答する人が少ないということもあり、『上の上』と『上の下』は『上』一つに統合して五段階とした、という」（平松1998：196）。

<sup>9</sup> 現行の1965年調査コードブック（SSMトレンド分析研究会1994）には当時の回答票が掲載されていないため、尾高の発言の真偽は不明である。1965年SSM調査データの再コーディング作業に関わった佐藤俊樹も、1965年調査で「流」が用いられていたかどうかは確認できていないとしている（佐藤2009）。

識の性質を考える上で重要な意味を持つと思われる。

### 2.3 「国民生活に関する世論調査」における「生活程度」

内閣府は、戦後間もない1948年から「国民生活に関する世論調査」（以下、「国民生活調査」と略）を実施してきた。この調査は、国民の生活状況や生活に関する様々な意識を測定し、行政の資料とすることを目的とするものである。1954年以降の調査では、「生活程度」についての質問が行われている。

国民生活調査における生活程度の質問文および選択肢には多少の変化があるが<sup>10</sup>、基本的には以下のような形式で測定されている。（以下、本文中の「生活程度」は、特に断りがない限りこの質問のことを指す。）

お宅の生活程度は、世間一般からみて、この中のどれにはいると思いますか。

[上、中の上、中の中、中の下、下]

国民生活調査の場合、調査票・回答票とも「流」はつけられておらず、単に「上・中の上…」となっている<sup>11</sup>。先に、「単なる上・中・下は、生活程度を意味する」という安田三郎の発言を紹介したが、国民生活調査の質問文は、まさに「生活程度」を尋ねるものであり、その選択肢に「流」を用いなかったのは、調査者側が安田と同様の見解を有していたことを示唆している。

こうしてみると、SSM調査における階層帰属意識と国民生活調査における生活程度は、質問内容や回答形式が似ているとはいえ、測定しようとする対象は異なる（少なくとも、調査者側は異なるものと考えていた）らしいことがわかる。後に、生活程度は階層帰属意識としばしば混同され、さらに単なる「中」を「中流」と読みかえられることで、「一億総中流」の根拠に祭り上げられていく<sup>12</sup>。その一方で、当初は階層帰属意識の選択肢に「流」をつけ

<sup>10</sup> 生活程度の質問が初めて登場した1954年調査では、「世間で一番いい暮らしをしている人たちを上の上とし、一番わるい暮らしをしている人たちを下の下として、その中をこのように分ければ、お宅はどれに入りますか。[上上、上中、上下、中上、中中、中下、下上、下中、下下]」となっていた。次に生活程度の質問が登場するのは1958年調査で、この時は「お宅の暮らし向きは、全国的にみればどの程度だと思いますか、この中〔回答票ア〕から選んでください。[上、中上、中、中下、下]」で、質問文および「中」カテゴリーの語句が微妙に異なる。本文で示した質問文になるのは、1964年調査以降。

<sup>11</sup> 筆者が確認した最も古い回答票は1967年調査報告書に掲載されているもので、この時点で「流」はついていない。

<sup>12</sup> ただし、『国民生活に関する世論調査』昭和39年（1964年）報告書では、生活程度を分析する節のタイトルが「中流意識の拡大と生活の満足感について」となっており、調査者側も生活程度を読み替えていたことがわかる。また、この時点で「中流意識」という言葉が登場していることにも注目したい。

ていたSSM調査が後に「流」を外し、この調査に関わった研究者の多くが階層帰属意識の「中流」解釈に慎重な姿勢を示すようになるのは、皮肉な運命といわざるをえない。

### 3. データ

以降の節では、高度経済成長期における階層帰属意識と生活程度の性質についてデータ分析を行う。本稿で用いるのは、「社会階層と社会移動」全国調査（SSM調査）と「国民生活に関する世論調査」（国民生活調査）の2種類である。SSM調査は、1955年以降10年おきに行われているが、今回は、1955年、1965年、1975年の3時点のデータを用いる。この3時点のSSM調査は、男性のみが対象となっていた。（調査の詳細については付録参照。）

国民生活調査は、1948年の初調査以降、現在までの60年以上ほとんど毎年行われてきており、生活に関わる人々の意識の変化を知る上で貴重な調査である。この調査の単純集計は各年度の調査報告書に集録されているほか、インターネットでも閲覧することができる<sup>13</sup>。また、1963年・1964年・1965年・1967年の調査データについては、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブにおいて個票データが公開されている。今回分析に用いるのは、この4時点の個票データである。（ただし、1963年調査データでは生活程度が質問されていないため補助的な利用にとどまる。調査の概要は付録参照。）

### 4. 分析

#### 4.1 階層帰属意識と生活程度の分布

まず、SSM調査における階層帰属意識の分布を確認しておこう。表1は、1955年から1975年までの階層帰属意識の分布をまとめたものである。1955年調査では、以後の調査でも継続して測定されることになる「日本の社会全体」における帰属階層の他に、(1) 地域（行政市町村）内の所属階層、(2) 日本社会全体における父の所属階層、(3) 日本社会全体における祖父の所属階層、(4) 昭和10年頃の日本社会全体における所属階層、(5) 戦争直後の日本社会全体における所属階層、(6) 調査員による回答者の所属階層の判定、が測定されている。すでに触れたように、ウォーナーの階級概念は地域コミュニティをベースとしていた。そのため、これを階層帰属意識に転用し、さらに日本社会全体における位置づけへと拡張するに際し、回答傾向の差異が生じるかどうかを確認する必要があるのだろう。そのことも

<sup>13</sup> <http://www8.cao.go.jp/survey/index-ko.html> (2010年5月12日現在)

あり、1955 年データについては、地域内の階層帰属意識の分布も併せて掲載した。日本社会全体の分布よりも高めになる点に興味深い。(なお、昭和 10 年頃と戦争直後の階層帰属意識については、橋本 (2009) が基礎的な分析を行っている。)

表 1 SSM 調査における階層帰属意識の分布：1955-1975

|       | 1955 年  |      | 1965 年  | 1975 年  |
|-------|---------|------|---------|---------|
|       | 日本の社会全体 | 地域内  | 日本の社会全体 | 日本の社会全体 |
| 上     | .2      | 1.3  | .3      | 1.2     |
| 中の上   | 7.1     | 14.8 | 12.1    | 23.8    |
| 中の下   | 34.8    | 40.0 | 42.7    | 54.0    |
| 下の上   | 37.7    | 27.0 | 32.2    | 17.0    |
| 下の下   | 18.6    | 15.8 | 8.8     | 4.0     |
| DK    | 1.6     | 1.1  | 3.9     | 1.8     |
| % の基数 | 2,014   |      | 2,077   | 2,724   |

「中」比率は、1955 年で約 4 割だったが、75 年にはほぼ 8 割に達している。

一方、国民生活調査の分布は、表 2 のようになる。

表 2 国民生活調査における生活程度の分布：1958-1975

| 年    | 上   | 中の上 | 中の中  | 中の下  | 下    | DK  | % の基数  |
|------|-----|-----|------|------|------|-----|--------|
| 1958 | 0.2 | 3.4 | 37   | 32   | 17   | 10  | 15,941 |
| 1959 | 0.3 | 3.3 | 37   | 33   | 17   | 9   | 16,897 |
| 1960 | 0.4 | 3.9 | 40.8 | 31.5 | 13.6 | 9.8 | 17,291 |
| 1961 | 0   | 4   | 41   | 31   | 13   | 11  | 17,103 |
| 1964 | 0.5 | 6.6 | 50.2 | 30.3 | 8.5  | 4.0 | 16,698 |
| 1965 | 0.6 | 7.3 | 50   | 29.2 | 8.4  | 4.5 | 16,145 |
| 1966 | 0.7 | 7.3 | 51.7 | 28.4 | 7.4  | 4.5 | 16,277 |
| 1967 | 0.6 | 6.3 | 53.2 | 28.7 | 7.3  | 3.9 | 16,358 |
| 1968 | 0.6 | 7.6 | 51.4 | 28.0 | 7.6  | 4.8 | 16,619 |
| 1969 | 0.7 | 6.8 | 51.7 | 29.6 | 7.7  | 3.4 | 16,848 |
| 1970 | 0.6 | 7.8 | 56.8 | 24.9 | 6.6  | 3.3 | 16,739 |
| 1971 | 0.6 | 6.8 | 56.3 | 26.3 | 6.4  | 3.6 | 16,399 |
| 1972 | 0.6 | 7.0 | 57.6 | 24.7 | 6.5  | 3.6 | 16,985 |
| 1973 | 0.6 | 6.8 | 61.3 | 22.1 | 5.5  | 3.7 | 16,338 |
| 1974 | 0.5 | 7.0 | 60.9 | 22.6 | 5.7  | 3.3 | 16,552 |
| 1975 | 0.6 | 7.2 | 59.4 | 23.3 | 5.4  | 4.0 | 8,145  |

出典：『国民生活に関する世論調査』サイトに掲載の各年度集計より作成

注 1：小数点以下なしと小数点以下ありの数値が混在しているが、これらは全て元の集計の表記に準じている。また、比率の合計が 100% にならない場合がある。

注 2：1958 年から 1961 年までの選択肢は「上、中上、中、中下、下」

注 3：1974 年と 1975 年は年 2 回調査が行われているが、ここでは 1 回目の調査の数値を用いた。



全体的には、いわゆる「中」意識（中の上、中の中、中の下の合計比率）の拡大が確認できる。1958年で7割程度だった「中」意識は、64年には8割を超え、73年には9割に達する。

カテゴリー別に見てみると、「上」はほとんど変化がない。「中の上」と「中の中」はほぼ倍増している。逆に「中の下」と「下」は減少しており、特に「下」は3分の1以下になっている。もう1つ特徴的なのは、1961年までの調査にDKが多いことである。この原因が、質問自体が当時の人びとには答えにくいものだったためなのか、調査手法上の問題があったのか、あるいは別の何かによるものなのかはわからないが、1955年SSM調査におけるDK率の少なさと比較すると興味深い。

#### 4.2 階層帰属意識と社会経済的変数との関連

階層帰属意識が、教育、職業、収入といった客観的な地位変数とある程度の関連をもつことは良く知られている。ただし、そうした先行研究の多くは1970年代以降のデータを分析したものが多く、1950年代・60年代のデータを分析したものは少ない。本節では、この点を確認するために、階層帰属意識・生活程度を従属変数とする重回帰分析を行う。

まず、SSM調査データから検討しよう。階層帰属意識は「上」=5～「下の下」=1とコードする。独立変数はこの種のモデルとして標準的な、年齢・教育年数・職業威信スコア（1975年版）・世帯収入（世帯年収を連続値に変換）を使用する。なお職業威信スコアは無職者の補完を行わず、有職者のみを対象とする。

表3に分析に使用した変数の記述統計量を、表4に重回帰分析の結果を示す。

独立変数の影響のパターンは、先行研究に見られる傾向と一致している。注目すべきは決定係数で、1955年、1965年、1975年と時代が進むにつれて、決定係数が低下していく。1975年以降の階層帰属意識と社会経済的変数の関連の傾向については吉川（1999）がすでに分析しており、近年になるほど関連が強まる傾向が指摘されている。それに先立って、高

表3 SSM調査データの記述統計量

|               | 1955年  |        | 1965年  |         | 1975年   |         |
|---------------|--------|--------|--------|---------|---------|---------|
|               | 平均     | S.D.   | 平均     | S.D.    | 平均      | S.D.    |
| 階層帰属意識        | 2.326  | .862   | 2.596  | .824    | 3.013   | .780    |
| 年齢            | 40.886 | 12.715 | 40.235 | 11.780  | 40.084  | 12.079  |
| 教育年数          | 8.802  | 2.379  | 9.812  | 2.563   | 10.710  | 2.709   |
| 職業威信スコア（75年版） | 42.810 | 9.595  | 44.549 | 10.833  | 45.158  | 10.919  |
| 世帯収入（年収：万円）   | 25.981 | 21.387 | 88.094 | 109.311 | 293.043 | 186.483 |
| N             | 1,784  |        | 1,761  |         | 2,386   |         |

注：階層帰属意識は「上」=5～「下の下」=1でコード

表 4 階層帰属意識（男性有職者）の重回帰分析：SSM 調査（1955-1975）  
 数値：標準化偏回帰係数（ $\beta$ ）

|                    | 1955 年              | 1965 年              | 1975 年              |
|--------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 年齢                 | .039                | .000                | .029                |
| 教育年数               | .162 <sup>***</sup> | .143 <sup>***</sup> | .070 <sup>**</sup>  |
| 職業威信               | .117 <sup>***</sup> | .130 <sup>***</sup> | .070 <sup>**</sup>  |
| 世帯収入               | .242 <sup>***</sup> | .183 <sup>***</sup> | .155 <sup>***</sup> |
| 調整済 R <sup>2</sup> | .153 <sup>***</sup> | .104 <sup>***</sup> | .046 <sup>***</sup> |
| N                  | 1,784               | 1,761               | 2,386               |

\*\*\* : p<.001, \*\* : p<.01, \* : p<.05

度経済成長期に決定係数が低下していくフェイズが存在していたことは非常に興味深い。

国民生活調査についても、同様の分析を行うことができる。生活程度は「上」=5～「下」=1 とコードする。独立変数は SSM 調査データの場合と共通だが、国民生活調査は男女とも調査対象となっているため、性別（女性ダミー）も追加する。独立変数は SSM 調査データの場合とは異なり、世帯収入（月収）以外はカテゴリカルに処理される。年齢は 10 歳刻み、学歴は「中卒以下、高卒、大卒」の 3 カテゴリー<sup>14</sup>、職業は「上層ホワイト、下層ホワイト、

表 5 国民生活調査データの記述統計量

|               | 1964 年 |      | 1965 年 |      | 1967 年 |       |
|---------------|--------|------|--------|------|--------|-------|
|               | 平均     | S.D. | 平均     | S.D. | 平均     | S.D.  |
| 生活程度          | 2.587  | .766 | 2.604  | .780 | 2.628  | .747  |
| 性別（女性）        | .531   | .499 | .548   | .498 | .542   | .498  |
| 年齢（基準：60 歳以上） |        |      |        |      |        |       |
| 20-29 歳       | .217   | .412 | .216   | .411 | .156   | .363  |
| 39-39 歳       | .261   | .439 | .256   | .436 | .296   | .456  |
| 40-49 歳       | .217   | .412 | .223   | .416 | .266   | .442  |
| 50-59 歳       | .158   | .365 | .159   | .366 | .179   | .383  |
| 学歴（基準：中卒以下）   |        |      |        |      |        |       |
| 高卒            | .287   | .452 | .301   | .459 | .310   | .463  |
| 大卒            | .070   | .256 | .069   | .253 | .081   | .272  |
| 職業（基準：無職）     |        |      |        |      |        |       |
| ホワイト上         | .042   | .200 | .043   | .202 | .045   | .207  |
| ホワイト下         | .105   | .306 | .104   | .305 | .103   | .304  |
| ブルー           | .152   | .359 | .143   | .350 | .182   | .386  |
| 自営            | .146   | .353 | .149   | .356 | .154   | .361  |
| 農業            | .233   | .423 | .223   | .416 | .181   | .385  |
| 世帯収入（月収：万円）   | —      | —    | —      | —    | 5.899  | 2.981 |
| N             | 15,986 |      | 15,428 |      | 11,139 |       |

注：生活程度は「上」=5～「下」=1 でコード

<sup>14</sup> (1)「未就学・小卒」および「旧高小・新中卒」を「中卒以下」、(2)「旧中・新高卒」を「高卒」、(3)「旧高専大・新大卒」を「大卒」、とした。

表6 生活程度の重回帰分析：国民生活に関する世論調査（1964-1967）  
 数値：標準化偏回帰係数（ $\beta$ ）

|                    | 1964年    | 1965年    | 1967年    |          |
|--------------------|----------|----------|----------|----------|
|                    |          |          | Model 1  | Model 2  |
| 性別（女性ダミー）          | .019*    | .007     | -.004    | .001     |
| 年齢（基準：60歳以上）       |          |          |          |          |
| 20-29歳             | .043***  | .069***  | .073***  | .099***  |
| 39-39歳             | .012     | .031**   | .072***  | .058***  |
| 40-49歳             | .007     | .020*    | .071***  | .024     |
| 50-59歳             | -.010    | .029**   | .060***  | .017     |
| 学歴（基準：中卒以下）        |          |          |          |          |
| 高卒                 | .182***  | .180***  | .202***  | .112***  |
| 大卒                 | .162***  | .158***  | .168***  | .079***  |
| 職業（基準：無職）          |          |          |          |          |
| ホワイト上              | .012     | .009     | .015     | .004     |
| ホワイト下              | -.001    | -.020*   | -.024*   | -.016    |
| ブルー                | -.117*** | -.106*** | -.127*** | -.096*** |
| 自営                 | .056***  | .061***  | .045***  | -.012    |
| 農業                 | .002     | -.022*   | .026*    | .062***  |
| 世帯収入               | —        | —        | —        | .371***  |
| 調整済 R <sup>2</sup> | .080***  | .077***  | .086***  | .199***  |
| N                  | 15,986   | 15,428   | 12,627   | 11,139   |

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$

ブルーカラー、自営、農業、無職」の6カテゴリ<sup>15</sup>で扱われる。これは元の変数が連続的に処理しにくい形で測定されているためである。

表5に分析で使用した変数の記述統計量を、表6に重回帰分析の結果を示す。なお、世帯収入は1967年データにしか含まれないため、他時点データとの比較のために世帯収入以外の独立変数を用いたモデルを「モデル1」、世帯収入を含めたモデルを「モデル2」とする。

それぞれの独立変数の効果について概観しよう。まず性別だが、階層帰属意識には男女差があり、女性の方が高めに回答する傾向があること指摘されている（数土2009など）。しかし、今回の分析では1964年データ以外は性別ダミーの効果が有意になっていない。年齢の効果は総じて弱いですが、若年層の方が高い傾向がある。これはSSM調査の階層帰属意識には見られなかった傾向である。学歴は、高卒および大卒が有意な正の効果を持つ。ただし、高

<sup>15</sup> (1) 被傭者の「管理職」および「専門技術職」を「上層ホワイトカラー」、(2) 被傭者の「事務職」を「下層ホワイトカラー」、(3) 被傭者の「労務職」を「ブルーカラー」、(4) 自営者の「商工サービス業」と「その他」、および家族従業者の「商工鉦サービス業・その他」を「自営」、(5) 自営者と家族従業者の「農林漁業」を、「農業」、(6) 「無職の主婦」と「失業者・その他」と「学生」を「無職」とした。

卒の方が大卒よりも係数が若干大きい。職業は、ブルーカラーが低く、自営が高いという傾向がほぼ一貫している。世帯収入は、SSM 調査の場合もそうであったように、最も強い効果を持っている。

以上のように、細部については興味深い点、やや直観に反する点などもあるが、この時期の生活程度については、総じて階層帰属意識に関する先行研究と同じ傾向を見出すことができる。

ところで、すでに説明したように、対象者が男性のみの SSM 調査データに対し、国民生活調査データは女性を含んでいる。そこで、同時期の SSM 調査データと国民生活調査データをより直接的に比較するために、SSM 調査データの独立変数を国民生活調査データの独立変数の形に変換し（逆はできない）、国民生活調査のデータを男性有職者に限定した分析を行った。結果を表 7 に示す。（モデル 1 とモデル 2 の定義は表 6 と同じ。）

表 7 1960 年代中頃の SSM 調査と国民生活調査の比較（男性有職者のみ）  
 数値：標準化偏回帰係数 ( $\beta$ )

|                    | SSM 調査  |         | 国民生活調査   |          |          |          |
|--------------------|---------|---------|----------|----------|----------|----------|
|                    | 1965 年  |         | 1964 年   | 1965 年   | 1967 年   |          |
|                    | Model 1 | Model 2 | Model 1  | Model 1  | Model 1  | Model 2  |
| 年齢（基準：60 歳以上）      |         |         |          |          |          |          |
| 20-29 歳            | -.001   | .011    | .004     | .020     | .015     | .060***  |
| 39-39 歳            | -.090   | -.062   | -.020    | -.028    | .001     | .023     |
| 40-49 歳            | -.098*  | -.070   | -.013    | -.005    | .015     | -.004    |
| 50-59 歳            | -.097** | -.080*  | -.018    | .009     | .036     | .006     |
| 学歴（基準：中卒以下）        |         |         |          |          |          |          |
| 高卒                 | .116*** | .081**  | .146***  | .134***  | .146***  | .080***  |
| 大卒                 | .164*** | .124*** | .152***  | .154***  | .174***  | .077***  |
| 職業（基準：農業）          |         |         |          |          |          |          |
| ホワイト上              | .078**  | .085**  | .041**   | .056***  | .021     | -.033*   |
| ホワイト下              | -.016   | -.009   | .026     | .024     | -.046*   | -.080*** |
| ブルー                | -.076*  | -.081** | -.127*** | -.092*** | -.178*** | -.195*** |
| 自営                 | .033    | .010    | .067***  | .105***  | .020     | -.085*** |
| 世帯収入               | —       | .193*** | —        | —        | —        | .359***  |
| 調整済 R <sup>2</sup> | .072*** | .104*** | .081***  | .076***  | .085***  | .186***  |
| N                  | 1,889   | 1,761   | 6,935    | 6,463    | 5,403    | 4,960    |

注：従属変数は、SSM 調査が階層帰属意識、国民生活調査が生活程度。

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$

全体的な傾向は両調査とも良く似ている。収入の効果に関しては、SSM 調査データよりも国民生活調査の方が効果が大きく、収入を追加することによる決定係数の上昇も大きい。これが階層帰属意識と生活程度の違いによるものなのか、年収（SSM 調査）と月収（国民生活調査）の違いによるものなのか、あるいはそれらの複合的な効果なのかは、残念ながら

よくわからない。ともあれ、以上の分析から見る限り、高度経済成長期の階層帰属意識と生活程度は、類似した性質を持っていたことがわかる。

#### 4.3 生活意識との関連

前節で確認したように、階層帰属意識および生活程度は、客観的な変数とある程度の関連を持つ。その一方で、暮らし向きや生活満足感といった、生活に関わる主観的な評価意識（以下、これを「生活意識」と呼ぶ）との関連も強いことが指摘されている。直井（1979）は階層帰属意識と暮らし向き意識との関連を、前田（1998）は生活満足感との関連を、そして中尾（2002）は、複数の生活意識の組み合わせのパターンとの関連を、それぞれ指摘している。

ただし、これらの知見もまた1970年代以降のデータによっており、高度経済成長期の意識がどのようなものであったのかはわからない。この点を検討しよう。

SSM調査、特に1955年調査データと1965年調査データには、生活意識項目がほとんど含まれていないので、残念ながらこの点について十分な分析はできない。対照的に、国民生活調査には生活意識が豊富に含まれているので、今回はこちらを利用し、代表的な生活意識である「暮らし向き」意識と生活満足感の関係を分析する。

生活意識は、以下の質問文で測定される。

- ・今の暮らし向き

お宅の今の暮らしは楽ですか、苦しいですが、普通ですか

[楽, 普通, 苦しい]

- ・生活満足感

あなたはお宅の暮らしについてどうおもっていらっしゃいますか。この中であなたの気持ちに一番近いものを選んでください。

[充分満足している, 充分とはいえないが一応満足している, まだまだ不満だ, きわめて不満だ]

表8に、2つの生活意識の分布をまとめた。「今の暮らし向き」は、1960年代で測定が打ち切られてしまったため現在との比較はできないが、暮らし向きは「楽」という人は多くなく、「普通」6割、「苦しい」3割程度で安定している。生活満足感は現在でも継続して質問されているが（ただし選択肢の表現は変更された）、分布自体は近年のものと大きく変わらない。

表 8 国民生活調査における 2 つの生活意識 (1964-1967)

数値：%

|       |        | 1964 年 | 1965 年 | 1967 年 |
|-------|--------|--------|--------|--------|
| 暮らし向き | 楽      | 3.7    | 3.0    | 2.6    |
|       | 普通     | 65.1   | 64.8   | 64.9   |
|       | 苦しい    | 31.2   | 32.2   | 32.5   |
|       | % の基数  | 16,432 | 15,897 | 13,041 |
| 生活満足感 | 充分満足   | 4.7    | 4.5    | 5.3    |
|       | 一応満足   | 57.7   | 56.7   | 56.6   |
|       | まだまだ不満 | 34.2   | 34.4   | 33.8   |
|       | きわめて不満 | 3.5    | 4.3    | 4.3    |
|       | % の基数  | 16,368 | 15,849 | 15,982 |

注：DK は省略した。

表 9 は、生活程度と、暮らし向きおよび生活満足感のクロス表をまとめたものである。紙幅の都合上、65 年データのもののみ示す。

表 9 生活程度と、暮らし向き・生活満足感のクロス表 (65 年データ)

数値：%

|       |      | 生活程度 |      |      |      |      | N     |
|-------|------|------|------|------|------|------|-------|
|       |      | 上    | 中の上  | 中の中  | 中の下  | 下    |       |
| 暮らし向き | 楽    | 8.9  | 39.5 | 44.7 | 5.9  | 1.1  | 461   |
|       | 普通   | .5   | 8.7  | 62.7 | 24.9 | 3.3  | 9,886 |
|       | 苦しい  | .1   | 2.4  | 32.1 | 44.3 | 21.2 | 4,912 |
| 生活満足感 | 満足   | 5.8  | 31.5 | 52.1 | 8.6  | 1.9  | 685   |
|       | やや満足 | .6   | 9.2  | 63.2 | 23.3 | 3.8  | 8,641 |
|       | やや不満 | .1   | 2.8  | 39.6 | 44.2 | 13.2 | 5,251 |
|       | 不満   | .0   | 1.6  | 12.7 | 38.1 | 47.6 | 670   |

まず、暮らし向き意識から検討しよう。暮らし向きが「楽」だと、生活程度は「中の中」以上になる確率が高い。暮らし向きが「普通」だと、生活程度は「中の中」が過半数を占め、「中の下」がそれに次ぐ。暮らし向きが「苦しい」と、生活程度は「中の下」が中心になり、その隣接カテゴリーに分布する（「中の上」以上はほとんどいない）。

これは、直井（1979）が指摘した暮らし向き意識と階層帰属意識との関係によく似ている。もともと SSM 調査における暮らし向きと階層帰属意識は意味的に非常に近いものだが（盛山 1990）、国民生活調査における暮らし向きと生活程度のニュアンスはさらに近いので、当然と言えば当然の結果ではある。

生活満足についても、満足感が高いほど生活程度が高く、不満が強いほど生活程度が低くなる傾向がある。これも、先行研究で繰り返し指摘されきたことである。

生活程度と、暮らし向きおよび生活満足感との相関係数（0次相関と、前節の重回帰分析で用いた独立変数をコントロールした偏相関）をまとめたのが、表10である。（生活程度、暮らし向き、生活満足感、肯定的なほど高い数値になるように処理されている。）

表10 生活程度と暮らし向き、生活満足感の相関係数

|       | 1964年  |      | 1965年  |      | 1967年  |      |
|-------|--------|------|--------|------|--------|------|
|       | 0次相関   | 偏相関  | 0次相関   | 偏相関  | 0次相関   | 偏相関  |
| 暮らし向き | .388   | .357 | .422   | .394 | .455   | .371 |
| 生活満足感 | .368   | .347 | .420   | .402 | .436   | .366 |
| N     | 15,569 |      | 15,079 |      | 10,989 |      |

統制変数：1964年・1965年＝性別、年齢、学歴、職業、1967年＝性別、年齢、学歴、職業、世帯収入。欠損値はリストワイズ処理。相関係数は全て0.1%水準で有意。

社会経済的変数をコントロールしても、偏相関係数の値は0次相関の値からほとんど低下せず、生活程度と強く結びついている。以上のように、1960年代中頃の生活程度と生活意識の関連は、1970年代以降の階層帰属意識と生活意識の関連とよく似ていることがわかる。

#### 4.4 中意識拡大の原因は何か？

すでに確認したように1950年代から1960年代にかけて、階層帰属意識・生活程度における「中」回答の比率は大きく上昇した。1970年代以降は「中」比率は安定したまま推移する状態が続いている。

こうした変化の原因については様々な説明がなされているが、最も有力なもの1つが、盛山和夫による「生活水準の『中』イメージの断続的变化説」である（盛山1990）。この仮説によれば、人々は自らの社会経済的な地位や生活水準をもとに帰属階層を判断するが、その際に帰属階層判断のための基準（以下「階層基準」と略す）を想定し、その階層基準と自分の置かれた位置や状況を比較する必要がある。

盛山は、階層基準について3つの補助的な仮定を導入している。第1に、階層基準は、調査時点での社会の正確な認知というよりは、過去のイメージに依拠したものになるという仮定。第2に、階層基準は所得分布のように抽象的なものではなく、具体的な生活スタイルのようにイメージしやすいものに準拠するという仮定。たとえば、社会全体の所得分布を想像して「年収が400万円以上あれば『中の下』だ」と考えるよりは、「一戸建ての持ち家と自

家用車とピアノを持って入れば『中の上』だ」と考える，ということである。最後に，いったん形成された階層基準は，ある程度長い期間にわたって持続するという仮定（盛山1990：64-65）。

以上の仮定に基づくと，高度経済成長期に階層帰属意識が上昇したのは「人々が古い生活水準イメージに基づいて階層基準を設定しており，その基準が大きく変化しないまま生活水準が急速に向上したためである」と考えることができる<sup>16</sup>。なお，ここでの階層基準は，モデルとしての「人々の平均的な階層基準」であって，人びとの階層基準を直接観測したものではない点に注意が必要である。また，盛山の仮説にはさらに続きがあるのだが（1970年代以降の安定局面のメカニズムについての議論），本稿で扱っているのは高度経済成長期の階層帰属意識・生活程度なので，そちらの部分の説明は省略する。

さて，この仮説を検証するためには，どういうデータが必要だろうか。階層基準を直接的に測定したデータがあれば理想的だが，残念ながらそのようなものは存在しない。次善の策としては，階層基準を直接扱うのではなく，実際の生活水準と結びつく財産（特に耐久消費財）と階層帰属意識の関係を分析できれば良さそうである。具体的には，1950年代から1970年代の複数時点で，階層帰属意識と（時点間比較が可能な）十分な数の財産保有情報を含むデータがあるとよい。（もちろん，適切なコントロール変数が揃っていることが前提である）。しかし，SSM調査の場合，1955年データの財産項目が貧弱であり，なおかつ1955年から1975年までの財産項目の共通性が低いため，有効な分析が難しい<sup>17</sup>。

今回分析した国民生活調査の個票データには，十分ではないものの，この説の検証がある程度可能な変数が含まれている。1960年代の国民生活調査で測定されていた，「せめてこれ位の生活をしたい」という生活水準の欲求についての質問がそれである。

お宅として，将来「せめてこれ位の生活をしたい」とあなたが考えている生活はどのようなものをお聞きしたいと思います。「せめてこれ位のもは持った生活をしたい」というものをこの中から選んで下さい。

1. ラジオ・ミシン
2. ラジオ・ミシン・テレビ・電気洗濯機
3. ラジオ・ミシン・テレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫・電気掃除機
4. ラジオ・ミシン・テレビ・電気洗濯機・電気冷蔵庫・電気掃除機・乗用車・ピアノ

注：質問文および選択肢の表現は調査年によって微妙に異なる。ただし選択肢の内容は共通。

<sup>16</sup> 類似の指摘は，直井（1979），間々田（1990）などでもなされている。

<sup>17</sup> 直井（1979）が財産保有（電話）と階層帰属意識の関係について1955年と1975年を比較する興味深い分析を行っているが，直井自身が「1つの傍証にすぎない」と断っているように材料不足の感は否めない。



選択肢は最も少ないもので2種類の財が提示され、以降2種類ずつ、より高価な財が追加されていく構造になっている。基礎財から上級財へと要求水準が上昇する形になっていると言ひ換えてもよい。(ラジオとミシンが基礎財として相応しいかは、議論の余地があるだろうが。)

以下では、この質問を「希望財産水準」と呼ぼう。希望財産水準は、盛山の言う階層基準そのものではないが、それに近い性質を持っていると考えられる。たとえば、2番目の選択肢の「ラジオ・ミシン・テレビ・電気洗濯機」を持っていることが「中の中」の階層基準(人びとが有していると考えられる平均的なイメージとしての)と対応しているとしよう。この時、これら4種の財産を所持していない人は、自分の帰属階層を「中の下」以下と判断するだろう。逆に、これら4種の財産をすでに所持している人(選択肢3もしくは4を選ぶ人がそうである可能性が高い)は、自らの帰属階層を「中の中」以上と回答するだろう。つまり、希望財産水準は、人々の階層基準をある程度反映するので、結果として生活程度との関連を予想できる。したがって、希望財産水準と生活程度の対応関係を分析することで、具体的な階層基準がどのあたりにあるかを推測できる。以上の議論は、「生活水準の『中』イメージの断続的变化説」の2番目の仮定に対応している。

その上で、「生活水準の『中』イメージの断続的变化説」の3番目の仮定-いったん形成された階層基準は、ある程度長い期間にわたって持続する-が正しいなら、希望財産水準と階層帰属意識(生活程度)の関係の時間的変化について、次のような仮説を考えることができる。

仮説：所与の希望財産水準における生活程度の分布は、時間の経過によって変化しない(少なくとも高度経済成長期の間は)。

仮説の検証に先立って、希望財産水準の性質を確認しておこう。表11は、希望財産水準の分布をまとめたものである(選択肢は簡略化のため財産数で表記した)。

表 11 希望財産水準の分布の変化：1963-1967

数値：%

|       | 1963 年 | 1964 年 | 1965 年 | 1967 年 |
|-------|--------|--------|--------|--------|
| 2 種類  | 1.7    | .6     | .4     | .3     |
| 4 種類  | 22.0   | 13.7   | 9.5    | 3.9    |
| 6 種類  | 51.7   | 55.0   | 47.5   | 33.8   |
| 8 種類  | 24.5   | 30.7   | 42.6   | 62.0   |
| % の基数 | 12,911 | 15,560 | 14,706 | 7,006  |

注 1：DK は除外した。注 2：選択肢の詳細は本文参照。

注 3：1967 年調査はスプリット形式で測定されたので回答者数が半減している。

わずか 4 年の間に、人々の希望水準が大きく上昇していったことがわかる。高度経済成長期は各種耐久消費財の普及率が急速に高まった時期であるが、こうした人々の欲望がそれを支えていたわけである。

表 12 は、希望財産水準と、人々の実際の経済状況の対応関係を分析したものである。分析法は一元配置分散分析、独立変数は希望財産水準（2 種類は人数が少ないので 4 種類と統合）、従属変数は所有財産（10 項目）の合計および世帯収入（月収）である。（世帯収入は 1963 年データと 1967 年データに、財産項目は 1963 年データにのみ含まれる。）

表 12 希望財産水準と所有財産数、世帯収入の対応関係（1963 年・1967 年）

| 希望財産   | 1963 年                  |      |        | 1963 年                  |      |        | 1967 年                 |      |       |
|--------|-------------------------|------|--------|-------------------------|------|--------|------------------------|------|-------|
|        | 所有財産数（10 種）             |      |        | 世帯収入（月収：万円）             |      |        | 世帯収入（月収：万円）            |      |       |
|        | 平均                      | S.D. | N      | 平均                      | S.D. | N      | 平均                     | S.D. | N     |
| 4 種類以下 | 1.1                     | 1.1  | 3,066  | 2.3                     | 1.1  | 2,615  | 3.5                    | 1.7  | 254   |
| 6 種類   | 3.1                     | 1.8  | 6,678  | 3.6                     | 1.7  | 5,886  | 5.0                    | 2.2  | 2,040 |
| 8 種類   | 5.4                     | 2.3  | 3,167  | 5.1                     | 2.5  | 2,819  | 6.9                    | 3.2  | 3,784 |
| 全体     | 3.2                     | 2.3  | 12,911 | 3.7                     | 2.0  | 11,320 | 6.1                    | 3.0  | 6,078 |
| F 値    | 4316.104 <sup>***</sup> |      |        | 1619.521 <sup>***</sup> |      |        | 400.153 <sup>***</sup> |      |       |

<sup>\*\*\*</sup> : p<.001

希望財産水準は、実際の経済水準とよく対応していることがわかる。この結果から見る限り、「現在の所有財産数 + 3」がおおよその希望財産水準ということになる。

次に、希望財産水準と生活程度の関連を分析しよう。ここでは 2 種類の分析を行う。1 つは、希望財産水準と生活程度の関連をクロス表分析（カイ二乗検定）で確認する。もう 1 つは、各種者経済的変数をコントロールした上で、希望財産水準が生活程度と関連を持つかどうかを重回帰分析で検討する。

まず、各調査時点の希望財産数と生活程度のクロス表分析の結果を表 13 に示す。

表 13 希望財産数と生活程度の関連

数値：%

| 調査年    | 希望財産数  | 生活程度 |      |      |      |      | N     |
|--------|--------|------|------|------|------|------|-------|
|        |        | 上    | 中の上  | 中の中  | 中の下  | 下    |       |
| 1964 年 | 4 種類以下 | .1   | 2.3  | 34.9 | 42.5 | 20.3 | 2,117 |
|        | 6 種類   | .3   | 4.7  | 53.0 | 34.4 | 7.6  | 8,296 |
|        | 8 種類   | 1.0  | 13.0 | 61.2 | 21.7 | 3.1  | 4,654 |
| 1965 年 | 4 種類以下 | .1   | 3.0  | 30.3 | 40.0 | 26.5 | 1,419 |
|        | 6 種類   | .2   | 4.3  | 50.2 | 36.0 | 9.3  | 6,706 |
|        | 8 種類   | 1.1  | 12.4 | 60.5 | 22.7 | 3.3  | 6,083 |
| 1967 年 | 4 種類以下 | .0   | .4   | 27.1 | 41.7 | 30.8 | 247   |
|        | 6 種類   | .1   | 2.5  | 47.5 | 40.2 | 9.7  | 1,883 |
|        | 8 種類   | .9   | 9.2  | 62.6 | 23.9 | 3.4  | 3,472 |

$\chi^2$  値：1964 年 = 1382.821、1965 年 = 1551.282、1967 年 = 611.572。  
いずれも 0.1% 水準で有意。

希望財産水準が高い人ほど、生活程度は高めに回答する傾向があることがわかる。希望財産水準が 4 種以下の場合、「中の下」と回答する人が最も多い。希望財産水準 6 種と 8 種では、いずれも「中の中」が多数派で、特に 8 種の場合は 6 割が「中の中」と回答している。したがって、希望財産水準が階層基準とある程度対応していることが確認された。

次に、重回帰分析の結果を表 14 に示す。ここでは、4.2 で行った生活程度の重回帰分析に、希望財産水準（4 種以下を基準とするダミー）を追加したモデルを分析した。

諸変数をコントロールしても希望財産水準は階層帰属意識を高める効果があり、その効果は 6 種より 8 種の方が強いことがわかる。所有財産数が階層帰属意識を高める効果があることはよく知られているが、希望財産水準は（表 12 から明らかなように）所有財産数の代理指標とみなせるので、当然と言えば当然であるが。

それでは仮説の検証に移ろう。ここでは、希望財産水準を第 3 変数としてコントロールした上で、調査年と生活程度の関係を分析する。（具体的には、希望財産水準を第 3 変数とし、希望財産水準の各カテゴリーごとに調査年×生活程度の 2 重クロス表を作成し、カイ二乗検定を行う。）もし、仮説が正しければ、調査年と生活程度の関係は独立になるはずである。なお、この分析におけるクロス表は表 13 の内容と実質的に共通になるので、分布については表 13 を見直していただきたい。（表 13 の調査年と財産水準の部分を入れ替えるのがここでの分析である。したがって、下位の 2 重クロス表のカイ二乗値は表 13 とは異なるが、各

表 14 生活程度の重回帰分析：国民生活に関する世論調査（1964-1967）  
 数値：標準化偏回帰係数（ $\beta$ ）

|                    | 1964 年   | 1965 年   | 1967 年   |          |
|--------------------|----------|----------|----------|----------|
|                    |          |          | Model 1  | Model 2  |
| 性別（女性ダミー）          | .028**   | .021*    | .032     | .029     |
| 年齢（基準：60 歳以上）      |          |          |          |          |
| 20-29 歳            | -.003    | .023     | -.014    | .031     |
| 39-39 歳            | -.043*** | -.026*   | -.030    | -.006    |
| 40-49 歳            | -.032**  | -.020    | -.024    | -.031    |
| 50-59 歳            | -.041*** | .000     | -.003    | -.021    |
| 学歴（基準：中卒以下）        |          |          |          |          |
| 高卒                 | .130***  | .132***  | .154***  | .097***  |
| 大卒                 | .118***  | .117***  | .142***  | .075***  |
| 職業（基準：無職）          |          |          |          |          |
| ホワイト上              | .005     | .006     | .013     | .002     |
| ホワイト下              | -.001    | -.017    | -.024    | -.020    |
| ブルー                | -.104*** | -.086*** | -.113*** | -.105*** |
| 自営                 | .038***  | .050***  | .026     | -.021    |
| 農業                 | .031**   | .011     | .045**   | .066***  |
| 世帯収入               | —        | —        | —        | .301***  |
| 希望財産水準（基準：4 種以下）   |          |          |          |          |
| 6 種                | .215***  | .242***  | .280***  | .214***  |
| 8 種                | .341***  | .413***  | .487***  | .352***  |
| 調整済 R <sup>2</sup> | .124***  | .133***  | .148***  | .217***  |
| N                  | 15,029   | 14,200   | 5,589    | 5,039    |

\*\*\*：p<.001, \*\*：p<.01, \*：p<.05

行の生活判断の分布そのものは変化しない。）

希望財産水準と生活程度の関係はそれほど大きくは変化していないが、全てのカテゴリーで、生活程度の下方シフトが見られる。特に、希望財産水準「4 種以下」が変化幅が大きく、64 年から 67 年の間に、「下」は 20.3% から 30.8% に上昇し、「中の中」は 34.9% から 27.1% に低下している。同様の変化は、「6 種」および「8 種」内でも見られる。ただし、希望水準が高いほど、生活程度の低下幅は小さくなる。カイ二乗値は「4 種以下」の下位クロス表で 36.674、「6 種」で 61.665、「8 種」で 33.342 となり、いずれも 0.1% 水準で統計的に有意である。したがって、希望財産水準に対応する生活程度の判断は時間の経過と独立ではなく、仮説は成立しない。もっとも、この程度の変化幅であれば「ある程度長い期間にわたって持続する」という仮定には矛盾しないと強弁することもできなくはないだろう。

1964 年から 1967 年にかけて同一希望財産水準内の生活程度判断が低下するのは、社会全体の希望水準（≒階層基準）の高まりを物語っている。例えばラジオがまだ高級品で普及率

が低かった時代であれば、ラジオを持っていることはその人の生活程度の判断を高めるだろう。しかし、ラジオが安価になり、誰でも当たり前で持てるようになれば、ラジオを持っていることは生活程度を必ずしも高めない。あるいは、多くの人が持っているラジオを自分がいまだに所有できないならば、そのことは生活程度の判断を引き下げる方向に作用するだろう。こうしたことから、時間の経過と共に、ラジオと生活程度の対応関係は下方シフトする。原・盛山（1999）風に、「上級財が基礎材へと転換してゆく」と言い換えてもいい。

希望財産水準4種以下で生活程度の方シフトが比較的大きいのは、そのレベルの財が上級財から基礎財へと転換したことを示唆している。他方、希望財産水準6種と8種（特に8種）において生活程度の方シフトがそれほど大きくないのは、それらの財は、まだ誰でも持てるようになったわけではなく、上級財としての地位をある程度維持できたからだろう。

このように、希望財産水準と生活程度の間はわずか4年の間に下方シフトした。しかし、表2に示したように、生活程度の分布はゆるやかに上方シフトしている。これは、希望財産水準自体の上昇（表11）が、各希望財産水準における生活程度の方シフトを上回ったためだろう。

以上の結果は、高度経済成長期における階層帰属意識・生活程度の上昇は、「生活水準の『中』イメージの断続的変化説」が想定するよりも複合的でダイナミックなメカニズムが働いていた可能性を示唆している。

もちろん、本節の分析には様々な限界があり、これだけで「生活水準の『中』イメージの断続的変化説」全体の妥当性を云々することはできない。しかし、適当なデータが2次分析可能であれば、高度経済成長期の階層帰属意識・生活程度の変化について、これまでの研究よりも踏み込んだ検討ができる可能性の一端は示しえただろう。

## 5. おわりに

以上、十分に体系的な形ではないが、高度経済成長期における階層帰属意識と生活程度に関していくつかの検討を行った。質問が設計された当時の事情をふり返ると、階層帰属意識と生活程度は異なる意図の元に作られたようであるが、今回の分析結果から見る限りは、早い段階からこれら2つの意識は類似した性質を持っていたらしいことがわかる<sup>18</sup>。また、1970年代以降の研究で観測される傾向との大きな違いは見出せなかった。したがって、本稿の分析結果を総合すると、階層帰属意識・生活程度については、現在までその性質は一貫

<sup>18</sup> 後に、濱島（1991）は階層帰属意識と中流帰属意識の違いを強調する調査分析を行っているが。

していたらしいことになる。

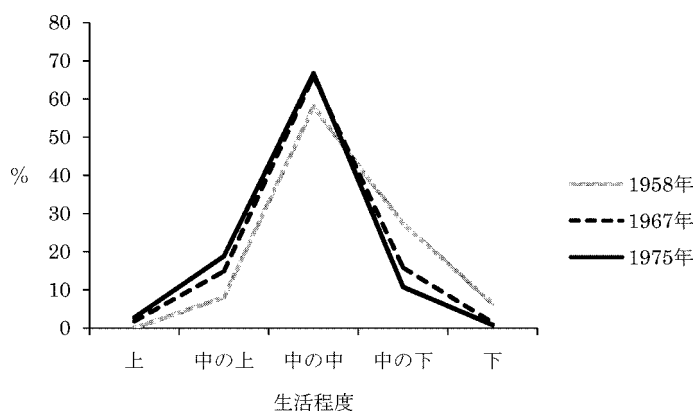
もっとも、これは分析手法の問題があるのかもしれない。本稿では多くの変数との関連を手早く把握するために標準的な多変量解析を多用したが、こうしたアプローチでは、階層帰属意識や生活程度の各カテゴリーが有している質的な意味を見落としてしまう可能性が高い。

その意味では、佐藤（2009）が行っているように、世帯収入と階層帰属意識の対応関係をシンプルに分析するアプローチの方が、意味的な差異の発見・解釈には適しているのかもしれない。たとえば国民生活調査の個票データは、現在のところ今回分析した時点のものしか公開されていないが、調査ごとに刊行されている調査報告書には、変数の単純集計だけでなく主要な変数とのクロス集計が掲載されている。（ただし、集計内容は一貫しているとは限らない。）生活程度についても、年齢・性別・職業・教育・世帯収入などとのクロス集計が行われており、これを再集計することで、社会経済的変数と生活程度の関係（2変数関係に限定されるが）を詳しく見ることができる。

図1と図2は、「国民生活に関する世論調査」調査報告書から再集計した世帯収入層別の生活程度の分布である（1967年データのみ個票データから計算）。

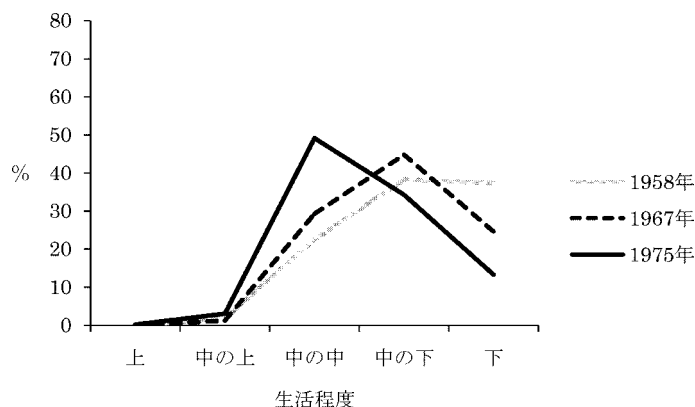
図1が高収入層（各時点で収入分布上位25%の層）、図2が低収入層（各時点で収入分布下位25%の層）である。高収入層の分布はあまり変化しないが、低収入層の生活程度は大きく上昇していることがわかる。

こうした分析を積み重ねることで、階層帰属意識と社会経済的変数の関連が1970年代に向かって低下していくというSSM調査データに見られた傾向の意味が、より明確になるか



出典：「国民生活に関する世論調査」調査報告書（1958年・1975年）、および「国民生活に関する世論調査」1967年個票データより作成

図1 高所得層の生活程度の変化（1958-1975）



出典：「国民生活に関する世論調査」調査報告書（1958年-1975年），  
および「国民生活に関する世論調査」1967年個票データより作成

図2 低所得層の生活程度の変化（1958-1975）

もしれない。このような「国民生活に関する世論調査」調査報告書のクロス集計を再構成して関連の変化を分析する試みについては、稿を改めて行う。

#### 【付記】

(1) 本稿の分析を行うにあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「国民生活に関する世論調査（第6回・第7回・第8回・第10回）」（寄託者：神戸大学名誉教授・三宅一郎）の個票データの提供を受けた。

(2) SSM調査データの利用にあたっては、2005年SSM調査研究会の許可を得た。

#### 付録 使用したデータの調査概要

調査概要は、(1) 調査時期、(2) 調査主体、(3) サンプルング法、(4) 対象者、(5) 有効回答者数（有効回収率）、(6) 備考、の順に記す。

### 1. 「社会階層と社会移動」調査（SSM調査）調査概要

#### 1.1 1955年調査

(1) 1955年、(2) 日本社会学会調査委員会、(3) 層化2段階抽出法、(4) 全国の20歳～69歳の男性、(5) 3,677 (81.7%)、(6) 分析用データは回収サンプル3,677ケースを2,000程度に再サンプルングしたもの。

### 1.2 1965年調査

(1) 1965年, (2) 東京大学社会学研究室他, (3) 層化2段階抽出法, (4) 全国の20歳～69歳の男性, (5) 2,158 (71.6%), (6) 分析には, 2005年SSM調査研究会より配布された収入修正データを使用した。

### 1.3 1975年調査

(1) 1975年10月～11月, (2) 1975年SSM全国調査委員会, (3) 多段層化抽出法, (4) 全国の20歳～69歳の男性, (5) 2,724 (68.1%), (6) A調査(本調査)データのみ使用。

## 2. 「国民生活に関する世論調査」調査概要

### 2.1 1963年調査

(1) 1963年1月, (2) 内閣府, (3) 層化2段階抽出法, (4) 全国の20歳以上の男女, (5) 16,007 (80.0%) (6) 有効回答者数および回収率はデータファイル付属のコードブックによる数値(以下同様)。公開データにおける実際の標本数は16,005。

### 2.2 1964年調査

(1) 1964年1月, (2) 内閣府, (3) 層化2段階抽出法, (4) 全国の20歳以上の男女, (5) 16,698 (83.4%), (6) 公開データにおける実際の標本数は16,691。

### 2.3 1965年調査

(1) 1965年1月, (2) 内閣府, (3) 層化2段階抽出法, (4) 全国の20歳以上の男女, (5) 16,145 (80.7%), (6) 公開データにおける実際の標本数は16,133。

### 2.4 1967年調査

(1) 1967年2月, (2) 内閣府, (3) 層化2段階抽出法, (4) 全国の20歳以上の男女, (5) 16,358 (81.8%), (6) 公開データにおける実際の標本数は16,341。

## 謝 辞

本稿の執筆にあたり, 林雄亮氏(東北大学)から有益なコメントをいただきました。記して感謝します。



## 文 献

- 坂東 慧 (1977) 「階級意識と中流意識の間 - 労働者意識分析をめぐる覚書」『労働調査時報』675: 4-9.
- Cantril, Hadley. 1943. "Identification with Social and Economic Class." *Journal of Abnormal and Social Psychology* 38: 74-80.
- Centers, Richard. 1949. *The Psychology of Social Classes*. Princeton University Press. (=1958, 松島静雄訳『階級意識』東京大学出版会)
- Davis, Allison., Gardner, Burleigh B., and Mary R. Gardner. [1941] 1988. *Deep South*. The Center for Afro-American Studies The University of California, Los Angeles.
- Fortune. 1940. "The people of the U.S.A.: A Self-Portrait (The Fortune Survey: XXVII)" *Fortune* 21 (2); 14, 20, 28, 133-134, 136.
- Gallup, George., and Saul Forbes Rae. 1940. *The Pulse of Democracy: The Public-Opinion Poll and How It Works*. Simon and Schuster, New York.
- 濱嶋 朗 (1991) 『現代社会と階級』東京大学出版会.
- 原 純輔・盛山和夫 (1999) 『社会階層 - 豊かさの中の不平等 -』東京大学出版会.
- 橋本健二 (2009) 『「格差」の戦後史 - 階級社会 日本の履歴書』河出ブックス.
- 平松貞実 (1998) 『世論調査で社会が読めるか - 事例による社会調査入門』新曜社.
- 吉川 徹 (1999) 「「中」意識の静かな変容」『社会学評論』50(2): 216-230.
- 前田忠彦 (1998) 「階層帰属意識と生活満足感」間々田孝夫 (編) 『現代日本の階層意識 SSM 調査シリーズ 6』1995年SSM調査研究委員会: 89-112.
- 間々田孝夫 (1990) 「階層帰属意識」原純輔 (編) 『階層意識の動態 田現代日本の階層構造 2』東京大学出版会, 23-45.
- 中尾啓子 (2002) 「階層帰属意識と生活意識」『理論と方法』17(2): 135-149.
- 直井道子 (1979) 「階層意識と階級意識」富永健一 (編) 『日本の階層構造』東京大学出版会, 365-388.
- 日本社会学会調査委員会 (編) (1958) 『日本社会の階層的構造』有斐閣.
- 尾高邦雄・西平重喜 (1953) 「わが国六大都市の社会的成層と移動」『社会学評論』3(4): 2-51.
- 尾高邦雄 (1961) 「日本の中間階級 - その位置づけに関する方法的覚書」『日本労働協会雑誌』22: 4-27 (再録: 尾高邦雄 (1995) 『尾高邦雄選集第三巻 社会階層と社会移動』夢窓庵, 191-259)
- . (1967) 「安田三郎君に答える」『社会学評論』18(2): 109-113. (再録: 盛山和夫 (2008) 『リーディングス 戦後日本の格差と不平等 1 変動する階層構造』日本図書センター, 247-251)
- 佐藤俊樹 (2009) 「階層帰属の意味論」『社会学評論』59(4): 734-751.
- 盛山和夫 (1990) 「中意識の意味」『理論と方法』5(2): 51-71.
- 総理府大臣官房審議室 (編) (1958) 『国民生活に関する世論調査』大蔵省印刷局.
- 総理府大臣官房広報室 (編) (1975) 『国民生活に関する世論調査 第20回』内閣総理大臣官房広報室.
- 数土直紀 (2009) 『階層帰属意識のダイナミクス』勁草書房.
- 富永健一 (1957) 「現代社会学における階級の理論」『思想』397: 125-136. (再録: 盛山和夫 (2008) 『リーディングス 戦後日本の格差と不平等 1 変動する階層構造』日本図書センター, 193-206)
- Warner, W. Lloyd. 1952. *Structure of American Life*. Edinburgh at the University Press.
- Warner, W. Lloyd., and Lunt, Paul 1941. *The Social Life of A Modern Community* (Yankee City Series Volume I). Yale University, New Haven.
- Warner, W. Lloyd., Marchia Meeker., and Kenneth Eells. [1949] 1960. *Social Class in America: A Manual of Procedure for the Measurement of Social Status*. Harper & Brothers, New York.

- 安田三郎 (1967) 「階級帰属意識と階級意識 — 尾高論文に対する疑問」『社会学評論』18  
(2): 102-108. (再録: 盛山和夫 (2008) 『リーディングス 戦後日本の格差と不平等 1 変  
動する階層構造』日本図書センター, 239-246)
- . (1973) 『現代日本の階級意識』有斐閣.

# Tilesius und Japan (3. Teil)

## Allgemeine Bemerkungen zu Japan und Bibliographie seiner Schriften

Frieder Sondermann und Günther Sterba

### Vorbemerkung

In Teil 1 und 2 dieser Artikelreihe<sup>1</sup> ging es um die Wiedergabe derjenigen Passagen aus dem Mühlhäuser Tagebuch [Arbeitsjournal] von Wilhelm Gottlieb Tilesius, die – wenn auch nicht aktuell von Tag zu Tag in dieser Form geführt – doch einen chronologischen Ablauf der Ereignisse während des Japanaufenthaltes der ersten russischen Weltumseglung 1803–1806 bieten. Es erstaunt, wie wenig der Verfasser dabei auf die Kontakte mit den Japanern vor Ort aus seiner persönlichen Sicht eingeht. Dass er auf einem, kleinformatigen Farbportrait in einem der beiden sog. Moskauer Skizzenbücher<sup>2</sup> einen der Obertolks als “Mein Freund Sake Saburo O : T :” bezeichnet, lässt ja eigentlich darauf schließen, dass es intensive Kontakte und einen regen Meinungs-austausch gegeben hat. Das kann so aber nicht der Fall gewesen sein, weil es neben der nicht zu unterschätzenden Sprachbarriere auch erhebliche Einschränkungen im Umgang mit den Einheimischen gegeben hat. Einzige Ansprechpartner waren die Holländisch sprechenden Dolmetscher (Tolks), ein Meinungs-austausch mit den Beamten (Banjos) war kaum möglich. Anders als der Kapitän Adam Johann von Krusenstern und der mitreisende zweite Naturforscher Georg Heinrich von Langsdorff hat Tilesius seine Reisetagebücher nie komplett (als Memoiren oder Reisebericht) veröffentlicht. Im Verlauf der Niederschrift des Tagebuchs, das in Mühlhausen aufbewahrt wird<sup>3</sup>, lagen Tilesius die beiden umfassenden Werke von Krusenstern und Langsdorff bereits vor, so dass er sowohl sein Gedächtnis damit auffrischen als auch seine gegebenenfalls abweichende private Meinung formulieren konnte.

---

<sup>1</sup> Vgl. Teil 1 in Nr. 154 (Dez. 2009), S. 105–147 und in Nr. 155 (März 2010) S. 21–53 dieser Zeitschrift.

<sup>2</sup> Russische Nationalbibliothek, Moskau, Handschriftenabteilung, “Skizzenbuch des Hofrath Tilesius...” Sign. : Font 178, M 10693 a und b, hier a 29 : Kopfbild im Medaillon.

Der Text befindet sich oben. Auf der Rückseite dieses Blattes (verso) : “Ein Banjo aus Nangasaki”. Beide Alben wurden in der russischen Zeitschrift *Vosmotschnai kollektija* [“Oriental Collection”] 2001, Nr. 3 (6), S.122–131 von Ekaterina Barysheva und Irina Fomenko vorgestellt, vgl. das Titelblatt in der Internetpräsentation.

<sup>3</sup> Stadtarchiv Mühlhausen/Thür., Tilesius Bibliothek, 82/298, im folgenden mit der Signatur zitiert.

Wie Tilesius hatten auch seine Reisegefährten den zweimaligen Aufenthalt in Kamtschatka im Sommer 1805 dafür genutzt, Briefe an Freunde und Kollegen zu verfassen, die selbstverständlich auch neugierigen europäischen Lesern durch eine Publikation in Journalen zugänglich gemacht werden sollten.<sup>4</sup> So hat etwa Horner an seinen ehemaligen Vorgesetzten Freiherrn von Zach geschrieben, der die *Monatliche Correspondenz zur Beförderung der Erd- und Himmels-Kunde* redigierte. Langsdorff schrieb Briefe an Gelehrte wie von Krafft und von Schubert in St. Petersburg sowie an seinen akademischen Lehrer Johann Friedrich Blumenbach in Göttingen für die von ihnen betreuten periodischen Schriften.<sup>5</sup> Der Schiffsarzt Dr. Carl Espenberg war mit August von Kotzebue befreundet und versorgte auch diesen mit Nachrichten für den *Freimüthigen oder Ernst und Scherz*. Durch diese Multiplikatoren war eine relativ rasche Veröffentlichung gewährleistet, die dann mit einiger Verzögerung in verschiedenen europäischen Blättern wieder abgedruckt wurde.<sup>6</sup>

Zwar sind Reisebriefe von Tilesius auch in deutschen Journalen erschienen, sie haben aber bei weitem nicht die Aufmerksamkeit erweckt, wie man es etwa von August von Kotzebues fiktivem Bericht aus Japan in seinem populären Journal *Der Freimüthige* vermuten darf. Kotzebue hatte alle Register an angelesenen Vorurteilen über Japan gezogen, um die Leser mit scheinbar authentischen und pikanten Nachrichten seiner beiden dort weilenden Söhne zu narren.<sup>7</sup>

Das unmittelbar nach dem Aufenthalt in Japan von Tilesius Publierte ist vorwiegend<sup>8</sup> 1806 in der

---

<sup>4</sup> Eines der Publikationsforen war die von Nikolai M. Karamsin gegründete Zeitschrift *Vestnik Evropy* (Der Bote Europas), in der ab 1803 die Berichte von Ratmanov, Romberg und Moritz Kotzebue auf Russisch veröffentlicht wurden. Das *Philosophical Magazine* von Tilloch war auf dem Kontinent zwar nicht überall zugänglich, konnte aber auch kritischere Passagen zensuriert abdrucken.

<sup>5</sup> Interessant ist, dass Blumenbach diese Briefe auch an Bertuch für die *Allgemeinen geographischen Ephemeriden* weitergab; siehe dazu *Kleine Beiträge zur Blumenbach-Forschung 2* (Göttingen 2009) S. 146 Anm. 180.

<sup>6</sup> Vgl. zum bedenkenlosen Abschreiben aus anderen Zeitschriften, was Aug. von Kotzebue dazu im *Freimüthigen* Nro. 162 (Donnerstag, den 14. August 1806) S. 132 schrieb:

“Drolliges Schicksal einer Zeitungs=Nachricht Der Freimüthige meldete zuerst in Nro. 143 aus Reval, daß die Nachricht von der Arretirung der Russischen Weltumsegler in China, unbegründet sey, und daß sie im Sept. d. J. in Cronstadt ankommen würden. Der Hamb. Corresp. nahm diese Nachricht wörtlich auf, ohne seine Quelle zu nennen, und aus ihm entlehnten wieder die Berlinischen Zeitungen, was sie wenigstens zwei Posttage früher als er, dem Nachbar hätten nacherzählen können. Jetzt steht eben diese Nachricht wörtlich übersetzt in den Französischen Zeitungen, aber fast jede datirt sie anders wo her: das Journal de Paris aus Petersburg, der Moniteur aus Riga usw. Nur der Publiciste nennt gleichfalls Reval.”

<sup>7</sup> Ebd. 1806 Nro. 63, 66, 67 – danach folgen wieder authentische Berichte von Dr. Espenberg in No. 128, 131 und 133 über den Japanaufenthalt. In der Zeitschrift *Rußland unter Alexander dem Ersten. Eine historische Zeitschrift* liefert der Herausgeber Heinrich Storch im Band 6, 18. Lfg., May 1805, S. 410-418 einen “Nachtrag zu den Berichten der Weltumsegler aus Kamtschatka”, in dem er erklärt, dass Espenberg sein Reisetagebuch für ihn und nicht für Kotzebue geschrieben habe. Storch druckte auch verschiedene Briefe von Krusenstern an den Akademiker Schubert ab.

<sup>8</sup> Vgl. zu seinen anderen Berichten die Nummern 33, 35 und 36 in der Tilesius-Bibliographie.

von Konrad Joachim Kilian (1771-1811) herausgegebenen Zeitschrift *Georgia oder der Mensch im Leben und im Staate* erschienen und zum größten Teil noch als Manuskript erhalten. Es handelt sich um Briefe, die Tilesius aus Kamtschatka an den Mediziner Johann Christian Rosenmüller (1771-1820) in Leipzig sandte.<sup>9</sup>

Diese für Tilesius' Veröffentlichung ausgewählte Zeitschrift war aber ein Journal, das nur eine geringe Leserschaft aufwies und bereits nach einem Jahr 1807 wieder eingestellt wurde. Eine viel größere Verbreitung hatten sowohl die beim Verleger Bertuch in Weimar erscheinenden *Allgemeinen geographischen Ephemeriden* als auch Johann Heinrich Voigts *Magazin für den neuesten Zustand der Naturkunde*, in denen die Berichte von Langsdorff abgedruckt waren. Vielleicht auch deshalb hat Rosenmüller die Nachrichten seines Freundes Tilesius in diesem etwas obskuren Journal untergebracht. Immerhin konnten die Leser hier zum erstenmal einen kolorierten Kupferstich bewundern, der authentisch zwei japanische Personengruppen darstellte : 3 Banjos und 3 Bäuerinnen.

Dem Anfang des dreiteiligen Artikels soll hier die Eintragung im Mühlhäuser Tagebuch<sup>10</sup> gegenübergestellt werden :

- Donnerstag den 20. Septbr. stieg die Wärme bereits auf 19° Reaumur ; den 21. Sept. hatten wir wieder Regen und Wind ; den 22. Sept. trieb der Sturm einen kleinen fliegenden Fisch aufs Verdeck, es war weder *Trigla* noch *Exocetus volitans*, sondern eine Art Stutzkopf 1 1/2 Zoll lang, und mit einer Bartfaser versehen, blau und glänzend ; doch kann er nicht unter das bekannte *Genus Coryphaena* gebracht werden. Abends kam Regen, und des Nachts bereits ein Aequinok-

Donnerstags d. 20 Sept. stieg die Wärme bereits auf 19° Reaum.

Freytags d. 21. Sept. Regen und Wind und darauf 20° R. Wärme.

Sonnabends d. 22. Heute trieb der Sturm einen kleinen fliegenden Fisch aufs Verdeck welchen der erste Lieut. auffing, es war weder *Trigla* noch *Exocetus volitans* sondern eine Art Stutzkopf 1 1/2 Zoll lang und mit einer Bartfaser versehen, blau und glänzend.

22. Sept: Regen Abends und Nachts *Aequi-*

<sup>9</sup> Lt. Bibliographie Nr. 34 sandte Tilesius "Einige Bemerkungen aus Japan von Herrn Hofrath Tilesius" auch an den Astronom Dr. [Chrn.Frdch.] Goldbach (1763-1811) in Moskau, obwohl dieser Hinweis in der Kopfzeile der Artikel nicht mehr auftaucht. Dieser Bericht erschien in drei Teilen 1806, No.96 Montag den 11. August 1806 (Sp. 757-760), No.103 Mittwoch den 27. August 1806 (Sp. 819-820), No.104 Freitag den 29. August 1806 (Sp. 821-826 und Kupferstich). Goldbach publizierte andere Briefexzerpte von Tilesius in den *Mémoires de la Société des naturalistes de Moscou* 1, 1806, S.110-112.

<sup>10</sup> Das linke Zitat nach *Georgia*, No. 96, 1806, Sp. 758 das rechte nach (82/298), pag. 52.

tialsturm, der sich in dem Japanischen Meere schon ziemlich charakterisirte.

*noctial*Sturm

Sontags den 23. Sept. heftigeren Sturm mit Regen, ermattet hatte sich heute ein Seevogel (Seeschwalbe) {*Sterna stolidi maxima*} aufs Schiff niedergelaßen, welcher nachdem ich ihn gezeichnet hatte, wieder losgelaßen wurde und dennoch wieder kam, als er einige Zeit in den Wellen gefischt hatte, unsere Leute nannten ihn Tölpel {es war aber kein *Pelecanus*}, weil er so einfältig gewesen war, sich zum zweitenmal fangen zu laßen. Auch war in diesem Tagen ein großer fliegender Fisch gefangen worden (*Exocetus volitans*).

Ihnen folgt ein sehr knapp gehaltener Bericht vom gefährlichen Taifun, als sich die russische Fregatte „Nadeshda“ Ende September 1804 der japanischen Küste näherte. Dann beschreibt Tilesius die Vorbereitungen auf dem Schiff für die Landung, als man alle christlichen Gegenstände in eine Kiste packen und vernageln mußte.

Zum Zeitpunkt der Veröffentlichung im August 1806 war er zwar bereits zurück in europäischen Gewässern, aber noch nicht in Kronstadt gelandet. Der offizielle Reisebericht von Krusenstern hatte natürlicherweise den Vortritt. Er sollte auf Russisch ab 1809, auf Deutsch ab 1810 erscheinen. Vorausgegangen war der unangenehme Befehl des Zaren, den Streit um die Kompetenzverteilung zwischen Kapitän Adam Johann von Krusenstern und dem Gesandten Nikolai Petrovich Rezanov zu „vergessen“. Davon durfte also nicht mehr berichtet werden, so dass eine öffentliche Abrechnung mit dem inkompetenten Gesandten nicht möglich war.<sup>11</sup>

Tilesius war als loyaler Anhänger des Kapitäns einer der hauptsächlichen Leidtragenden dieser Auseinandersetzung durch die Repressalien des russischen Gesandten. Daher hatte er sich so früh wie möglich in seinen Briefen gegen dessen Zumutungen und Anmaßungen zur Wehr zu setzen und öffentlich zu rechtfertigen versucht.<sup>12</sup>

<sup>11</sup> Der Astronom Horner tat dies 1813 aber doch in der französischen Zeitschrift *Annales Des Voyages, De La Géographie Et De L'Histoire* von Malte-Brun und in seinen Vorträgen vor schweizer Kollegen 1818. Vgl. meine beiden Artikel "Heinrich Julius Klaproth (1783-1835) und Johann Caspar Horner (1774-1834) über Kontakte zwischen Europa und Asien", in: *Tohoku Gakuin Daigaku Ningen joho kenkyu (Journal of Human Informatics)* No. 13 (March 2008) S. 59-86 人間情報学研究 第13巻2008年3月 59-86頁 und "Joh. Casp. Horner über Japan (II) (1818)", in: *Tohoku Gakuin Daigaku Kyoyogakubu ronshu* No. 150 (2008, Okt.), S. 85-116 東北学院大学教養学部論集, 第150号(平成20年10月)85-116頁.

<sup>12</sup> Vgl. in der *Staats- und gelehrten Zeitung des Hamburgischen unpartheyischen Correspondenten* 1803 Nr. 195

Tilesius könnte schon 1807 versucht haben – Briefe von Johann Caspar Horner an Adam Johann Krusenstern legen diese Vermutung nahe<sup>13</sup> –, einen privaten illustrierten Reisebericht zu publizieren, was ihm allerdings nicht gelang. Auch Krusenstern dürfte es ihm nahegelegt haben, von einem solchen unangemessenen Vorpreschen abzusehen, bevor die offizielle Dokumentation der Expedition publiziert war. Um 1812 scheiterte dann der Versuch von Tilesius, ein französisches Buch über die Weltreise beim Verleger Leclerc in Paris zu publizieren.<sup>14</sup> Nach der Publikation von Krusensterns und Langsdorffs Berichten schwanden aber die letzten Chancen von Tilesius, für eine weitere detaillierte Beschreibung der Weltumseglung noch einen Verleger oder ein kauf- und lesewilliges Publikum zu finden.

Heutige Leser wünschen natürlich ebenso sehr wie die damaligen Käufer des 1813 (russ.) und 1814 (dt.) erschienenen Krusenstern-*Atlases*, dass Tilesius seine Erklärungen zu darin gelieferten Kupferstichen hätte drucken lassen. Aber dafür fand sich nach ihrer vermutlichen Fertigstellung um 1823 kein Verleger mehr.<sup>15</sup>

Seine naturhistorischen Aufsätze sind nur noch für Spezialisten der Wissenschaftsgeschichte von Interesse. Aber die im Tagebuch festgehaltenen Notizen über die damals besuchten Länder (vor allem zur Marquesasinsel Nukahiva<sup>16</sup> und dem Aufenthalt in Macao), ihre Sitten und den Kontakt mit den Fremden sind weiterhin lesenswert und aufschlussreich.

Tilesius hat seine Reisebemerkungen verschiedentlich überarbeitet und wohl auch noch in seiner Vorlesung an der Universität Leipzig 1828-1832 sowie für seinen Auftritt bei der Versammlung Deutscher Naturforscher und Ärzte am 19. September 1836 in Jena verwendet, wo er über Japan und Taifune nach eigener Erfahrung und japanischen Berichten referierte.

Man sollte ihn also nicht auf die von ihm nur ungerne übernommene Rolle des Illustrators (nach krankheitsbedingtem Abgang des russischen Malers Stepan Kurljantsov in Kamtschatka 1804) und

(Dez.) das "Schreiben des Hrn Hofraths, Dr. Tilesius, Naturkündigers bey der Rußischen Weltumseglungs=Expedition, an den Herausgeber des Correspondenten. (Eingegangen über Amsterdam.) Santa Cruz, auf Teneriffa, den 25 October 1803". Im Sommer 1805 schrieb er dann von Kamtschatka aus empörte Klagen über Rezanov nach St. Petersburg, deren Abschriften sich im Mühlhäuser Tagebuch (82/298) pag. 47-50 finden.

<sup>13</sup> Vgl. die Dokumente bei Sondermann (s. Anm. 1) in TGU Ronshu Nr. 154 zur Anmerkung 11.

<sup>14</sup> Vgl. den Artikel von Sondermann (s. Anm. 1) in TGU Ronshu Nr. 154 zur Anmerkung 12.

<sup>15</sup> Vgl. die Hinweise dazu bei Sondermann (s. Anm. 1) in TGU Ronshu Nr. 154, S. 109-112. Ob eine Abschrift dieser Bilderklärungen heute noch irgendwo komplett erhalten ist, entzieht sich meiner Kenntnis. Ein Schlaglicht auf das Durcheinander nach Rosenmüllers Tod werfen die Äußerungen des Arztes Johann Christian Gottfried Jörg (1779-1856) in seinen "Abgenöthigen Zusätzen..." (Leipzig, Ind.-Compt., 1820), wo es um die Verunstaltung von ärztlichen Kunstfehlern durch die beiden Gutachter Rosenmüller und Tilesius geht.

<sup>16</sup> Vgl. das jüngst erschienene gut recherchierte Buch von Elena Govor *12 Days At Nuku Hiva – Russian Encounters And Mutiny In The South Pacific* (University of Hawai'i Press 2010) mit zahlreichen Quellenangaben.

sog. Reisehistoriographen (wohl im Auftrag von General Suchtelen von der Akademie der Wissenschaften in St. Petersburg) einschränken, so auffallend und dominant sein Anteil an der graphischen Ausgestaltung des *Atlases* und von Langsdorff's Buch auch ist und so viel unpubliziertes Material weiterhin (vor allem in der Kustodie der Universität Leipzig)<sup>17</sup> der Erschließung harrt.

Tilesius hat sich an berühmten Vorbildern orientiert in der Art, wie er seine Eindrücke zu Papier brachte. Vor allem Georg Forsters Berichte von der zweiten Cookschen Weltreise, und natürlich Engelbert Kämpfers und Carl Peter Thunbergs Nachrichten aus Japan hatten Maßstäbe gesetzt, an denen er sich messen lassen wollte und auf die er sich auch berief.<sup>18</sup> Ein Naturforscher war damals nicht so spezialisiert wie heute. In erster Linie verstand Tilesius sich seit seiner Portugalreise 1795-6 als Meeresbiologe, in zweiter Linie als Naturwissenschaftler (Biologie, Anthropologie, Geographie inklusive Geologie) und natürlich auch als promovierter Mediziner.<sup>19</sup>

Gerade was den Aufenthalt in Japan betrifft, sahen sich die Reisenden auf der "Nadeshda" als Gefangene, denen der Zugang zu direkter Feldforschung ungerechter- und empörenderweise verwehrt wurde. Die Japaner, mit denen sie in Kontakt kamen, waren nur bedingt aussagewillig und -fähig. Andere Quellen und Kontaktpersonen (etwa die Holländer auf Dejima) standen nicht zur Verfügung.

Wenn Tilesius somit über das Land Japan und die dort lebenden Leute zu schreiben beginnt, weiss man sofort, dass es sich um sehr verallgemeinerte Vor- und Nachurteile handelt, die in manchen Fällen direkt auf die Lektüre einschlägiger Werke beziehbar sind. Daher ist vieles von den Aussagen zu

---

<sup>17</sup> Ein von Prof. Sterba über die Tilesius-Sammlung angefertigter Katalog, u.a. mit bedenkenswerten Hinweisen zur Besitzstandfrage, stand der Kustodie bereits 1998 vor der Tilesius-Ausstellung zur Verfügung. Er soll – wie die Tilesius-Bibliographie in diesem Artikel – in meinem kommenden Aufsatz allgemein zugänglich gemacht werden.

<sup>18</sup> Vgl. etwa seine Bemerkung im Mühlhäuser Tagebuch (82/298), pag. 260: "Literarische Bemerkungen. Es ist auffallend in Thunbergs Reisen Pl. 5 Kupferstangen und Japonische Talglichter vom *Rhus succedanea* abgebildet zu sehen, nicht minder die Meßerchen Peruquen, und dergl. Dinge, an welchen man bemerkt, daß sie erst in Europa abgezeichnet wurden, so wie *Thunbergs* Pflanzen. Noch zweckmäßiger scheinen mir wenigstens die Kupfer im dritten Theil wo er die Strohschuhe oder Pantoffeln die Rasiermeßer das Schreibzeug und Zahl oder Rechenbret, Wage Maaß und Gewicht Pinsel Ohr Löffelchen Zahninstrumenten Medizinkästchen Tobakspfeiffen Besteck und dergl. vorstellt. Die Japoneserin auf der zweiten Kupferplatte welche nebst ihrer Laute nicht größer ist als die beyden Tuschtäfelchen neben ihr drückt eben die Nationaltracht und den Habitus des Japonischen Frauenzimmers nicht sonderlich aus." Verwendet, aber nicht genannt hat Tilesius Bildvorlagen aus anderen Werken. Siehe dazu bei Govor (s.Anm. 16) S. 104-107. Was hat er wohl zur sicher nicht autorisierten Verwendung seiner eigenen *Atlas*-Illustrationen in Breton de La Martinière's *Le Japon, ou Moeurs* ... (Paris 1818) gesagt ?

<sup>19</sup> Zur Biographie hat Ingrid Kästner kürzlich die wichtigsten Dokumente veröffentlicht im Artikel "Wilhelm Gottlieb Tilesius von Tilenau (1769-1857) - Arzt, Naturforscher und Künstler", in: *Leipzig-Erfurt: Akademische Verbindungen. Festgabe der Akademie gemeinnütziger Wissenschaften zu Erfurt zur 600-Jahrfeier der Universität Leipzig*. Hrsg.v. Jürgen Kiefer, Werner Köhler und Klaus Manger. Erfurt 2009, S. 91-103.



Japan Spekulation und “educated guess”, also Hochrechnung auf schmaler Datenbasis. Tilesius hat sich die gelesenen und zu lesenden Referenzwerke notiert.<sup>20</sup> Nur ein Beispiel dafür sei genannt. Auf pag. 259 des Mühlhäuser Tagebuches (82/298) gibt es “Oekonomische Bemerkungen”, in denen eine solche Quelle genannt wird :

Auf *Teneriffa* sah ich Goldfische (*Aprinus auratus L.*) und andere seltene bunte Fische in langen schmalen Behältern (*Bassins*) welche auf *Terrassen* am Abhänge eines hohen Berges angelegt und durch *Canale* {miteinander verbunden waren}, welche frisches Waßer zuführten und daßelbe aus *einem* den obern in die untern Behälter leiteten, so daß diese Thiere, welche immer frisches Waßer erhielten sehr munter waren, eben auf dieselbe Art erhalten die Chineser ihre Fische, die sie verkauffen, durch Zuführung des frischen Waßers mittelst einer Rinne oder Röhre sehr lange frisch und munter, (S. *Osbeck* 184.)<sup>21</sup> ein Verfahren welches auch bey uns Nachahmung verdiente.

In Japan, wo bey der großen Volksmenge jedes Stückchen Land und jeder dürre steile Hügel zum Ackerbau benutzt werden muste, sahe man an den Abhängen der jähesten Berge alles angebaut, damit aber so

<sup>20</sup> Vgl etwa die Liste am Ende des Mühlhäuser Tagebuchs (82/298) pag. 262f. mit bibliographischen Hinweisen zu einschlägigen Werken, u.a. von

- [Pierre François Xavier de] Charlevoix *histoire et description General[e] du Japon etc.* Paris 1736. in IVto. 2 Volum. Paris 12mo IX volum.

- E. Kämpfer's Geschichte u. Beschreibung von Japan pp herausg.b. Dohm 1 Band 1777. 4. Lemgo. 2ter Band 1779. in 4to. mit Kupfern. [abgekürzt und durch eine neu hinzugekommenen Beschreibung von Japan von Medicus und durch ein ächtes Kämpferisches deutsches Manuscript vermehrt abermals erschienen zu Leipzig 1782. 83 in 8 mit Kupfern und Charten].

- Kaempfer *Amoenitatum exoticarum politico-physico medicarum. Fasciculi V. etc.* Lemgoviae 1712. in 4.

- Das neueste aus Japan (in einem Schreiben von Thunberg) in dem Götting. Taschenbuch zum Nuzzen und Vergnügen fürs Jahr 1782 S. 1-15 [aus den Transactionen. Vol. LXX, Part I.]

- Thunbergs Reisen in Africa und Asien 8.

- Thunbergs *Flora Japonica* c.f.8. Lipsiae 1784.

- Didaci Collado *Dictionarium Japonicum Romae* 1632 4to

- Didaci Collado *Grammatica Japonicae linguae Romae* 1632 4to.

- Ludw. Froès *de rebus Japonicis historica relatio.* Coloniae 1582.

- [...] Mogunt. 1599 in 8. oo Tom. III. p. 229.

- Caron und Hagenaar *Bemerkungen über Japan im {französ.} zweiten Theile der Sammlung merkwürdiger Reisebeschreibungen von Melchisedech Thevenot und im 2ten Theile der Reisebeschr. der Indischen Compagnie, deutsch herausgegeben, mit van Schoutens und Meklins Reise, zu Nürnberg 1663. 1672. in 8.*

- Du Halde *Neuhof. van Horne, Osbeck Macartney*

*Barrows Reise in China enthält einen großen Theil von des Jüngern Stauntons Mscpt.*

/263/

*Forskål Fauna Aegyptio Arabica*

*Forsters Bemerkungen* Seite 180. 181.

[Johann Reinhold] *Forsters historia aptenodytae in Comment. Soc. Goetting. 1780. Vol. III p. 121 [pp.121-148 und Tab. I-V]*

<sup>21</sup> *Herrn Peter Osbeck Reise nach Ostindien und China. Nebst O. Toreens Reise nach Suratte, und C.G. Ekebergs Nachricht von der Landwirthschaft der Chineser. Aus dem Schwedischen übersetzt von J[oh].G[li]. Georgi.* Rostock : Koppe : 1765 : 430 S. (Mit 13 Kupfertafeln.). Die Bemerkungen über Terrassen und die in China angebauten Pflanzen finden sich in der englischen Version am Ende ; Pehr Osbeck : *A Voyage to China and the East Indies ... Translated from the German, by John Reinhold Forster.* vol. 1-2. London 1771 (II, 290-7). Solche Passagen aus der deutschen Compilation hat Tilesius auch auf einigen jetzt in der Kustodie der Leipziger Universität gelagerten Tafeln notiert, aber nicht immer als Zitate markiert – lt. Hinweis von Prof. Sterba.

wohl die Aussaat selbst als auch der dazu nöthige Dünger nicht durch den Regen herabgeschwämmt werden kann, so war der ganze Abhang um horizontale Flächen zu bekommen in *Terrassen* abgetheilt, die am Rande durch eine von Feldsteinen zusammengelegte Mauer unterstützt wurden. Zwischen diesen *Terrassen* waren freye Stellen {Wege} oder Gräben übrig gelaßen in welchen das Waßer vom Berge ablaufen konnte ohne den Äckern selbst, außer der nöthigen Bewässerung zu schaden wie man dies {auch} in Deutschland bey einigen Weinbergen eingerichtet hat.

Trotz möglicher Redundanz sollen hier weitere handschriftliche Aufzeichnungen von Tilesius abgedruckt werden, auch wenn sie sich in ihrer Pauschalisierung von den Veröffentlichungen der Mitreisenden kaum unterscheiden konnten, da sie alle unter ähnlichen Bedingungen in Nagasaki lebten und auf die gleichen Quellen (vor allem die eben genannten Kämpfer und Thunberg) angewiesen waren. Langsdorff hatte wohl etwas mehr Kontakte und wegen seiner Sprachkenntnisse auch bessere Kommunikationsbedingungen als Tilesius, denn für ihn gab es an der Seite von Rezanov an Land weitaus mehr Begegnungsmöglichkeiten mit japanischen Funktionären, Dolmetschern und Wachtpersonal als für den meist auf dem Schiff in seiner selbstgewählten Einsamkeit forschenden Mühlhäuser.

Im Folgenden wird daher nicht der vermutlich von Rosenmüller redigierte Journaltext aus Kilian's Zeitschrift *Georgia* zitiert, sondern die von Tilesius geschriebenen handschriftlichen Vorlagen (1b und 1c). Vorangestellt wird ein fragmentarisches Blatt (1a), das den ersten Kontakt mit den Offiziellen im Hafen von Nagasaki etwas ausführlicher als das spätere Tagebuch in Wort und Bild festhält. Anschließend werden einige Japan betreffende Blätter aus einem Konvolut von Aufzeichnungen zu Macao vorgestellt (2), gefolgt von weiteren verstreuten Bemerkungen zu Japan in dem erhaltenen Teil der Tagebücher. Den Abschluss dieses Artikels bildet die von Prof. Sterba zusammengestellte Tilesius-Bibliographie (3).

Wie bei den bereits edierten Texten des Mühlhäuser Tagebuches (82/298) sollen die Handschriften so originalgetreu wie möglich präsentiert werden, d.h. nur Reduplikationsstriche wie auch Verschleifungen am Wortende werden stillschweigend aufgelöst. Unterstreichungen werden als solche angezeigt und der Schriftenwechsel (von Kurrent zu lateinisch) kursiv dargestellt. Texteingfügungen über oder neben den Zeilen werden in geschweifte Klammern gesetzt. Eckige Klammer zeigen editorische Ergänzungen und Schrägstriche den Seitenwechsel im Manuskript an.

## 1. Dokumente zu Japan

**1a. Stadtarchiv Mühlhausen, Tilesius-Bibliothek Nr. 82/661 Querformat 2 Blatt, beidseitig beschrieben, und 1 Blatt mit Bleistiftskizze. Dieser Kommentar war als Bilderklärung für Krusensterns *Atlas* wohl zu lang. Er mag daher für eine eigene Publikation von Tilesius gedacht gewesen sein, und dürfte – wie die Formulierung am Ende nahelegt – unmittelbar nach der Ankunft in Nagasaki abgefasst worden sein.**

d. 8 October 1804

Montags Mittags um 12 Uhr, als wir dem festen Lande näher kamen und sich unsere {*Japoneser*} Matrosen bereits durch ein Gespräch mit einigen Fischern unterrichtet hatten wurde eine *Canone* abgefeuert um einen Lotsen zu verlangen. Die Fischer hatten geäußert, daß wenn man dem Land erfahren würde daß sie mit uns gesprochen hätten, ihnen der Kopf abgeschlagen würde und sie sagten deshalb nicht wo sie her wären, oder wie die umliegenden Inseln hießen. Anstatt eines Lotsen kam eine Stunde darnach ein Wachtbot welches unsere Japoneser genau *examinirte* und Abschrift nahm von unsern *Creditiv* des Japan Kaysers. Die beyden Gerichtspersonen versicherten, daß man schon seit 3 Jahren dieses *Creditiv* in den Vorles. nicht mehr erwähnt habe, und die Hoffnung mit den Rußen Handel zu treiben aufgegeben habe. Unsere Japoneser stiegen in dieses Bot hinab und knieten vor den Gerichtspersonen, die sich ernsthaft und milde betrogen, nieder zeigten ihre Päße usw. Beyde Gerichtspersonen schrieben mit vieler Fertigkeit und ihre Kleidung war verschieden. Der eine war ganz schwarz gekleidet und hatte weiße Rosen auf dem Rocke so wie sie im schwarzen Felde der Fahne des Botes auch zu sehen waren<sup>22</sup>, beyde trugen nur einen Säbel und giengen barfuß. Eine Stunde nachher kam das Polizeybot, welches uns tadelte, daß wir vor dem Berge, wo die Holl. Schiffe Anker werfen müßen vorbeigefahren waren und befahl sogleich mit 35 Faden Tiefe Anker zu werfen. Die beyden Gerichtspersonen trugen 2 Säbel und bedekte Füße. Der Gerichtsdieners ebenfals aber nur 1 Säbel auf dem Bote am Steuer waren 2 Piketen aufgesteckt und die Flagge war auch verschieden. Die Kronböte haben im Segel ein blaues Mittel-feld, die Seegel sind der Länge nach aus 5 Streiffen zuammengenähet /

Auf jedem Bote ist ein Keßel mit Feuer auf welchem sie Reisgrütze und Thee kochen, und ihre kleinen Pfeifchen Toback anbrennen. Die Leute sind zwar alle mit dem baumwollenen Zeuge bekleidet, aber bey dem Rudern sind sie nakkend wie die Fischer. In diesem Zustande sehen sie den Südinsulanern mit welchen sie überhaupt in Sprache und Tracht ähneln sehr gleich, auf beyden Seiten des geschornen Schädels bleiben Haarbündel stehen welche zusammen in ein aufgestülptes pomadirtes Zöpfchen eingebunden sind, Bey andern ist der ganze Hinterschädel behaart und besonders bey Vornehmern, wo der Schädel und das schwarze Zöpfchen wie lakkirt glänzt. Das Polizeybot erlaubte keinem unserer Japoneser herabzusteigen und keiner von ihnen stieg herauf, auch diese untersuchten und copirten unser *Creditiv*. Kaum waren wir vor Anker so kamen noch zwei andere Gerichtsböte mit andern *Flaggen* und andern *Piquen* und legten sich auch an unser Schiff kurz darauf kamen noch mehr andere und alle *examinirten* unsere Japoneser, ob die Rußen Menschenfreßer wären? etc. Abends um 9-10 kamen die beyden *Repräsentaten* des *Gouverneurs* von *Nankasaki* nebst den Holl. Dollmetschern und einem zahlreichen Gefolge, worunter auch der Chef und Buchhalter wie auch ein Holl Schiff Capitain waren, und machten uns die *Visite*.<sup>23</sup> Ihre zahlreichen *Piroquen* waren gros geräumig mit hohen *Paldachin* und

<sup>22</sup> Zu den japanischen Wappen und Ehrenzeichen in Krusensterns *Atlas* und dem Tagebuch von Hermann Ludwig von Löwenstern soll künftig mehr berichtet werden.

<sup>23</sup> Der Besuch der Holländer erfolgte lt. Tagebuch von Hendrik Doeff aber erst am 9. Oktober, was aus diesem Kurztexst nicht hervorgeht. Vgl. dazu Doeffs *Herinneringen uit Japan* (Haarlem, Boehn 1833) jetzt in englischer

schönen Decken beschützt von den Regen auch durch eine Menge großer Papier Laternen erleuchtet. Zu zeichnen sind noch die Lampen, die Schreibzeuge und großen Piroken. Heute wurde bey den Holländern Bestell. gemacht auf Lebensmittel, besonders theuer sind Hüner und Brennholz. Die Holländer scheinen uns nicht sonderlich zu begünstigen.<sup>24</sup> /

**1b. Berliner Fassung (Berlin, Staatsbibliothek, Hs.-Abt., Tilesius Nachlass, Nr. 11 Dieser Text ist weitgehend im *Georgia*-Artikel verwendet worden.**

(1)

Beschreibung der Zeremonien und  
Verhandlungen, welche die Japoniser vorzunehmen  
pflegen, wenn ein fremdes Schiff vor den Haven  
von *Nangasaki* kommt.

Sobald sich ein fremdes Schiff vor den Japonischen Küsten sehen läßt ; so werden an allen Orten des Meergestades nächtliche Feuer unterhalten um die entfernten Küsten bewohner aufmerksam zu machen und Wachsamkeit und Mißtrauen zu verbreiten, die Nachricht kommt auf diese Weise, wie durch *Telegraphen* in einigen Nächten nach *Jedo*, der Japan. *Residenz* und der Kayser hat auf diese Art frühere Nachrichten von dem fremden Schiffe, als es selbst an den Ort seiner Bestimmung einlaufen kann. – Denn niemand wagt es von den Küstenfahrern und Fischerböten mit ihm zu sprechen oder Lotsen zu geben oder sonst in die geringste Verbindung zu treten, weil es Bey Lebensstrafe verboten ist, daß ein Japoniser früher, als das Schiff durch die Ankunft der Polizey und Wachtböte und durch die Untersuchung der *Banjos* und *Ober Banjos* klarirt ist, mit denselben spreche oder handeln. Die Wachtböte, welche so bald sie beykommen, als sich das Schiff auf eine Stunde ihren Plätzen nähert, examiniren es um die Absicht seiner Ankunft und statten den nächsten Polizeybeamten sogleich Bericht davon ab, worauf es entweder zurückgewiesen, oder bis an einen entfernten Anker Plazz geführt wird und nunmehr umringen es eine Menge Wacht und Polizeyböte, welche sich Tag und Nacht abwechseln, beständig examiniren und nicht von der Seite gehen. Endlich kommt ein *Banjos* unter Begleitung mehrerer Böte von der Stadthalterschaft des Fürsten *Fisen* /

und examinirt alles, um dem *Gouverneur* von *Nangasaki* davon Bericht abzustatten, den folgenden oder einen Tag um den andern kommen wieder andere *Banjos* und in der Folge *Ober Banjos* und so scheint es die Rangordnung der *Offizire* durchzugehen bis zum *Gouverneur*, damit die Herrn ja durch vieles *Examiniren* und Beobachten erst hinter Alles kommen, bevor man in den Haven gelaßen wird. Wenn ein *Banjos* oder *Officir* an das Schiff kommt, so erkennt man sein Fahrzeug schon von weitem durch das Trommeln und durch eine Menge kleinerer *Barken*, welche der großen zur Seite und hinter her kommen

---

Übersetzung *Recollections of Japan* (Victoria B.C., Trafford 2003) und dessen handschriftliche Abschriften aus den offiziellen Tagesberichten in seinem Nachlass (Nat. Archiv, Den Haag). Der "Buchhalter" könnte Baron Lawick van Pabst sein, der als Rekonvaleszent der Armee von Batavia Gast in Dejima war. Der "Kapitän" war entweder Arend Musquetier von der *Gesina Antoinette* oder Gerrit Belmer von der *Maria Susanna*.

<sup>24</sup> Das im Manuskript folgende Blatt 3 zeigt "Ein Jap. Polizeybot. d. 8 Octobr. 1804". Es wird am Ende dieses Artikels abgebildet. Vgl. eine ähnliche Skizze in Löwensterns Tagebuch und in Krusensterns *Atlas*. Für eine Synopse der wichtigsten zeitgenössischen Texte und Illustrationen gut geeignet ist das russische Buch *Vokrug sveta Kruzenshternom* [sostaviteli Alekseĭ Kruzenshtern, Olga Fedorova]. St. Peterburg, Kriga 2005.

müßen. Ein solcher *Banjos* oder *Officier* wird schon von den Dollmetscher *grootte Heere* genannt und mit dem devotesten Verbeugungen behandelt, sie werfen sich vor ihm auf die Erde und wagen nicht laut zu sprechen, beständig liegen sie mit zur Erde gehefteten Blick vor ihm auf den Knien, drücken ihren tiefen Respect durch ein sonderbares Zischen mit dem Mund aus, indem sie den Athem hörbar an sich ziehen und wagen es nie ihn anzublicken und dennoch ist dieser Mann nichts anders als ein bloßer *Officier*, der sobald der *Ober Banjos* kommt daßelbe vor diesem thun muß was die Dollmetscher vor ihm thaten, Indessen muß auch der *Ober Banjos* vor dem *Gouverneur* mit eben so devoten Verbeugungen und sklavischen Zeremonien und dieser vor den Fürsten der einzeln Provinzen und dieser wieder vor dem Kayser.

In unserer Gegenwart ergriffen die Dollmetscher den holl. *Baron v. Pabst* und die Schiffs *Capitains*, nachdem sie schon ihre Verbeugungen vor den *Banjos* gemacht hatten und nöthigten sie mit den Worten *Pabst Compliment make vor de grootte Here* noch eine weit tiefere Verbeugung zu machen wobey sie den Kopf /

(2) einige Zeit lang nieder halten müßen. Dergleichen entehrenden und widrigen Behandlungen müßen sich Europäer, welche hieher kommen einmal gefallen laßen.<sup>25</sup> Doch sind diese noch nicht so drückend, als das Mißtrauen und die Vorsicht mit welcher man sie bewacht, sie entschuldigen zwar alles dies, wenn ihnen die Unschicklichkeit und Beleidigung ihres Betragens vorstellt, mit Achselzucken und Hinweisung auf ihre Gesezze auf altes Herkommen und auf Japanische Manier, doch fahren sie immer fort ruhig und gelaßen jeden Fremden zu betrachten, wie einen Dieb, verdächtigen Menschen oder Betrüger. *Linne* sagt sehr richtig von dem Asiaten<sup>26</sup>: *opinione regitur* ich möchte von den Japanern *praeopinionem reguntur* sagen, sie sind voller Vorurtheile und vorgefaßten Meynungen und zwingen alles, was sich ihnen nur nähert, unter den Gehorsam dieser ihrer vermeintlichen Gesezze und wer diesen nicht gehorchen will, wird auf die grausamste Art ermordet. Es kostet nur ein Wort von ihren Obern so ermorden sie Freund und Feind: denn diese seltsame Art eines knechtischen Gehorsams ist nichts anders, als ein Werk eines durch die Furcht und Gewohnheit zur andern Natur gewordenen Slavensinnes.

Sie pflegen beständig zu sizzen und lieben keine Fußbewegung. Dahero tragen sie kein Bedenken, jedem Fremdling, der ihre Küsten betritt, Gottes Erdboden zu versagen, sie sperren ihn ein und umzäunen seinen Wohnplazz mit *Bambu*, ohne daran zu denken, daß sie ihm die erste Bedingung um gesund zu bleiben entziehen. Ihr erbärmliches Fußwerk erlaubt keine Fußbewegung, sie gehen ja so gar so weit, daß sie den Pferden, deren Hufe sie nicht zu beschlagen pflegen, ebenfalls Strohschuhe anlegen, beydes hat schon *Thunberg* abgebildet. S. deßen *Voyage par les deux Indes. Paris 3 Vol.*<sup>27</sup> Bey ihrer Wachtparade wird das Pferd von 2 Soldaten hinter dem *Officier* her geführt aber reiten habe ich sie niemals gesehen, sie tragen gewöhnlich keine Beinkleider außer die Bedienten, Knechte und Landsleute, welche auch /

mehrentheils, nebst den Matrosen halb nakkend gehen. Die Soldaten tragen an statt des Helmes einen hölzernen lakkirten flachen vorn zugespizzten Huth, welcher keinen Kopf hat, sondern ein kleines Kißen, welches auf dem bloßen Schädel aufliegt und unter dem Kinne und hinter den Ohren mittlest 2 Bändern fest geschnürt ist. Ihre Kleidung ist schwarz oder blau, wie die Wacht anderer Unterbedienten nur mit

<sup>25</sup> Doeff wehrt sich in seinen Memoiren (s. Anm. 23) entschieden gegen diese auch bei Krusenstern und Langsdorff publizierte Darstellung (Doeff 2003, S. 54f.).

<sup>26</sup> In den verschiedenen damals vorliegenden Ausgaben von Carl Linnés Werk *Systema naturae* findet sich jeweils im Anfangsteil der Klassifikation der "Mammalia primates. Homo" diese Behauptung, etwa in der von Joh. Frdch. Gmelin edierten 13. Edition.

<sup>27</sup> Offensichtlich hat Tilesius sowohl eine deutsche wie eine französische Fassung von Thunbergs Reisebericht verwendet. Die 3bändige französische Version *Voyage en Afrique et en Asie, principalement au Japon, pendant les années 1770-1779* mit den kommentierten Illustrationen erschien in Paris 1794.

dem Unterschiede, daß sie Strumpfbeinkleider tragen und der Rock mit einem weißen Kragen, den auf der Brust eine Querbinde meist Wappen hält, besetzt ist ; auf dem Rücken ist ein großer weißer Teller, welcher wahrscheinlich einen Stern oder Mond, das Wappen des Fürsten *Tschikusing*) vorstellt. Uibrigens trägt jeder Soldat 2 Degen auf einer Seite und bey der Parade oder unter Gewehr, seine Flinte in einer roth scharlachenen Filzcapsel. Die Soldaten stehen mehrentheils vorn auf dem Dache eines Botes mit einem Busch von weißem Papier und zeigen andern den Weg, den sie nehmen sollen. Die Kleidung des *Officers* in diesem Dienste welchen er wenn der *Gouverneur* oder der Fürst selbst zu Wasser geht, beobachtet, ist sehr prächtig alles kostbar gestickt und der Huth mit langen Seidenlappen behangen, welche ebenfalls gestickt sind. Uibrigens aber sehen die Japonischen Soldaten gar nicht militärisch aus, sondern vielmehr wie die alten Weiber.

Landleute und andere, die sich der Sonne aussetzen müßen, tragen große runde Strohhüte ohne Kopf, sondern mit einem Kissen, das mittelst der Bänder unter dem Kinne und hinter den Ohren befestigt wird. Aerzte und Bonzen tragen ganz kahl geschorene Köpfe, letztere haben auch nach den Orden und *Secten*, zu welchen sie gehören, ganz verschiedene Kleidung, Schriftbänder, Pater noster Rosenkränze und dergl. Einer meiner undankbaren Schüler der bey der Gesandtschaft war hat eine Zeichnung davon gemacht, die ich hier *copirt* beylege<sup>28</sup>, ich selbst habe keine Bonzen gesehen, weil ich den Aufenthalt der Gesandtschaft nie besuchen wollte – /

(3) Ob ich gleich in meinem ganzen Leben keine schrecklichern Stürme und Orkane erlebt habe, als in der Japanischen See<sup>29</sup> und ob wir uns gleich zu einer sehr gefährlichen Jahreszeit in derselben befanden, so können wir doch noch immer von Glück sagen : denn aus allen Reisebeschreibungen ersieht man, daß es eben so und noch weit ärger in den besten Jahreszeiten in diesem Meere herzugehen pflegt. Schon aus diesem Grunde fürchte ich, (anderer gar nicht zu gedenken), daß die Rußen ihre großen Erwartungen von den Vortheilen die sie aus dem mit Japan zu schließenden Handel zu ziehen hoffen, werden herabstimmen müßen. *Thunberg* (Reise 133) sagt “Gewöhnlich rechnet man, daß von 5 Schiffen, die nach Japan geschickt werden, eins verlohren geht. Dies bestätigt mir hundert jährige Erfahrung“ und *Thunberg* führt zum Beweise dieser Warheit eine Liste von verlohrenen gegangenen Schiffen an. Der Verlust der Schiffe, welche in den ungestümen Wellen des Japanischen Meeres würden verschlungen werden, würde gewiß den kleinen Gewinn, den diejenigen Schiffe, so glücklich zurückkämen, bringen könnten, weit übertreffen, zumal da sie von *Kamtschatka* eine weit gefährlichere Fahrt haben als die Holländer von *Java*. Uiberdieses haben sie auch den Japanern ungleich weniger anzubieten als die Holländer, denn der einzige Artikel den sie ihnen mit einigem Vortheile anbieten können sind Felle und Pelswerk und diese sind gewiß nicht wolfeil, so, daß man hoffen könnte, daß den Japanern die Waren preise eben so annehmlich seyn würden als die Ware selbst.<sup>30</sup> /

Die Japaner tragen aber garkein Pelzwerk sondern wattirte Kleider.

Doch nach einem 6monatigen Aufenthalte oder Einkerkung im Haven von *Nangasaki* wissen wir, daß

<sup>28</sup> Die Originalzeichnung findet sich nicht mehr bei den Unterlagen, wohl aber ein Probeandruck mit 2 Mönchen (jeweils Vorder- und Rückansicht) und einem Handwerker mit waageähnlichem Tragegestell in der oberen Reihe, sowie 5 verschiedenen Banjos in der Unterreihe (Stadtarchiv Mühlhausen, Tilesius Bibliothek, Nr. 82/405, Bl. 21). Der “undankbare Schüler” Langsdorff hat sich von Anfang an strikt geweigert, in Tilesius einen weisungsbefugten Vorgesetzten zu sehen. Das Original dieser Zeichnungen von buddhistischen Priestern durch Langsdorff befindet sich in Privatbesitz in Hannover.

<sup>29</sup> Tilesius hat sich in seinem Tagebuch (82/298, pag. 214-218) etliche Notizen zu Taifunen (Typhoon) gemacht und dabei auch den eilfertigen Bericht Horners genannt, der am 9. Oktober 1804 vollendet und dann durch die holländischen Kapitäne “Musketier u. Bellmark” an Baron von Zach übermittelt worden sei. Vgl. auch Tilesius’ Taifun-Aufzeichnungen im Berliner Teilnachlass Nr. 18.

<sup>30</sup> Ähnliche Argumente formulierte der 4. Offizier Hermann Ludwig von Loewenstern in seinem Tagebuch (Tartu, Estländisches Historisches Archiv, EAA, Krusenstiern-Fond f. 1414, 3-6, z.B. am 19&31.Mrz. 1805). Das Tagebuch liegt inzwischen in einer russischen (2003), englischen (2003) und deutschen Edition (2005) vor.

es gar nicht einmal nöthig ist, dergleichen Besorgniße zu erwägen. Japan will nichts mit Rußland zu thun haben, die Geschenke der Rußen und ihre Gesandtschaft ist nicht angenommen worden, die Handels vorschläge sind abgewiesen und man hat es gemißbilliget, daß es der Rußische Kayser gewagt hat an dem großen *Kubo* von Japan<sup>31</sup> einen Brief zu schreiben.

Man hat uns durch die Dollmetscher wissen laßen, daß keine Macht der Welt es wagen dürfe, an den großen *Kubo* zu schreiben. Welche *Arroganz*, welcher unwißende Dünkel einer Nation der *Europens* Macht, die Wirkung des groben Geschützes und der Kartätschen einer ganzen Flotte so wenig kennt. Der Gesandte hoffte noch immer Erlaubniß zur Hofreise zu erhalten, als die Dollmetscher täglich zu uns kamen und seine Hoffnung immer nach und nach herabstimmten, endlich sogar berichteten, daß ein großer Herr von *Jedo* ankommen würde, dem der Kayser Vollmacht gegeben hätte, dem Rußischen Gesandten in seinem Nahmen *Audienz* zu geben, und so wurde es auch. Nicht lange darnach erschienen die großen Staatsböte der Fürsten *Fisen* und *Tschikusing* im Haven von *Nangasaki*. Beyde Flotten und viele *Banjos* böte versammelten sich an den kaiserlichen Wachtschützen und fuhren unablässig von der Stadt dahin und wieder zurück. Man sezzte einen Tag fest an welchem der Gesandte in dem fürstlichen Schiffe nach der Stadt geführt werden sollte und dem großen Herrn von *Jedo* und beyden *Gouverneurs* von *Nangasaki* vorgestellt werden /

(4) sollte, welches auch geschahe. Da der Gesandte darauf gedrungen hatte eine Wohnung am Lande zu erhalten, so hatte man ihm in *Megasaki* eine Viertelmeile vor *Desima* gerade unserm Schiffe gegenüber eine angewiesen und die Gebäude in welchem er nebst seiner *Suite* eingeschloßen war mit einer *Balisade* von sehr starken *Bambustangen* umgeben. Die Thür war den ganzen Winter über Tag und Nacht verschloßen und der Schlüssel war in den Händen der Japonischen Soldaten und *Officieres* die ihn bewachten – und hinter jedem der vom Schiffe zu ihm wollte, wieder zu schloßen. Vor diesen gefänglichen Pallast wurden nun die sämtlichen Schiffe gebracht und der Gesandte nebst einem kleinen Rußischen aber sehr großen Japanischen Gefolge nach der Stadt *buxirt*. Hier wurde er in einem *Norimon* oder Japanischen *Portechnaise* oder tragbaren Häuslein nach der Wohnung des *Gouverneurs* getragen und die andern Herrn giengen in *Procession* von den Dollmetschern Soldaten und Polizey bedienten umringt hinter her. In dem Hause des *Gouverneurs* wurden sie mit Toback, Thee, *Confituren* und *Saki* (japanischer künstlicher Wein durch Gärung und *Destillation* aus dem Reis zubereitet) bewirthe und als dann zur *Audienz* geführt. Hier fand sich daß die beyden *Gouverneurs* von *Nangasaki* mehr Gewicht hatten, als der von *Jedo* gekommene große Herr, welcher kein Wort sprach<sup>32</sup>. Nach dem der Gesandte und sein Gefolge, die von den Dollmetschern erlernten tiefen Verbeugungen sizzend auf den Knien und ohne Schuhe, gemacht hatten, so befahl der eine *Gouverneur* dem Oberdollmetscher dem Gesandten /

zu sagen, daß es mit dem Handel nichts sey und das der große *Kubo* von keinem Menschen Geschenke anzunehmen pflege, daß also die Rußen die ihrigen wieder einpacken könnten und so bald wie möglich abziehen, dem Rußischen Kaiser, welchen die Japoniser wohl nicht einmal so gros als den *Gouverneur* von *Nangasaki* denken mochten, sollten sie sagen, daß er nicht wieder an den großen *Kubo* von Japan schreiben sollte. Der große *Kubo* sey der größte *Monarch* auf der bewohnten Erde und dürfe nicht einmal von gewöhnlichen Menschen angesehen werden (nb. die Japoniser fallen schon mit dem Gesichte

<sup>31</sup> Mit Kubo (sama) wurde damals der in Jedo (Tokyo) regierende weltliche Kaiser (Shogun) und mit Dairi das in Miyako (Kyoto) residierende geistliche Oberhaupt des Landes bezeichnet.

<sup>32</sup> Vgl. zur Bewertung und zum Ausgang dieser Verhandlungen jetzt den Artikel von William McOmie "From Russia with All Due Respect: Revisiting the Rezanov Embassy to Japan", in: *Kanagawa University Repository (Jinbun kenkyu)* No. 163 (2008) S. 71-154. Er stützt sich vorwiegend auf das Tagebuch Rezanov's, berücksichtigt aber nicht Löwenstern. Bei dem aus Edo angereisten Beauftragten handelte es sich um Tōyama Kagekuni/Kagemichi, die beiden "Gouverneure" von Nagasaki waren derzeit Hida Yoritsune (von 1799-1806) und Naruse Tadashi (1801-1806).

zur Erde oder kehren sich sogleich um, wenn sich nur der *Gouverneur* von *Nangasaki* zeigt oder ein Reichsrath von *Jedo* hierher kommt, um ihn nicht anzusehen) – Der große *Kubo* sey der gütigste und weiseste *Monarch*, er habe befohlen, uns alle nur mögliche Bedürfnisse und Lebensmittel zu schenken und uns zu unserer baldigen Abreise hilfreiche Hand zu leisten, (warscheinlich hatte der Gesandte durch sein elendes Betragen, wol auch etwas zu diesem Befehle beygetragen)<sup>33</sup>. So entehrend auch im Ganzen die Art ist, mit welcher die Rußische Gesandtschaft, die doch wenigsten nur Geschenke bringen sollte, von den Japonesen aufgenommen wurde, so haben doch die *Gouverneurs* von *Nangasaki* unser Schiff mit allen möglichen Bedürfnissen, besonders gegen die Abreise hin versorgt, sie haben Arbeitseute, Kupferplatten zum Beschlagen des Schiffs und eines ziemlich großen Pack oder Waaren Botes, Kampferholz, und Fuder Hölzer in Menge herbeygeschafft und ihre eigenen Leute für uns arbeiten laßen. Die Ernährung und Versorgung eines solchen Schiffes, wie das unsrige mit so mancherley Bedürfnissen, die die Japonesen, welche so wenig eßen und trinken, in Erstaunen sezzten, für einen ganzen Winter mag auch in der That nicht wenig gekostet haben. Ich habe nicht bemerkt, daß sich die Rußen durch die gros müthige und erniedrigende Behandlung der Japonesen gedehmüthigt gefühlt hätten, vielmehr hat sich die Gesandtschaft die Freygebigkeit dieser Nation sehr zu Nuzze gemacht, die Herrn sind etwas dickhäutig, wenig delikat oder vielmehr unempfindlich – bey ihren *prävalirt* der Kaufmannsgeist der Eigennuz und ein ganz sonderbarer Dünkel, um diese Begierden zu befriedigen wird das Leben die Zufriedenheit und das Glück anderer Menschen gern ohne Bedenken aufgeopfert.<sup>34</sup> /

(5) Die Wachböte Polizeyböte und kleinern Fahrzeuge sind gewöhnlich zu beyden Seiten des Bords mit 6 auch 3 Rudern versehen, diese Ruder bestehen aus 2 Stangen welche in einem stumpfen Winkel mit einander vereinigt sind, so daß der Matros mit demselben Ruder zieht und stößt und auf die Art dieselbe Bewegung entsteht mit welcher ein einziger englischer Matros sein Bot fortrudert, das hinterste Ruder braucht der Knecht auch als Steuerruder. Das will *Thunberg* S. 144 mit seinem großen am Ende schief gedrehten Ruder zum Regiren sagen. Aus der Abbildung bekommt man zwar schon einen sinnlichen Begriff von der sonderbaren Form dieser Böte ; doch ist die Vorstellung, welche man davon erhält, nicht auf die innere Einrichtung den Zweck und die Bedeutung der Flaggen Wimpel und Ehrenzeichen ausgedehnt. Es giebt größere und kleinere Wachbarken. Die kleinern haben am Vordertheil einen aufsteigenden Kiel wie die großen, an welchem zum Zeichen der Wache und ihres gerichtlichen Zweckes ein Gehänge von schwarzen Schnüren befestigt ist. Außer dem aber haben sie gleich hinter diesem Kiele eine kleine bedeckte Hütte, deren Seitenwand zur Vergrößerung des Daches und zum Schuzz gegen die Sonne hinauf geschlagen werden kann. Die beyden für eine solche kleine Barke bestimmten gerichtlichen Wächter liegen in dieser Hütte auf Matten und sehen unter dem Dache hervor, um alles, was um sie herum vorgeht, zu beobachten. Die *Meubles* dieses kleinen Zimmers bestehen gewöhnlich in einen kleinen 4ekkigen *Bureau* mit Schreibzeug, Theegeschirr und Stäbchen nebst einigen Gefäßen zur Malzeit.<sup>35</sup> Im Hintertheil des Bots ist ein Herd, welchen die 6 Ruderknechte besorgen, welche zugleich diesen Herrn aufwarten müßen. /

Diese Hütten auf den Wachtböten nehmen also den kleinsten Theil des Fahrzeuges ein. Die größern aber sind ganz und gar bedeckt und gleichen ganz einem kleinen schwimmenden Hause. Auf den Hintertheilen der kleinen stecken nur 2 Lanzen zum Zeichen der Richterlichen Vollmacht nebst einer kleinen Fahne auf welcher das Wappen des Fürsten oder ihre Instruction oder Bestimmung durch Japanische

<sup>33</sup> Diese Stichelei gegen den russischen Gesandten wurde wie die wenige Zeilen später am Seitenende folgenden Mäkeleien im Druck weggelassen.

<sup>34</sup> Die auf der folgenden Seite (5) beginnenden Informationen wurden in der *Georgia* 1806, No. 104, Sp. 821–826 abgedruckt.

<sup>35</sup> Vgl. die Abbildungen am Ende dieses Aufsatzes. Auch Loewenstern hat solche Zeichnungen entweder von Tilesius erhalten oder selbst kopiert und in sein Tagebuch eingefügt.



*Charaktere* angedeutet ist. Die geringern haben schwarzes Tuch mit weißen *Charakteren*, die hohen weißes mit schwarzen oder blauen Zeichen. Ist, wie es die Manier der Japoner erfordert, ein *Banjos* auf einer solchen Barke; so wird beständig getrommelt, und das Familien Wappen des *Banjos* ist an der großen Flagge, in der kleinern aber das Wappen des Unter *Banjos*. Ein Roßschweif, ein Strauß von Hahnenfedern, ein großer Papierbusch ein Wimpel in einem cirkelförmigen Reiff ausgespannt mit einer vergoldeten Kugel oder dergl. geziert sind die Amts und Ehrenzeichen des Ober und *UnterBanjos*.

Die *Piquen* und Lanzen welche vorne aufgesteckt sind die 8 Federbüsche auf sehr langen Stäben, welche am Hintertheile hervorragen, die Bogen Pfeile und Köcher wie auch die in Scharlachsäcke verwahrten Kugelbüchsen, welche auf dem Vordertheile des obren Verdeks aufgestellt sind, deuten auf die richterliche Gewalt und Vollmacht. Da indeßen in Japan seit langen Zeiten weder innerlicher noch äußerer Krieg geführt worden ist, so sind diese Gewehre auch in der That nichts weiter, als Sinnbilder, so lange wir in Japan waren, sahen wir auch nicht ein einziges mal einen Soldaten oder Polizeybe-

(6) bedienten schießen. Die Japanischen Flinten haben keine Schlößer mit Feuerschlag, wie die unserigen, sondern es sind statt deren Haken oder Drücker mit einem Eisen an welchem die brennende Lunte befestiget wird, die so bald der Schütze gezielt hat, zum Zünden auf die Pfanne heruntergedrückt wird. Mit diesem *Mechanismus* sind Soldaten und Jagdflinten eingerichtet. Ich sahe die Japoner auf diese Art am Strande Enten schießen und es gieng in der That beßer und schneller von statten, als es die mangelhafte Art des Zündens erwarten ließ. Die Säbel der Japoner sind über alle Vorstellung schön und prächtig und so scharf, wie die Scheermeßer, Soldaten und Polizey oder Wachofficire Staatsbediente etc. tragen 2 Säbel auf einer Seite. An dem einen Säbel steckt ein eben so scharfes Meßer oder Dolch, deßen sie sich zum Werfen gegen ihre Feinde bedienen oder sich selbst damit den Bauch aufschneiden, wenn sie sich so weit vergangen haben, daß sie vor Gericht zur Verantwortung könnten gezogen werden, oder gegen ihre Obern oder gegen die *Subordination* gestündigt haben. Der Stahl der Klingen ist so hart, daß sie unmöglich im Gefecht halten können, sondern von *Contraschlägen* oder *Paraden* zerspringen müssen, kommen sie aber auf weichere Körper, so sollen sie so große Würkung thun, daß die Japoner und Holländer behaupten, man könne damit in einem Hiebe einen Menschen vom Schädel bis auf die Beine zerspalten. Sie haben kleine, alt gothisch oder symbolisch modellirte Stichblätter, dicke Gefäße mit dem Perlenrochenfell überzogen mit seidnen Borten kreuzweise umflochten, ohne Bügel und die Scheiden sind sehr dicke rund von Holz und mit dem *Succ. rhus vernix* lakkirt und wie die Klinge aufwärts gebogen. Diese tragen sie ganz wagerecht durch die Binde gesteckt, daher die Hintertheile der Säbel, wenn sie auf den Knien mit dem Gesicht zur Erde liegen, hinterwärts in die Höhe stehen, wie die Hinterfüße einer Fledermaus, welches nebst ihren devoten *Krimassen* und ihrer komischen stückweise holpernden Sprache einen so drolligen Eindruck machte, daß man bey dem ersten Anblick *nolens volens* darüber lachen muß. Ich hatte so sonderbare /

abentheuerliche und für Europäer so ganz auffallende Szenen hier in Japan mit angesehen, daß ich eine Menge der merkwürdigsten Gruppen hätte malen können, wenn ich hätte richtig zeichnen und *grouppieren* gelernt und wenn mir die Naturgeschichte, deren Zeichnung ich doch wenigstens etwas mehr als der Figurenzeichnung gewachsen bin, Zeit dazu gelaßen hätte. Indeßen habe ich doch einige Federzüge von dergl. Gegenständen entworfen, die einst *Boehm* oder *Geissler* ausführen können.<sup>36</sup> Jeder Japoner

<sup>36</sup> Seit der Betreuung von Kupferstichen zu Pallas' Werk in Leipzig 1802 hatte Tilesius Verbindungen zu den Kupferstechern Johann Gottfried Heinrich Geissler (1770-1844) und Amadeus Wenzel Böhm (1771-1823). Geissler fertigte die Druckplatte für den Artikel in der *Georgia* an. Aufgrund finanzieller Schwierigkeiten musste er Leipzig verlassen, so dass Kupferplatten für den 3. Band von Pallas' *Zoographia Rosso-Asiatica* z.T. verloren gingen. Vgl. etwa den Brief von Tilesius (Ende August 1825) an den Historiker Joh. Phil. Krug in St. Petersburg (Archiv der Akademie der Wissenschaften, St. Petersburg, Font 88, 2, 85, Bl. 93r und v):

“Auf Ihren lieben Brief vom 7 Aprill 1825. mein theurester Freund Krug! habe ich doch noch folgendes zu beant-

trägt Tobakspfeiffe Tobakstasche, Arzeneykästchen und Fächer in der Leibbinde. Über der Binde, im Unterleide steckt die Papiertasche nebst Schreibzeug und Pettschaft. Ihre Kleidung ist Seide von verschiedener Farben, das Unterkleid glänzende, das Oberkleid aber glanzlose Seide, im Dienste mehrentheils schwarz, auf der Brust, auf den Ermeln und Rücken mit ihrem Amts und Familien wappen (*Mong ...*) bezeichnet. Je vornehmer sie sind, um so mehr Unterkleider tragen sie, ich habe keinen *Gouverneur* gesehen, aber die Ober *Banjos*, welche ich sahe, hatten bisweilen 5 seidene Kleider übereinander, sie müßen dabey doch immer Kälte genug ausstehen, Sie haben auch *Gallakleidung*, die in einem weiten Rock ohne Ermel bestehen, der mit einem runden hohen aufrecht stehenden Kragen versehen ist, ich habe sie in diesem Aufzuge nur ein einziges mal, nämlich an ihrem Neujahrstage gesehen, wo sie vor unser Schiff kamen und gratulirten. Daß ich damals sogleich eine skizzirte Abbildung entwarf, versteht sich von selbst.<sup>37</sup> An statt der Strümpfe und Stiefel tragen sie weiße oder blaue baumwollene Sokken und Pantoffeln oder bloße Sohlen von geflochtenem Stroh, welche unten mit einem Eisen und oberhalb mit einem ledernen Biegel befestiget sind. Wenn sie auf unserm Verdecke giengen so klapperte das Eisen, als wenn viele Klepper oben herum trabten, Wenn sie in ein Zimmer oder in ihre *Canots* treten; so ziehen sie die Strohpantoffeln aus und laßen sie vor der Thüre stehen, bis sie wieder zurückkommen. Ihre Köpfe sind bis auf die *sutura lamboidea* kahl rasirt, die hinten stehenden Haare werden mittelst eines Papierschnittchens auf dem Schädel gebunden, mit Pomade steif in ein Zöpfchen gewichst und auf den hinten Theil des Stirnbeins gelegt. Schädel und Haar glänzen wie ein Spiegel.<sup>38</sup> /

---

worten: Die *K. Academie* der *W.* hat gar nicht nöthig, etwas, was *Geissler* von *Pallas* Nachlaß versetzt oder verkauft hat, wieder einzulösen. Die gesammten Vögel und Fische, welche *Pallas* von *Geissler* hat zeichnen laßen, stehen in der Sammlung des Prof. hist. nat. *Schwaegrichen*, dem sie *Geissler* aus Noth überlaßen hat, er kann jeden Tag dahin gehen und nachsehen, wenn er etwas zu *corrigiren* hat: er wartet nur auf die Befehle der *Academie*, seine angefangene Arbeit fortzusetzen; aber als ich ihn zum letztenmale sahe, schien es mir, als wenn er nicht mehr gar lange leben würde: denn Kummer und Elend und der leidige *Spiritus profanus*, in welchem er seine Stärkungstropfen gefunden zu haben glaubt, hatten ihn sehr verändert. – Es ist also, wie Sie sehen, ein bloßes Vorgeben und leere Ausflüchte, man will einmal, daß das Werk ein todt gebohrnes Kind bleiben soll, damit auch ich als schlechter *Accoucheur* betrachtet werde. Wenn *Geissler* todt ist, so wird man darin allerdings ein wichtiges Hinderniß finden, das Ganze zusammen zu bringen, und ich bin dann fast überzeugt, daß es garnicht mehr möglich seyn wird. Ein solches Werk aber ohne Abbildungen ist ein Leib ohne Seele. Ich habe in meiner letzten Abhandlung bewiesen, daß ein seit einem Jahrhundert beschriebener Fisch, sobald er noch nicht abgebildet worden, als ein ganz unbekannter anzunehmen sey. Wenn man nur wenigstens hätte fortfahren wollen wie ich mit *Fuss*, der einige Fische von *Neyer* hat stechen laßen, angefangen hatte; so wäre doch wenigstens der dritte Band *Amphib. u. Fische*, zu denen man meine neuen bereits gestochen von den *Memoires* her stehen hat, jezt vollendet: indeßen werden sich auch nach und nach die Handzeichnungen verlieren, und die ganze Arbeit des seeligen Mannes, der mit großer Mühe vorher die zahlreichen und *exacten* Abbildungen zusammengebracht hatte, wie auch die meinige, wird verlohren seyn, ohne daß jedoch die *Academie* den Vorwurf der Vernachläßigung von sich wird abwälzen können. *Littera scripta manet!* bey jedem Thiere ist auf die Tafel hingewiesen, und bey meinen Fischbeschreibungen sind die schon vorhandenen u. in den *Memoires* abgedruckten Platten, als beygelegt, angegeben. Wenn man diese 3 Bände ohne Abbildungen verkauft; / oder sie auch nur verspricht nachzuliefern, welches man in kurzem auch mit dem besten Willen nicht mehr wird halten können; so giebt man schon zu erkennen, daß man das Buch nicht seit 1814, sondern schon weit früher auf die lange Bank geschoben, und schadet dadurch dem Ruf der *Academie*, welche die Arbeit eines Mannes, wie *Pallas* war, gering zu achten schien und vernachläßigen konnte. *Rudolphi* hat diesen Gegenstand in seiner *Biographie* von *Pallas* in seinen Beyträgen für *Anthropologie* und Naturgeschichte auch schon zu wichtig gemacht, als daß er könnte in der Folgezeit ohne weiterer Nachfrage bleiben oder je vergeßen werden, und *Kluge*, *Schüppel* und ich, die wir *Entomologie* u. *Helminthologie* d.R.R. nachliefern und den *Pallas* ergänzen sollen, können unser Wort nicht halten: ich vermuthe ohnedem, daß die beyden *Berliner* auch gar keine Lust haben, daßelbe zu halten, und daß es ihnen blos um die *Pallasschen* Insecten zu thun war. *Rudolphi*, welcher die Fische bekommen hat, hat sich zu nichts verbindlich gemacht.”

<sup>37</sup> Diese Kleidung wurde dann auch in Langsdorffs Werk vorgestellt und findet sich gleichfalls in Loewensterns Tagebuch.

<sup>38</sup> Hier endet der Japanbericht in diesem Manuskript. Anschließend folgen Bemerkungen über Kamtschadalen und

Der Vollständigkeit halber soll hier eine Textpassage von Tilesius' eigener Hand folgen, die das Ende des Artikels in der *Georgia*<sup>39</sup> bildet, dort aber etwas anders lautet.

### 1c. Stadtarchiv Mühlhausen (Tilesius-Bibliothek Nr. 82/661)

Als wir die Japanischen Inseln zu Gesichte bekamen wurden alle Kreuze Christusbilder Spanische und Portugiesische Münzen auf welchen Kreuze geprägt waren, die Bibeln und Gebetbücher wie auch die Halsgehänge der Matrosen eingesammelt {und} in einer Kiste vernagelt. Auch wurde ein Verzeichniß der ganzen Mannschaft, in welchem das Alter, das Amt und die Religion eines jeden einzeln angezeigt war, aufgesetzt, in der Folge wurden auch Flinten Pistolen und Säbel eingefordert. Auf den hohen Bergen und an den Seeufern der Küste hat die Japanische Regierung überall Wachtplätze errichtet auf welchen die Beamten mit Fernröhren die Schiffe schon von weitem entdecken können, Nächtliche Feuer in diesem Falle unterhalten und die Annäherung eines fremden Schiffes auch durch expresse Boten dem *Gouverneur* von *Nangasaki* sogleich melden müßen. Gleich beym Empfange und von allem Anfange {an} behandelt dieses mißtrauische Volk jeden Fremden mit einer beleidigenden Anmaaßung und Oberherrschaft kalt, langsam, verächtlich und mit einer Wachsamkeit und Sorgfalt, wie man unter Voraussetzung der schändlichsten Laster bey uns nur Diebe, Räuber, Verräther und Mörder zu behandeln pflegt, wie schon *Charlevoix* und *Kaempfer* sehr richtig bemerken. Da *Banjos* und *Gouverneurs* selbst sehr wenig eigene Macht zu haben scheinen ; so muß alles an den Kayser nach *Jedo* gemeldet und Verhaltensbefehl erwartet werden, welches immer über 1 Monat lang dauert, in dem *Jedo* 200 deutsche Meilen weit von *Nangasaki* entfernt liegt, so lange müßen also die Schiffe vor /

dem Haven liegen bleiben und die Mannschaft muß sich als Gefangene ganz ruhig verhalten, darf weder in den Haven noch an eine benachbarte Insel gehen, Nahrungsmittel werden ihnen bisweilen freylich ziemlich spärlich zugesichert

Kein Dollmetscher darf ohne *Banjos* oder ohne ausdrücklichen Befehl des *Gouverneurs* an das Schiff kommen.

Bey uns wurde ja von den *Gouverneur* aus eigener Macht schon eine Ausnahme gemacht. Am 26 Octobr 1804 als wir bereits über 14 Tage vor dem Haven am Papenberge gelegen hatten, schickte er den Dollmetscher und lies uns sagen daß wir nicht angesehen würden wie die Holländer, welche bereits über 1 *Saeculum* unterthänig wären, und daß wir aus dieser Rücksicht bald an Land gehen sollten er habe bereits Befehl gegeben, daß ein Stückchen Land so gros wie *Desima* oder die Ratteninsel abgesteckt, eingezäunt und mit Wohnungen versehen werden sollte.

Ungeachtet wir also nicht {als} unterthänig behandelt wurden wie die Holländer, so wurden wir doch immer eingesperrt verächtlich behandelt und bewacht wie Diebe und Verräther.

Wenn wir ihnen dies vorstellten ; so beriefen sie sich blos auf die Strenge und Unabänderlichkeit der Japanischen Gesezze. – Eben so sehr als die Feinheit ihrer Zunge und überhaupt die Strenge Geduld Fleiß Mäßigkeit, Ruhe und die industriösen Spuren, so man an ihren Arbeiten und Geräthen bemerkt, dem Fremden gefällt, so sehr mißfällt uns das Schändliche ihrer slavischen Regierung und Denckungsart und das Entehrende ihres Betragens gegen Ausländer, die aus keiner andern /

Absicht zu ihnen kommen als, um ihrem Kayser Geschenke zu bringen. Es wird uns ja nicht einmal erlaubt, an unsere Eltern Freunde und Bekandte zu schreiben. Tag und Nacht umgeben unser Schiff an die 30 Wachtböte, damit wir weder mit Holländern noch mit Japonesern sprechen sollen. *Thunberg*

---

die das berliner Konvolut Nr. 11 abschließende Beschreibung des Mammuthzahnes.

<sup>39</sup> Vgl. *Georgia* No. 96 Montag den 11. August 1806, Sp. 759f.

sagt sehr richtig S. 154. “Ein Europäer ist hier bürgerlich todt und in einem Winkel der Erde begraben. Die Seele behält keine andere Kraft als den Verstand. Der Wille ist ihr gänzlich geraubt : denn für die Europäer giebt es hier keinen andern Willen, als den die Japaner haben.”

Den nachtheiligsten Einfluß aber hat die Regierung und das Mißtrauen der Japoner auf die Naturgeschichte. Wie kann ein Europäischer Naturforscher in einem an neuen Naturprodukten so reichen Lande große Entdeckungen und Beobachtungen machen, wenn ihm die Natur selbst verboten ist ; wenn er auf dem Schiffe oder {zwischen} den 4 Wänden auf dem Lande eingesperrt gehalten wird und keine Excursionen anstellen darf? Hätte ich nicht manchmal die Japonischen Gesezze übertreten und die Wachtsamkeit der Japoner hintergangen ; so würde ich nicht im Stande gewesen seyn, so viele schöne Gegenden aufzunehmen und Fische Gewürme und Insecten zu beobachten.

Ungeachtet ich in einem Winter in Japan {an Fischen und Würmern} weit mehr zusammen gearbeitet habe, als der gelehrte *Kaempfer* und Ritter *Thunberg* in 2 Winter arbeiten konnten, die doch ungleich mehr Freyheit die Natur zu genießen gehabt haben als ich ; so hat es mich doch von einer Nation die alles Völkerrecht so sehr verletzt, geärgert, daß sie mich zwingen konnte mit so manchem minder Wichtigem vorlieb zu nehmen. /

Es ist wahr, besonders an Fischen habe ich Japan eine so gute Beute gemacht, daß ich allein vom Haven von *Nangasaki* eine *Ichthyologiam Japonicam* von 60 bis 80 Tafeln geben kann<sup>40</sup> ; aber ich habe freylich nehmen müssen, was man für uns und unsere Matrosen zum Eßen gebracht hat {mehrentheils todt Fische} ohne weitere Auswahl und ohne wichtige Verschiedenheiten von den Europäischen Arten, zwar hat Japan eine weit größere Mannichfaltigkeit an Fischen als andere Länder, indeßen habe ich doch nur ein einziges zuverlässig neues Fischgeschlecht (welches ein sehr wunderbares Thier ist) nebst mehreren neuen Arten aufzuweisen, weches bey der Menge von Abbildungen doch nicht gar zu viel ist. ~~Apropos eine Zeichnung von einem neuen Klippfisch Chaetodon cornutus nebst zwei Tafeln mit neuen {großen} sorgfältig ausgemalten und zergliederten Spinnen aus Japan sind mir von den Japanern {selbst}, so viel die unsrigen behaupten, gestohlen worden, sonst ist es ein unerhörtes Beyspiel, daß ein Japaner stiehlt (nicht so bey den Rußen? –)~~

Wenn *Linné* von den Asiaten so im Allgemeinen sehr wahr sagt : *capute conico opinione regitur*<sup>41</sup> ; so kann man von den Japanern in's Besondere sagen, *praeopinionem superstitione emblematica, curiositate etc. reguntur* : denn ein Volk, welches mehr zu Sinnbildern, {Zeichen} mysteriöser Philosophie, *Medicin* und Religion, Aberglauben, sympathetischen Curen, Bilderschrift etc. geneigt wäre als die Japoner, wird man nicht leicht finden – Sie haben 4 bis 6 verschiedene Alphabete oder Schriftformen, Aerzte und Bonzen haben eine eigene, die Regierung hat eine eigene, die gelehrten Historiker und gedruckte Bücher haben eine eigene und, die Schrift des gemeinen Volkes, der Weiber etc. ist eine eigene : doch bedeuten alle diese Charaktere nicht Buchstaben wie bey uns, sondern Begriffe und Sachen. Die Wörter sind nicht aus Buchstaben zusammengesetzt.<sup>42</sup> Jedermann trägt neben dem *Mong* (Zeichen Wappen) seiner

<sup>40</sup> In Konkurrenz zu Langsdorff, der bereits in der Aprilausgabe 1806 von Voigts *Magazin für den neuesten Zustand der Naturkunde* (XI. Bandes 4. St. S. 306–309) eine lange Liste von in Japan vorgefundenen Fischen geliefert hatte, bemühte Tilesius sich drei Monate im Juni später ebenda (XII. Bandes 6. St., S. 503–505) um die Sicherung seiner Priorität bei der Beschreibung, als er seinen Plan für eine “*Ichthyologiam Japonicam*” mit 60–80 Tafeln publik machte. Das Projekt gelangte aber nie zur Vollendung, weil Tilesius eine den gestiegenen wissenschaftlichen Kriterien angemessene Beschreibung und taxonomische Klassifizierung der Fische nicht zustande brachte. Zudem erschienen nach 1830 umfangreichere Fischbeschreibungen zu Japan durch Temminck und Schlegel. Selbst seine Illustrationen waren nicht immer dem damaligen Standard angemessen. Die Bewertung seines 1825 dem aktuellen Forschungsstand nachhinkenden Veters Tilesius als einem “*Epimenides*” durch Carl Gustav Carus in seinen *Lebenserinnerungen und Denkwürdigkeiten* (Weimar 1966, 2. Teil, 5. Buch, S. 437f.) drückt diese Kritik feinfühlig aus. Dazu sollen detaillierte Ausführungen in einem weiteren Artikel folgen.

<sup>41</sup> Diese Formulierung finde ich nur als *Linné*-Zitat bei John Barrow, nicht aber bei *Linné* selber.

<sup>42</sup> Im Tilesius-Nachlass im Stadtarchiv Mühlhausen befindet sich das Manuskript eines in Romaji geschriebenen ja-

Familie noch ein anderes, welches sein Amt oder Beschäftigung anzeigt, auf seinen Kleidern und Degen. Hohe Staatsbediente oder Soldaten tragen neben dem gewöhnlichen Degen noch einen andern etwas längern welcher ihr Amt andeutet oder der Kayser Degen genannt wird und zur Vertheidigung ihres Monarchen bestimmt zu seyn scheint.

## 2. Bei den “Macao”-Aufzeichnungen eingefügte Bemerkungen und Abbildungen zu Japan (Stadtarchiv Mühlhausen, Tilesius Bibliothek, 82/291)

Es handelt sich bei diesem Einschub zum Japanaufenthalt 1804–1805 um ein Konvolut von Aufzeichnungen, die sicher danach geschrieben wurde. Ein darin enthaltener korrigierender Bezug auf die deutsche Ausgabe von Krusensterns Reisebericht legt nahe, diese Passagen nach 1810 zu datieren. Vielleicht ist es ein Teil der nie edierten Bilderklärungen des *Atlases* von 1813 (dt. Edition 1814), wahrscheinlicher aber ein Teil des Buchprojektes oder der Vorlesung, wie die laufenden Nummern vermuten lassen, die nicht zum *Atlas* passen.

Hauptartikel der *Japaner*

1 Strohmatten Kein Haus kein Schiff kein Bot oder Nachen kann ohne diese ihnen höchst nothwendigen Bedürfnisse *existieren*, sie sind ihre Dächer ihre Betten und Schlafstellen ihre Fußböden und Vorhänge. Ich habe sogar einen Matrosen abgebildet der blos in Strohmatten gekleidet war. Die Größe der Schiffe und Böte wird oft blos nach der Zahl der Matten bestimmt, es giebt aber verschiedene Matten als {1.} bloße lokkere} von gebleichten Binsen gewebte, 1 Klafter lang u 1/2 breit 2 gefütterte Matten 3 hart ausgestopfte Matten oder Polster 4) weiche feine Matten mit künstlicher Einfaßung zu Vorhängen und Bettdecken. II K. p. 162 Drittes Kapitel<sup>43</sup>

2 Sonnetfächer zu vielfachen Gebrauch als Memorandum als Stammbuch. Ich habe in Nangasaki meinen Nahmen wol auf 20 Fächer schreiben müßen auf einige habe ich auch unser Schiff zieren [?] müßen mit der Flagge u. *Standarte*. Ich selbst hatte einen Fächer von *Sandelholz* auf deßen Blätter sich 6 Dollmet.<sup>44</sup>

/

H.v. *Krusenst* schreibt *Tschingodzin*, ich schrieb wie es die Dollmetscher aussprachen *Tschikusin*. Dieser und *Fisen* scheinen gleiche Rechte in *Nangasaki* zu haben, auch muß der Fürst von *Omura* nicht davon ausgeschlossen seyn, weil auch die *Officiere* des letzteren Fürsten oft bey dem Gesandten die Wache hatten p. 291 Im Hafen und an den Festungen sahe man blos das Wappen und die Flaggen der beiden erstern Fürsten Kleidung der *Banjos* u Dolken. 292–293 ist abgebildet in meinem Tagebuche Japan<sup>45</sup>.

/

---

panischen Textes (Sign. : 246). Da es offensichtlich ein religiöser Text ist, dürfte er aus dem späten 16. oder frühen 17. Jahrhundert stammen. Die Quelle des Inhalts (Übersetzung aus dem Portugiesischen?) ist mir ebensowenig bekannt wie die Provenienz des Buches und die Form der Acquisition durch Tilesius.

<sup>43</sup> Diese Notiz weist nicht auf die deutsche Ausgabe von Krusensterns Reisebeschreibung in Quartformat (Berlin 1810) hin, doch findet sich vielleicht ein Bezug zu Kämpfer in der Dohmschen Ausgabe.

<sup>44</sup> Der erwähnte Fächer ist nicht mehr vorhanden. Vgl. aber die Stempel der Japaner in Tab. II. Der Text wird im Manuskript auf dem folgenden Blatt nicht fortgesetzt.

<sup>45</sup> In Krusensterns Werk *Reise um die Welt* (Quart-Ausgabe) ist im Band I, S. 282f. u. 291ff. von der Kleidung der Japaner die Rede.

Am 9 Octob. 1804 kamen der *Secrtaire des Gouverneurs* der Schatzmeister und Bürgermeister v. *Nang.* oder *Otona* in einem großen mit Flaggen und Wimpeln Roßschweiften und *Spondons* gezierten Bote unter beständigem Paukenschlage an Bord nachdem sie der Landessitte gemäs ein Geschenk aus Reis Fischen und Geflügel an Bord geschickt hatten 295. 1. *die Banjos* verlangten bei dieser Gelegenheit unser Pulver und Gewehr und ließen unser Schiff nach der Westseite des Papenberge Tabagoboku<sup>46</sup> [?] bogieren. Weis blau weis ist kaiserliche Flagge und Behänge an den Festungen *Fisinokama Sama* aber sind die meisten Böte u Festungen d.h. der doppelte Palmzweig.<sup>47</sup>

Die größern Böte welche ein Verdek hatten, das über das ganze Bot gieng und mit blauen Tuche überzogen waren zeichneten sich durch 2 Piken aus die am Hintertheile als Ehrenzeichen<sup>48</sup>

/

Da der Gesandte einmahl den krotischen Einfall bekam auf einer von den zahlreichen leer um uns herstehenden chinesischen Junken zu wohnen, so wurde uns aufgetragen diese plumpen großen Schiffe zu untersuchen, daher bin ich in vier solcher Junken herum gekrochen, um mit *Langsdorf* Spinnen und Spinnenhäute zu suchen, über dem Waßer fanden wir die *Aranea hydrophila Chinensis* oder *Aranea navalis Japonica*, welche auch als eine neue *Species* abgebildet aber noch nicht bekannt gemacht ist.<sup>49</sup>

Tab. I. [(Brieftasche – unter der Zeichnung befindet sich dann folgender Text :)

“*Santukf* oder *Santokpf* ist eine Brieftasche oder wie es die Holl Dollmetscher nannten ein Schriftsack, den die *Banjos* und *Otony* in ihren Amtsverrichtungen brauchen, er ist deshalb mehrentheils aus schwarzer und dunkelblauer Seide mit silbernen Schlössern oder Haken er enthält Schreibzeug Pett-schaft und Amtsnotizen und wird über der Binde getragen wie es an meinen Abbildungen der *Banjos* zu sehen ist. Man hat dergl. *Santokfs* von allen Farben.”<sup>50</sup> /

Tab. II. A-E. und fig. 1.- . stellen “Ingo oder Ingio” sowie “Inikf” (inkan und hanko) dar. /

Tab. III. [links neben dem folgenden Text befindet sich die Abbildung eines Schreibkastens, gefüllt mit den Utensilien]

ein Schreibzeug *Susuri ako*

*Susuri* das Reibebret der Reibe=Stein

*Sum* der Tusch auch *Sim* und *ako* heißt der Kasten

[unter der Abbildung :]

*Misuire* das Waßergefäß oder auch die Vorrathsbüchse mit der flüßigen Tinte, wie sie die Schreiber

<sup>46</sup> Eine schöne kolorierte Zeichnung des Papenbergs (Takaboko) findet sich in Loewensterns Tagebuch.

<sup>47</sup> Wahrscheinlich verwechselt Tilesius die vermeintlichen Palmzweige mit den dargestellten Wistera im Wappen des Lokalfürsten Fisen no kamisama.

<sup>48</sup> Der Text bricht hier ohne syntaktischen Bezug zur folgenden Seite ab.

<sup>49</sup> Das folgende Blatt zeigt die kontrastarme Abbildung eines Japaners (?) im Seitenprofil. Ihr schließen sich die Abbildungen der *Japonica* an, die hier wiedergegeben werden.

<sup>50</sup> Vgl. Krusenstern-Atlas Tab. LVI. die Fig.3a-c : Pfeife (a) mit Hülle (b) und angehängter Tasche (c).

und *Banjos* in ihren Amtsgeschäften zu führen pflegen.

[der zugehörige Text ist um die Abbildung des mit 2 Luftöffnungen versehenen, dekorierten Wassergefäßes gruppiert, das auch im oberen Kasten zu sehen ist.] /

Tab. IV.

Fig 1. [hier handelt es sich um ein tragbares Tablett mit Bügelgriff und 6 umgedrehte Teebecher, fig 3. ein runder Becher, fig 2. ein pokalförmiger Becher auf einem pokalförmigen Ständer, fig 4. ein tulpenförmiger Becher - vgl. die farbige Abbildung im Loewenstern-Tagebuch] /

Tab. V.

“Name Kata Kakpf Sai Mon Sama Banjos”<sup>51</sup>

Tab VI. 1.-5. [vgl die Abb. im Loewenstern-Tagebuch]

1. “Asche” und “Spuck” (2 Behälter auf einem viereckigen Tablett)
2. (sechseckiger Holzkohlebrenner mit 2 Metallstäben zum Nachlegen von Holzkohle)
3. (Teekanne auf Stöfchen)
4. “Inikf Schwärze”
5. “Ingio Pettschaft” /

Tab VII.

1. [stellt ein viereckiges hölzernes Untergestell dar]
2. [stellt ein tragbares, rundes Teetablett mit Kanne und 2 Bechern dar] /

Tab VIII 1.-3.<sup>52</sup>

1. “Briefkästen *Fubako*” [länglicher Holzkasten für Schreibutensilien, durch zwei Bänder verschlossen]

---

<sup>51</sup> Der dargestellte Banjo (Namekata Kakusaemon – japanische Familiennamen stehen vor Eigennamen) im Kimono mit Pfeife in der linken und einem rundlichen Gegenstand (Uhr?) in der rechten Hand war, lt. Tagebuch vom japanischen Dolmetscher Nakayama Sakusaburo, verantwortlich für die Lieferung von Proviant an die Russen. Eine modernisierte japanische Transkription dieses Tagebuchs stellte mir freundlicherweise Prof. Hirakawa Arata von der Tohoku Universität zur Verfügung, aus der Dr. Demura Shun einige Passagen ins Deutsche übersetzte. Den Stempelabdruck von Namekata hat Tilesius in seinem Moskauer Skizzenbuch konserviert (s. Anmerkung 2, pag. 60).

<sup>52</sup> Vgl. die colorierten Abbildungen in Loewensterns Tagebuch II, 80, mit dessen Beschriftung “Schachteln wo die lackierten Sachen drin eingepackt waren”. Schon Thunberg hat ähnliche Motive in Illustrationen festgehalten und publiziert.

2. [Unterteil, innen japanisch beschrieben]
3. [mit einem Band mehrmals umwickelter Innenkasten mit japanischer Aufschrift]

Im Mühlhäuser Tagebuch (82/291) gibt es zudem verschiedene Addenda<sup>53</sup> und Einschübe, die aus dem chronologischen Kontext gerissen sind und sich auf den Aufenthalt in Japan beziehen. Eine davon (S. 236) lautet :<sup>54</sup>

“Atlas Erklärungen Utensilia Japonica  
tragbares Geräth zur Malzeit. Hako der Kästen und der  
runden Schale (Suribatsch) ist Misu, der Löffel dazu heißt  
Suriki Chibatschi ist der Reißkasten Chibasch sind die  
Freßstäbe Sakusi ist Zuckergebakenes oder allge  
meines Freßgeräth”

### 3. Bibliographie der Schriften von Tilesius (Prof. Sterba unter Mitwirkung von Erika Ebert)

#### Tilesius-Bibliographie (Literaturliste)<sup>55</sup>

Am Ende verschiedener Literaturangaben steht eine in Klammern gesetzte Zahl. Diese Zahl verweist auf die entsprechenden Positionen der Liste “Bemerkungen zur Tilesius-Bibliographie”, die der Literaturliste angefügt ist.

1. Tilesius, W.G. : Musae Paradisiaceae, quae nuper Lipsiae floruit, icones IV. S.1-16. Lipsiae ex officina Sommeria, 1792.
2. Tilesius, W.G. : Historia pathologica singularis cutis turpitudinis Io. Godofredi Reinhardi viri L. annorum (Von Johann Gottfried Rheinhardts Hautkrankheit), mit einem Vorwort von Chr.F. Ludwig. Lateinisch und deutsch, S.1-17, Tab.I-IV. Siegfried Lebrecht Crusius, Leipzig, 1793. (1)
3. Tilesius, W.G. : Nachtrag zur Berichtigung einzelner Ansichten in dem Gemälde von Lissabon und einzelne Fragmente eines Augenzeugen zur Kenntnis dieser Stadt hinzugefügt von W.G. Tilesius. In : Neuestes Gemälde von Lissabon (Übers. aus dem Französischen ohne Angabe des Autors). S. 321-504. Leipzig im Industrie Comptoir, 1799.

---

<sup>53</sup> Bei Sondermann “Tilesius und Japan (Teil 2)” (s. Anm. 1) findet sich die Transkription aus der Berliner Abschrift von Tilesius’ Tagebuch (S. 26f., Sontags den 28 April 1805). Im Mühlhäuser Tagebuch (82/298) gibt es einen ähnlich formulierten Text am Ende des Bandes pag. 256f. unter der Überschrift “Nachträge und vermischte Bemerkungen”.

<sup>54</sup> Auch hier gilt es zu bedenken, dass Thunberg in seinem Werk über Japan sowohl verschiedene kleine japanische Geräte wie am Schluß auch ein japanisches Glossar geliefert hatte. Tilesius notierte sich in seinen beiden Skizzenbüchern (s. Anm. 2) weitere japanische Vokabeln und zeichnete manche Gerätschaften ab.

<sup>55</sup> Diese Liste ist in ihrer ursprünglichen Form und Nummerierung belassen. Ein paar Ergänzungen wurden als Fußnoten hinzugefügt. Weitere Hinweise werden gern eingearbeitet.



4. Tilesius, W.G. : Vorläufige Nachricht von Dambergers Reise durch Africa, vom Vorgebirge der guten Hoffnung bis Marocco, in einem Auszuge, vom Hrn. D. Tilesius. In : Allg. Geogr. Ephemeriden, Bd. VI, 5. Stück, S.385-461(1800). (2)
5. Tilesius, W.G. : Verzeichniß und Bestimmung merkwürdiger Seeprodukte, welche in einer instructiven Ansicht zu microscopischen Untersuchung zubereitet, in natura ausgegeben werden. Erste Lieferung, S.1-8 (s.l., 1800) (3)
6. Tilesius, W.G. : Zergliederung des Tintenvurmes (*Sepia officinalis* Linn.). In : Beiträge für die Zergliederungskunst (Hrsg. Isenflamm, H.F. und Rosenmüller, J.C.), Bd.I, S.72-136, Tab.III. Karl Tauchnitz, Leipzig, 1800.
7. Tilesius, W.G. : Vergleichende Anatomie des Gehirns (Mitteilung Mag. encyclopédique par Millin No 4. premier Messidor. an.7.) In : Beiträge für die Zergliederungskunst (Hrsg. Isenflamm, H.F. und Rosenmüller, J.C.), Bd.I, S.137-142. Karl Tauchnitz, Leipzig, 1800.
8. Tilesius, W.G. : Ueber Gehirn und Nervensystem des Tintenvurmes (*Sepia officinalis* Linn.), welchem die Beschreibung und Abbildung des Gehörorgans bey dem Tintenvurm und Seepolypen von Scarpa, als ein neurographisches Bruchstück zum Grunde gelegt ist. In : Beiträge für die Zergliederungskunst (Hrsg. Isenflamm, H.F. und Rosenmüller, J.C.), Bd.I, S.204-206, Tab.II. Karl Tauchnitz, Leipzig, 1800.
9. Tilesius, W.G. : Ueber einen bisher noch nicht erörterten Nutzen des Keilbeins (ossis sphenoidei) im Knochenbau des Kopfes, nebst einer Rüge einer höchst schädlichen Gewohnheit, die Kinder am Kopf in die Höhe zu heben. In : Beiträge für die Zergliederungskunst (Hrsg. Isenflamm, H.F. und Rosenmüller, J.C.) Bd.I, S.337-371. Karl Tauchnitz, Leipzig, 1800. (4)
10. Tilesius, W.G. : Ueber den Zustand der Zergliederungskunst in Portugal. In : Beiträge für die Zergliederungskunst (Hrsg. Isenflamm, H.F. und Rosenmüller, J.C.), Bd.I, S.383-435. Karl Tauchnitz, Leipzig, 1800. (5)
11. Tilesius, W.G. : Bemerkungen über die Injection der lymphatischen Gefäße, vom Bürger Duméril, Vorsteher der anatomischen Uebungen an der medizinischen hohen Schule zu Paris, mit Anmerkungen und Zusätzen von W.G. Tilesius. In : Beiträge für die Zergliederungskunst (Hrsg. Isenflamm, H.F. und Rosenmüller, J.C.), Bd.2, S.65-86. Karl Tauchnitz, Leipzig, 1801.
12. Tilesius, W.G. : De respiratione Sepiae officinalis L., cum II tab. (Karl Friedrich Wilhelm Schmidt [Praes.] Dissertatio inauguralis physico philosoph.). p.1-88 [2 Tafeln, davon 1 gefaltet ] (4to). Breitkopf et Haertel, Lipsiae, 1801.
13. Tilesius, W.G. : De pathologia artis pictoriae plasticisque auxilio illustranda (Dissertatio inauguralis medica, praeside Ernest. Benj. Gottlieb Hebenstreit ...). p.1-28. Breitkopf et Haertel, Lipsiae, 1801.
14. Tilesius, W.G. : Ueber eine neue Methode, pathologische Gegenstände zu bearbeiten, in die Natur der Krankheiten tiefer einzudringen, und sie von allen Seiten näher zu beleuchten. In : Paradoxien, Bd.I, H.2., S.96-130 (1801). (6)

15. Tilesius, W.G. : Ueber die flechtenartigen Ausschläge. Ein Versuch zur näheren Bestimmung der chronischen Hautkrankheiten. In : Paradoxien, Bd.2, H.1, S.1-64, 1 col. Kupfertaf. (1802). (7)
16. Tilesius, W.G. : Ueber die sogenannten Seemäuse oder hornartigen Fischeyer nebst anatomisch-physiologischen Bemerkungen über die Fortpflanzungsweise der Rochen und Hayfische. S.IX-XXII Vorerinnerungen, anschl. S.1-171, mit 5 ausgemalten Abbildungen auf 2 Tafeln. Literarisches Comptoir, Altenburg, 1802. (8) S.1-71.
17. Tilesius, W.G. (Hrsg.) : Jahrbuch der Naturgeschichte zur Anzeige und Prüfung neuer Entdeckungen und Beobachtungen und zur Aufnahme solcher Beyträge, welche zur Erweiterung und Berichtigung der gesamten Naturgeschichte unmittelbar abzwecken. Bey C.W. Kuchler, Leipzig, 1802. (9)
18. Tilesius, W.G. : Untersuchung derjenigen Thiere, welche aller Wahrscheinlichkeit nach die Fabel von Sirenen oder Seemenschen veranlaßt haben. Übersetzung des Artikels : Recherches sur les animaux qui ont pu donner lieu de croire à l'existence des hommes marins. Mag. Encyclop. ou Journal des Sciences, des lettres et des arts, redigé par Millin. An. VI. No.6. prem. Thermidor. p.149-162. In : Jahrb. d. Naturgeschichte (Hrsg. Tilesius, W.G.), Bd.1, S.1-26. Kuchler, Leipzig, 1802.
19. Tilesius, W.G. : Der Chinesische Fischfänger ist nicht *Pelecanus piscator* L., auch nicht *Pelecanus Carbo* (Blumenb.Handb.). In : Jahrb. d. Naturgeschichte (Hrsg. Tilesius, W.G.), Bd.1, S.27-75, Taf.I, II. Kuchler, Leipzig, 1802.
20. Tilesius, W.G. : Abbildung und Beschreibung eines sonderbaren Seebeutels, oder einer neuen *Thetys-Species* aus dem Atlantischen Oceane. *Thetys vagina*. In : Jahrb. d. Naturgeschichte (Hrsg. Tilesius, W.G.), Bd.1, S.150-165, Taf.V, VI. Kuchler, Leipzig, 1802.
21. Tilesius, W.G. : Bemerkungen über einige Quallen oder Meergallerten (*Medusa* Linn.), welche sich am Tagus und an den Portugiesischen Seeufern finden. In : Jahrb. d. Naturgeschichte (Hrsg. Tilesius, W.G.), Bd. 1, S.166-178. Kuchler, Leipzig, 1802.<sup>56</sup>
22. Tilesius, W.G. : Beschreibung einer neuen *Chiton species* aus dem Tagus. *Chiton Lusitanicus*. In : Jahrbuch. d. Naturgeschichte (Hrsg. Tilesius, W.G.), Bd.1, S.213-221, Taf.VI. Kuchler, Leipzig, 1802.
23. Tilesius, W.G. : Ueber das Geschlecht der Meereicheln, der sogenannten Entenmuscheln, Seetulpen und Langhähse. (*Lepas* L.). In : Jahrb. d. Naturgeschichte (Hrsg. Tilesius, W.G.), Bd.1, S.222-419, Taf. VII, VIII. Kuchler, Leipzig, 1802.
- 23a. Tilesius, W.G. : Neueste Bereicherung und Berichtigung der Botanik durch Pallas. Beschreibung und Abbildung drey neuer Arten aus dem Geschlecht *Robinia*. 1) *Robinia jubata*. 2) *Robinia traganthoides*. 3) *Robinia microphylla*. In : Jahrb. d. Naturgeschichte zur Anzeige und Prüfung neuer Entdeckungen und Beobachtungen, (Hrsg. Tilesius, W.G.), Bd.1, S.433. Kuchler, Leipzig, 1802.
24. Tilesius, W.G. : Beschreibung eines zum Kalkgeschlechte gehörigen, bis jetzt noch unbekanntem Fossils, aus der Gegend des Thales von Alcantara, ohnweit Lissabon. In : Jahrb. d. Naturgeschichte (Hrsg. Tilesius,

---

<sup>56</sup> Kritisch referiert in Oken's *Isis* 1818, II. Band, Sp. 1461-1462.

W.G.), Bd.1, S.473-485. Kuchler, Leipzig, 1802.

25. Tilesius, W.G.: Ausführliche Beschreibung und Abbildung der beyden sogenannten Stachelschweinmenschen, aus der bekannten englischen Familie Lambert, oder the Porcupine-man. S.I-VI und 1-42, mit 2 gemahlten Tafeln. Literarisches Comptoir, Altenburg, 1802. (10)

26. Tilesius, W.G.: Ueber den Zustand der Entbindungskunst in Portugal. In: Paradoxien - Zeitschr. für d. Kritik wichtiger Meinungen u. Lehrsätze aus allen Fächern d. theoretischen u. practischen Medicin. Leipzig, 1801, Bd.3, H.1, S.29-76 (1803).

27. Tilesius, W.G.: Ausführliche Geschichte eines böartigen Faulfiebers mit brandiger Zerstörung der Milz. In: Med. Korrespondenzblatt (Anlage d. Allg. med. Annalen), Februar 1803, Sp.17-29 (1803).

28. Tilesius, W.G.: Vorläufige Nachricht von einem außerordentlich dicken Kinde. In: Mag. f. d. neuesten Zustand d. Naturk. (Voigt's Mag.), Bd.V, S.289-300 u. 363-364, Taf.IX (1803)

29. Tilesius, W.G.: Reflexionen und Bemerkungen über ein, im eigentlichsten Sinne des Wortes, im Fette ersticktes Kind. In: Mag. f. d. neuesten Zustand d. Naturk. (Voigt's Mag.), Bd.V, S.408-414 (1803).

30. Tilesius, W.G.: Nachricht von einem ungewöhnlich fetten Kinde von 4 Jahren, mit einem seltenen Haarwuchs. In: Med. Korrespondenzblatt (Anlage d. Allg. med. Annalen), Mai 1803, Sp.65-67 (1803).

31. Tilesius, W.G.: Nachricht von der Leichenöffnung eines ungewöhnlich dicken und im eigentlichen Sinne des Wortes im Fette erstickten Kindes, als ergänzender Nachtrag der im vorigen Maistücke gelieferten Geschichte eines ungewöhnlich fetten und bereits mit Schamhaaren versehenen vierjährigen Kindes. In: Med. Korrespondenzblatt (Anlage d. Allg. med. Annalen), August 1803, Sp.126-128 (1803).

32. Tilesius, W.G.: Zwey verschiedene Species (Spongia villosa und ocellata) in einem Röhrenschwamme vereinigt (Aus der Langguthischen Sammlung). In: Mag. f. d. neuesten Zustand d. Naturk. (Voigt's Mag.), Bd.VI, S.277-288, 288-296, Taf.VII (1803).

33. Tilesius, W.G.: Bachia, oder Kamtschadalischer Bärenanz, Nationalmusik und Tanz und das Menschenfresser-Lied der Marquesas-Insulaner auf Nukahiwah, ein Nationalgesang. In: Allg. musikalische Zeitung, 7.Jg., Nr.17, S.261-271 (1805). (11)

34. Tilesius, W.G.: Einige Bemerkungen aus Japan von Herrn Hofrath Tilesius (Aus einem Briefe desselben an Hrn. Hofrath Goldbach in Moskau, und Herrn Dr. Rosenmüller in Leipzig). In: Georgia oder der Mensch im Leben und im Staate (Kilian's Georgia), Jg.1806, No. 96 (Sp. 757-760), No.103 (Sp. 819-820), No.104 (Sp. 821-826 und Kupfer).

35. Tilesius, W.G.: Fernere Nachrichten von den neuen Marquesas Inseln und deren Bewohner (Aus einem Briefe des Hrn. Hofraths Tilesius aus Kamtschatka, vom 9.Jun. 1805). In: Mag. f. d. neuesten Zustand d. Naturk. (Voigt's Mag.), Bd.XII, S.492-498, Taf.VI, Fig.3 und S.498-499, Taf.VI, Fig.1,2 (1806).

36. Tilesius, W.G.: Naturhistorische Bemerkungen aus Kamtschatka. Dergleichen aus Segalien, (Tschoka) und Japan. Dergleichen aus Japan. Ueber das Leuchten der See (Aus einem andern Briefe, auch von Kam-

- tschatka vom 24.Sept. 1805). In : Mag. f. d. neuesten Zustand d. Naturk. (Voigt's Mag.), Bd.XII, S. 500-505 (1806).
37. (Tilesius, W.G.) : Bestimmung eines neuen Geschlechts der Mollusken (Nereus), und einiger neuen Gattungen des Medusengeschlechts. In : Göttingische gelehrte Anzeigen, Jg. 1808, Bd.III, S.1441-1443. (12)
38. Tilesius, W.G. : Dessin et Description d'une variété d'alcyon arborescent d'un rouge vermillon. In : Mém. de la Soc. Imp. des Naturalistes de Moscou, T.II, p.147-172, Tab.IX, X (1809).
39. Tilesius, W.G. : Description de quelques poissons observés pendant son voyage autour du monde. In : Mém. de la Soc. Imp. des Naturalistes de Moscou, T.II, p.212-249, Tab.XIII-XVII (1809).
40. Tilesius, W.G. : Nachricht von einigen Brasilischen Amphibien, nebst der Beschreibung und Abbildung von der gehörnten Kröte (*Rana cornuta* Lin.). In : Mag. d. Ges. d. naturf. Freunde zu Berlin, Jg.III, S.83-94, Taf.III (1809).
41. Tilesius, W.G. : Über die Melonenquallen als ein Versuch einer Monographie zur genaueren Kenntnis der Mollusken. Erste Lieferung. In : Mag. d. Ges. d. naturf. Freunde zu Berlin, Jg.III, S.143-157 (1809). (13)
42. Tilesius, W.G. : De nova Actiniarum specie gigantea Kamtschatica. In : Mém. Acad. Imp. des Sciences Pétersbourg, T.I, p.388-422, Tab.XIV : 1, XV : 1,4,5 (1809).
43. Tilesius, W.G. : Piscium camtschaticorum "Terpuck" et "Wachnja". Descriptiones et icones. In : Mém. Acad. Imp. des Sciences Pétersbourg, T.II, p.335-375, Tab.XV-XX (1810).
44. Tilesius, W.G. : Piscium camtschaticorum, Descriptiones et Icones. In : Mém. Acad. Imp. des Sciences Pétersbourg, T.III, p.225-285, Tab.VIII-XIII (1811).
45. Tilesius, W.G. : Abbildungen und Beschreibungen einiger Fische aus Japan und einiger Mollusken aus Brasilien, welche bey Gelegenheit der ersten Russ. Kaiserl. Erdumseglung lebendig beobachtet wurden. In : Denkschriften der Königl. Akad. d. Wiss. zu München, Jg.1811/1812, Classe Math. Nat., S.71-88, Taf. II-IV.
46. Tilesius, W.G. : Abbildungen und Beschreibungen einiger Fische aus Japan und einiger Mollusken aus Brasilien, welche bey Gelegenheit der Russisch-Kaiserlichen Erdumseglung lebendig beobachtet wurden. (G.St. : Fortsetzung von 45.). In : Denkschr. Königl. Akad. d. Wiss.zu München, Jg.1813, Classe Math.Nat., S.31-50, Taf.III-V. (14)
47. Tilesius, W.G. : Naturhistorische Früchte der ersten kaiserlich-russischen unter dem Kommando des Herrn v. Krusenstern glücklich vollbrachten Erdumseglung, gesammelt von Dr. Tilesius, Naturalisten der Expedition. Mit kolorierten Kupfern. Schnorr, St.Petersburg, 1813. [130 S., [5] gef. Bl. : III.] (15)
48. Tilesius, W.G. : Ueber die Seeblasen. In : Naturhistorische Früchte der ersten kaiserlich-russischen un-ter dem Kommando des Herrn v. Krusenstern glücklich vollbrachten Erdumseglung (Ed. Tilesius, W.G.),

S.1-108, Taf.I und II. Schnorr, St.Petersburg, 1813. (16)

49. Tilesius, W.G. : Bemerkungen über den Jocko oder Orang-Outang von Borneo, oder den ostindischen Waldteufel (*Simia Satyrus* L.). In : Naturhistorische Früchte der ersten kaiserlich-russischen unter dem Kommando des Herrn v.Krusenstern glücklich vollbrachten Erdumseglung (Ed. Tilesius, W.G.), S.109-130, Taf.III und IV. Schnorr, St.Petersburg, 1813. (16)

50. Tilesius, W.G. : Iconum et descriptionum piscium camtschaticorum, continuatio tertia. Tentamen Monographiae generis *Agoni Blochiani* sistens. In : Mém. Acad. Imp. des Sciences de Pétersbourg, T.IV, p.406-478, Tab.XI-XVI (1813).

51. Tilesius, W.G. : Granskning Af Djurslägtet *Physosphora* och af dess hittils kände Arter, samt Beskrifning pa en ny Art af samma Slägte. In : Kongl. Vetenskaps Academiens Handlingar (1814) St.II., S.178-188, Tab. VIII A.B.

52. Tilesius, W.G. : Über das Leuchten der Weichtiere. In : Annal. Wetterauischen Gesellsch. f. d. gesamte Naturkunde, Bd.III, S.360-372 (1814). (17)

53. Tilesius, W.G. : *Cheirostemon platanoides humboldi* [ob mirabilem interioris corollae structuram denuo pictum et descriptum]. In : Mém. Acad. Imp. des Sciences de Pétersbourg, T.V, p.321-330, Tab.IX (1815).

54. Tilesius, W.G. : De cancris camtschaticis oniscis, entomotraxis et cancellis marinis microscopicis noctilucentibus [cum appendice de acaris et ricinis Camtschaticis]. In : Mém. Acad. Imp. des Sciences de Pétersbourg, T.V, p.331-405, Tab.V-VIII (1815).

55. Tilesius, W.G. : De skeleto mammonteo sibirico ad maris glacialis littora anno 1797, effoso, cui praemissae elephantini generis specierum distinctiones. In : Mém. Acad. Imp. des Sciences de Pétersbourg, T.V, p.406-513, Tab.X, XI (1815). [S. 409-11 dt. Anmerkung von Klaproth]

56. Tilesius, W.G. : Additamentum ad *Cheirostemon*. In : Mém. Acad. Imp. des Sciences de Pétersbourg, T.V, p.579-582 (1815).

57. Tilesius, W.G. : De nova medusarum specie. In : Mém. Acad. Imp. des Sciences de Pétersbourg, T.VI, p. 550-564, Tab.XVIII (1818).

58. Tilesius, W.G. : Über das nächtliche Leuchten des Meerwassers. In : Annal. Wetterauischen Gesellsch. f. d. gesamte Naturkunde, Bd.IV, S.1-10, Taf.XXI a,b (1819). (18)

59. Tilesius, W.G. : Anmerkungen des Hofraths Tilesius. In : Annalen der Physik, Bd. 61, S.320-330 (1819). (19) [zu : Macartney „Beobachtungen über leuchtende Tiere. Deutsch von L.W. Gilbert. Mit berichtigenden Anmerk. v. (W.G.) Tilesius]

60. Tilesius, W.G. : Anhang brieflicher Nachträge zum vorigen Stück (Leuchten von Augen, Fischlaich und Seesternchen ; vorgebliches Meeresleuchten ohne Thiere.). In : Annalen der Physik, Bd. 61, S.330-334 (1819). (19)

61. Tilesius, W.G. : On the Mammoth or Fossil Elephant, found in the ice at the mouth of river Lena, in Siberia. With a lithographic plate of the skeleton. (Translated and abridged from the fifth volume of *Memoirs of the Imperial Academy of Sciences of St.Petersburg*). A lithographic plate of the American Mammoth is inserted. London, 1819.
62. Tilesius, W.G. : De piscium australium novo genere icone illustrato. In : *Mém. Acad. Imp. des Sciences de Pétersbourg*, T.VII, p.301-310, Tab.IX (1820).
63. Tilesius, W.G. : De geckone australi argyropode, nec non de generum naturalium in zoologia systematica dignata tuenda, atque de Geckonibus in genere. In : *Mém. Acad. Imp. des Sciences de Pétersbourg*, T.VII, p.311-358, Tab.X, XI (1820).
64. Tilesius, W.G. : Additamenta conchyliologica ad zoographiam Rosso-Asiaticam. Specimen primum. In : *Mém. Acad. Imp. des Sciences de Pétersbourg*, T.VIII, p.293-302, Tab.IX (1822).
65. Tilesius, W.G. : Naturgeschichte des Eisfuchses, des kaukasischen Schakals und des Kerssakfuchses. Mit 3 Kupfertafeln. In : *Nova Acta physico-medica Acad. Leopoldina Carol.*, T.XI [Bonn : Weber], Pars II, S.374-410, Taf. XLVII-XLIX (1823). (20)
66. Tilesius, W.G. : Die Wirkung des Blitzes auf den menschlichen Körper, durch einen merkwürdigen Fall erläutert. In : *Jahrb. d. Chemie u. Physik*, Bd.IX, 2.H., S.129-138, Taf.III (1823). (20)
67. Tilesius, W.G. : Über die Wirkung des Blitzes oder Meteorfeuers auf vegetabilische Körper. In : *Jahrb. d. Chemie u. Physik*, Bd.IX, S.138-141 (1823).
68. Tilesius, W.G. : De Aegocerote Argalide Pallasii, ovis domesticae matre, brevis disquisitio. Mit einer Tafel. In : *Nova Acta Acad. Leopoldina Carol.*, T.XII, Pars I, p.279-290, Tab.XXIII (1824).
69. Tilesius, W.G. : De chitone giganteo Camtschatico. Additamentum ad Zoographiam Rosso-Asiaticam. In : *Mém. Acad. Imp. des Sciences de Pétersbourg*, T.IX, p.473-484, Tab.XVI, XVII (1824).
70. Tilesius, W.G. : Lebensbeschreibung eines frommen Arztes des Herrn Doctor C.G. Altenburg. S.1-32. G.Danner, Mühlhausen (1826).
71. Tilesius, W.G. : Naturhistorische Abhandlungen und Erläuterungen besonders die Petrefactenkunde betreffend. 8 Steindrucktafeln. Joh. Christian Krieger u.Co, Cassel, 1826. (21)
72. Tilesius, W.G. : Le plus petit volcan du globe, c'est à dire sur la petite isle de Coosima situé dans l'archipel du Japon près du Cap Sangar. In : *Mém. Acad. Imp. des Sciences de Petersbourg*, T.X, p.309-321, Tab.XVI-XIX (1826).<sup>57</sup>
73. Tilesius, W.G. : De Corallio singulari maris orientalis, ejusque, organo lapidifico. Addidamentum ad

---

<sup>57</sup> In den *Neuen Allgemeinen Geographischen und Statistischen Ephemeriden* 1828, 24. Bd.,15.St. S. 449-457 (Abhdlg.) "Die Insel Ko-sima, oder der kleinste Vulcan der Erde. (Aus den *Nouvelles Annales des Voyages*, Februar 1828.) Klaproth." Vgl. diesen Artikel auf Englisch in *The Edinburgh philosophical journal* vol. 3 (1820) S. 349-357 und plate XI. Fig. 1-4.

zoographiam Rosso-Asiaticam. In : *Mém. Acad. Imp. des Sciences de Pétersbourg*, T.X, p.322-332, Tab.XX (1826).

74. Tilesius, W.G. : Ueber das gesellschaftliche Leben der Papous-Insulaner. In : *Jahrbücher der Geschichte und Staatskunst*, Jg. 1828, Februar Heft, S.156-176. (22)

75. Tilesius, W.G. : Ueber den Ursprung des bürgerlichen Lebens und der Staatsform in den Südsee-Inseln, und zwar auf der Insel Nucka-hiwah, einer der Washington-Inseln. In : *Jahrbücher der Geschichte und Staatskunst*, Jg. 1828, Mai Heft, S.133-168, 1 lith. Taf. (22)

76. Tilesius, W.G. : Ueber den Grund der Hieroglyphen oder der Ursachen des sinnbildlichen Ausdrucks der Völker in ihrer Kindheit und der Südsee-Insulaner. In : *Jahrbücher der Geschichte und Staatskunst*, Jg. 1829, August Heft, S.181-186. (22)

77. Tilesius, W.G. : Von den Bestandteilen und den davon abhängigen Heilkräften der aus dem Meere gezogenen Arzneimitteln (*Officinalia marina*). In : *Arch. d. Apothekervereins im nördl. Teutschland* (Brandes Archiv), Bd.31, S.1-53, Taf.I (1829). (23)

78. Tilesius, W.G. : Nachtrag zu meiner Abhandlung über die Heilkräfte der Seekörper, namentlich des Wurmmoses. In : *Arch. d. Apothekervereins im nördl. Teutschland* (Brandes Archiv), Bd.31, S.53-61 (1829).

79. Tilesius, W.G. : Über den Nutzen der kohlen-sauren Getränke für Gesunde und Kranke zur See und zu Lande, besonders an heißen Sommertagen u. in heißen Climates. In : *Arch. d. Apothekervereins im nördl. Teutschland* (hrsg. v. Rudolph Brandes, Brandes Archiv), Bd.34, S.321-350 (1830).

80. Tilesius, W.G. : Über die Cholera und die kräftigsten Mittel dagegen, nebst Vorschlag eines großen Ableitungsmittels, um die Krankheit in der Geburt zu ersticken. S.I-VIII und 1-200. Johann Leonhard Schrag, Nürnberg 1830. (24)

81. Tilesius, W.G. : Neueste ableitende Behandlungsart der krampfartigen Cholera asiatica. Mit Abbildungen der Instrumenta discussoria der Orientalischen Nationen. Nebst einer Abhandlung von J. Mouat, Esq. Med. Doct., über die Cholera morbus, welche 1828 zu Berhampore in Indien beim 14ten engl. Regimente geherrscht hat. Aus den *Calcutta Transact.* Vol.IV. 1829, übersetzt und mit Anmerkungen begleitet. Dyk'sche Buchhandlung, Leipzig, 1831. [1 gef. lith. Taf., XII, 244 S.]

82. Tilesius, W.G. : Über die Arzneimitteln, welche in den Apotheken eines Landes, welches so unglücklich ist, von der Cholera asiatica heimgesucht zu werden, besonders frisch und kräftig vorhanden seyn müssen. In : *Arch. d. Apothekervereins im nördl. Teutschland* (Brandes Archiv), Bd.37, H.2 (1831).

83. Tilesius, W.G. : Beiträge zur Naturgeschichte der Medusen. I. Cassiopeae. Mit 5 Steindrucktafeln. In : *Nova Acta Acad. Leopoldina Carol.*, T. XV, Pars II, S.247-288, Taf. LXIX-LXXIII (1831).<sup>58</sup>

---

<sup>58</sup> Sonderdruck aus den *Nova acta Academiae caesareae Leopoldino-Carolinae germanicae naturae curiosorum* Bd. 15, 1831. - Bei der Akademie eingegangen im Junius 1829.

84. Tilesius, W.G. : Ueber die Wohltätigkeit und Schädlichkeit heftiger Nerveneindrücke auf empfindliche Körper. In : Allg. Med. Zeitung, Jg.1833, Nr.75, Sp.1185-1190.
85. Tilesius, W.G. : Interessante Beobachtung von Pokken bei einer Syphilitischen. In : Allg. Med. Zeitung, Jg. 1834, Nr.11, Sp.161-164.
86. Tilesius, W.G. : Ueber den schädlichen und nützlichen Einfluß geistiger Eindrücke auf den Körper und gegenseitig körperlicher auf den Geist. In : Allg. Med. Zeitung, Jg.1834, Nr.18, Sp.273-280 und Nr.19, Sp.289-297.
87. Tilesius, W.G. : Heilkräfte des Phosphors oder der Phosphor als Arzneimittel in einer ganz neuen Gestalt, nebst Erwähnung seiner frühern Anwendung gegen Krankheiten. In : Arch. d. Pharmacie, II.Reihe, Bd.VII, H.2, S.1-36 (1836).
88. Tilesius, W.G. : Ueber das ganze Linnéische Genus Sepia. In : Abhandlungen d. naturf. Gesellsch. zu Görlitz, Bd.II, H.1, S.39-67, 1 Steindrucktafel (1836).
89. Tilesius, W.G. : Oniscus suffocator, eine neue Species aus Japan. In : Abhandlungen d. naturf. Gesellsch. zu Görlitz, Bd.IV, H.1, S.15-24 (1844).
90. Tilesius, W.G. : Über Rosenmüller's Höhlenbär. In : Neues Lausitzisches Mag., Bd.23, S.134-147, Taf.III, IV (1846). (25)

**Veröffentlichungen an denen Tilesius beteiligt ist.**

91. Hedwig, R.A. et Tilesius, W.G. : Disquisitio ampullarum Lieberkühnii, physico-microscopica. Sectio prima / (Cum IV tabulis aeneis) / quam / in augusta literarum academia / Lipsiensi / ... proposuit Romanus Adolph Hedwig / Libb. Artt. Mag. et Med. Bacc. / adsumto socio Guilielmo Theophilo Tilesio ... Medicin. Baccal./ Apud Johannem Ambrosium Barth / Lipsiae : apud Johannem Ambrosium Barth [1797] 29 S. : Taf. [S. 32]. [Lieberkühn, Joh. Nath. (1711-1756) und Hedwig, Romanus Adolf (1772-1806)]
92. Rosenmüller, J.C. und Tilesius, W.G. : Beschreibung merkwürdiger Höhlen. Ein Beitrag zur physikalischen Geschichte der Erde. Bd.1 (1799) mit 10 Kupfern, Bd.2 (1805) mit 8 Kupfern. Breitkopf und Härtel, Leipzig, 1799 und 1805. (26)
93. Martens, F.H. : Icones symptomatum veneri morbi ad naturam delineavit aeri incidit atque publici juris fecit Franciscus Henricus Martens. Assumpto in delineandis tabulis socio Guillermo Theophilo Tilesius. Baumgaertner Lipsiae, 1804. (27)
94. Krusenstern, A.J. von : Atlas zur Reise um die Welt unternommen auf Befehl Seiner Kaiserlichen Majestät Alexander des Ersten auf den Schiffen Nadesha und Newa unter dem Commando des Capitains von Krusenstern. St.Petersburg, 1814. (28)
95. Pallas, P.S. : Zoographia Rosso-Asiatica. 3 Bände. Petropoli in Officina Caes. Acad. Scient., MDCCCXXXI. (29)



96. Pierer, J.F. (Hrsg.): Medizinisches Realwörterbuch. Abth. I Anat. u. Physiol. Leipzig u. Altenburg 1816-1829. (30)

**Tilesius' Liste von Rezensionen in den *Göttingischen gelehrten Anzeigen* (31)**

- (1) Gutmachung der Nutzholzer. 1816. 14. Dez (.) Nr.200
- (2) Treviranus Abhand.anat (.) u.phys (.) ebendasselbst 1994
- (3) Risso Crustacees de Nice p. 252. 1817. 15. Febr. 26.
- (4) Captn. Lewis source of Missouri 1817. 2 (.) Jan (,) No.1
- (5) Linnean Society Transact. 1817. 10 (.) May (,) No.75. 737
- (6) Osianders Salzburg Reise 1817. 5 (.) Jul. No (.) 107
- (7) Krusenst. praes. über O (.) Kotzebus R. 1817 (.) 21. Jul (.) N (.) 116.
- (8) Kohlwes ThierArzneik. ebendasselbst 1159.
- (9) Treviranus Arachniden 1718. 26 (.) Jul. No 119
- (10) Osiander Paracelsus Schädel et 1817.18 (.) Aug (.) N 132
- (11) Peron Reise Freycinet. 1817 23. Aug. No 135
- (12) Behartes Mädchen p 1352 p 1441 No 145
- (13) Die 4 Pferde auf dem SMarc Platz in Venedig 1817 11 (.) Sept
- (14) Agardh algarum Decas IV ebendasselbst p. 1445
- (15) Linnean Society transact.XI 1817-6 (.) Dec (.) No 194
- (16) Henning pathol. of Scrofula 1818 23 (.) Mart. No 48
- (17) Noehden über die Nordpol Reisen der Engl. 1818 18 (.) April 62
- (18) Bateman Willans Hautkrankh. ebendasselbst 612
- (19) Martens Alliancetractate 1818 2 (.) May. No 70. 689
- [x] Upsala nova act Soc reg. VII ebendasselbst 692
- [x] (20) – „ – contin. 1818 2 (.) May No 71. p. 697

- [x] – „ – contin. 1818 4 (.) May No 72 p. 713
- (21) Treviranus Vermischte Schriften, II. 1818 4 (.) Juni Nr.89. 881
- (22) Alibert Nosologie (?) 1818 16 (.) Jul (.) No 113.114 : p.1121
- (23) Oeuvres d'Euclide ebendasselbst p. 1133
- (24) Meyer flora Essequiboensis 1819 30 (.) Januar N17. 161
- [x] (25) Münchner Denkschriften für 1813 d Acad. 1819 27.May.
- [x] (25) Münchner Denkschriften 1813 29 May No 86 849
- [x] (26) Schmidt Conchylien Gotha 1819 8.November 179 [S.1785-1792]
- [x 1819, 185. St., S.1841-1848 Rez. zu den „Neuen Schriften d.Naturf. Ges. Halle“ 3. Bd.]
- (27) Alibert precis malad de la peau 1820 15 Januar
- (28) Visconti vasi sepolcrali ebendasselbst 85
- (29) Handelsrecht ebendasselbst 87
- (30) Philos. Transact. 1817. I.II. 1820 2. Mart p. 359
- (31) Chladni acoustic 1820 April 27. Na 68 p. 673
- (32) Albrecht Dürer und sein Zeitalter ebendas. p. 677
- (33) Linnean Soc. Transact. 1820 6 (.) May, Nr.74 p. 729
- (34) Crichtons Mineraliensammlung ebendas. p. 742
- (35) Wernerian Society Mem II. part II. 1820 15 (.) May No 79 p. 785
- [x] (36) Galees fumigation sulfurceuses 1820 5. Aug. No 126 p. 1249
- (37) American register lit.et polit. 1820 ebendas. 1260
- (38) Ross nord Reise 1820 14 (.) Sept. No 148 p. 1473
- [x] (39) Nilson ornithologie 1820 Dez (.) 25. No 207. p. 2067
- (40) Noehdens Nachricht von Parrys Reise 1821 febr (.) 19 Nr.29. p. 281.

- (41) Amalthea Boettigers Kunst Museum ebendas. p. 284
- (42) Prinz Max v. Neuwied Brasil. Pflanzen 1821 5 (.) May No 72. 705
- (43) Herrmann ad hist. Erfurtensem ebendaselbst 719
- (44) Prinz Max v. Neuwied Reise nach Brasil 1821 18. Juni No 97
- (45) Ruhl Kirchen Paläste u. Klöster I. ebendas. 967
- (46) Dalby u. Mudge Engl. geogr. Vermeß. (?) 1821 23. Juni 977
- (47) Krusenstern Hydrograph. Leipz (.,) Kummer 1821 ebendas. 980
- (48) Pierre Camper Skelettes des Cetacees 1821 9. Juli 1081
- (49) Tittmans deutscher Bund ebendas. pag. 1088

**Bislang nicht gefundene Schriften von Tilesius. (32)**

97. Tilesius, W.G. : Doctor T.G.W. : Von der Hartleibigkeit und Verstopfung, von den Krankheiten, die daraus entspringen, und von den Mitteln diese zu verhüten, und eine gesunde Verdauung und Ausleerung zu erhalten / v. T.G.W.. Nebst der Beschreibung u. Abbildung einer neu erfundenen Motionssäge, eines Stubenpferdes und eines Gesundheits-Nachtstuhls v. Br. in Leipzig. Leipzig : Baumgärtner, [1804]<sup>59</sup>
98. Ueber die Heilkräfte der Schwefelleber und über den Nutzen der hepatischen Bäder oder der Schwefelleberlauge zum äußerlichen Gebrauche. In : Pierers med. Annalen?

**Bemerkungen zur Tilesiusbibliographie**

Von den zahlreichen Rezensionen über Tilesius-Publikationen wurden nur solche berücksichtigt, die besonders informativ bzw. umfangreich sind. In Klammern stehende Zahlen, denen ein B vorangestellt ist, beziehen sich auf die einschlägigen Positionen der Autographenliste "Tilesius : Briefe und Dokumente".

- (1) Tilesius wird nur im Vorwort als Autor genannt.
- (2) Stilistische und kürzende Bearbeitung eines von Damberger (Tischlergeselle aus Wittenberg) eingereichten Manuskriptes und Vorwort dazu.<sup>60</sup>
- (3) Auf eigene Kosten gedruckt.

---

<sup>59</sup> Das Werk ist inzwischen nachgewiesen in der UB München, UB Leipzig, der TUUB und der LB Meckl.-Vorpommern.

<sup>60</sup> Es handelt sich um einen fiktiven Reisebericht mit der Nachschrift des zweifelnden Herausgebers Tilesius auf den S. 459-461 ; vgl. etwa die Rez. in der *Allgemeinen Literatur-Zeitung* 1801 No. 7 und No. 8, Sp. 49-56 und 57-62.

- (4) Rezension in : Allg. med. Annalen, Jg.1801, Spalte 31.<sup>61</sup>
- (5) Ausführliche Rezension in : Allg. med. Annalen, Jg.1801, Spalte 225-236. Die Rezension gibt den Artikel gekürzt wieder. Berücksichtigt sind vor allem die medizinisch relevanten Abschnitte.
- (6) Rezension in : Med.-chirurg.Zeitung, Jg.1803, 1.Bd., S.133-134.
- (7) Die Publikation erschien auch als Sonderdruck mit einem zusätzlichen Schmucktitelblatt "Theorie der flechtenartigen Ausschläge, ein Versuch zur nähern Bestimmung der chronischen Hautkrankheiten. Mit Kupfern." J.C. Hinrichs, Leipzig 1802. Ausführliche Rezension in : Med.-chirurg. Zeitung, Jg.1803, 1.Bd., S.17-21.
- (8) Rezension in : Göttingische gelehrte Anzeigen, Jg. 1803, Bd.II, S.822-823.
- (9) Publiziert wurde nur 1 Jahrgang. In einer eigenen bibliogr. Zusammenstellung (Autograph : Staatsb. Preuss. Kulturbesitz, Handschriftenabt. Sign. : Wilh.Gottl. Tilesius v. Tilenau. Slg. Darmst. Weltreisen ; acc. Darmst. 1920. 405 : Blatt 35-37) schreibt Tilesius 1844 dazu : "... der Verleger starb, daher sind die folgenden Jahrgänge nicht gedruckt worden, obgleich sie wichtigere Beiträge enthalten als der erste." Diese Angabe ist typisch tilesianisch. Rezension in : Leipziger Literatur Zeitung, Bd.2, Spalte 821-822 (1802).
- (10) Ausführliche Rezensionen in : Mag. f. d. neuesten Zustand d. Naturk. (Voigt's Mag.), Bd.IV, S.422-432, Taf. V u. VI (1802). - Allg.med. Annalen, Jg.1802, Spalte 15-36. - Leipziger Literatur Zeitung, Bd.2, Spalte 822-824 (1802).
- (11) Zusammengestellt und redigiert von Friedrich Rochlitz. Als Quellen dienten Noten und Briefe, die Tilesius von St. Peter-Pauls-Hafen in Kamtschatka am Tage der Abreise nach Japan an seine Freunde in Leipzig geschickt hatte.
- (12) Vorankündigung einer von Tilesius eingereichten Abhandlung, erweitert durch kurze Angaben über Nereus hydrachna, N. hydraster, Medusa saltatrix und M. saccata. Die Abhandlung selbst ist vermutlich nicht gedruckt worden.
- (13) Die Abhandlung schließt mit dem Hinweis "Die Fortsetzung folgt", jedoch wurde diese Absicht nicht realisiert.
- (14) Rezension in : Göttingische gelehrte Anzeigen, Jg. 1819, Bd.II, S.839-841.
- (15) Unter diesem Titel separierte und publizierte Tilesius auf eigene Kosten die naturw. und medicin. Beiträge des 3. Teiles (Bandes) des von v. Krusenstern herausgegebenen Reisewerkes : Reise um die Welt in den Jahren 1803, 1804, 1805 und 1806 auf Befehl Sr. Kaiserl. Majestät Alexander des I. auf den Schiffen Nadeshda und Neva unter dem Commando des Cap. von der kaiserl. Marine A.J. von Krusenstern. St. Petersburg, 1810-1812.<sup>62</sup>

<sup>61</sup> Nachdruck des Tilesius-Artikels in : *Oldenburgische Zeitschrift*. Hrsg. v. Gerhard Anton von Halem und Gerhard Anton Gramberg. Band 2. Heft 6. 1805.

<sup>62</sup> Sonderdruck der Abhandlungen von Tilesius :  
- Ueber die Seebblasen, ein räthselhaftes Thiergeschlecht, welches auch unter dem Namen : Galere, Fregatte, the

- (16) Auch im dritten Teil des Reisewerkes von A.J. v. Krusenstern (siehe voranstehende Bemerkung). Rezension in : Göttingische gelehrte Anzeigen, Jg.1814, Bd.II, S.993-995.
- (17) Die zu der Abhandlung gehörenden Tafeln sind im Bd. IV als Taf. XXa und XXb publiziert. Die am Ende der Abhandlung avisierte Fortsetzung erschien erst 1819 im Bd. IV.
- (18) Mit Band IV wird die Zeitschrift als "Neue Annalen der Wetterauischen Gesellschaft für die gesamte Naturkunde" bezeichnet und mit Bd. I begonnen. Bd.IV (alte Bez.) = Bd.I (neue Bez.).
- (19) Im Band 61 der *Annalen der Physik* stellt Gilbert in mehreren Kapiteln die Beobachtungen von J. Marcartney und W.G. Tilesius zum Thema "Leuchtende Tiere" vor. Dabei stützt er sich hinsichtlich Tilesius vor allem auf dessen Publikationen und Briefe. Tilesius selbst liefert zu den sehr ausführlichen Gilbert'schen Texten nur ergänzende oder berichtigende Anmerkungen. Die unter Nr. 59 und Nr. 60 der vorliegenden Tilesius-Bibliographie aufgeführten Beiträge schließen das Thema aus tilesianischem Blickwinkel ab.
- (20) Druckfehler im Titel. Statt Kerssak ... muss es Korssak heißen.
- (21) Fälschlich erschienen unter A. von Tilesius. Siehe dazu ausführliche Rezension von Schwägrichen in : Leipziger Literatur Zeitung, Jg.1830, No.307, Spalte 2449-2453.
- (22) Tilesius war lt. Vertrag vom 7.8.1827 (UB-Leipzig, Handschriftenabt. Nachlaß 240 : 6 ; Hinrich'sche Buchh.) Mitarbeiter der Zeitschrift. Schon am 6.3. 1828 beschwert er sich beim Redakteur über die Einschränkung seiner Beiträge (Autograph : SPK-wie oben (9)- ; acc. Darmst. 1920. 299 : Blatt 52). Dabei spielt auch die Befürchtung eine Rolle, daß ihm die "Entdeckung" der Bilderschrift der Tätowierung von dem engl. Kapitän Thomas Manby streitig gemacht werden könnte.<sup>63</sup>
- (23) Der 31. Band dieser Zeitschrift ist laut Titelblatt Tilesius gewidmet.
- (24) Von der Korrespondenz zu dieser Abhandlung sind 11 Schriftstücke erhalten (Autographen : Bayr. Staatsbibliothek München, Handschriftenabt. Sign. : Schragiana I (1, 2, ...bis 11). Im wesentlichen geht es dort um einen 2. Band, dessen Manuskript Tilesius im April 1831 beendete. Bei Schrag in Nürnberg ist jedoch kein 2. Band erschienen. Aus verschiedenen Einzelheiten läßt sich schließen, daß dieser 2. Band jener Abhandlung entspricht, die 1831 in Leipzig bei der Dyk'schen Buchhandlung verlegt wurde (siehe Nr. 81 dieser Liste).
- (25) Tilesius hat fast alle in seinen Abhandlungen publizierten Tafeln selbst entworfen, gezeichnet und, soweit dies Kupfer betrifft, zum Teil selbst gestochen. Dies gilt auch für die Steindrucktafeln seiner letzten Abhandlung. Tafel III (5 Teilfiguren) ist signiert mit "Dr. Tilesius v.T.ad nat. delineavit", Tafel IV (6 Teilfiguren) mit "Dr. Tilesius ad nat. delineavit Lipsiae 1845".

---

portuguese man of war, Besandjes und Bydewind-Seglare unter den Seeleuten bekannt ist ; in mehrern Bruchstücken gesammelt vom Dr. Tilesius, Naturalisten der Expedition. (S.1-108)

- Bemerkungen über den Jocko oder Orang-Outang von Borneo, oder den ostindischen Waldteufel\*). (Simia Satyrus L.) Entworfen von D. Tilesius, Naturforscher der Expedition. (S. 109-130, mit 3 Tafeln im Anhang).

<sup>63</sup> Harald Tausch verweist in seinem Werk *Gehäuse der Mnemosyne : Architektur als Schriftform der Erinnerung* (Göttingen : Vandenhoeck & Ruprecht 2003, S. 293) darauf, dass Heinrich Wuttke im Vorwort (S. VIII) seines Buches *Die Entstehung der Schrift, die verschiedenen Schriftsysteme und das Schrifttum der nicht alfabetaarisch schreibenden Völker* (Leipzig : Weigel 1877) angibt, 1840 und 1841 mit Tilesius Gespräche über die Tätowierungen geführt zu haben.

- (26) Ausführliche Rezension in : Göttingische gelehrte Anzeigen, Jg. 1805, Bd. III, S. 1684–1686.
- (27) Das Tafelwerk hat 2 Titelblätter (lateinisch, französisch). Tilesius hatte bei seiner Abreise zur Weltumsegelung mit v. Krusenstern seine Tafeln, nicht aber die Texte dazu, Martens übergeben. 1844 äußert er sich enttäuscht über die Art, wie Martens seinen Anteil an der Publikation behandelt hat (Autograph : SPK – wie oben (9) – acc. Darmst. 1920. 405 : Blatt 35–37).<sup>64</sup>
- (28) In der Vorrede zum 3. Teil (Band) seines Reisewerkes schreibt v. Krusenstern auf S. III : “Der Atlas zu meiner Reise ist, wie ich dies schon bei einer anderen Gelegenheit erwähnt habe, mit Ausschluß der Charten, ganz das Werk des Herrn Hofrath Tilesius.”
- (29) Tilesius hat vor allem den 3. Band überarbeitet. Seine zahlreichen Fußnoten und Einschübe sind in petit gesetzt. Der von Pallas stammende Text bleibt so gewahrt.
- (30) In der Abt.I Anat. u. Physiol., Bd.1 (1816) bearbeitete Tilesius die Stichworte AFFE (S.95–105), AFFINITÄT (S.116) und ergänzte das Stichwort AFTER (S.118), für den Bd.3 (1819) lieferte er Zusätze zu den Stichworten FORM (S.98–100) und GEBURT (S.279–281).
- (31) Diese handschriftl. Liste<sup>65</sup> stammt aus dem Stadtarchiv Mühlhausen, Tilesius Bibliothek Nr. 123. Die Nummerierung von 1 bis 49 findet sich nicht im Original. Nr. 1 z.B. ist eine Buchbesprechung im 200. Stück auf den S. 1985–1994, von : Friedrich Ernst Jester (1816) : Anleitung zur Kenntniß und zweckmäßigen Zugutmachung der Nutzhölzer. Bey A.W. Unger, Königsberg 1816. Nr. 2 ist die anschließende Buchbesprechung auf S. 1994, von : Reinhold und Christian L. Treviranus (1816) : Vermischte Schriften anatomischen und physiologischen Inhalts. I. Bd. Bey Röwer, Göttingen, 1816. Und die Nr. 49 ist eine Buchbesprechung vom 9. Juli 1821, S. 1088, von : Tittmann, Friedrich Wilhelm : Darstellung der Verfassung des deutschen Bundes. Leipzig, bey Fleischer jun. 1818.
- (32) Bezug : Angaben von Tilesius an verschiedenen Stellen.

#### **Einige Ergänzungen** (F. Sondermann, ohne Autopsie)

- Auszug eines Schreibens des Hrn. Hofraths Tilesius an den Herausgeber des Hamburger Correspondenten ; abgedruckt in Nr. 195 dieses Blattes v.J. 1803. (Santa Cruz auf Teneriffa d. 25. Oct. 1803). In : (Voigt's) Mag. f. d. neuesten Zustand d. Naturk. Bd.VII, S. 185–187 (Weimar : Landes-Ind.-Comptoir 1804)
- Izvestie o estestvennom i politicheskom sostoianii ostrova Nukaivu... [News of the Natural and Political Conditions of Nukaivu Island...], in : Tekhnologicheskii zhurnal [Technological Journal], vol. III/4 (1806), p.89–109.
- Opisanie bolsago gubchatogo griba. [Beschreibung großer schwammiger Pilze]. In : Tekhnologicheskii zhurnal [Technological Journal] vol. VIII (1811), pt. 4,.

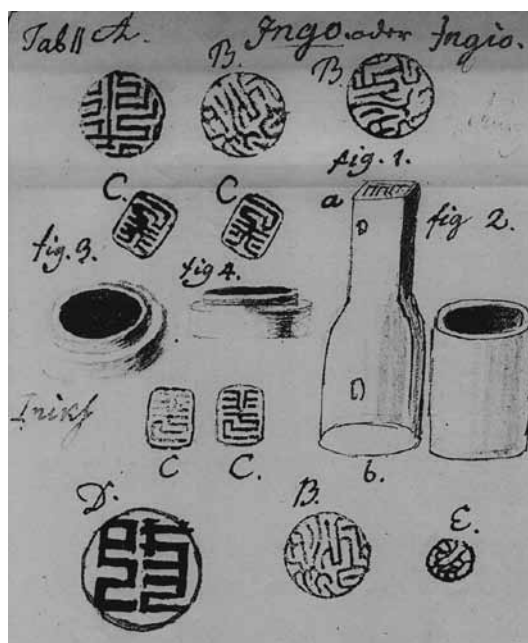
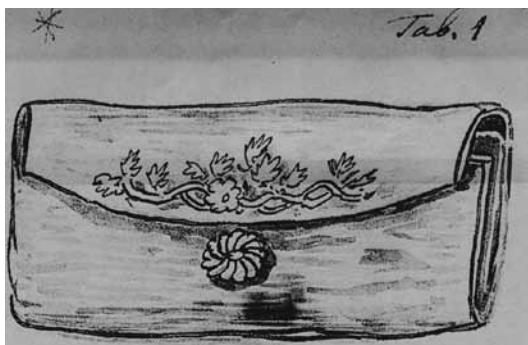
<sup>64</sup> Als Reprint 1996 im Verlag des Deutschen Hygiene-Museums Dresden mit sieben Illustrationen von Tilesius erschienen.

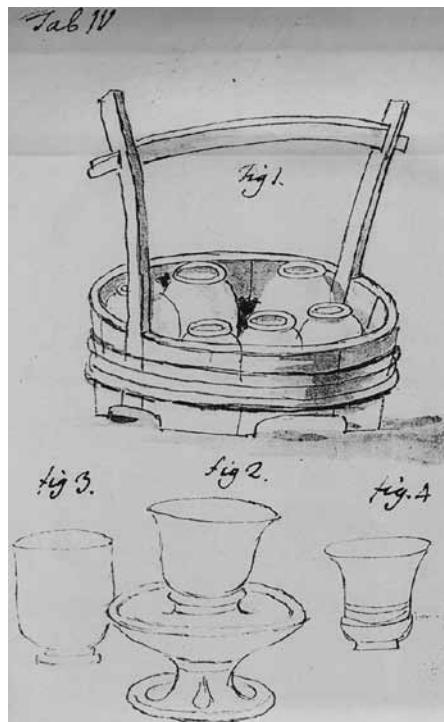
<sup>65</sup> Sie stimmt nur teilweise überein mit den Angaben bei Oscar Fambach *Die Mitarbeiter der Göttingischen Gelehrten Anzeigen* 1769–1836 (Tübingen, Universitätsbibliothek 1976, hier : Personenregister S. 510). Nur die mit [x] markierten Rezensionen sind bei Fambach genannt.

- O rogache bez briushnykh per'ev, novom rode iz luzhnogo okeana ili Tikhogo moria [On Balistes without Abdominal Feathers, a New Species from the South Ocean or Pacific Sea], in : Trudy Akademii nauk, 1 (1821), p. 184-196 (eingereicht am 21.05.1817)
- Ueber die Darmgeschwüre der Intestinaldrüsen. In : Allgem.med. Zeitung (Hg. K. Pabst), Jg. 1834, Nr. 55 -57.
- Hydrophobie und Hämato-phobie, in : Berliner Medicinische Central-Zeitung 1834, No. 40.
- Über den verschiedenen Arzneivorrath der Aerzte bei der Krankenbehandlung, in : Berl. med. Centr.-Zeitung 1835, No. 1. 2.
- Die Wallfische. In : Isis (von Oken) 1835 (8). S.709-752 ; 1835 (9), S. 801-828.

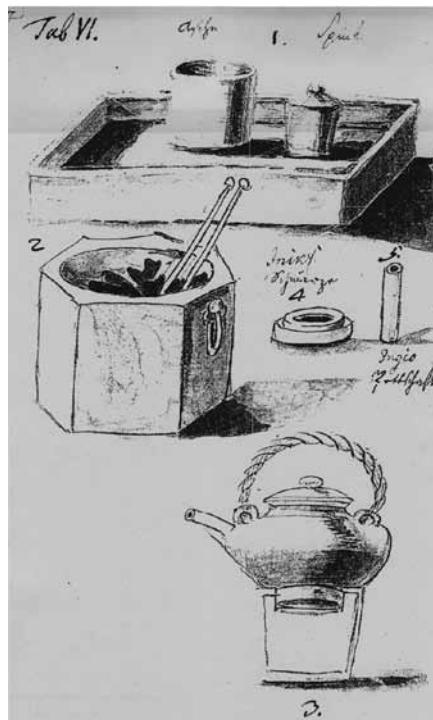
**Anhang :**

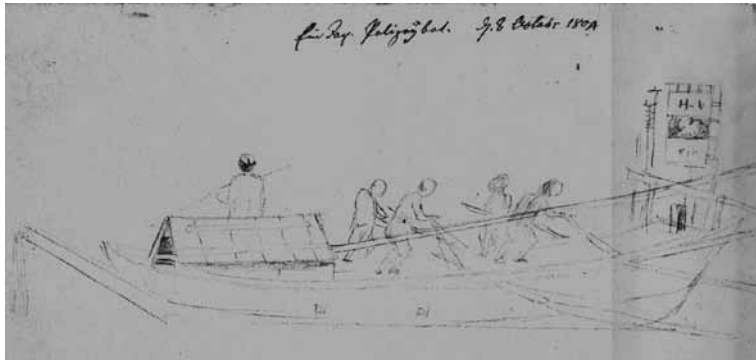
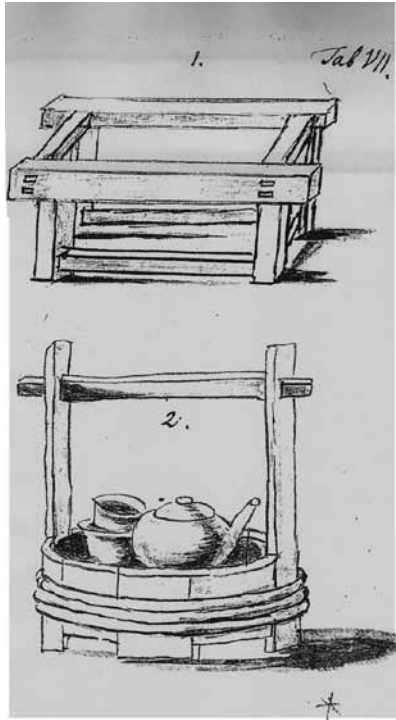
Die Tafeln I-VII stammen aus dem Stadtarchiv Mühlhausen, Tilesius-Bibliothek, Nr. 82/291, die letzte Abbildung findet sich in Nr. 82/661.











# ひな形方式に対する（見かけ上の）反例

高 橋 直 彦

## 0. 摘 要

筆者は、1988年に「ひな形（照合）方式（TM方式）」という枠組を提唱し、以来、これに依拠しつつ音韻研究を行ってきた<sup>(1)</sup>。この枠組の骨子は、構造主義（IA方式）・生成文法（IP方式）双方の難点を回避し、利点を活かす点にある。（次頁「英語の複数形」に対する説明力の違い参照。また、「日本語の動詞の活用」のムービー <<http://raspberrys.jp/kaku.html>>、他の部門への応用の例として「英語の受け身文の分析」のムービー <<http://raspberrys.jp/np.html>>も参照されたい。）ときに見られる理論レベルの誤解の例として、構造主義を悪者に見立てた上で、生成文法という「正義の味方」がこれを成敗した、といった勧善懲悪風史観に立つ向きがあるが、文法史観として単純化し過ぎである。さらにまた、ひな形方式そのものに対する誤解の例として、「ひな形（照合）」という言葉で往年のパターン・プラクティスに象徴される単純な「型への当て嵌め」を連想しつつひな形方式を蔑視する向きもあるが、これもまた浅薄な誤解である<sup>(2)</sup>。

本稿では、ひな形方式に対する上記のような理論絡みの誤解とは別に、データ絡みの誤解（ときになされてきた「反例の指摘」）の例を採り上げて、これに対する正式な形での解答を試みる<sup>(3)</sup>。この種の反例というのは、具体的には例えば「sign [n]～signature [gn]」の交替に関してはうまく行くかに見えるひな形方式流の説明は、sign [n]～signing \*[gn]」の交替に関してはうまく行かないのではないかといいた類の指摘である。本稿では、以下、こうした反例が実は見かけ上の反例であって、ひな形方式に対するデータレベルの真の反例とはならないことを論じ、ひな形方式の妥当性をあらためて主張することにする<sup>(4)</sup>。

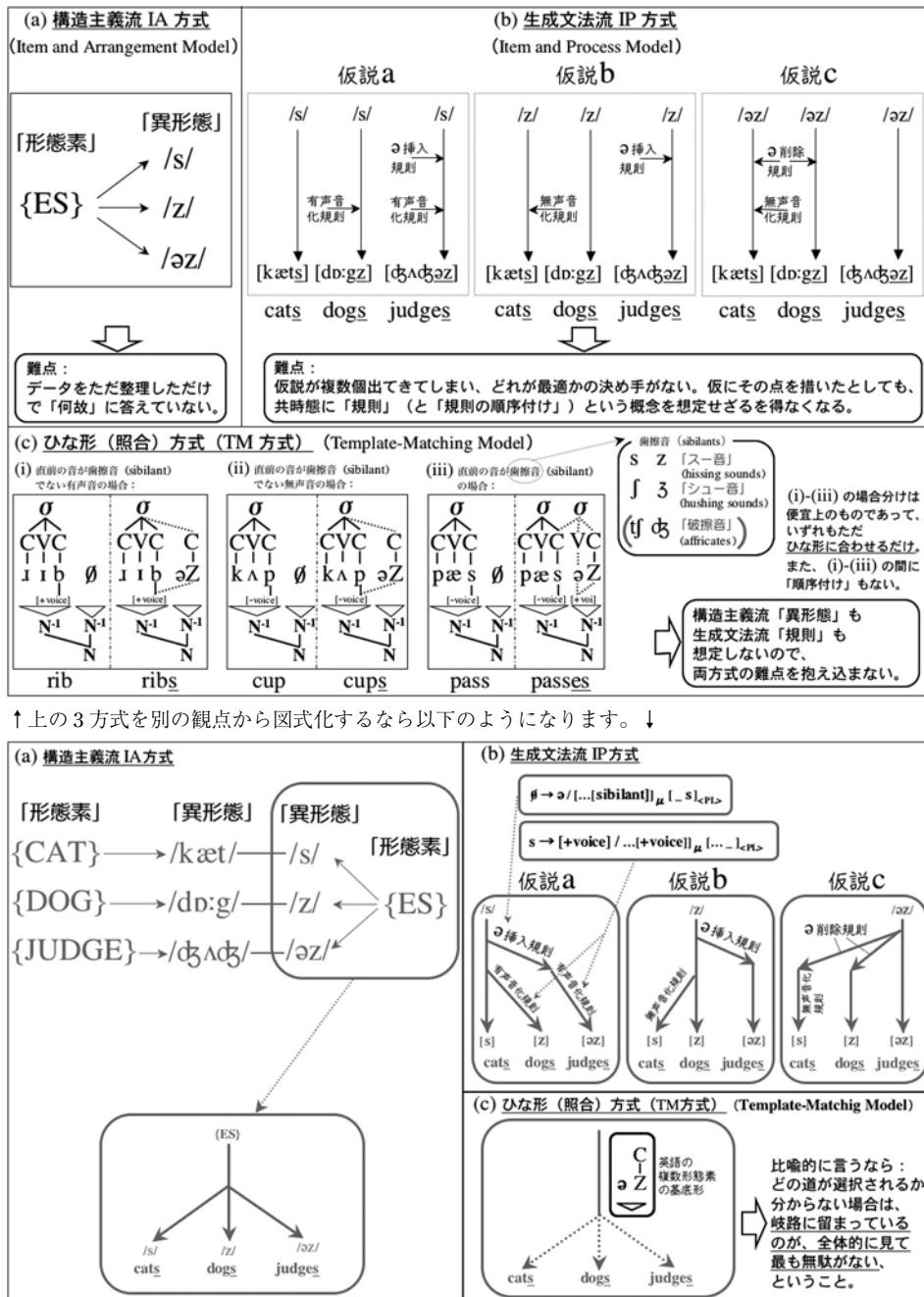
---

(1) 高橋（1988a, b, c, d; 1989a, b, c, d; 1990a, b, c; 1991a, b; 1992; 1995a, b; 1996a, b; 1997; 2000; 2005a, b, c; 2007; 2008; 2009; 2010）。

(2) 加えて、個人的には、パターン・プラクティスとして、外国語習得上の必要悪・乗り越えるべき関所であって、蔑視するのは習得後でも遅くはない、と考える。ただし、筆者個人の専門はあくまでも外国語教育ではなく、基礎研究としての言語学である。

(3) インフォーマルな形の解答は、既に学会での口頭発表といった機会でも折りに触れ公にしていた。

(4) ただし、データレベルの議論・理論レベルの議論といっても、両者は、当然のことながら、截然と分たれる訳ではなく、こうした区分は多かれ少なかれ便宜上のものであるという、科学的営為一般に当てはまる点を想起されたい。データに対する特定の見方は、なんらかの理論的視点を必然的に前提するからである。



1 節では, sign [n]~signature [gn] の交替に対する IA 方式・IP 方式・TM 方式 3 者の説明の仕方を比較参照する。結論として, IA 方式が依拠する「異形態」にも IP 方式が依拠する「(変更) 規則」にも依拠しないで済むという点で TM 方式の説明法が妥当であることを確認する。2 節では, 1 節で確認した TM 方式のもつ妥当性が, データを sign [n]~signing

\*[gn] の交替にまで扱った場合、（一見）頓挫するという（見かけ上の）反例のケースを見る。3 節では、2 節で見た反例が、TM 方式を精緻化することで、見かけ上の反例と見做し得ることを指摘し、TM 方式のもつ妥当性を再確認する。

### 1. 3 方式の比較——TM 方式の妥当性

図(1)を参照されたい<sup>(5)</sup>。図で[割愛]している部分を補足する形で述べるなら、次のようになる。sign [n]～signature [gn] の交替に対する「説明」として、IA 方式では、形態素 {SIGN} に関して「異形態」/sain/～/sign/ という概念を想定せざるを得ないし、また、IP 方式の場合は、「g- 削除規則」か「g- 挿入規則」かいずれかの「(変更) 規則」という概念を想定せざるを得ない。これに対して、TM 方式では、「ひな形」というどの道必要な概念に依拠するのみで、IA 方式の「異形態」という概念にも IP 方式の「(変更) 規則」という概念にも依拠しないで済んでおり、その意味で理論上の経済性を達成していることになる。「同一現象を説明する際、少ない道具立てで済ませられる理論の方が相対的に優れた理論と判定される」という科学一般で広く受け入れられている評価手順（経済性の原理）により、3 者の中で TM 方式が多とされることになる。なお、ここでは詳細を省くが、ひな形への照合操作は、英語では「L ← R（右から左）」、日本語では「L → R（左から右）」という形で「方向性（directionality）」のパラメーターが獲得時に（1 度だけ）選択・固定される、と想定する。（「1 度だけ」という条項が意味するのは、TM 方式という枠組が（大人の文法に関して）「派生依存文法（derivation-dependent grammar）」ではなく「派生非依存文法（derivation-independent grammar）」である、という点である。因みに、IP 方式は規則適用が大人の文法獲得後も一々の派生の度に行なわれる派生依存文法である。この意味でも、IP 方式は妥当性を欠く理論である<sup>(6)</sup>。）

### 2. TM 方式に対する反例？

本節では、前節で確認した TM 方式のもつ妥当性が、データを sign [n]～signing \*[gn]

- (5) 図(1)は口頭発表時のものを流用している。「もの言い」が論文調になっていないのはそのためである。ご了承を請う。
- (6) 無論 TM 方式でも「ひな形照合操作」自体は派生の度ごとに行なわれるものの、この操作は、変更規則適用操作と異なり、基本的にコストレスな（もしくはコストレスに限りなく近い）操作と想定される。対して、変更規則適用操作は、そもそも、脳内に多数の規則+規則の適用順序を保持し続けねばならないという静的コストに加え、実際の規則適用の際にも、多数の規則の中から当該規則を走査し選択するコスト（+規則の順序づけを遵守しつつ適用するコスト）という動的コストがかかる蓋然性がある。加えて、IP 方式では、基底表示から表層表示に至るまでの派生の間、規則適用の度に表示の変換が行われるという（TM 方式には不要な）「紆余曲折」を経ることになる。

(1)

- campaign~campaigner : g は発音しない。sign~signature : sign の g は発音せず、signature の g は発音する。これだけのデータからでも (1) 綴り字と発音は区別すべき、(2) sign~signature での g の発音には法則があるのか、あるとすればどのような法則か、等の問題意識をもつことができる。

つづりじ  
 綴字 (spelling) と発音とを混同してはいけない。  
 ていじ

例1:  $\left\{ \begin{array}{l} \text{campaign} \sim \text{campaigner} \leftarrow \text{綴字 (spelling)} \\ \square \quad \quad \quad \square \quad \quad \quad \leftarrow \text{発音} \end{array} \right\}$

上例では、綴字 'g' はいずれの交替形を見ても発音されていない。  
 このような場合、音形 (≒発音) に関する理論では無視して構わない。(というよりも、無視しなければならない。)

例2:  $\left\{ \begin{array}{l} \text{sign} \sim \text{signature} \leftarrow \text{綴字 (spelling)} \\ \square \quad \quad \quad [g] \quad \quad \quad \leftarrow \text{発音} \end{array} \right\}$

上例では、綴字 'g' は 'sign' という交替形では発音されず、'signature' という交替形では発音されている。  
 このような場合、音形 (≒発音) に関する理論ではこの交替を何らかの形で説明しなければならない。

① 構造主義流の「異形態」に基づく分析: → [割愛] いずれもうまくいかない。  
 ② 生成文法流の「規則」に基づく分析: → [割愛]  
 ③ ひな形照合方式に基づく分析: → 以下を参照。

音韻構造 (の一部)

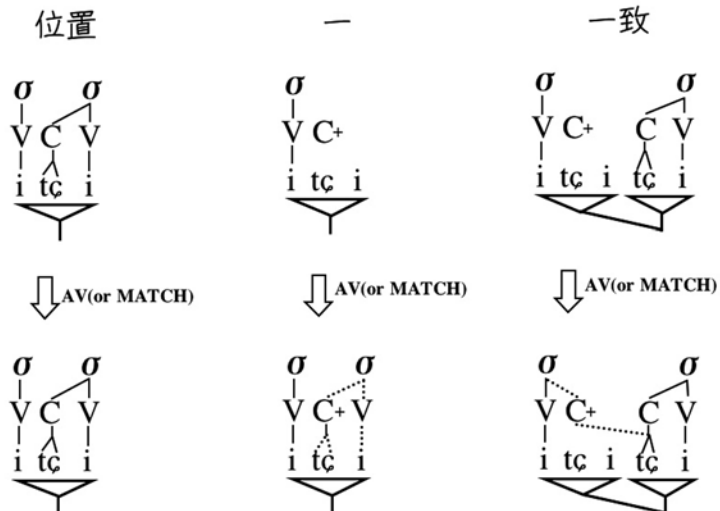
形態構造 (の一部)

音韻構造 (の一部)

形態構造 (の一部)

← 音節のレベル  
 ← 子音/母音に対応するスロット (C=子音、V=母音、X=子音 or 母音)  
 ← 子音/母音  
 ← 形態素のレベル  
 ← 単語のレベル

- 日本語でも、「位置」と「一」の「ち」は一見同じに見えるが、「一」の方は「一(ip)杯」「一(it)旦」「一(ik)回」等と形を変える。法則はあるか、あるとすればどのような法則か。こうした観点から、英日語の発音を考察し得る。





るという側面を共有してはいるものの、そのことに加えて、[ə]は「-atureという形態素を構成する母音」であり、[ɪ]は「-ingという形態素を構成する母音」である、という形態音韻上の資格の違いをも有しているのは明らかである。だからこそ、母音という共通項にも拘わらず、データの上で異なった振る舞いを示すのである。現に伝統的にも、-atureと-ingとは形態音韻上異なった類に所属するものとされるのが一般的である。

以上の考察から、理論構築に関し、次の示唆が得られる。即ち、言語データが sign [n] ~signature [gn] に対するものとして sign [n] ~signing [n] という交替を示す以上、「(2)よりも形態音韻レベルに一層配慮した説明法」を追究すべし、という示唆である<sup>(7)</sup>。ただしここで(例えばかつての語彙音韻論のような)「規則アプローチ」を援用したのでは、IP方式に逆戻りすることになってしまい、元の木阿弥である。我々は「規則」もそしてできれば「異形態」も用いない方式を追究せねばならない。

結論を述べる。要は発想の問題である。文章による説明では解りづらいので、図示し((3b): A picture paints a thousand words!), ポイントのみを以下列挙する((3a))<sup>(8)</sup>。

### (3a)

- ・語彙音韻論流の「派生」モデルで得られた知見は 規則なしの「表示」モデルで把握可。「サイクル」や「厳密循環条件」(Mascaró (1976), Kiparsky (1982))といった道具立てで捉えようとした知見も自然な形で説明可。
- ・各形態素  $V^2$  はしかるべき「Domain」(I, II等)に配置される。
- ・形態素  $V^2$  は  $V^2$  のままでは他の Domain の要素と関係づけることができない(=連結線を引くことができない)と想定する。関係づけるためには  $V^1$  のレベルが必要となる(比喩的に述べると「服を着ないで外へは出られぬ」or「靴を履かずに外へは出られぬ」)。
- ・ $V^1$  と関係づけられる(=連結線が引かれる)ことが Template-Matching (=AV or MATCH) の引き金(trigger)となると想定する。
- ・ $V^0$  のレベルが「単語」のレベルである。統語構造中のしかるべき位置に挿入されるためには、「単語」のレベルになっていなければならない。(=「形態素  $V^2$ 」のレベルのままでは文中に生起できない。

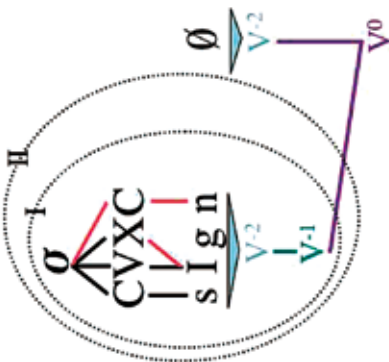
(7) 実は、(2a,b) 左側の sign の形態構造に関して、形態素「2つ」で構成された形の配置型で表示したのも、こうした形態音韻的考察を先取りしたものである。

(8) 「運用モデル」では、(3b) ①-④の段階が適用済みの形式が Buffer に貯蔵されており、即時に抽出・使用される、というケースも発話によって想定し得る。

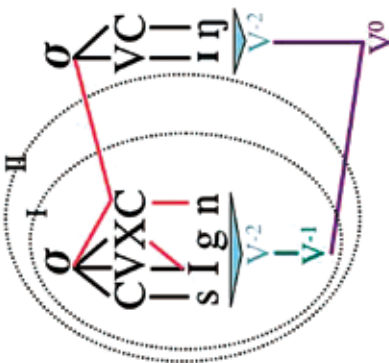


(3b)

They will sign a new player.

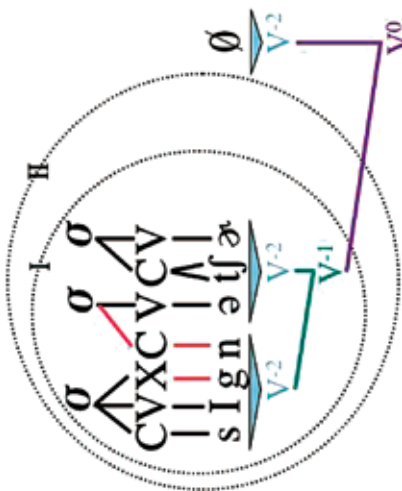


They are signing a new player.



この段階ではまだ  
Template-Matching  
(=AV or MATCH)  
は発動していない。

He put his signature to the letter.



- ① 発語材料の形態素  $V^{-2}$  を「Morpheme List」より取り出す。
- ② 各形態素  $V^{-2}$  がしかるべき「Domain」（I, II 等）に配置される。
- ③ 形態素  $V^{-2}$  は  $V^{-2}$  のままでは他の Domain の要素と関係づけることができない（＝連結線を引くことができない）。関係づけるためには  $V^{-1}$  のレベルが必要となる（＝「裸のままでは外出できぬ」）。
- ④  $V^{-1}$  と関係づけられる（＝連結線が引かれる）ことが **Template-Matching (=AV or MATCH)** の引き金 (trigger) となる。
- ⑤  $V^0$  のレベルが「単語」のレベルである。統語構造中のしかるべき位置に挿入されるためには、まず「単語」のレベルにならなければならない。（＝「形態素  $V^{-2}$  のレベルのままでは文中に生起できない。 Cf. ③）
- ⑥ ①～⑤の想定事項により、語彙者韻論流の「派生」モデルで得られた知見は規則なしの「表示」モデルで把握可能となる。また、「サイクル」や「厳密循環条件」（Mascaro (1976), Kiparsky (1982)) といった道具立てで捉えようとした知見も自然な形で説明可能となる。 Cf. 高橋 (1996a: 197-200) .

以上、本稿では、(2b) に類するデータは TM 方式にとって何ら致命的な反例とはならず、見かけ上の反例に過ぎないという点を論証した。これにより、TM 方式の妥当性がさらに裏付けられることになる。

#### 4. 補 説

前節では、論の展開上 形態音韻論的な視点の重要性を指摘した訳だが、この点にまつわるよくある別種の誤解についてもここで指摘しておきたい。

- ・形態論の分野では、「自由形態素」対「拘束形態素」ということが一般に言われる。そして、両者の違いは、便宜上「ハイフンの有無」等に表示される (e.g. *sign vs. -ature*)。しかし、前節で見た TM の枠組に基づくなら、この違いは「理論上の虚構 (theoretical fallacy)」であるということになる。例えば、*They will sign a new player.* における *sign* は、「自由形態素」という名称にも拘わらず、理論的には、(2a, b) の左側に示したように、「拘束形態素」*sign-* + 「拘束形態素」 $-\emptyset$  に他ならないと見做せる (し、そう考えた方が筋が通っている) からである (註 (7) 参照)。*They are signing a new player.* における *signing* も同様に、「拘束形態素」*sign-* + 「拘束形態素」*-ing* に他ならないと見做せる。(名詞の *sign* の場合も同様。単数形は「拘束形態素」*sign-* + 「拘束形態素」 $-\emptyset$ 、複数形は「拘束形態素」*sign-* + 「拘束形態素」*-s*。)
- ・こうした観点に立てば、*transmit* の *trans-*、*-mit* も、*sign-* も共に「拘束形態素」ということになる。両者の違いはと言えば、*sign-* が、レキシコンの中に単語とは別個に独立の素材 (=形態素) としても記載されているのに対して、*trans-*、*-mit* はレキシコンの中に単語の中に組み込まれた形でのみ記載されており、単語と別個に独立の素材 (=形態素) として記載されていない、という点である。(この想定事項により、後者の非生産性もまた説明可となる。)
- ・例えば、不規則活用動詞の *went* は、厳密には「異形態」と呼ぶことはできない。*went* は、レベルとしては「形態素」よりも上位の「単語」のレベルで不規則な形式だからである<sup>(9)</sup>。

(9) 因みに、*undergo* ~ *underwent* 等はどう扱うのかに関しては、*overcome* ~ *overcame vs. welcome* ~ *welcomed* 等のデータの扱いと共に稿を改めて論じたい。

## 参 照 文 献

- 平河内健治（編）（1989）『言語構造の表示と派生（Forms and Processes of Linguistic Structure）』，仙台言語学研究会。
- 平河内健治（編）（1990）『生成文法の方位（Perspectives in Generative Grammar）』，松柏社。
- Kiparsky, Paul (1982a) "From cyclic phonology to lexical phonology", In H. van der Hulst and N. Smith (eds.), *The Structure of Phonological Representations*, vol. 1, Dordrecht: Foris, 131-175.
- Mascaró, J. (1976) *Catalan Phonology and the Phonological Cycle*, Ph. D. Dissertation, Department of Linguistics, M.I.T.
- 音韻論研究会（編）（1996）『音韻研究 理論と実施 — 音韻論研究会創立 10 周年記念論文集 —』開拓社。
- 高橋直彦（1988a）「Avoid Empties について」，コトバの会第 18 回例会に於ける発表原稿，於東北学院大学。
- （1988b）「Underspecification and Avoid Empties」，東北英文学会第 43 回大会に於ける発表原稿，於秋田大学。
- （1988c）「Avoid Empties and Syllabification」，日本言語学会第 97 回大会に於ける発表原稿，於神戸市外国語大学。
- （1988d）「原理 Avoid Empties について」，『東北学院大学論集（英語英文学）』第 80 号東北学院大学，99-154。
- （1989a）「音節理論における Avoid Empties について — Prosodicization Theory の適用例 —」，『英語英文学研究所紀要』，第 18 号，東北学院大学，91-147。
- （1989b）「素性階層構造とひな形アプローチ」，東北英文学会第 44 回大会（1989 年 10 月 8 日，於仙台白百合短期大学）における発表原稿。
- （1989c）「音韻部門におけるひな形アプローチについて」，日本言語学会第 99 回大会（1989 年 10 月 15 日，於関西学院大学）における発表原稿。
- （1989d）「音韻理論の目指すもの」，平河内（編），（1989），87-106。
- （1990a）「音韻部門におけるひな形アプローチの妥当性について」，『英語英文学研究所紀要』，第 19 号，東北学院大学。
- （1990b）「Prosodicization Theory について」，平河内（編），（1990），375-444。
- （1990c）「音韻階層構造についての一考察」，日本言語学会第 100 回大会（1990 年 5 月 30 日，於東京大学）における発表原稿。
- （1991a）「文法内規則と文法間規則について」，東北英文学会第 46 回大会（1991 年 10 月 5 日，於宮城教育大学）に於ける発表原稿。
- （1991b）「音韻理論における変更規則の位置づけ」，日本言語学会第 103 回大会（1991 年 10 月 27 日於南山大学）における発表原稿。
- （1992）「文法内規則と文法間規則について」，『英語英文学研究所紀要』，第 21 号，東北学院大学，33-70。
- （1995a）「現代日本語の動詞の活用」，『東北学院大学論集（人間・言語・情報）』第 110 号，東北学院大学 107-78。
- （1995b）「Synchrony Can Do Without Changing Rules / Conventions」，日本言語学会第 111 回大会（1995 年 10 月 15 日，於東北大学）における発表原稿。
- （1996a）「(英語) 音韻論に変更規則・変更規約は不要である」，『東北学院大学論集（人間・言語・情報）』第 113 号，東北学院大学，163-214。
- （1996b）「英語の rhotics のふるまい」，音韻論研究会（編），（1996），127-8。
- （1997）「いわゆる -ng (-) をもつ形式について」，『東北学院大学論集（人間・言語・情報）』第 117 号，東北学院大学，129-172。
- （2000）「[弾音の生起環境]」，『東北学院大学英語英文学研究所紀要』第 29 号，東北学

院大学, 67-114.

- (2005a) 「音韻理論における経済性 (Economy in Phonological Theory)」東北学院大学英語英文学研究所定例公開講演会 (2005年9月28日 東北学院大学泉キャンパス) における発表原稿
- (2005b) 「純粋な「音韻論」は想定可能か？」日本英語音声学会 EPSJ 第7回東北支部大会 (2005年12月3日 東北学院大学土樋キャンパス) における発表原稿
- (2005c) 「英語の否定接頭辞 in-, un- の形態音韻論」, 『東北学院大学論集』第142号, 東北学院大学 53-75.
- (2007) 「ひな形方式の他の部門への適用の可能性」日本英語音声学会東北・北海道支部第1回研究大会 (2007年10月27日 東北学院大学土樋キャンパス) における発表原稿
- (2008) 「ひな形方式の適用可能性」東北英文学会 (日本英文学会東北支部) 第63回大会 英語学・英語教育部門シンポジウム「言語理論の進展とその応用－言語教育・自然言語処理を手がかりに－」 (2008年11月24日 東北学院大学土樋キャンパス) における発表原稿
- (2009) 「英語における語頭の /j/ と語中の /j/ のふるまいの違い」, 『東北学院大学教養学部論集』第154号, 東北学院大学, 91-103.
- (2010) 「連濁に対する (見かけ上の) 反例」, 『東北学院大学教養学部論集』第155号, 東北学院大学, 55-68.

# 中国における労働力市場に関する考察 (2)

楊 世 英

中国における労働力市場制度は市場経済化の進展に伴い整備されつつ、雇用に関する調整機能が市場原理の導入により強化されている。とはいえ、労働力価格メカニズムが制度障害の原因で依然機能せず、制度整備のあり方について検討することが求められるものである。中国が移行経済期にあるかと言えば、労働力市場そのものはむしろ形成の初期整備段階にあると言ってよい。この意味では労働力市場の問題点に対して制度上・理論上において検討することは極めて重要である。本文は前文(1)に続き、中国における労働力市場の分断性をめぐる問題を考察して、その原因と特徴を分析すると共に先進工業化国の経験と対照しつつ、中国のALMPsの問題点と労働力市場の整合性問題も触れることにする。

## 1. 労働力市場の分断性

労働力市場では制度障害が存在している。労働力が自由に移動できる基本の前提条件は労働力市場が整備されていることはいうまでもない。この意味からまず、中国では分断された都市農村部における労働力市場を統合して統一的な労働力市場を形成されるのは不可欠である。

二重構造下での労働力市場では常に制度要因で分断される問題はしばしば指摘されている。中国も例外なく建国以来、都市農村部・地域間の労働力市場を強力な行政手段による分断されている<sup>1</sup>。1978年以來の改革・開放政策による農民の労働意欲が高まり、農業生産性が急速に上昇した結果、農村に隠れた過剰労働力が一気に顕著化された。仕事を求めるためこれらの労働力が都市部に流入した。しかし、都市部では国有企業を中心とした第二次産業が自らも過剰雇用問題を抱えていた。沿海地域では労働集約型の貿易加工業の振興は初期段階であったため、新規採用規模は限定的であった。第二次産業全体の労働力吸収力が弱くて十分な雇用機会が提供できなかつた。都市部に移動した農村からの過剰労働力の多くは仕事

<sup>1</sup> たとえば、地域間や都市農村部に労働力の移動が諸制度や政策・条例によって阻害されている。とくに都市農村部には「戸籍制度」という身分制度の制限で農村労働力が自由に都市部への移動はほぼ不可能であった。なお、戸籍制度とセットに食料配給制度が実施されたから、労働力の自由移動はほぼ不可能であった。

がなくそのまま失業者となっていた。労働力市場では過剰供給で需給構造はアンバランス状態にあった。マクロ的政策による政策介入を行わざるを得なかった。一方、政策的対応が求められたものの、労働力市場そのものは機能せず、政府は深刻化する雇用情勢を緩和するため、労働力市場の制度整備を着手した。それがいわゆる中国の労働力市場の制度整備が始まった契機であった。しかし、中央政府政策や地方政府の条例は農村労働力の都市への移動が阻害しているから<sup>2</sup>、同一労働には同一報酬を実施するという労働力市場の原則は労働力市場の制度整備の初期段階から、実現できなかった。

業種間における労働力市場は依然分断している。一例として中国の公共事業は市場化がかなり遅れているため、市場メカニズムは機能せず、国有企業（公有制経済）の独占状態がいまなお続いている。このような行政手段による独占は国家独占主義の一種といっても過言ではない。このような独占企業に市場経済制度を導入せず、労働力市場への参入制度は未だ整備されていない。市場からの准参入は難しい。非公有制経済（民間企業）企業の独占企業への参入はほぼ不可能である。

このような業種間の独占状態は労働力における産業間の移動に影響している。本来ならば産業間における賃金格差は労働力移動の規定要因となっている。しかし、中国の独占企業は独占利潤を転化した結果、業種間において賃金格差が生じたため、本来の労働力価格を反映せず、労働力移動の阻害要因となっている。現状では、業種間でも同一労働同一報酬が実現していないので、産業間における労働力の移動はきわめて稀少である<sup>3</sup>。

そして、労働力市場の参入制度が依然整備されておらず、行政手段による労働力市場管理が依然として続いている（2000年12月8日に公布した『労働力市場管理規定』は市場関連サービス、市場管理およびマクロ的な意思決定の根拠となっている、当該規定はすでに2007年11月に廃止された。そのかわりに『就業サービスおよび就業管理規定』が2008年1月1日から実施）。公共事業（電力・水道・ガスなどインフラ基幹産業）は独占企業の代表格として知られる。確かに改革以来、このような独占状態は規制緩和によりいくつかの改善が見られたが、労働力市場の准参入制度などの面で行政制度による制限現象が依然存在している。競争を必要とする制度環境が整備したとは言い難い。

独占企業への投資構造が依然単一化している。市場経済に適応する多元化なおかつ競争

<sup>2</sup> 農村からの労働力が排除され、一例として「農民工」の採用については農村出身者は採用者総数上には何パーセントとか決められていたこともよくある。とくに大都市では業種により制限が違う。差別性が強い許可証制度が実施された。許可証制度に伴って各種名目費用が徴収される。また、社会保険、子女教育などの面にも差別問題が存在している。失業者は最低生活保障にすら保障されない状態である。それを労働力市場の形成に契機となっていた。形成する客観条件が揃えたと考えられる。

<sup>3</sup> 同一労働同一賃金原則とは同質・同量の労働に対して年齢、学歴、性別、人種、民族などの差異にかかわらず同一額の賃金支払いを求める原則である。

型の投資構造が未だ形成していない。つまり非公有制経済による独占企業への参入は体制上（あるいは政策上）の阻害による依然不可能である。さらに独占企業の改革がかなり遅れているため、業種間における労働力市場には依然分断され、その直接の結果は業種間における賃金格差が拡大されている。独占企業の労働賃金は特段高い。これは単純に独占企業労働力の付加価値が反映でなく、独占企業が独占利権を利用して得た独占利潤を労働者に転嫁しすぎない。この意味ではこのような企業の独占構造が労働力市場の制度整備や労働力の自由移動を直接に阻害しているといえる。業種間における労働力の流動性が非常に低いため、さらに将来的にはこうした状態が続けば、社会全体の就業規模の拡大は難しくなる<sup>4</sup>。

中国は、労働力市場を通じて労働需給を調整し、最終的に就業規模を拡大させるという従来の労働力市場の機能が働いているとはいえ、労働力の市場化が進んでいない。行政手段による独占・介入は依然存在している。

労働力市場は体制（制度）による分断化されている。中国では、企業体制内外において二つの労働力市場が存在している。つまり正規労働力市場と非正規労働力市場がある。体制内にある正規労働力市場については、雇用安定ないし市場管理体制（制度）、労働者の権益保護など雇用環境が整っている。しかし賃金が一方的に上昇して賃金硬直性が強いから、労働力の価格メカニズムが機能していない。一方、非正規労働力市場では非正規労働部門に就業している非正規労働者を対象とし、現実では多くの農村から出稼ぎ農民（農民工）と都市部の非正規労働者は対象となっている。非正規労働力市場の特徴としては低賃金・労働環境の悪化・雇用の不安定性・市場制度の未完備・雇用機会の不平等・不公正な競争環境・不対等な労資関係（労使関係）などがあげられる。さらには賃金未払い問題や社会保障加入率が低いなども特徴的である。しかし労働力の価格メカニズムは機能している<sup>5</sup>。

こうした分断している労働力市場は雇用機会の不平等化問題をもたらした。就業管理体制が差別化しているから、体制内では社会保障制度が整備され、労働契約がほとんど結ばれている。正式な労働組合もある。しかも体制外労働市場は市場管理制度が未完備状態である。労働契約率・社会保険加入率は非常に低く低賃金状態が続いている。同一労働同一報酬問題もあり、雇用政策上の差別表現としては中央政府・地方政府が実施した積極的雇用政策・条例の対象は体制内就業者だけに留まっている。職業訓練・失業保険など面においても出稼ぎ農民「農民工」が就業サービスの対象外となっている。都市部においても国有企業以外の失業者（リストラ者を含む）も対象外となっている。この意味で公正な雇用環境が形成されているとは言えない。

<sup>4</sup> 労働力市場の競争性がなくなる恐れがあるので、労働力市場への参入の増大と労働需要とが衝突することを回避できなくなる。

<sup>5</sup> 企業においては、内部労働力市場、外部労働力市場が分けている。

さらに、このような分断した労働力市場は労働者の職業選択にも影響している。労働力市場には流動性が低く移動コストが高いから、就業は地元傾向となっている。就業選択範囲が限定されている。地域間における労働力の流動性が非常に低いため、大卒者の初回就業行動にも反映されている。彼らは常に沿海地域の大都市・中都市などを選ぶ。つまり仕事より労働場所を優先に選択する動きがあった。生産要素である労働力の配置は合理的でなく、過剰と不足が同時に存在する状況が現れた。いわゆる労働力過剰と人材不足のジレンマ（ディレンマ dilemma）問題が見られ、過剰から不足への転換点（いわゆるルイス転換点）に迎いつつある状態として考えればよい。

今後は、都市と農村の協調の取れた発展のための制度的障害除去にポイントを置き、労働力、資源などの合理的な移動と最適化を図るべきである。都市と農村の統一的労働力市場・公平な就業制度を設けるために、戸籍管理制度の改革により都市・農村の統一的戸籍登録管理制度を構築、農村から都市への移動制限の緩和、社会保障の農村全域への拡大が必要であるとしている。

## 2. 市場調整機能の不完全さ

労働力市場自体には自主性が高くない。労働力市場の供給主体である労働力は、十分な財産権を与えられていないから、市場参入を自主にできない。労働力が自身の利潤最大化を追及することもできない。また、労働力市場の需要主体である企業が十分な人事採用権が与えられなかった。とくに国有企業については市場主体の地位が明確されていない。企業内部には余剰人員が大量に存在している。企業が市場に応じて生産行動を行っていない。政府からの企業に行政的介入がしばしば指摘される。こうした行政介入に政府の規制政策はまた整備していない状態にある。政府の行政介入は、たとえば企業の人事権、人事部門の「人材」を管理するほか、労働管理部門が「労働者」を管理する。組織部門は「幹部」を管理するなどが挙げられる。しかし、非正規労働力市場には管理者である政府は存在しない。

労働力市場の管理制度は不健全である。有効的な価格と競争機能自体は労働力市場が機能するための根本保障である。労働力市場に価格調整メカニズムが機能せず、労働力価格は労働力資源の配置程度と市場の需給関係を反映していない。労働力の合理的な移動ができず、労働力資源の有効的な配置ルートが封鎖されている。またソーシャルネットワークのような重要な役割を果たす社会保障制度の不健全化のため（たとえば、社会保険の対象は国有企業に限り、失業者では社会保険はない）、労働力移動は制度上のコストが増大している。労働者の権益保護への配慮が足りないため、社会保障の制度設計は主に国有企業（正規労働部門



の労働者）の事情を基準に作ったものである。私営企業に従事する非正規労働者、出稼ぎ農民および農民が制度上排除されている。また、労働力市場に関わる立法が遅れている。労働政策に関する基本法である「労働法」にも条文が曖昧で法律対象も不明確な部分もあって履行しにくい。

労働力市場への監察システムは不健全である。公平なおかつ競争的な労働力市場が成立する前提条件である市場情報伝達が機能不全である。需要側（企業側）に有利であるため、情報は単一方向に流れている。求職者には不利な立場に置かれている。就職に関する情報収集・公布に留まって雇用動向や雇用情勢の分析など中立性ある情報提供は行われていない。また失業率に関する科学的な予測や計算にも問題がある。国民経済のマクロ情勢を正確に把握せず、その原因は情報の非現実性および非対称性にあると考えられる。

労働力市場に関する法整備が遅れている。1994年公布した「労働法」は関する基本方針・原則などは市場の経済化の変化に答えられない部分がかかなりあった。改正した労働法は2008年1月1日から実施され、その主要内容は急速に増えた労働契約のトラブルを対処するために法的根拠を提示することである。短期雇用から長期雇用へと転換を図って雇用市場の安定化が狙いである。しかし労働法は社会保障や雇用促進・企業賃金調整などについてはマクロ的で労働関係の規定範囲は比較的単一である。法律責任に関しては曖昧で「労働法」とセットにする立法活動がかかなり遅れている。たとえば、「労働契約法」「社会保険法」「集団契約法」などはなかなか立法過程にすら入れなかった。また、労働法の適用範囲は依然狭く多くの労働者が対象外となっている。「労働法」によれば企業との労働関係が成立した場合だけ、労働法を適用する対象となっている。国家機関や事業単位と社会団体に勤めた労働者（労働契約を結んだ場合に限り）が対象となっているが、労働契約を結んでいない場合、たとえば、出稼ぎ農民（農民工）、非正規労働者、労務派遣工などは労働法から排除されている。なお、経済のグローバル化が進み、労務輸出は頻繁に行っている。対外労働関係やトラブルの解決のため、対外的関連する労働法規の整備が必要となってくる。労働関係ははっきりとしない。労働紛争（争議）を処理するための根拠となる法的根拠が明確でないのは現状である。

就業上には差別問題がある。「労働法」の第十二条、第十三条では民族・人種・性別・宗教という理由で就業上では差別してはいけないという条文がある。しかし、規定の適用範囲や判断基準は曖昧で実際には大量の差別問題が存在している。これらの問題を対処するため、明確な法的根拠がないから、労働法の履行はできない状態である。また、就業差別された労働者に相応する救済措置を講じていない。例外ケースへの対応は検討されていない。なお、労働争議の処理手順が複雑で時間は長すぎている。原因は法律・行政法規・司法解釈によっ

て労働者の救済措置として調停・仲裁・訴訟など三段階をわけている。まずは調停，そして仲裁・訴訟という順で行われる。労働者の権益保護は即効性が求めるのに，それが出るまで時間がかかりすぎて労働者の権益保護への提供という観点からすれば，司法上では有効な救済措置とは言い難い。

労働力市場政策では整合性が欠けている。一般的に言えば，就業保護（労働保護）が低いほど，労働力市場は柔軟性がある。そして，労働力を有効的に配置することができると考えられる。しかし過度保護や過度な柔軟性が労働力市場に機能不全をもたらす恐れがある。そこで，中国の労働力市場の改革は必ずしも労働者の保護を完全に撤廃するのではなく，労働力市場の柔軟性と硬直性を両方に配慮すべきである。現在中国では積極的雇用政策を柱とした労働力市場政策がすでに初歩的に形成されている。労働力市場において保護政策の重点はすでに就業保護から失業保護へと転換した。このような政策転換は市場経済化の方向と一致している。しかし，市場転換過程において経済の市場化に伴い，労働力市場政策がすべて市場構成員に対して配慮できなくなり，労働者の保護面において不平等現象が起ころう。労働者の身分はある程度で保護を受ける基準となっている。労働力市場においてこのような政策上の問題を原因により差別現象が拡大している。現在，中国の労働力市場保護政策の対象は主に国有企業のリストラ者である。非国有企業のリストラ者は対象外となっている。さらに出稼ぎ農民（農民工）は政策上から排除されている。こうした政策が中国は計画経済から市場経済へと移行段階にあることと密接な関係がある。経済体制の変革や構造調整などにより国有企業に最も影響しているからである。このような労働力市場の保護政策の偏りはむしろ国有企業のリストラ者に一種の補償として理解できる。長期から見れば，このような偏りは国有企業の改革につれて次第になくなるはずである。なぜならば，この偏りは実は労働力市場において不平等を起こす原因であるからである。

### 3. ALMPs (Active Labor Market Policies) とは

ALMPs とは，消極的労働市場政策 (negative or passive labor market policies) と対照して積極的労働市場政策の略語である。ここでいう「積極的」ということは良い労働環境を恵まれない労働者（しかも労働意欲ある労働者）に労働機会を提供することや，労働環境を改善することにより労働者の就業を促進することである。つまり政府の政策介入による雇用環境づくりということである。ここでは労働者が労働市場への参入をやすくするために，政府介入の重点を労働力市場の制度整備におくことである。

これに対して消極的労働市場政策では政府は景気変動による失業状況への影響を判断し

て政策介入を行うのではなく、完全に労働市場の調整機能に依存する。要するに、経済成長過程において好景気である場合、失業率を下げ、逆に景気不況が発生した際に、失業率が上がる。こうした景気循環プロセスによる発生した失業者を救済するという目的である。給付金などの生活支援により失業者がいかに迅速なおかつ安全に労働市場から退場することができるのが狙いである。

外延からみると、ALMPsとは政府は失業者を新たに労働力市場に参入できるように積極的に支援を行うことである。在職者も含めて職業訓練を通じて労働技能の向上や、新しい仕事に適応する能力を高める政策措置といえる。その主要内容は次のとおりである。① 無料で失業者に就業サービスを提供、② 無料で職業訓練を行う（訓練期間では特別給付金を支給し生活を支援する場合もある）、③ 現行の失業保険制度を見直す。従来の失業保険では基本的に失業者の基本生活を維持することが目的である。一時的救済という意味合いは非常に強い。そしてALMPsの政策理念として失業保険は失業者の基本生活水準を一時的に維持することではなく、失業者がいかに速やかに労働市場に再参入できるように支援することに重きをおくということである。失業者の就業を支援する社会行動（企業行動・個人行動など）に奨励するとともに、それに関連する活動をサポートする。④ 企業側に雇用助成金を支給する。企業が失業者を雇用する際、雇用した人数によって助成金を支給する。また、企業が失業者の職業訓練を通じて雇用した場合をも助成金対象となる。⑤ 創業環境整備、たとえば創業プロジェクト・中長期雇用計画などを経済成長戦略に取り入れることにより雇用増加をはかる。⑥ 再就業を目的とした一時的雇用計画（たとえば、ワーキングプア）の実施などがあげられる。

以上述べたALMPs政策の主要内容は、これまでの工業化市場経済国が実施した消極的労働力市場政策と違っている。いままでの政策では失業者を優遇する給付金を支払い、つまり失業者に福利厚生を提供することによって失業者の労働力市場への復帰を目的とした。要するに失業者の福利厚生水準を維持することにより失業者の労働力市場への復帰を促す。失業者が失業期間において基本生活水準を維持するという。失業期間において失業者の基本生活水準を保障するということで失業者の労働意欲を維持するのが目的である。

このような政策転換は市場メカニズムを労働力市場に導入することによって就業サービス体系の充実をはかる。従来では個人意識による失業者の再就業行動を考えると、個人の行動範囲や社会的活動能力に依存する。こうした個人的再就業行動は政府のマクロ政策の内容とリンクしてその発想自体には意義が大きい。ALMPs政策の目的は職業訓練などの就業支援活動を通じて失業者を労働力市場に復帰できるように支援する。そして政策ビジョンとしては社会全体の就業規模を拡大し、雇用情勢を改善して最終的に労働者の完全就業を目指す。

実は、このような政策転換は1960-70年代における経済情勢の変化と関連している。

1960-1970年代では経済発展には新たな変化が見られた。次のようにまとめることができる。

まず、マクロ経済では新たな均衡成長を遂げる過程に、インフレ抑制政策の失敗で総需要調整を目的とする財政政策や貨幣政策は直接完全就業の目標を影響している。さらに部門間・地域間の格差拡大により若年失業率が急速に高まった。同時に経済停滞によるインフレが上昇したため、欧州諸国経済全体に大きいな打撃を与えた。これに加えてグローバル化の進展や国際分業の加速でそれに対応できる経済体制を求められている。つまり産業間における労働力需給調整は国際経済情勢の変化に応じて頻繁に行われなければならない。ここでいう需給調整は産業間における流動性を高めるという意味である。諸工業化国家および経済協力開発機構（OECD）諸国は次第にこのような共同認識ができた。要するにこのような相対的失業不足は過去のように短期間で解決できることはほぼ不可能となっている。地域間・産業間の労働力流動ができるように労働力供給構造は労働需要構造と適応しなければならない。そして、競争の熾烈化による企業間においても労働力流動は必要となってくるので、衰退産業から新興産業への労働力流動は重要である。また、地域間における雇用不足による過剰供給といった需給構造の不均衡状態にある。労働力市場全体には労働力の適応性が求められている。そして、失業率を下げてとくに長期失業者の減少または若年失業者を減らして失業周期の短縮を目的とした政策転換はこの時期におけるマクロ経済政策の特徴であるといえる。

次に、経済理論の発展はALMPs政策の誕生に理論的根拠を提供した。1960年代以前では主にケインズ主義だったが、1960年代になってから失業率が急速に上昇したと同時にインフレも上げるということはケインズ理論も予想できなかった現象が発生した。さらにTobinの理論研究の進展による積極的労働市場理論の登場でALMPsに追い風となった。労働力市場における需給構造の不均衡の原因は過剰需要と過剰供給が同時に存在していることは重要な要素と考えられる。つまり、労働力市場においては過剰需要を補充できない一方、過剰供給は失業という形で存在している。そこで、いわゆる労働力市場の均衡は失業がないという状態を意味する。このような労働力市場の不均衡状態が回避できないのは賃金の硬直性があるからである。失業水準の上昇速度は賃金率の減少速度より遅いから、失業率の変動がインフレ率への影響はほとんどない。さらに過剰需要は過剰供給より大きければ大きいほど賃金の増加は速くなる、インフレ率も上昇する。失業が発生した場合、市場の分散性と市場構造の変化による市場の不均衡状態が生じる。インフレはこのときに回避できなくなる。そこで、失業、完全就業と物価安定三者には矛盾となっている。インフレはゼロである場合、

失業者数は過剰需要より多い。Tobin 理論は財政政策と貨幣政策だけ有効需要の調整ができないため、やむをえずほかの政策介入が必要となっている。その主な内容は労働力市場政策による就業指導目標の実現や所得上昇政策となっている。賃金上昇率・物価をコントロールし賃金率上昇は労働生産性より遅くなるために、インフレ上昇が抑制される。

労働市場政策とは政府投資による市場構造の調整機能を強化することである。その主な目的は構造的失業を減らして失業問題と過剰需要・過剰供給問題をセットにして解決しようとするものである。具体的には、労働集約型産業への優遇政策、在職人員の職業訓練施設の充実などがあげられる。産業構造の変化に対応できるように職業訓練を通じて労働力における産業間の流動は産業構造の変化に適応する。また労働市場における情報の非対称問題を是正する。職業斡旋（職業紹介所）など就業サービスの充実なども挙げられる。

ALMPs は経済情勢による労働市場政策の転換が必要である。政策介入方式や財政投入の重点などを就業維持する政策がしばしば使用される。成功の例として 1964 年から OECD 諸国はこのような就業促進政策を利用して失業率を下げた。

#### 4. ALMPs 政策の主要内容とマクロ政策の関係

ALMPs 政策は創業環境整備などが含まれる。政策目標は「インフレなき完全雇用」を目指すものである。具体的な政策措置としては、緊縮財政政策による過度需要を抑えることでインフレへの影響を減らす。しかし緊縮財政政策の実施には失業率の上昇を招きかねないため、失業率が上昇に転じた時点では雇用拡大政策を講じなければならない。つまり二つの政策をセットにして実施することは効果的である。こうした政策選択は非常に重要である。一般に、製造業には労働力の吸収力が期待できる。しかし、製造業の建設周期が長く短期的には雇用効果は期待できない。大型公共事業では膨大な投資が必要となっているにもかかわらず、長期雇用効果は薄い。であるから、雇用効果を期待できる産業を選んで財政支援が行わなければならない。このような財政支援は産業全体規模の拡大をさせるのではなく、職業訓練などを通じて失業からの影響を受けやすい低利潤企業の労働者が高利潤企業へと移動をできるようにする。このようにすれば経済構造の調整はスムーズに行える。産業構造調整の代価は労働者個人に転嫁するのではなく、社会全体が負担する。この過程では労働組合からの協力が必要である。高利潤企業の賃金体系は生産規模の拡大を圧迫する場合、労働組合の柔軟対応が求められる。他方、低利潤企業では生産性の上昇を目標にして企業努力しなければならない。

ALMPs 政策の主要内容は具体的に次のとおりである。

- ① 就業サービスの充実（職業訓練指導等システムの強化）：労働者が有する労働技能を如何に最大限に発揮させる。これは労働者素質にも関係あるが、外部環境とも密接な関係がある。就業サポートが必要で労働者の研修や職業再訓練といった労働環境を保障する。つまりこのような研修を受けるのは一種の権利として制度化する。さらに労働者の職業生涯にわたる職業能力の開発及び向上を段階化及び体系化することは、労働者の転職や産業間における流動に対して不可欠なことである。むしろ将来においても経済発展とあわせて労働力育成の流れとが必要なものとは言えない。実は、このような試みは多くの国では20世紀60年代から実施してきた。衰退産業の従業員が如何にスムーズに再就業できるように、新しい職場の適応性の育成に力を入れた。EU諸国では相次ぎ給付制度を創設し、失業者に給付金を支給することや、在職者の職業訓練・研修（再研修）などを行われた。そしてこのような給付金制度や研究制度は工業化社会の基本原則のひとつとして認識されたようになった。
- ② 特殊な労働者層への配慮：ここでいう特殊な労働者層とは、仕事経験がない、身体障害者、女性、若年労働者、長期失業者、年寄り、家庭主婦などを意味する。
- ③ 産業間・地域間における労働者の「流動化」を促進する。財政面から労働者の流動化を支援する。労働者が労働力の過剰地域での創業を奨励する。労働者の移動コストを軽減できるため、財政はこのような創業活動を奨励し補助金が支給する。たとえば、賃金の代わりに衰退産業の従業員に一時金を支給し、衰退産業の従業員を新規採用対象とした企業は税金などの面で優遇される。また、労働力過剰地域の投資も奨励し優遇政策の対象となる。このような諸政策をパッケージにして労働者の再就業を促進する。
- ④ 機能向上する機会の提供：人的資本とは労働者が有する生産に有用な能力を意味する。教育や訓練など、この能力を高めるの支出を投資として考える。在職・失業者とも問わず労働意欲がある労働者にできるだけだけの研修機会を提供する。しかし、こうした結果は、登録失業者が増え、社会全体の就業率は減少となる。給付金を受けた労働者がこの期間を利用して労働技能水準を上昇させる。つまり、全体として就業率の減少を職業訓練の機会として捉えるわけである。そして、景気の復調により生産規模の拡大に伴った労働力供給は迅速に対応できるようになる。社会全体の就業規模の拡充にも繋がる。つまり、景気循環に伴って産業が衰退期間においては労働技能向上をはかる。失業期間では失業者が労働予備軍となる。景気が回復してくると、失業者（労働者）が景気回復に必要とする技能は備えているから、景気が好循環に入った時点ですぐに就業規模は拡大できる体制がすでに出来ている。また、行政サービスを機能させ、企業と労働者の間に雇用契約を締結させることによって就業総量を維持する。

- ⑤ 雇用機会創出：季節的失業を避けるため、仕事繁忙期・閑散期を問わずに、雇用機会を均等にする。経営困難の企業に低金利融資等を通じて財政支援を行い、企業の財務状況を改善し企業体質を強化する。要するに、企業の生産活動が正常にできるように支援する。その目的は大量失業者が一気に溢れることを防ぎ、就業規模を維持する。また、新規採用（とくに長期失業者を採用する場合）を積極的に行う企業を支援する。公共事業部門の雇用や、民間企業（部門）における雇用機会の創出を奨励する。企業が地域に跨る雇用機会を創出し失業者を採用した場合、奨励対象となる。具体的に雇用者数と企業への補助金をリンクする。個人投資による雇用創出も奨励する。ベンチャー企業を設立した場合、創業資金の一部が補助される。そして従業員の賃金を政府から負担できる場合もありうる。要するに社会全体で失業者を負担するという考え方である。

各諸国の経験からわかるように、ALMPs 政策の実施は労働市場の完備が前提条件としていいる。充実した就業支援体制と職業訓練施設の完備はALMPs 政策の実施を保障する。そして、政府の財政投入が GDP に占める割合は比較的大きい。労働市場管理スタッフの素質が高くて市場管理ための予算が充足している。つまり、マクロ経済政策環境や健全な労働法律体系が整っている。

現在、市場経済国家は雇用問題を解決するため、その主要な方法は ALMPs 政策に依存している。周知の通り、ALMPs 政策の実施はマクロ経済政策とセットにしなければ効果はない。つまり、経済成長と積極的財政政策、内需拡大、産業構造調整などマクロ経済政策の核心部分とリンクする必要がある。そして国有企業の民営化、地域経済、社会保障体制などと一緒に考えなければならない。これは異なる歴史段階における中国の経済発展史からもいえることである。国外の経験もすでにこのような事実を証明したといえる。

しかし、失業保険は消極的作用がある。つまり直接には雇用機会が創出されないにもかかわらず、失業者の労働意欲が喪失し、仕事復帰が遅らせる場合もある。この意味では雇用促進のための財政投入を拡大する際には、とくに失業保険基金の使用方法も改善する必要がある。日々増加している失業給付者に対して地域経済が先行している地域では、財政投入は失業給付基金だけでなく、再就業に投入すべきである。財政の累積剰余金を有効に利用して再就業を促進する。

労働力市場の就業支援体制の整備は最終的に雇用促進を目的としている。労働力市場では需給双方に情報提供や法律保障などを提供する。つまり、求人企業は積極的に求人情報を提供して求職者が自ら積極的に就業サービス部門に登録するように労働力市場から積極的に話しかけることは重要であると同時に、個々の労働者のニーズを対応できる体制づくりはこれからの方向である。個人起業への支援策においてはまず政府は自主就業を奨励する。政府

は就業サービスを通じて個人の自主就業を促し、個人の職業選択が広がって就業意識が高める。ALMPs 政策は計画経済期のような政府が計画的に失業者に仕事を配置することではなく、市場状況に基づき一時的失業者または就業できない失業者に充実した就業サービスを提供するだけである。就業サービスの提供は一つの過程である。しかもそれは漸進的過程であるから、失業者の生涯にわたって就業機会を提供する。しかし、就業機会があっても就業できない人には特別な援助が必要となる。

## 5. 中国の ALMPs 政策の問題点

ALMPs は主にマクロ的政策介入による雇用促進を目的とする。ミクロ的から見れば、ALMPs 政策は主に政策手段を利用して労働力市場に介入すると考えられる。市場メカニズムは労働力市場を介して労働需給を調整する。しかし、市場は効率を基準としている。これに加えて労働力はただ生産要素の一つであるから、労働需要は資本と同様に派生需要で生産需要によって調整を行われなければならない。ALMPs 政策は人的要素や政策設定者自身の社会価値観の判断が含まれているから、市場と矛盾する点もある。さらに、市場自身も欠陥があるので、労働力市場には差別問題が存在しているように市場自身にも問題がある。つまり分断化した労働力市場自体は市場参入の障壁となっている。

なお、構造的失業は労働者本人とは関係ない。それ自体は労働力市場による解決は不可能であるから、政府は労働力市場を通じて介入することは必要である。政府は市場の欠陥部分を補い、社会全体の福利厚生水準を最大化にして重要な役割を果たしている。具体的には政府の介入は労働集約産業の振興や正規教育の発展により労働者素質の向上によって労働供給水準が上昇させる。職業訓練や就業指導を通じて労働供給構造に影響する。また、法律制定による労働差別をなくすため、法的根拠を明確的に提供すると同時に男女平等や雇用機会均等を目指す。

政策の目標対象は非常に狭くて一部の人に限定しており、多くの失業者（あるいは求職者）が政策から恩恵を受けられない。この意味では中国の ALMPs 政策が排除性は強くて普遍性をもっていない。政策対象は都市部の四種類の人に限られている。① 国有企業のリストラ者、② 国有企業の失業者、③ 国有企業の民営化に伴った仕事を待機する者、④ 最低生活保護を受けて一旦失業してから1年以上である失業者、実際は援助を受けた人はほとんど国有企業からのリストラ者であるのが現状である。これは計画経済期から残った悪影響ともいえる。本来の ALMPs 政策は、すべての失業者を対象としなければならない。すべての援助が必要とする人を対象とする。中国では今後、工業化・都市化・近代化過程において失業問



題が長期的に存在すると考えられる。経済構造や社会構造も絶えずに変化していく。そこで、すべての対象に援助を行うのは本来の政策である。たとえば、集団所有制企業の失業者や大学生・私営企業・外資系企業などを含めた ALMPs 政策は望まれる。中年失業者以外に大学生の失業者、高校生の失業問題も存在し、ほかには農村労働者をも政策対象から排除され労働力市場に弱い立場に置かれた農民も対象とすべきで公共財政政策の恩恵を受ける。実際は中国の ALMPs 政策の限界効果が大幅に逓減している現象の原因が政策対象の排除性によるものだと考えられる。

財政からの支援は不足している。現在中国 ALMPs に関する財政支出は GDP に占める割合は 0.4% にしか過ぎない。20 世紀 90 年代以来の OCED 諸国では大体 ALMPs 政策を採用しているので、財政支出は大体 GDP の 2% くらいである。これらの財政援助は基本的に労働力市場の運営経費に当たる。中国は、都市部に集中した失業者を解消するため、中央政府と地方政府が資金を出しあって雇用対策支援基金を作った。援助が必要な人が適切に支援を行う。失業者のための安全網（セーフティ・ネットワーク）を整備するため、政府が一時緊急対策ではなく、安定なおかつ持続的政策が求められる。現段階では、雇用対策支援基金は国が四分之三、地方政府が四分の一を負担している。国と地方政府が資金を出して「社会的包摂」という考え方である。

中国の ALMPs 政策が国有企業リストラ者向け緊急雇用政策は一種の救済策にすぎない。ALMPs 政策は基本生活保障対策（最低賃金法）とは違う。ALMPs 政策は求職者に仕事を用意することと雇用環境整備である。基本生活保障対策は、あくまでも働くことができない人たちの最低限度の生活を支えるシステムである。恩恵を受けた人たちの多くは働けないわけではなく、労働力市場から排除された。労働意欲があっても参入障壁の高い労働市場で労働力として評価されないのである。ALMPs 政策の基本理念は失業には個人の責任だけでなく、企業並びに社会全体にも責任がある。であるから、国が財政支出し、失業対策事業として対応すべきである。

そして、中国はまず労働総需要を拡大する必要がある。就業規模を拡大すると同時に就業構造を調整し失業率を下げ、完全就業を目指す。労働需要は派生需要であるから、労働需要の数量調整は単純に賃金調整によるのではなく、生産品市場からの影響を受ける。労働力市場では過剰供給が呈した場合、政府はマクロ的政策介入により合理的な調整が必要である。さらにマクロ的に見れば、ALMPs は雇用促進を目的とし、マクロ的経済政策体系の一つ重要な要素だと思われる。雇用は経済成長を前提としながら、経済成長の恩恵も受ける。つまり経済成長に伴って雇用を拡大しているからである。このように景気循環と同様に雇用も良性循環ができる。さらにまた、雇用目標を成長戦略の中長期目標の一つとすればより雇用政

策の実現が容易となる。

なお、産業構造転換や経済成長方式を選択する際にも、経済成長の目標制定（GDP 成長率）は雇用目標とリンクすることはマクロ政策の決定過程において重要である。マクロ政策決定過程においては、市場安定や経済成長、社会公平、完全雇用などの目標が挙げられる。しかし、経済成長の諸段階においては政策の重点が異なる。現段階では中国は雇用増加をマクロ政策体系の重心として考えられる。いかに高度成長下の雇用増加ができるかが問題である。そして経済構造の調整による失業問題を解決できるかを検証する必要がある。産業構造や企業構造の変動から見れば、中国の中小労働集約型企業の発展が不可欠である。また、労働力が供給過剰状態である地域には地方政府からの財政投入が必要である。中小企業を支援する体制の整備により経済成長と雇用促進を両立する。就業規模が大きい民間企業（とくに第三次産業）の発展にも力を入れるべきである。

現在、都市部では労働需給がアンバランス状態である。農村は巨大な過剰労働力が抱えている。都市農村間における労働力流動を促進するために制度整備が必要である。つまり、労働力を市場による配置が実現できるか否かは身分制度による社会福祉制度（社会保険）などの制度的障害を廃止することに関わる。ALMPs の基本的な考え方は制度創設改革による労働力の流動を促進することを制度上で保障する。そして、自主就業も政策の重点となっている。労働力資源は労働力市場を通じて合理的に配置する。労働力市場は労働力資源配置の基礎でも手段である。労働力市場政策を社会保障とセットにして雇用登録制度の実施や就業基本構造調査などを通じて社会全体が就業率の向上、社会公平などをはかる。

また、労働力市場における主体は労働力だけであるか、それともほかにも存在しているかを検討する必要がある「制度設計なき改革」を改善し、労働力市場における諸関係を再整理すべきである。労働力市場における政府の役割は何であるか、企業・個人・労働組合は労働力市場と関わる。ALMPs 政策の実効性を持っているか否かについては三者の間に協力関係があるかどうかに関連する。労働管理行政部門は組織として市場との協調を行う。政府は直接介入するのではなく、労働力市場を通じて間接的介入して労働需給の均衡を調整する。最終的には完全就業を目指す。

## 参 考 文 献

- 郭 継巖・王 永錫『2001-2020 年中国就業戦略研究』中国経済管理出版社（北京）、2001 年 6 月  
 郭 克莎『工業化与城市化関係の経済学分析』中国社会科学 2002 年第 2 期  
 王謙・郭震威「人口増長对経済増長の影響分析」人口研究 2001 年第 1 期  
 劉燕斌『面向新世紀的全球就業』中国労働社会保障出版社（北京）、2000 年  
 国家統計局『中国統計年鑑』2001～2005 年版、中国統計出版社（北京）

## セース・ノーテボームを読む 2

### 『熱帯物語』と『騎士の死』

吉 用 宣 二

#### 『熱帯物語』(1958)

オランダは小さな国である。車で数時間も走れば、横断できる。オランダは干拓し、土地を作った。海の向こうに広大な植民地を作った。私が言いたいのは、コロニアリズムのことではない。それは、他者、非ヨーロッパ世界との遭遇でもあった。西欧がアフリカ、アジアなどをどのように見たか（それは同時に、ヨーロッパ文明とはなにかという自己反省となる）ということである。それは文学の形でも刻印されている。同様に植民地国家であったイギリスのサマセット・モームのように、オランダにもたとえば中国を舞台に描いた Jan Jacob Slauerhoff のような作家がいる。このノーテボームの熱帯を舞台にした短編集は、オランダ文学の伝統に即しているのである。物語の起源は、『オデュッセイア』がそうであるように、異郷から戻った人が、そこでの出来事を語ることにあったのだろう。だからこの熱帯を舞台にした物語は、語りの正統に連なっている。

これは 1958 年に出版された。その 30 年後（1999 年）の改版にノーテボームは「後書き」を書いている。

「おととい、私は自転車で IJ 川にそって走った。それは 12 月の寒さの穏やかな日曜日だった。Schifffhaus 博物館の前には、その高いマストをもった Amsterdam の複製が氷の灰色の空の前に横たわっていた。船の上の水夫たちが挨拶をし、私は返答した。私が彼らに語りことができなかったことは私もまた 1957 年に全く同じ場所に立っていたということである。それは 6 月だった。私は軽水夫として Gran Rio に雇われた。それはリスボン、タイ、英国領ギニア、スリナムなどに行くことになっていた。その波止場に当時の 23 歳のやせた男を想像することは私には困難だった。この最初の大きな海の旅に私はロレンス・ダレルの『アレクサンドリア四重奏』を持っていったが、多くは読まなかった。昼の間私は過酷な仕事をしなければならなかったし、夜には、とりわけ、14 日間続いたトリニダードへの渡航の際には、息をのむような星空があった、絶えることのない波、自分たちの物語を持っていた他の人たちの声、その後、最初の熱帯の港の、当時の私にとって圧倒的な経験があった。しばらく私

は、Paramaniboにとどまった、そしてアルミニウムの船でMoengoへ旅した、AlninaでMaroniを横切り、Saint Laurent du Maroniに行った。これらの旅の沈殿がこれらの物語のいくつかには見出される。この物語集は1958年に現れた。第二版の際には私は2編を削除した。それはひょっとしたら、人が、もう二度と再会したくないものを書いてしまったことがあるという経験である。それゆえ私は30年間もこれらの物語の新しい版に同意することを拒否してきた。いま再び眺めると、それらは今はもう存在していない世界からの物語となった、しかしそれらは今も私の物語である。それらの物語の著者が、私がほとんど再認識しない、見知らぬ人になってしまったにもかかわらず。他の人たち、水夫や、死んだ王、Arthurなどを私は再び認識した。『Phantasma』（1972年）を付け加えた。私はそれを謎として書いた、それはWiliam Maisenの絵とともにAvenue誌に現れた。その舞台はGran Canaria。この島もそうこうするうちに絶望的に変わってしまった。その無名の放浪者は、放浪をその文のようにすることはできないだろう。かつて1957年にオランダが自分の後ろに消えていくのを見、もう完全には戻らなかった著者と同様に」（S. 217）。

この短編集は旅の中から生まれた。ノートボームは膨大な量の旅行記を書いているが、それは、言葉の真の意味で「記録」である。見知らぬ世界の、今はもう最終的に消えてしまった時代、人間たちの姿の記録である。

### 『恋する囚人』

「旅の中でこんなものを見た、聞いた」という、物語の起源のようなスタイルの短編である。それも舞台は、フランス領ギニアのSaint Laurent。フランスの流刑地があったところだ。映画の素材となるような、クリシェ的な物語を過剰に孕んでいる場所だ。さらにテーマは、囚人の恋である。それはあまりに、ロマン主義的なので、語られる前から、人はすでに聞いたように思う。それにも関わらず語るためには、そのクリシェを迂回する、そのクリシェをクリシェとして浮かび上がらせる、要するにパロディによるしかない。それかこの短編では、本来の「恋する囚人の物語」に至るまでの描写によってなされる。それによってその本来の物語がクリシェ性をはがされ、始源的な事件性を見せる。

一体、物語は誰が語るのか。20世紀の文学では、語りの主体は自明なものではない。この短編の中で、語り手である「私」は旅行者である。

「時々私は自分が狂っているのではないかと自問する。私は旅をし、旅をしている。そして私は旅から何を持っているのか。〈…〉ここAlbinaですでもう我慢できない。私はもう一か月もここにいるかのように思われる。二日過ぎたばかりであるが」（S. 144）。その地方は、

想像できない暑さとして現れる。「熱は私を一種の鉛の意識喪失の中に駆りたてた、その中から私は一時間もすぎないうちに汗まみれで、朦朧として眼が覚めた、太陽と蛇の不安夢の真ん中で」(S. 144)。熱帯の強烈な風土の中で、それまでの「私」が溶解する。「私」という存在が曖昧になったところで、「私」は van Elk に会う。「ほとんどまん丸い顔の中にルビー色の眼が短いピンク色の豚の剛毛の眉毛の保護の下にきらめいている」(S. 142)。Van Elk はある大きなオランダの木材会社の社員で、すでに長年熱帯に暮らしている。Van Elk は、蝶の収集のために時々 Saint Laurent へ行くことを語る。そこに彼のために蝶の標本を作っている一人の男がいる。その男は流刑地から釈放された元囚人である。そして話は van Elk に導かれて、展開する。

翌朝、「私」は van Elk とインド人のボートで Saint Laurent へ行く。中国人の村。「ここだ、よく見たまえ、そんなものを君は人生で二度と見ないだろう」。蝶の標本を作る男。「ほとんど裸の恐ろしい刺青をした男。70 歳に近いだろう。眼を開くと、それは崩壊した宮殿の中のヴェネツィア・ガラスのようだった。彼の声。私はすぐにフランスの Midi のアクセントを認めた。それはこの環境の中ではきわめて非現実だったので、起こっていることが現実なのかどうか自問した」。そして彼の妻の、「肥った、おおよそ 50 歳の女」。「彼女の顔は仮面だった。ひとりの悲しい残酷な神のためにつくられた仮面。その仮面は動かない。それは木からできている。凝視する石の眼は後で嵌めこめられた。黒いかすかに光る髪が彼女の周りにたれている。なぜだかわからないが、その顔は私を不安にさせた」(S. 147)。

Saint Laurent は「私」の旅の目的であった。そして「よろしい、私はすべてを見た。その絶望的な中庭、そこには粗い草が石の上に茂り覆い隠している。壁の上、高いところに格子をはめられた四角形のある、殺風景な湿った独房。〈…〉ギロチンへの魅力的な、公園のような道。ギロチンのあった場所は、その土地固有の茂みで囲まれている」(S. 148)。これはしかし、流刑地のステレオタイプのイメージである。「私」が求めているのは、そんな自分のイメージを揺るがすような異質な事件である。それを、蝶の標本を作る元囚人がほのめかす。彼は元看守に、「あの球」を見せるように言う。「その鎖のついた球は、囚人が屋外で働くとき、囚人の足に結び付けられた」(S. 147)。看守は話している間、その老人を一時も目から離さなかった。これまでの描写はすべて暗示的だった、そしてその暗示が指示している謎が今、その元囚人の老人によって語られる。

彼がフランスからここに送られるとき、そして牢獄でも、サーカスでアクロバットをしていたアルジェリア人と一緒だった。「屋外で労働に行くとき、ある混血の少女が Jean に挨拶をするようになった。その少女は可愛く、半ば白人、半ばインド系だった。彼女が Jean を見るときいつもすぐに下げた眼は大きく、凝視する黒さを持っていた。Jean は彼女に惚れた。

労働に向かう途中で、少女は素早く *moi, fruit, bongo* と言った」(S. 150)。「今はじめて、彼が囚われていることが明らかになったように見えた。鳥が捕まえられているように、動物園の動物のように。自分が恋するという役を持っていないことが」(S. 151)。日曜日、何も起こらなかった。月曜日、看守の *Grenier* が *Jean* に「おまえの恋人は来ないね」と言った。「一群の臭い鳥がおれたちの上方を飛んでいった、ひどくゆっくりと。おれは災いを感じた。この日はとても暑かった。風景のわずかな色がおれたちの眼の中に飛び込んできた。目が痛んだ。〈…〉後に *Grenier* はおれたちのところに来た。「〈昨日 *Jean* に面会があった。われわれの恋人、本当にかわいい娘、果物を持って。彼女は *Jean* に会えるかどうか尋ねた。もちろん、でも一つの条件でね〉。彼はみじかく話すのをやめた、彼の言葉の効果を待つために。おれは *Jean* を見た。おれは *Grenier* が何を言うのか知っていた。 *Jean* もまた。おれは何かを言いたかったが、口は動かなかった、 *Grenier* は *Jean* から2メートル離れて立っていた。彼の薄い、意地の悪い声は、新たに高まった。〈ひとつの条件で。おまえは看守に優しくなければならぬ。愛が何を引き起こすかは驚くべきことだ。彼女はすべてをした。そのあとで突然私は、囚人の面会を許すことは規則に反すると思いだした、それを私は彼女に言わねばならなかった…〉。彼は彼の文を終える必要がなかった。彼は *Jean* が自分に向かってくるのを見たとき、銃を抜こうとしたが、すでに遅すぎた。右手の球を持って *Jean* は素早い電光に似た跳躍をした、そうして彼は彼の左手で、足を宙に上げて着地し、そのサーカスの姿勢からその跳躍が彼に与えたすべての力を込めて、 *Grenier* の頭に鉄球を打ちつけた。 *Grenier* は即死だった。 *Jean* は死刑判決を下され、大統領が恩赦を拒否した後、処刑された。おれは *Jean* にもう話せなかった。 *Jean* はひとり耐えなければならなかった。「少女は」と *Elk* が尋ねた。「老人は彼を鋭く見た、グラスを飲み干しながら。彼はグラスを優しく脇に置いた。〈おれが出所したとき、少女と結婚した。あなたは彼女を今朝見た〉」(S. 152)。

これか悲しい愛の物語である。熱帯の風景の描写が重ねられ、それが凝縮して、愛の物語を取り囲んでいる。物語の本来のテーマは「惚れた男の愛」であるが、たとえばかなりの部分を占める風景描写、それまでの時間の経緯の描写がなく、元囚人の話だけがあるとすれば、この短編の力は失われるだろう、それとともに、この愛の物語も衝撃的な力を失うだろう。その愛の物語自体は、もしかつての流刑地 *Saint Laurent* という背景がなければ、ほとんど凡庸と言うべきものだ。つまり語りがこの短編の力を決定している。そしてこの語りは、男の話よりも、 *Saint Laurent*、熱帯の風土に向けられている。それは非ヨーロッパ的な地方である。文明の規範が無効になる場所だ、だからこそそこは流刑地、つまりヨーロッパが他者として排除した土地になった。流刑地はヨーロッパ文明のいわばネガである。そこでは風土が、かつてのギリシャ悲劇における運命のように、すべてを支配している。人間は岩に生え

た苔のような存在である。卑劣な看守も、Jean も少女も、その元囚人も風土に支配された存在である。「私」もその劇に参加するためには、ヨーロッパ的な自我の解消を強いられるのだ。看守を殺して破滅していったJeanは、熱帯の風土（西欧文明の外部、他者）の中に投げ込まれた近代人の姿なのである。

パヴェーゼの『流刑地』の、辺鄙なところとはいえ、同じ国の、それも緩やかな幽閉とかたちの「流刑地」と Saint Laurent の過酷なそれを比較することは出来ないのだが、ヨーロッパ近代が持つ「流刑」のイメージには、自己イメージのネガが現れている。そしてそこに見事に欠落しているのは、その「流刑地」にもともと暮らしている人々の姿である。この物語の最大の被害者はあの少女である。そして彼女は石のように語らない。

### 『Huelva の小人』

『熱帯物語』における熱帯は、そこで物語が起こる背景なのではない。物語自体はどこで起ころうとも、同じような類型を示している。すべては語られているという認識から、20世紀の文学は出発した。だとすれば、その物語の舞台、「背景」こそ、物語が本来語るべき事柄となる。

そのような図式を考えずとも、例えば、熱帯の小さな港に、ヨーロッパ人の船員を置いたら何が起こるか、想定すればよい。それはどんなに想像力があっても、無から作り出すことができない構想である。そこでノートボームは、ノルウエーの貨物船が Huelva の港に入り、油さしのヘムスカーと、厨房の見習いのアーゲの上陸を設定する。その後で彼らに「自由に」行動させる。

「熱がちらちら光り、波止場の上にとかんとぶつかった。白い薄い埃が、二人の男たちの足の下で急に燃えた」(S. 154)。船乗りが上陸してするのは酒を飲むことに決まっている。

ヘムスカーはバーに入り、コニャックを注文した。アーゲがビールが飲みたいと言うと、「ヘムスカーはアーゲの方を振り向いた、まるで彼が今はじめてそこに誰かを持っていたことに気づいたように。彼の青い眼の中の光は冷たかった。彼は何も言わなかった。彼らは彼らのコニャックを飲んだ。〈それがコニャックかい〉とアーゲは尋ねた。〈それは燃えないぞ〉。ヘムスカーは笑い、ピンを持ってきて、一杯に注いだ。この茶色い、生温かい液体はコニャックではないとアーゲは考えた」(S. 155)。乱暴で、強いヘムスカー、気の弱いアーゲはこのように表現されるのである。

アーゲが「泳ぎたい」と言い、バーを出た。油さしは広場の半ば枯れたシュロの下で寝ていた、盲目の老人にコニャックを飲ませた。浜辺に小人がいた。「どこにそれは書かれてい

たのか。ヘムスカーの顔の中、眼の中にか。あるいは災いを告げていたのは、そんなにも近い海のざわめきだったのか、まるで走り去ろうとするかのように、小人が準備するほどに。しかし彼はそれをしなかった。彼は待っていた。油さしは一口飲み、残りがピンの底にはねて戻った。彼らの後ろの木の中で紙のような葉がさらさらと音を立てた。長い、狭い段ボールの手で彼は小人のメガネを正した」(S. 157)。

油さしはその小人をいじめはじめる。小人の本を切り裂き、「小人のメガネを取り、太陽に掲げ、眩しい太陽光線がその途方に暮れた眼の中に差し込んだ。アーゲはだめだよと言った。ヘムスカーは彼を殴った。ヘムスカーはメガネを投げ捨てた。〈とって来い〉。小人はアーゲの方を見たが、アーゲは砂の中を見ていた、不安の、暑さの汗が顔の上を流れた。ヘムスカーは小人に一撃を食わせた、小人はメガネを拾い、二人のノルウェー人を見た」(S. 157)。

アーゲは逃げ出そうとする。ヘムスカーが言うことをしてはいけないと思う。しかしヘムスカーに逆らえない。ヘムスカーは小人を踊らせ、小人は倒れ、砂に顔を向けて動かない。「ヘムスカーは小人を慎重に彼の枝でつついた。しかし小人はもう上を見なかった。アーゲは油さしが同様に不安になるのを見た。彼らはまたあまりにも一人だけだった。海、空、木、すべてが苦い小さな線で真昼にかかっていた。多くの小さな動物たちの音。それに油さしは不安をもった。ヘムスカーは小人のとなりにはひざまずき、その上着を取り、白いナイロンのシャツをズボンから取り去った。現れてきたのは、やわらかい白い肌の筋だった。アーゲは油さしがボールペンを取りだし、ほとんど愛をこめて描き始めるのを見た。アーゲは彼をやめさせようとした、あるいはやめさせようとしたと思った、というのは彼はなにもしなかったからだ。こわばって不動に立っていた、それは結局あまりにも美しすぎた。何度もボールペンはその白い肌の上を這い動いた。ヘムスカーの汗がその絵の上に落ちた。そこに生まれている、青い空想的な風景。ヒレのある木、こうもりの翼をもった馬、七本の花をもった女たち。すべてがごっちゃに震え、あえいでいた。幾本もの道がそのあいだを走っていた。摩訶不思議な動物たちが住む道、年の市に行く途中の犬に扮した悪魔、僧は渦の中で溺れ、ワシは子羊を食べ、山は割れる〈…〉。そして小人ががさがさと立ち上がり、走り去り、遠方に無のように消えるとき、ヘムスキーはまだそこに座っている、夢見心地にボールペンを宙に掲げた、安息日の困惑した創造者。彼らは寝りこんだ」(S. 158f)。

彼らは夕方に目が覚める。彼らは町に戻り、バーに入る。

「動物園の鳥籠のように女たちは座っていた。扇子を広げ、閉じる、そして二人のノルウェー人を見つめている。女たちはアーゲを混乱させる。彼女たちは美しすぎる。ここは大そう上品だ。それにあの扇子。彼女たちは大きな鳥のように、チュールの羽の中に座っている。恐ろしい眺めだ。一人の女が彼のところに来て、扇子であおぐ。アメリカ人？ 私を招待して



くれる？ ヘムスキーは飲み物をおごる。ただちに彼らは蝶のように周りをひらひらと飛び回られる。飲み、踊る」(S. 160)。

そして小人が登場する。「今、その小さな黒い男、クモの巣の上のこの大きな上品な顔が中心である」(S. 160)。小人は女たちに離れるように命令する。ヘムスキーは多すぎるお金をテーブルに投げ、逃げた、彼らは、二つの通りの後でタクシーを拾う。港の近くで、「ある野生の姿、ある物体がライトの中に飛び込んでくる。彼らは叫んだ。運転手が呪いながらハンドルを切り、水の中に走っていく」(S. 161)。

この物語では、『恋する囚人』におけるほど、熱帯の風土の描写はされていない。風土というよりもむしろそこで演じられる物語に眼目がある。そして西洋の人間が熱帯にいること自体がすでに歴史的な文脈を浮かび上がらせる。この短編はコロニアリズムの文脈で読まれるべきである。ヘムスキーとアーゲは西洋の植民地主義的な身振りを表している。ヘムスキーの行為は、カミュの『異邦人』の「太陽がまぶしかつたから殺した」を思い出させる。それもフランスの植民地アルジェリアが舞台であった。ヘムスキーが小人の背中に描く空想的な絵は、西洋が熱帯に対して描く、一方的なエキゾティズムのパロディであろう。結末はそのエキゾティズムの嘘が暴かれることを意味している。ノーテボームは、その母国の大きさから見ると巨大な植民地を有していた、オランダの人間である。ヘムスキーもアーゲも、パロディ化された自画像なのだ。

### 『ストックホルム、バルセロナ、ストックホルム』

この短編集の中でノーテボームは様々な表現を試みている。その一つの共通項は風土の力である。タイトルに地名が用いられるのはそのためだ。ストックホルムが舞台となれば、どのような物語が考えられるだろうか。私は真っ先に、Dear Old Stockholm (「懐かしのストックホルム」)を思い出す。スウェーデンはジャズの盛んな国である。この曲はもともとスウェーデン民謡だが、スタン・ゲッツが50年代に取り上げ、ジャズのスタンダードとなった(『ザ・サウンド』)。ノーテボームはジャズについて書いていないが、これはストックホルムの風土に触発されたイメージの問題である。ジャンルが何であれ、磁場に引き寄せられるように、一つの強力はイメージが形成されるのだ。それをノーテボームは、文学というジャンルによって、このように形象化した。

「速く、大げさに急いでその黒人はカーテンのところへ行った。しかし彼かがそれを開ける最後の瞬間に、腕を止めた、(ひとつの無力な立像)、そして笑った。あるいはいずれにせよ、笑った。それをひとはもちろん正確には知らない、しかし彼が笑った場合、それは自分

についてだ。彼にちょうどやってきた考えに対する一つの弁明。彼は向きを変え、誰も起こさないかのように、妻先立って歩いた。ドアで明かりを消し、再び窓辺に行った。彼はカーテンを押し戻した。雨が夕べの家々からうっとりときらめく灰色を作り出していた。一步一步部屋を征服していく、黄昏の光とともに海と秋の重い息が中に押し寄せてきた」(S. 162)。

彼は何か心に奪われている。物語はそれが明かされる方向に進む。彼は電話をかけ、何も言わず受話器を置き、外に出て、タクシーに乗る。郊外のある通りでその黒人は一人の女と会う。ここで、事情が明らかになる。女は2ヶ月前から毎晩彼が演奏するのを聞いた。

男は、今日が最後の夜で、次にバルセロナへ行くことを告げる。「時々電話をして、私が取ると、何も言わなかったのは、あなたなのね」。「アーモンドの花を見たかい、白い」。「カモメのように」と彼女 (S. 165)。彼は、彼女が彼の演奏を聴きに来るのを彼のためだと思っているが、彼女の思いはそうではない。「あなたがものごとをする限り、それらは単純だ。あなたがそれについて考えなければならないとき、さらに話さねばならないとき、突然それがナンセンスであることが明らかになる。いかなる冷たさも客観性も耐えない何か。不実、愛の不足、逃れるものはなにもない。生が少なくとも何かのように見えるために、いくつかの儀式を持ったナンセンスが生なのだ。例えば、毎晩そこへ行くこと」。「ナイトクラブで演奏する男たちは、牧師に似ている。聖別された行為の遂行の際の媒体」(S. 165)。彼は彼女を翌日の食事に招待した。その招待の際に、彼は彼女に2週間有効のバルセロナ行きのチケットを渡した。チケットが有効な最後の日、バルセロナの駅で黒人は彼女を探した。彼女は来なかった。「列車を降りた人は、彼らがその旅行のはじめに、2、3日前にストックホルムで二つのトランクをもち、髪を短くした少女を見たことを話すことができただろう。トランクを持つことを手伝おうとするとき、彼女は〈ありがとう、ちょっと待ちます〉と言った。そして駅にいた人は、彼女がその列車が出てもそこにとどまり、トランクをもって苦労して外に出ていったことを語るだろう。彼女は、その急行が Nonkoeping に近づくころに、おおよそ自宅にいただろう」(S. 167)。

これはもっと長い文章を書き連ねることのできるテーマだ。女はなにか、ほとんど実存的な問題を抱えている。男は、黒人のジャズのトランペット奏者だが、芸術家である。女は、芸術を、生の不条理を耐えるための儀式として考えているが、それは芸術家との生活を意味していない。彼女の生活の場を離れることは彼女の生の問題の解決ではない。そしてそれを黒人も知っている。二人の孤独な魂が、一瞬の間だけ共通の夢を見た。それは芸術の力である。Dear Old Stockholm。

## 『Hula』

短編集のタイトルは『熱帯物語』なのだが、舞台が北ヨーロッパである短編もある。もし風土に関して述べるならば、それは例えば、フェルメールの絵の中のような、北欧の透明な、冷たい、張りつめた空気である。バルイマンやカール・テオ・フォン・ドライヤーの映画の空気である。その空気の中に、モノクロームの、輪郭やコントラストが鮮やかに浮かび上がる。それは日常の堅固さをもっているが、ある日突然、その日常性が裂ける。事件は、穏やかな日常の中に不意に、紙が裂けるように出現する。それはすぐに元通りになるのだが、その裂け目は人間の心の中にいつまでも残る。その心の、あるいは魂の裂け目をこの短編は描いている。この短編は細密画のような緊密さをもっているので、説明するのが難しい。ここはほとんど丸ごと訳すしかない。

「最初に庭が現れた。庭の中のテーブル、その隣に再び芝生。その後ろに高い生垣。濃い緑の。彼はその後ろに何が来るのか知っていた。そこにすぐに家が建てられるだろう区画。その一部を彼は見る事ができた。その端に製材所。彼は読むことができた。Keverkaats 高級木材製材所。空気は湿っていた、秋だった。でも寒くはない、と彼の父は言った」(S. 168)。

「庭と彼の後ろの部屋のあいだで彼は完全に一人だった。お婆さんは誕生日だった。お婆さんは彼にキスをした。彼は父さんと母さんのにおいをかいだ。あるいは彼は彼らを聞いたのか。彼は振りむかなかったが、クロスのある丸い低いテーブルの周りに彼らは座っていた」(S. 168)。

「タバコのおいが彼のところに来た、彼の後ろに立ち、言った、〈外で遊ばないのかい〉。香水が彼のところに来て、彼の後ろに立ち、言った、〈アーサーが外にいるわ〉。それを彼は知っていた。彼は外へ出て行かなかった、においたちは再び自分の席に戻り、彼について話した。彼の父は彼をほっておけと言った、そして彼らはそうした。彼は窓辺に立ち、アーサーを見た。アーサーはとても小さく、家の方を見なかった。アーサーは、湿った草のあいだで車を引いていた。砂を砂箱から持ってきて、決まった区間を運ぶ、(回り道)、そして砂を池に投げ入れる。人が彼を見れば、彼は一台の車だった。彼はノロノロテンポで動いていた」(S. 168)。母の手が彼に一杯のレモネードを持ってきた。中に来て座らない？ ノー。「彼は外を見続けた。美しい。アーサーの周囲の静けさ。時々、何かの音もなく車が庭のそばを走っていった。砂を箱に、池に投げ入れる」(S. 168)。

「一つの大きな手が彼を運び、人の輪の中に置いた。彼の祖父の隣に。大きくなったね。本当に力強い。彼は頬をつねられ、髪をなでられる、キスされる。祖父は、アーサーはずっと小さい、でももっとすばしこい、と言った。霧があつて少し寒いのに、外で遊んでいるか

らね。彼らはみんな外を見た、草の中の赤い車を。そして笑った。それから彼は再び窓際に行くことが許された。彼が窓辺に来た時、彼は外を見た。車がすべり、池の中に入って行く。彼は見た。アーサーはゆっくりと厚い水の中に押し分けて入っていった。アーサーは車を離さなかった。家と彼の方を見た。車はすべての力でクラクションを鳴らし、水の中に滑り続けた。アーサーは深く沈んでいながら、彼を見た。アーサーの口は動いた。それから突然、黒い表面の下に消えた。彼は見続けたが、何も言わなかった。彼の後ろのいろんなにおいがごっちゃに入り組んで動いていた。ずっと後になって彼はそのすべてを知るだろう。コーヒーカップの音、皿の上にケーキのフォークの音、椅子の影、声。彼は座ったままだった。車が完全に沈んでしまったとき、アーサーがびしょぬれになって一度水の中から浮かび上がったとき、その後再び今度は最終的に消えてしまってから、ずっと後になって、彼は母親の隣に立ち、トルテとレモネードをもらった。ずっと後で、彼が溺れ、溺れる何百万もの悪夢の後で、彼がああ午後何を考えていたか思いついたのだった。それは困難ではなかった。その滑り落ちていくことをたどりながら、彼の考えは、Leverkaats 高級木材製材所だった。そしてその間を通して、反対の方向に、まったく明らかに、彼は思った、hula hula hulaと」(S.169)。

平和な日常世界が、音もなく裂ける。それは美とか恐怖とか不安とかの感情で表現できない経験である。ひとはただ魅せられる、麻痺するしかない。それには日常のモラルは通用しない。モラルの彼岸にいる子供はもっと非日常の境界に近い。子供はただその瞬間に魅せられる。アーサーのことではなく、日常が裂け、異界が姿を現わすその瞬間に。その時、世界はただ意味もなく — 意味とは日常の論理である — そこにある。世界はいつもそのようにしてあるだけだ。人間はそれには耐えられないので、何か意味を付与しているのである。

それに対して、日常生活の論理における、この事件の意味付与は、精神的外傷の概念だろう。中井久夫は言う。「人間は3歳には物語を紡ぐ能力を顕在化させる。一般にストーリーは明確化し、矛盾がなくなり、因果関係が打ちだされ、そして自分に都合のよいことに重点が置かれる」。それに対して「外傷的記憶は変化せず、フラッシュバックの際に同一内容が反復出現し、その内容は静的であって、いつまでもなまなましく、文脈をもたず、言語化しにくい」。中井は「外傷的記憶は、3歳以前の古型の記憶に属している」<sup>1)</sup>と考えている。そして「外傷的記憶を〈語り〉に変えていくことが治療であるとジュネは考えた。体験が言語で語れる〈ストーリー〉に変わって初めて、生活史の多彩で変化する流れの中に位置を占めることができる」<sup>2)</sup>。大人たちの存在が音やにおいとして知覚されるのも、幼児の記憶の形であるかもしれない。

ノートボームはどうしてこのような短編を書くことができたのだろうか。それを小説家の想像力に還元することはできない。ノートボームがこのような事件を体験したというのでは

ない。でも私は、彼が家のバルコニーから父と一緒にドイツ軍の空爆によって、ロッテルダム港が燃えるのを見ていたことを思う。それは戦争という巨大なナンセンスの出現である。それには人は麻痺するしかない。とにかく、同じ強度の体験なしに私は作家がこのような文を書くことができるとは信じられないのである。

### 『唇のない水夫』

『恋する囚人』と同じ趣向の短編。貨物船の乗客という、おかしな立場にいる「私」が、二等航海士のオルセンから聞いた、一人の唇のない船員についての話。舞台は熱帯の旧植民地である。そのような世界では物語がもっと原初的に現れる。文明社会では、さまざまな風習の層 — ひとつはそれを文明という — が、事件を取り巻いて、見えなくさせている。

「それは Georgetown, 午後一番熱い時間だった」(S. 170)。「その植民地に存在していた、この怪物的なダンス小屋」。「私は X 回も自問していた、いったい全体何が私を、中央ラテンアメリカの船会社の貨物船での航行に記帳するように駆り立てたのかと」。「私がワイルドな旅から期待していたロマン主義は起こらないままであった」(S. 171)。

「私」は話を聞くために、二等航海士のオルセンを中華料理店に招待し、それから「私の母のところ」、最初の晩に行ったのと同じナイトクラブへ行く。「〈あなたは海の男のロマン主義を望んでいるんだろう。〈…〉そこにロマン主義がいるぜ〉。それは、私たちの船の、唇のない水夫だった。〈あいつがどのように唇を失ったか、話してやろう〉」(S. 173)。

そうして、「本来」の物語が始まるのである。これまでの「回り道」にノートボームの語りの特徴が現れている。物語そのもの — それは世界のすべてのそれのように、多かれ少なかれ類型である — よりも、それをどのように面白く、スリリングに語るか、ということである。

その水夫はポルトガルとインドの混血だった。「私」は、船の中で大麻を吸っている彼の姿を見た。港の酒場では「彼はまるで名誉の印を持っているようで、どの女も魅了した」(S. 174)。オルセンは「私」に水夫が踊るのを見たかと尋ねる。「彼は効果を高めるために、ちょっと間を置いた。〈でも San Juan では見なかった。そこでそれは起こった〉」(S. 175)。オルセンの語りは、物語作者の語りである。五年くらい前、プエルトリコ、San Juan の酒場。あの水夫は 17 歳くらいの、可愛い若者だった。港でも他の水夫と一緒にでかけなかったが、San Juan で酒場に連れて行かれた。まだ童貞であると思われるのがいやで、水夫は「最初に彼の道に現れた女と一緒に消えた。その女は、彼女たちがここでいつもすることをした。彼に、ただ彼女のところに戻って来ることを約束させた。そして彼は、彼女が望むすべてを約

束した」(S. 176)。「彼の話のこの箇所ではもう一杯飲んだ。そして私たちは、ちょうど私たちの前で踊っている、その男の方を見た。その後、水夫は大人であることを示すためにオルセンたちと3日間、他の酒場で女と遊んだ。そして4日目の晩に再びあの酒場に戻った」(S. 177)。「おれたちが戻ったとき、酒場の中は死んだように静かになった。一人の人間も動かなかった。あの女が来て、喜びのあまり輝いた、でもなにも言わなかった。ちょっとドアのところにとどまり、彼を見つめた。鳥のように速く彼のところへ飛んで行った、彼は成功を自慢して、彼女のところへ走った。彼女は腕を広げ、彼の口にキスした、そして彼女が口の中に持っていたかみそりで水夫の唇を切り取った、一方彼女は彼の血の出ている頭をぴったりと自分に抑えつけたままにしていた」。オルセンが語り続けようとした時、「とつぜんこの異質な黒褐色の皮膚が彼の肩の上にあった。唇のない水夫の手が彼の上に屈みこみ、〈舵手さん、話しが終わったら、バーに行き、飲みませんか〉。〈…〉オルセンは苦勞して立ちあがった。私は、彼が恐れているのを見ることができた」(S. 177)。

「ロマン主義を探しているのだろう」。でもそのロマン主義は、異質な、理解不能なものとしてある。物語はその周囲をめぐるだけだ。「私」と「オルセン」という二人の「語り手」が物語を届けようとする。しかしオルセンは、その物語＝事件の力の前に不安をもっている。その物語＝事件は、非ヨーロッパ世界、他者との遭遇である。若者は、その他者によって罰せられる。そしてそれによって、他者の世界の住民となる。それは「ロマン主義」の概念でとらえられないものである。ヨーロッパ近代そのものであるロマン主義のパロディが描かれているのである。

### 『POZUELO DE ALARCON』

繰り返すが、この短編集のテーマは「風土」である。気候、風景、人間の生活を規定する、諸条件。人間たちは自由意志で行動していると思っているが、本当のところ、「風土」の因果関係によって動かされているに過ぎない。ノーテボームは風土をこの短編のように考えていた。彼が眼の前に見る風土がある。それは不可解な、謎めいたものだ。その中に人を置く。すると人はおのずと動き始める。平面にさざ波がたち、収まる。でもその波をもたらすのは、外部の人間だ。その風土の中にいる人間は風土自体を意識できない。そのさざ波をとらえるのが文学である。そしてスペインの風土をノーテボームは次のように描いている。

「それは過ぎ去った。すべては起こった。午後はふたたび以前のようだ。私たちの顔からそれは読み取れない、たいていは。そしてアカシアの木もそれについて何も知らない。私たちはその下に座っている。アカシアの木の下に。それらはかさかさ音もたてない」。「暑い。

風もない。Pilar は花と遊んでいる、最後の、埃まみれの花と。ママは本を読んでいて、口をぴくぴくさせる。しかしそれを彼女は以前もしていた。それからアンナ。彼女は彼女の Mantilla (薄い絹の肩掛け) がはかどらない、時々数針、それがすべてだ。彼女はただそこに座り、庭の壁、門を見ている。しかしそれはもう起こらないだろう、彼女はそれを知っている。私は彼女に嫉妬している。彼女はもっと若い。しかし彼女はすでに一人の男を知った。「そしてそれはここで起こった、私たちの眼の下で。パパは金持ちで、私たちは働いてはならない、そうして人は夏の間庭に座っている、アカシアの下に。何かが起こることはけっしてない」(S. 179) と始まる。事件 = 物語を予感させる文だ。事件は、平和な、退屈な、永遠に続くような日常の中でとつぜん起こる。しかしそれは日常の中で次第に堆積していた情動の力がその時に解き放たれるのである。

Pozoelo という小さな村。全く普通の午後。「私は4年前から Jose=Luis と婚約している。でも結婚できない。アンナは長い間婚約していたが、解消した」(S. 180)。そこに、一人の男がマドリッドから、Kerstin Hellgren、彼女たちの家を夏の間借りているスウェーデン人女性を訪れてきた。彼女はその時不在だった。そのイギリス人の男は、その夜は泊まり、翌日の村の祭りを見ることになった。

村の祭り。夜、舞踏会、花火。「そして彼らを見失った。家に戻ると車がなかった。すべてが静かだ。ママはアンナの部屋に入っていった」。「私がそれを思うと、私はこの不安の静けさ、この危険、この脅威を感じる、まるでそれがアンナではなく、私であったように。彼女は蠟燭のようにまっすぐに窓辺に立っていた。ママは服を脱ぎなさいと言った。月の光の中に、冷たい、癒すことのない月の光の中に私はそれを見た。体全体に傷、噛み傷の血、引っかき傷、いたるところに。いたるところに苦痛」(S. 182)。

事件は、乾燥した地面に、一滴の雨粒のように、埃まみれになって丸く凝縮し、それから地面の中に消えていく、何も残らない。その時間が止まったような状況をノートボームは語るのである。

### 『Boelie Sneeuw のための罰』

「彼の父はそれをある奇妙な種類の効果狙いでもってした。書類から見上げて、ハロー、ヘルマンと言ひ、紫色の花が入ったばかげた花瓶をわきにどけ、煙草の箱をつかみ、彼に座るように指示した。それから彼の手は空中にかかったままで、一つのぼんやりとした神秘的なしるしを描いた、同時に Talala のようなもの、花のある花瓶と同じくらいばかげたものとなった、あるメロディーの伴奏をした。それはばんという音だった。Oje とかその類のこと

を彼の父は言った。その後、口をもう閉じなかった。いいや、そいつを開いたまま、彼は机の後ろに沈んだ、手は一緒に引っ張る身振りをしながら。それが父の死だった」(S. 183)。

そのように彼の父は死んだ。そして彼、Hermann Stannerは今 Transeuropa Express に座り、スペインに行く途中である。墓のところでその考えが浮かんだ。「ひょっとしたら彼は、自分とその墓との間の線を可能な限り薄くするためにスペインを選んだ。彼はスペインにいたことがなかった。それは、思い出なしを意味する」(S. 183)。高級ホテルを取った。「教育が彼に、あらかじめ厳密に制御されていない人間的なコンタクトに対する不自然な不安をもたらした。高級ホテルの従業員は、つねに自分との数メートルの距離を保っている。その距離によって彼は保護されていると感じた」(S. 184)。彼はそのホテルで、「周知の首筋」を見る。「ケツの穴」、Boelie Sneeuwと彼の美しい夫人。彼はその夫人に「放心」を見る。ヘルマンは、〈エル〉のようなグラビア雑誌の放心した女たちに対するひそかな偏愛をもっていった。Boelieは仕事でスペインに来ている。バーで、ヘルマンが法律の国家試験を受けたばかりだと言うと、Boelieはヘルマンの椅子の縁に座り、「ホッケーのゴルフの腕を国家試験の肩の上に」置き、告白する。ヘルマンがもっと前に国家試験を受けられなかったのは、「おれが試合の時、意図的にラケットをお前の脚の間に入れた」(S. 186)からだ。ヘルマンはばかげた転倒をし、脳震盪を起こした。「彼は、彼が感じたことを自分のために名づけようと試みた。怒りではない。ひょっとしたらそれは正しくなかった。〈…〉それはBoelieがケツの穴だと言う彼の観念をすこしも変えない」(S. 186f.)。ヘルマンが、それはうっかりした間違いだったと何度も言う間に、Boelieの妻が立ち上がる。263号。Boelieはヘルマンを本物の闘牛酒場に誘うが、ヘルマンは「父の死」を持ち出し、断る。「父親、役に立つことがらだ」(S. 187)。Boelieは一人でスペインの夜の街に消えていく。「突然彼は一人でホールに立っている。鏡、憂鬱がページュの壁から浮かび上がる、彼は鏡を見る、自分を見る」。そして263号へ行く。「〈彼が罰に値すると思わないか〉と彼は尋ねた。彼女は手で髪をなでた。〈かもしれないわ〉」(S. 187)。「彼女が鍵を引き抜き、彼に差し出すその身振りは、あいまいな神秘的なしるしを持っていた、同時にまた、彼の死んだ父親の書き物机の上の花のある花瓶あるいはBoelieのクラブ・ネクタイと同じくらいばかげたものとなってしまった、メロディーの伴奏、Talalaの何かを持っていた」(S. 188)。

「ヘルマンが、彼の死につつある父親の身振りと彼が知らなかったこの女のそれとのあいだの結びつきを名づけることができなかったということは、彼の罪ではなかった。結局彼はその結びつきに気づくところまでいった。彼はこの瞬間に、その中に〈生〉と〈死〉という言葉が現れる、半分の思考方法より以上に進まなかった。そしてそれは良かった。Boelieは結局、自分の罰を受けなければならない。それを彼は考えていた、彼が彼女のもとに行き、



キスし始めるあいだに」(S. 188)。

死は厳粛なものであるかもしれないが、父親はばかげた書割の中で、おかしな身振りをして死んでいく。これを存在と仮象ととらえれば、ヘルマンはそれらの齟齬に苦しむのである。その矛盾は墓とスペイン、ヘルマンと凡庸だが、それゆえに如才なく生きている Boulie、試合中の事故と Boulie の罪、Boulie の妻と Boulie、罪と罰の中に反復される。ヘルマンも、墓から遠く離れたスペインで、「仮象」と妥協するのだ。生はそのような類型的な仮象にはかならず、ただ死だけが絶対的な他者として存在している。

### 『子供遊び』

ノーテボームの描く子供は、無邪気でかわいい子供たちではない。それは、まだ善悪の彼岸にいて、文明や文化によって媒介されずにリアリティにさらされている存在だ。そうして『子供遊び』は現実の神話的な根源性を露わにする。子供たちは、文明に浸される前の人間のように得体の知れない、不気味な世界に投げ出されている。世界を恐れ、だが魅せられている、そのまま金縛りになり、麻痺している。パウルが示すその不気味な存在は、だが人間存在がさらされている深淵と同じものである。『Hula』において、その麻痺感はスナップショット的に表現されていた。『子供遊び』では短編映画として表現されている。子供の視点で語られることにより、魚眼レンズによるように、日常は謎めいた、見知らぬものとなる。「ある夏の日の午後。太陽は木々を不安にさせ、そうして木々は動くことなく夕べを待っていた。彼は裏庭にいた。彼はなにをしていたのか、草を噛むこと。知らせを埃の中に書くこと。彼の母の声が飛んできた。アンドレ、アンドレ、着替えなさい。訪問をします」(S. 189)。

訪問先の高い暗い家。「そこは教会の中のようにひんやりした。一人の女が出てくる。母はアンドレに上に行くように言う。友達がいるよ、でも病気だから親切に。〈友達をほしくない〉と彼は言った。女たちは向きを変えていた、二つの戦艦」(S. 189)。大人の世界はアンドレに対して閉ざされている。「玄関の前の寒い静けさは彼を不安にさせた。それで上に行くと、暗い部屋に一人の少年がいた。そんなに多くの年月の後ですべてを静かに名付けることは容易である。当時、子供のころも彼はそれを見たに違いない、この顔の中にメランコリーを、口の周りに彫られた疲労、防御する緑色の眼。不安、退屈、すべてがそこにあった」(S. 189f.)。

アンドレはその少年、パウルを外に誘い、エルレン森へ行く。パウルは、森はその森を見つけたアンドレのものだと言う。アンドレが気にしないと、パウルが立ち止まっている。「眼は緑にきらめき、もう同じではない、声、それは叫んでいた、〈おまえが何もいないなら、

森は僕のものだ」(S. 191)。パウルはアンドレを泥の中に押しつける。彼らは家に戻る。「アンドレは中に入り、玄関の間に立つ。静寂とぼんやりした闇、冷たさ、奇妙な匂いが彼の上に落下した。彼はドアを次々と叩いたが、誰も答えなかった」(S. 192)。パウルは明日も来るように言う。

その夜、アンドレは嵐の音を聞きながら、夢を見る。「平和に静かに彼は、明るい青と緑の風景の中を行く。生き、動き、話すものはなにもない。彼は何時間も木々の戦いを見る。木よりも大きなガチョウが彼の上を飛び、羽ばたくごとに土地を根こそぎする。一つの裸の岩の風景だけが残る。遠方から馬のひづめの恐ろしい音が聞こえてくる。彼は岩場の風景の中に逃げる。彼は馬を見ることは許されない、というのはそうすれば馬がどうなるのかわかっているからだ、白く恐ろしく。夢のふちで、叫び声とともに目が覚める。誰も来ない。彼はよく悪夢を見、両親はそれに慣れていた。彼は部屋の天井の冷たい顔の下に横たわり、誰も彼を保護しないだろうことを知った」(S. 194)。

翌日、一軒の重い赤いレンガの家の前を通る。彼が、結婚したいと言った、エリネの家。彼女と兄弟は学校に行かず、父親が教えていた。エリネの父親は、『ウォールデン』と菜食主義と新理念で縁まで一杯の、奇妙な理想主義者だった。彼は一度アンドレを詰問した。「母親を愛しているか、母にキスすることが好きか」。「おまえは父に悪いことをするだろうか」。アンドレは飛び上がり、ノーと叫んだ。「おまえはエリネの裸を見たか」。「おまえはうそつきだ」(S. 195f.)。アンドレは逃げた。その後、彼は彼女に会わなかった。

パウルの家の前に一人の男がいて、何かを歌っていた。「彼が歌うのをやめたとき、それはまるで言葉が突然入ってきた静寂の中にぶら下がったままにあるかのようだった」。男の刺すような視線、顔はこわばり、ギプスのように白い(S. 187)。男はその木の周りを走り、優しく撫で、キスさえする。男はアンドレの手をつかむ。「おまえは証人だ」(S. 199)。家の後ろの木造の小屋。中に椅子、机、大理石の板の上に死んだネズミ。アンドレは逃げたいが、動くこともできない。パウルが現れると、男は椅子に沈み込み、泣き始めた。男はパウルに、「私が生んだ愛しい人」と言う。パウルは男とともに去る(S. 199)。「何年も前に撮られたにちがいない一枚の写真。その膝の上にパウルが座っていた男は、アンドレがたったいま見たばかりの男と同じだった」(S. 200)。「この男は、アンドレが夜に夢に見た馬を見たのだ、その馬から彼は今なお逃れることができなかった」(S. 200)。

パウルが戻る。「おまえはネズミを忘れてるよ」と言い、自分はその土地の王だと言う。前日の、彼らが争った場所。二つの石の積まれた山。一つに草、もう一つに柳の枝。パウルはその枝を同じ長さに切り、先をとがらす、アンドレに、おまえは司祭だと言う。アンドレは、ねずみをナイフで切り裂くように命じられる。「アンドレはネズミを見る前に、パウル

の眼の中を見る。不安も憐れみも、好奇心もない。何事とも関係のないような眼、市場の魚の眼のような」(S. 201)。パウルは「有利か、不利か」と聞く。アンドレは「有利」と答える。「土地は測量されなければならない」。「女王を持たねばならないか」(S. 202)。パウルは家からの「食事」の声で戻る。アンドレも家に戻った。「家では誰も彼の消えたことに気づいていなかった」(S. 203)。

翌日、アンドレは、回り道をする。「枝の葉のない、死んだ骨。蛇の頭。茶色の葉のある小さな赤い木の垣根。それから突然、ひとがそこでだれも予期していなかった、部屋の中のため息のように、村の並木道が始まった。大きな暗い窓のある別荘、彼の方を見る、カーテンの後ろの老婆たち。パウルは、村の始まる場所に待っていた。大きな赤ら顔の無骨な少年。それはゲルトだった。彼は乱暴者たちの親分だった」(S. 204)。

ゲルトは大臣だ、とパウルは言う。「王は女王が必要ではないか」。会議は終わる。アンドレはエリネを連れてくるように命令される。アンドレは反対しない」(S. 205)。

翌日、アンドレはエリネの家の前で彼女が降りてくるのを見る。「王のところへ。君は女王になるんだ」。「それは遊び？」(S. 207)。パウルは、「君は女王になる、われわれは家を建てる」と言う(S. 207)。夕方が近づく。最後の鳥が逃げる。彼女は家に帰らねばと言うが、パウルは返事しない。パウルはゲルトに火を起こすように命令し、アンドレに、彼の家の垣根の木のところで見張りをするように命じる。アンドレは従う。「彼女の叫び声は、火をつけられた猫のように突然高く、鋭く来た」(S. 208)。アンドレは駆けつけるが、ゲルトがアンドレをとどめ、二人は争う。その時、「至るところで声があった。向こうで夕べの岸辺に、オイルランプが跳び、踊った。彼女の父の呼び声、〈エリネ、エリネ〉。アンドレは父、彼の従者の声を認めた」。ゲルトは逃げた。パウルは出てくる、何も言わない、彼の眼は大きすぎる。彼は、水の方へ逃げた。小屋の中でエリネは手と足を縛られていた、裸だった。彼女は何も言わなかった。「すべての人がいたとき、アンドレが生涯で初めて泣きじゃくりながら父親にしがみついたとき、この叫び声 came」。パウルは、足を低い枝にかけ、切り株に打ち付け、水の中に顔を入れ、死んでいた。「王は死んだ」(S. 209)。

アンドレを主人公とすれば、これはアンドレの悪夢の物語である。アンドレの子供の視線で描かれている。子供の短い焦点レンズによって、見られた世界は、彼の見る夢と同質で、よそよそしく、不気味だ。彼は誰によっても保護されていないように感じている。パウルも不安に駆られているが、その不安から自分の妄想世界に逃げ込んだ。反応の仕方は違うにしても、不安の同質性と強度がアンドレをひきつけ、とらえるのである。最後に初めて彼は泣き、その呪縛が解ける。自分の内面の観念に呪縛され、麻痺した状況の描写がすばらしい。それは子供ばかりでなく、恐らく人間の心の闇を一瞬にせよ浮かび上がらせる。その煌々と

照らされた世界は、魔術的リアリズムという言葉を使い起こさせる。

それはアンドレやパウルの内面の世界である。人気のない家、閉ざされたドア。大人たちも硬く心を閉ざしている。空気はピンと張りつめている。危うい均衡を保っている現実がいつか切り裂けることを、誰もが予感し、恐れている。『Hula』の場合のように、張りつめた内面世界の描写は、作家の想像力だけに還元されない。

### 『幻影 Phantasma』

実存主義によれば、人間は意味もなく現在に投げ出されている。文学は、恣意的に一人の人間を、島あるいは半島の海岸に投げ出す。彼はどこから来て、どこへ行くのか、彼は誰なのか、彼も知らない。孤島のロビンソン・クルーソーは彼がイギリス社会の過去から持ってきた概念（近代文明の概念）で生活を再生産する。しかしこの男(?)には過去がない。そして未来もない。時間がない。彼は誰でもない。そこを圧倒的に支配しているのは風景である。ノーテボームが書いているように、その「モデル」はGtan Canariaの島である。だがここで語られているのは、風景を媒介にして「誰でもないもの」、「非時間」的存在になることの寓意である。そしてそれがノーテボームにとって旅なのだ。

これは散文詩のスタイルで書かれている。文は簡潔である。暗示的である。「私」が主体として設定されているが、描かれようとしているのは「私」も「時間」もない世界である。要約しても意味はないが、それがどのように表現されているのか、見なければならない。

「…私は突然とある海岸に立っていた。私は海からやって来たにちがいない、あるいは夢の恐ろしい力によって。世界のどこかで誰かが眠り、私がこの人気のない海岸にいることを望んだにちがいない。私は海をじっと見る、灰緑色、ほとんど動かない、大きな動物のこの見せかけの不動性を持って。このほとんど非の打ちどころのない滑らかさの中、下の何かが、一つの小さな海のそれよりも大きな、果てしない力で、あちこちに押されていった。だから一つの大洋、世界海の一つ、でもどの？ 白く、疾走する雲によって引き裂かれて太陽が昇る。私は東に顔を向けて立っていた。しかしどの東から私はこの東の方に横たわっている海岸にやって来たのか。私は振り返る。私の下、砂の中に、私がある中に眠っていた形があった」(S. 210)。

「私」は不安も孤独も感じない。そして南の方へ行く。「私は自分を自由に感じた」(S. 211)。

「雨の中を歩きながら、私は、月に人間がいるならば、今の私のように歩くだろう、無頓着に、でも何か起こることを待ちながら。しかし何も起こらなかった。見捨てられた、やさしく波打つ大洋、右手には不毛の平原、そして同様に見捨てられた、雲によって覆われてい

る山々。私の歩みは不在の時を数えた。不在である、というのはここでは何も過ぎ去りはしない。ただ太陽だけが、私のように、ゆっくりと自分の道をたどっていく。しかし〈ゆっくりと〉というのはすでに時間感情なのか。かもしれない、しかしここで、私にとって、規定はない、何も意味しなかった時間、一つの存在の回想の中に自分を止揚する時間、非時間。この風景における唯一の規定は私だった、しかし私自身は何の規定も持っていない」(S. 211)。

文明とは時間の体制である。時が過ぎる／進む。それは時が人間の行動・労働によって充填されることだ。「私」はその時間の文明的な作用を免れている。文明とは人間による自然支配のことだが、その思考が停止されるとき、「私」と自然との間の境界はない。絶対的な万物照応の世界が暗示されている。

「私は、自分が意識している以上に、人間のいない世界に憧れていたにちがいないことに気づいた」(S. 211)。そこには「人間たち」がいるが、彼らは、「山羊を飼う人、畑を耕す人、魚を取る人」である。自然と共生する存在だ。

時間の概念が存在しないとき、風景は、それがあるがままに、ある。

「私は再び大洋に達した、数本のシュロ。アシ、大きな赤や白の花の茂み、水鳥、カエルの鳴き声。私は道を歩き続けた。塊のような大聖堂のそばを過ぎた。そこには内部空間も入口もない、それを神は自分のために投げつけて作ったにちがいない、まだ地上に彼を崇拜する人間がいなかったときに。一つの民族を犠牲にささげるのに十分な、巨大な祭壇。海は遠くにある、そして再び山から雲が来た。雷鳴、だが私の上方は真夏の日曜日のように青いままだ。後に私の上も灰色になる。そして夏の天候が過ぎ去った」(S. 213)。

「私」はまだ「私」であり続けているのだが、風景がただあるがままにあるように、「私」からの離脱を求めている。

「私の運命はますます私にとって好ましくなった。私の過去、私自身のこと、これらすべてのどのようであり、何故なのかを私はもう思わなかった。私はいかなる問いも立てなかった、私は、自分で巻き上げる幸福な機械のように走り、眠った。そして風景の奇妙な変化を、空の気違いじみた書割の変化と同様に無関心に受け入れた。〈…〉この異質な世界において私は、同じままでとどまっている唯一の存在であるように見えた」(S. 213)。

時間がないとすれば、「意識」を分節するのは、自然である。

「私は最終的に一つの神秘的な大陸に身をゆだねようとしていたのか。立ち上がる風は私をもっと先に押し進めるように見えた。奇怪に、白く、ぎざぎざに、地球外の石から彫りだされたように、山は私の前に横たわっていた。谷へ。私がそこにいて以来、そのような植物を見たことがなかった。柔らかい黒い地面、そこに玉ねぎ、トマト、ナスが生えていた、そ

して私が名前を知らない、多くの黄色い花。草は、そこから私が来た国でのように緑だった。私と一緒に春がその石化された山岳地帯からやってきたように見えた。別の側にも山、もっと低い山。道はその周りをくねくねと曲がっていた。あらゆるこれらの奇妙な沈黙する植物、サボテン、カラマツ、神がまだ笑うことができなかつた時代に作られたような」(S. 214)。

海岸で、「一日中私は横たわり、何も考えなかつた、風の中に呼びかけ、私の謎を楽しんだ。ひょっとしたら私は何者でもなかつた」(S. 215)。

「私が内陸部に入れば入るほど、風景はいつそう繁茂し、豊かになった。〈…〉いま私は本当にあらゆる時間観念を失ってしまった。時がなんであろうと、それは私を空気のように包んでいた。私の思い出はもう日々の思い出ではなく、風景の思い出であった」(S. 215)。

「それから最後の時が来た、あるいは最初の時が」。水辺に「私」は横たわり、夢を見る。「私は人生において初めて私自身を夢の中で見た。私は老いていた、白髪だった。私は私との類似性を持っていた。澄んだ青い海の上方に時計がかかっていた。指針のない卵形の白く輝く文字盤。私はその輝く盤を通して中に入り、私が後にしてきたすべての風景のそばを通り過ぎた」(S. 215)。「私は上り、降りる。それからその老人は私から一片、一片とはがれていき、埃となり、解け、私のものはなにももう見えなくなる。胸も消え、ひとつの記号もない円盤となり、瞳孔のない眼、太陽となった」(S. 216)。

「私は目覚めた、私がここに来たあの日のようだった。あるいはこの日がそれだったのか。私は立ち上がり、私の形を砂の中に見た。私は海の上に白く青白くかかっている太陽を見た。私は振り返り山を見た、その秘密を私は知っていた、あるいは知らなかつたのか。この風景を私は見たあるいは夢で見た、あるいはその風景を見たと夢見ていたのか。もしそうなら私は一体どこから来たのか。私は待つ、何も起こらない。鳥さえも飛んで行かない。風だけがもっと強くなる。雨が降り始める。杖をもうアシから作り必要はない。私が行くところ、南の方では、空は鉄のような明るさだ。眼にまぶしい。ゆっくりと私は出発する」(S. 216)。

時は円環を描く。あるいは無時間は循環の形でしか表象されない。「私」の行程も夢の中に回収される。「私」は「出発点」にいる。あるいは「出発」とか「到着」という時間的な概念が存在しない世界である。時、空間(延長)、「私」を構成するカテゴリーが解体される。それは絶対的な自由のイメージである。そのイメージは、空間や時間の具体的な表象をもってしか表現できない。最後の「夢」が語られることによって、現実が無効にされ、無限の循環を形成することで、無時間のイメージが一つの美しい寓意として表現されているのである。

しかしこのような要約はこのテキストに対して意味をもたないだろう。ここでは絶対的な自由が問題となっている。「自己」からの、「人間」からの、人間や自己を構成しているすべての表象 — それ文明である — からの自由がイメージされている。このテキストはこ

の短編集に後に加えられたものである。それ以外のテキストは、「自己」、「時間」に苦悩する人間の姿を描いていた。自分が作り出した観念に苦悩する人間の姿は、それだけいっそう、その対極、救済への願望をあらわにする。それがこのテキストで表象されているのである。このテキストはまた、旅のメタファーである。ノートボームの果てしない旅は、この島の男のように、絶対的な自由を、あるいはその表象を求めているのである。

『恋する四人 — 熱帯物語』“Der verliebte Gefangene - Tropische Erzählungen” は全集版による。Cees Nootboom: Gesammelte Werke Band 1. Romanen und Erzählungen 1. (Aus dem Niederländischen von Helga van Beuninger und Hans Herrfurth). Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2002. ここからの引用は、本文中にページ数を記した。

#### 注

- 1) 中井久夫：トラウマとその治療経験。In：徴候 記憶 外傷。(みずず書房) 2004年。84p。
- 2) 中井久夫：115p。

Cees Nootboom lesen 2

„Der verliebte Gefangene - Tropische Erzählungen“

In diesen frühen Erzählungen handelt es sich um das Klima, worunter ich die Landschaft mit dem Wetter verstehen möchte, denen die dort lebenden Menschen ausgeliefert sind, d.h. um den sogenannten „genius loci“. Nootboom versetzt die Personen in ein fremdes Klima, um sie dann aus freiem Willen handeln zu lassen. Diese Methode hängt zusammen mit der Problematik der Darstellungen darüber, wie man das jeweilige Ereignis erreicht. Das Ereignis selbst ist nur ein Stereotyp, aber dennoch durch das Klima stark geprägt. Dieser Umweg der Darstellung ist der Versuch zu fabulieren. Hier ist das Klima der Tropen behandelt, die eine Grenze der westlichen Zivilisation aufzeigen und die Ursprünglichkeit des Ereignisses hervortreten lassen. Die Liebe des Gefangenen spielt sich in einer Strafkolonie ab. Es ist eine bildliche Darstellung des Kolonialismus, der das Erlebnis des Anderen (Alterität) für die Europäische Kultur ist. In der Erzählung „Phantasma“ ist die Befreiung aus der Zivilisation allegorisch und poetisch dargestellt, was zum Einklang mit dem Weltall führt.

In den Erzählungen, die in den Niederlanden spielen, bleibt das Klima im Hintergrund, vor dem

es erzählt wird, z.B. wie ein Kind ein anderes kleines Kind ins Wasser sinken sieht, gefesselt und paralyisiert. Wie der Alltag zerrissen wird und die Unwirklichkeit erscheint, ist in der Weise des magischen Realismus dargestellt. In der Zivilisation vollzieht sich das Ereignis immer traumatisch. In allen Erzählungen sind Thematik und Problematik der Literatur wunderbar vereinigt.

### 『騎士の死』(1963)

オランダの若い詩人、アンドレがスペインの島に来る。彼は「不安」を抱えている。「不安」は、島の外国人芸術家たちと接して発火する。島の風景、人たちは彼の苦悩の書割にすぎない。そこに救いはない。島を出るのは、マドリッドまでイギリス人の遺体に付き添う時だ。そこで彼は失踪する。テーマはアンドレの「不安」のようであるが、その正体が何であるのか最後まで分からない。そもそも彼は、癒されようとしないう。彼はただ突き動かされているだけだ。その軌跡が、彼の「不安」の輪郭を描くのである。

この「不安」を探求するのは、私の目的ではない。この「不安」は一つの文学的な excuse である。物語には「原因」が必要である。幸福なアンドレがスペインの島に来れば、凡庸な観光物語になる。この不安はエキゾチズムに回収されない「島」の姿を露わにする。異郷の外国人(芸術家)のステレオタイプを剥ぎ取る。ノーテボームは、「不安」を抱えた、つまり日常性の論理から乖離した感覚の人物を、60年代のスペインの島に放りこみ、彼がどのようにじたばたし、破滅していくのかを、表象することを試みたのである。アンドレの「不安」は、自動的に、その解明=治癒という回路を作動させるのだが、アンドレはそれに抵抗する。抵抗することで彼はますます傷つくのだが、その抵抗は類型への抵抗である。つまり文学の抵抗である。

類型に対する処方箋としての不安。物語ることに対する不安を語ることもできるだろう。物語は可能か。今まで語られなかったことを語ることはない。そうではなく、今まで語られたことがなかったように語ることは可能か。新しい文学表現は可能か。

「不安」を表現するだけではいかにも工夫がないように見える。語りの構造はここでも問題となる。誰が語っているのか。この「小説」は、語り手の「私」が、亡くなった友人が未完のまま遺した原稿を完成させるという体裁をとっている。「私」がどれほど補ったのか、それは明白ではない。元の小説は三人称で書かれ、アンドレの内面は内的独白として語られる。「私」はときどき全体のメタレベルから、そのテキストについてコメントをする。そしてそのすべての著者のノーテボームは、両者のメタレベルにいる。だがそのメタレベルの立場は自明なものではない。「著者」という概念がもう有効ではないのだ。小説というジャン



ルは、他のジャンルを侵犯し、自己を解体し、構成することで成長してきた。今はもう誰も小説をジャンルとして定義しようとしなない。この小説の形式はだから、小説自体の自己反省の形象なのである。タイトルの『騎士の死』の騎士はこの意味で、「著者」である。全能の語り手の「著者」は死んだのである。カフカの「主人公」のように、何が何だか分からないままうろろろするのが、近代の小説世界なのだ。「騎士は死んだ」。ドンキホーテが既に、騎士世界という神話の存在しない世界に迷い込んだ「騎士」であった。

アンドレの悪あがきの物語。ヒーローとなりえないヒーロー。「狂気」もとっくに文学的なクリシェになっている。アンドレの不安を描こうとしても、それはすでに語られてしまっている。パロディでしかない。その文学がパロディでしかあり得ない状況が、この小説のテーマである。それを確認するのが、アンドレの「不安」であり、そして彼は「死ぬ」。そこに悲劇性はない。歴史は繰り返す、二度目は喜劇として。

不安とは何かに対する不安である。死に対する、人間に対する、生に対する不安。しかしアンドレの不安はその何かがない。あるいは書かれていない。不安だけがある。あるいはそれを不安と名づけていいのだろうか。対象をもたない不安。それはこのような物語の形を取るしかない。実存主義の時代、キルケゴールの不安。「不安」の異常な意味づけがあった。

アンドレの「不安」の原因をさぐってもそれは無限に遡るだけで、その根源的な理由はない。アンドレはその無限に退行する迷路の中に迷い込んでいる。それは彼の内面の世界であり、外に向かって開かれていない。外の人たちは、彼の内面に入ることもできない。彼は世界の中でただ不可解な振る舞いをするだけである。ドンキホーテにはサンチョパンサがいたが、彼には誰もいない。彼は、自分が閉じ込められている内面の牢獄から逃れたいのだろう、せめて外をのぞく窓を壁の中に穿ちたいのだろう。その試みが、そしてそれがことごとく失敗することがここでは語られているのである。

以上は、私の思ったことである。だが小説は具体的なものなので、実際にどのように表現されているのか、見なければならぬ。そのためには何か概念的な装置が必要である。

ノートボームは冒頭に、ゴンブロヴィッチの文をモットーとして掲げている。「人間の別の目標、疑いもなくもっとひそかな目標、ある仕方では非合法のそれ、完成されていないものへの彼の欲求、不完全なものへの、もっと低くあること *Niederer-Sein* への、青春への欲求」(S. 221)。ノートボームは、ゴンブロヴィッチ Witold Gombrowicz (1904-1969) のフランス、プロヴァンスの Vence の墓地を訪れている。「世界と斜めに位置している作家が存在するとすれば、彼こそそれである。この偏屈さは、私が 1963 年に彼の一つの文を、私の小説、『騎士の死』のモットーとして選んだ理由であるに違いなかった。〈…〉『ポルノグラフィ』の中のその文は、あるパセティックな本の冒頭に置かれているが、その本を私は進み続けた

めに書かねばならなかった、それはしかし17年後に『儀式』でもって初めて成功することになった。私の主人公は、このモットーがそれを望んだように未完成であった、ただ彼は彼の未完成さにおいて没落したが、一方ゴンプロヴィッチはその未完成さを生涯、旗のよう掲げていた<sup>1)</sup>。

「未完」性は直接的には、「私」の友人が残した原稿のそれである。「私」が完成したのも、最終的なものではないので、この小説自体にも妥当する。さらにノートボームの作家としての「未完」性にも妥当する（だがいったい「完成した」作家などいるのだろうか?）。そうするとこのモットーは一種の不在証明として挙げられているのだろうか。あるいは青春という「未完」の時代を述べるためにか。とにかく、ノートボームは「完成」を『騎士の死』の17年後の『儀式』に見ている。「完成」とは彼固有の文体の創出のことである。その17年間彼はおびたしい旅をし、それを記録し、詩やコラムを書いた。するとこの『騎士の死』の意味がますます少なくなる。『儀式』までのかなり混乱した試みの一つとして済ませることができるのだろうか。それに対しては、ノートボームが書いている「その本を私は進み続けるために書かねばならなかった」という文にこだわりたい。なぜ書かねばならなかったのか、その意味を探ることが、『騎士の死』を読むことである。

その意味は、二つの側面から考えられる。人生の、特に青春期の人間形成の意味と、文学上の意味である。だが恐らくそれらは交差しているのであろう。ラディカルに先鋭化されたアンドレの「不安」は、ノートボームのそれと重なるのだろうか。ノートボームはアンドレのように明らかに病気ではない。しかし誰が「不安」を感じないだろうか。ノートボームは、戦争、ドイツ軍による占領、両親の離婚、父の爆撃による死を体験している。学校を何度も放校されている。だからアンドレの不安の描写をその人生上の意味と文学表現の意味で考えることが、ノートボームの「書かねばならなかった」ことの分析となるだろう。

フロイトの本の中に、ルードヴィッヒ・ベルネの『三日間で独創的作家になる技術』の引用を見つけた。「二、三枚の大型紙を用意し、頭によぎる一切を、三日間たてつけに、ごまかしもへつらいもなしに書き記してみよ。自分自身について、妻について、トルコとの戦争について、ゲーテについて〈…〉最後の審判について、上司について、自分が考えるところを書き記してみよ — 三日もすれば自分が何と前代未聞の新たな考えをもっているかに驚き、まったく呆然としてしまうだろう<sup>2)</sup>」。

これはもちろん自由連想の、精神分析の技法に合流するのだが、文学的な技法として、私はこの小説に妥当すると考えた。文学に関しては、それは文体の問題である。それを私は、「症例の自己記述」と名づける。「私」の友人は、アンドレの姿を借りて、自分を見つめている。

その不安の核は何だかわからないが、その不安をめぐるアンドレの行動の軌跡が「不安」の強度を指し示す。「症例」は文学ではない。だが「症例」がその隅々にまで書きつくされるとすれば、それは「文学」に他ならない。

その場合、小説家は —「誰」か？— ヒーローであれ、アンチヒーローであれ、何かの具体的な空間に（この場合、スペインの島に行く船の中に）放り込むのである。そこに何人かの人物を配置すれば、物語は自動的に始まる。意識された、あるいは無意識の類型に従って。そして私が読む場合、どの程度「類型」的であるのか、ないのかを、私の限定された知に従って判断、評価するだろう。

## 1. 構成

「自己による症例記述」は、メタファーではない。この小説の大部分をなしており、文学表現の技巧を含めて、集中的に記述されている、アンドレの「不安」がそれを想定させるのである。だが「症例」は文学になるだろうか。内面の不安をさらけ出すのは、いかにも格好が悪いし、無防備である。つまり、症例で構わないにしても — というのは20世紀の文学は、かなり「症例」的であるからだ— それを呈示するにもなにか工夫が必要である。この小説ではかなり手の込んだ工夫がされている。この小説は、一人の作家が遺した原稿を友人が完成するという体裁をとっている。未完の小説を完成させた「私」がどの程度、加筆、修正したのかが問題となるだろう。

「私は彼が書いていたその本を終える。筋を私は考え出す必要はない、それを彼はすでにしていた。彼の本は、死んでしまった一人の作家についての本となるべきであった。一人の別の作家が故人の本を書き上げる。シンプルな原理。Droste Kakao 缶の看護婦のように。彼女は缶を手を持っている、そしてその缶の上にひとりの看護婦がいて、彼女は手に〈…〉。そしてそのように私はここに座っている、私の、彼の永遠に回転して離れていく作家と一緒に、彼らの死と、彼らを追って離れない作家たちと一緒に、その作家たちは彼らの本を終わりまで書く、しかし死につつある、などなど」(S. 223)。

文学とは、文学とは何かと考える媒体である、というベンヤミンの初期ロマン派の文学概念の綱領に従えば、読者は、その小説の中で示されている文学概念をさらに考え続ける存在である。だからこのココア缶の絵のように、始原に向かう無限後退は、奇異なメタファーではない。ここでは、そのメタファーは、「誰が書いているか」こだわらな、という意味だと思う。最初の部分では、「私」が現れ、コメントをするのだが、後になるとそれは殆どない。最後に、アンドレの死の後、「私」がとりあえずの終止符を置く。そうしないと物語は終わ

らないからである。つまり「誰が語っているか」は事柄に重要ではない。

彼の原稿は「想像できないほど乱雑な覚書、半ば完成した詩、日記、本の断片」(S. 223)である。「私たちの主人公は作家、アンドレ・Steenkamp」である。「私は私自身の空想を甲高い断片に役立てるだろう、私の観察能力が彼に関して気づいたことによって補足されて。それからそれに彼についての本当の物語の抜粋を付け加えるだろう」(S. 224)。だが「私」はその原稿の明確な上級審ではない。「私は彼について話しているのだろうか。彼が自分について話しているのだろうか。私は、彼を、彼がそうである主人公の場の上に書いているのだろうか。でもどの程度まで？ 私はどうなっているのか？」(S. 226)。最後までこの上級審的な枠は維持されるが、「私」と「私」の死んだ友人／アンドレは限りなく接近する。あるいは最初からそうであった。でも「症例」は文学にならない — 誰が他人の症例を読みたいだろうか — ので、この枠が考えだされた。

この枠、ここでは上級審としてテキストの中に介入する「私」は、文学的には効果的な手法である。表現のレベルが多重になることで、一つの表現が相対化され、それが他の表現の可能性を暗示することで「ココア缶」のように奥行きが現れる。文学表現をめぐる問題がこの構造の中に示唆されるのだ。

アンドレがスペインの島に到着するときの描写。「海は緑色、灰色、あるいは黒い。私は、彼のすべての比喩に理解を示す気はそんなにない。彼はそのうちのいくつかを、次のようなスタイルで書いている、つまり、〈海は猫の目のように青い〉、など。夜は〈二つに折れて〉消えた。〈遠方の大きな灰色の広間の中に〉島の形が現れる」(S. 226)。

登場人物は「私」によって改めて置かれる。島への船の中、「ひとりの男が彼の隣に立つ。いや、もっとよく言えば、私がひとりの男を彼の隣に置くのである。実際に起こった出来事の承認のもとで。ツイードをきた酔っ払いの神父である。サマセット・モームは彼を違った風に描写しただろうが、結局、彼は同じ一族の出身である」(S. 226f.)。シ ril・クラレンス Cyril Clarence。「彼が出会った多くの聖人たちの最初の聖人」(S. 228)。

「私」が饒舌になるのは、「主人公」のアンドレが眠る時である。「ああ親愛なる古風な小説よ、そこでは次のように言うことが許された、つまりいま私たちは私たちの主人公をしばらく一人にしておこう、そしてAに行こう、Aで同じ時間に彼の生の秘密が明らかにされるのだ、と。彼は眠っている。腕を胸の前で組み、引きつって自分をつかまえておき、守っている。何から？ 彼は私から身を守っているのか。いま彼自身の言葉で彼を貫いている私から。〈…〉私はこの最初の部分を憎んでいて、再び私の忠実さを暗に示唆しなければならない、私は耐えている、この怠惰な自然主義的な語りを、と説明するために。その語りを通して私は無力に彼のパセティックな姿を見ているのだ。不安に、子供っぽい不安に占められ

た、苦しむ誰かを。私は彼を論じつくすことは許されない、私がいま知っている彼の未来をあらかじめ彼に叫ぶことは許されない。ノー、彼自身の手で、断固としたフェティシストのように彼の紙を私の紙の中に挟み込んで、私は彼の物語の中で彼について行かねばならない。彼が生きたが故に、罪の感情に他ならなかった、彼の青春についての恥ずかしさを覆うために、彼自身はシンプルな加算法で進んだ、それはもっと簡単である。〈…〉彼は彼の体験の総計である。彼の体験は彼の手の中に入り込み、彼の眼に色を与え、彼の口を形作り、彼の声の中でいっしょに話している。しかしそれらの相互の関係はもはや突き止められない。彼は、彼が彼の人生の毎秒であること、そのうちのとても多くが消えてしまったこと、消えてしまった時の中に消えてしまったことについて驚いていた」(S. 232)。

そうしてアンドレが眠っている間に彼の幼年期が語られる。でも「私」ではなく、元の原稿、「テキスト」が語るのである。6歳、「父親についてのほとんど唯一の思い出。椅子をバルコニーに置かせ、そこからたばこを吸い、黙って兵士たちを見ている男」(S. 233)。学校時代の押し花。「その花は、彼の黄ばんだ押し葉標本の墓地の中で、13年後もまだ偽りに、乾燥して咲き続けている。きちんと名づけられて。そのどの一分も、有効であった、まだ未来から観察されることのできない、未来からばかにされることのできない一分だった、自律的な一分だった」(S. 236)。

そして「私」は言う。「彼が自分に加えた切断と、私が彼に書き付けた歪曲の間のどこかで私は非常に明確な影を再発見し、彼を花輪で飾り、接吻して、英雄たちの国に送らねばならない。というのはそれを私はしたいからだ」(S. 240)。

アンドレが「目覚め」、実際に行動し始めると、「私」のコメントはほとんどない。「私」が口を出すのは、アンドレが眠っているが、かなり錯乱しているときである。そしてアンドレが死んだ後で、「私」は語るだろう。しかし「私」のコメントは、アンドレの上位の審級 Instanz にいる自分を想定しているわけだが、その他の大部分の、アンドレが実際になすことの描写は、「私」とアンドレとのそのような上下の位相関係を無効にする。「私」とアンドレの区別は曖昧になる。あるいは区別しても構わないが、物語の観点からは、重要ではなくなる。自己による「症例」を語りたいのだが、それでは露骨なので、文学的な体裁のために、このような枠の構造を仕立てた、そのように見える。そしてこのココア缶の構造、無限後退、悪循環の構造こそ、またその症例の核であるアンドレの「不安」そのものなのだ。

## 2. 島の人々、あるいは風景

精神分析において「症例」は解読されるべきテキストである。その解読は因果関係、原因

と結果の解明である。だから「症例」は解読を内在的に要請している。だがアンドレはそのような解読のプロセスに回収されない、彼の「不安」の自律性にこだわっているように見える。彼は解読を試みない。ほとんど治癒を望んでいないかのようだ。彼はただ苦しむ。そしてその苦しみの軌跡がかなり詳細に描写される。この小説はアンドレの不安が現実を描いた線の描写である。その描写の強度が「不安」の深刻さを予感させる。私はだからこの小説は「不安」の描写の可能性をめぐる小説であると考え。トマス・ベルンハルトの文学が、人間を罵倒するレトリックをめぐる小説であったように。「不安」という何かがあるのだろう、しかしそれは周囲の人間、世界、状況と触れ合い、火花を散らす、その痕跡においてしか可視的にならない。

「不安」をそれ自体として描写することはできない。私たちはただ「不安」の現れた現象を見るだけである。だから「不安」の描写を見るために、アンドレの不安が顕在化する契機としての場に従って述べる。「不安」とは人間関係によって測定されるものなので、アンドレから距離が離れているものから述べて行く。島の風景、島の人々である。それらを背景にしてアンドレに「近い」外国人たちの姿が絡み合い、最後にはすべての要素が合流する形で、「不安」が描写される。だが、それらの要素は「作家」によって置かれたものである。つまり、アンドレの精神の投影である。

アンドレから遠い自然と風景は、それが彼と無関係であるがゆえに、美しく見える。

「時折、霧のかかったオランダの朝に、荒野の探索行において一人の見えない狩人がはるか遠くで銃を撃つ、そしてこの短い明晰な爆発は人がそれをできるよりもっと明白に一つの幸福感を書き上げている、俺は生きている、俺は生きている、と。それと似ていると彼は考えた。朝は野蛮な、磨かれた明晰性を持っていた。床の赤いタイルの上に立ち、それから太陽の100倍の顔を見た。〈…〉彼は服を着て、外へ出た。クリアで透明なスペインの空気が彼を、愉快的な水のように包んだ。その水の中では、色が輝き、音がそんなにも完成された共鳴する明晰さをもっていた。そのような音を、北欧ではそのために独自に作られた空間でしか聞かない。決して屋外では聞くことがない。灰色の、悲しげな一日、風が学校の黒板の上をひっかく一日、深く、薄暗く襲いかかり、いかなる期待も起こさない夜、それから突然、次の日、オープンで朗々と歌う、光と音で満たされた一日。毎分が手に負えない平和と陽気さによって満たされて。開かれていて、明るい霊たちで一杯の息を吐き出す、空の月、ただここ、この海辺で。長いトランペットの音が太陽に向けて上げられ、海を越えて吹きならされる、岩の脇を通り、陸の中へ。彼は下町への長い距離を走らないために、自分を抑えなければならない」(S.248)。

これは小説の中で、殆ど唯一の肯定的な気分の描写である。島に着いたばかりのアンドレ

は他の人間から離れている。「不安」とは他の人間との関係に関する心の動きである。そしてその関係性は人間の条件である。当時のスペインはフランコの政権下にあった。しかしそれは、あるバールの「大きな、嫌悪の念を起させる Pepe。秘密警察への所属。壁に、20 か 30 の肖像画」(S. 243)、あるいは「The day of the AHRMY. 鉄十字勲章を付けた海軍司令官」(S. 256) のかなりグロテスクな描写によって暗示されるだけだ。

漁に出る漁師たちを見てアンドレは思う。「アンドレは彼らを羨む、彼はそれに属していないから。神の名においてすべきことを持っている、魚を捕らえる、なにかをもって帰宅する。このぼろぼろの、屈辱的な不安をもってではなく。彼はその不安について考えることを拒否した。彼に思いつく唯一のことは書くことであった」(S. 246)。アンドレは、人間の共同体から排除されている、あるいは自分から離反した存在だ。

人間ではなく、風景がアンドレに救いを暗示するように見える。

「あえぎながら彼は丘の尾根までよじ登った、海への眺めはもっと広がった。塩の沼の後ろに彼は低い丘と長い白い海岸、そして再び海を見た。振り返り内陸部を眺めたとき、ふたたび丘が続いていた。高い緑の背をもつ波状形成物。そしてこのこわばった動きの中で彼は眺めている中心点だった。その中心で突然ものすごい静寂が起こった。光によって動かされて、彼の周りの風景全体が渦を巻いていた。彼が引き裂かれ、彼についての真実が鉄の筆で書きとめられるかのように。それはとてもすばやく起こったので、彼はその後落ち着いて考えることができる、〈めまいがする〉、そして慎重に木のもとに座ることができる。周りは完全に静かなので、彼は自分は叫んだのかと自問する。今は一になるのか。幸福は風景の中から霧散する。そして彼が町に戻ったとき、彼は絵葉書の上の一人の男に過ぎない。彼の両側に厚紙の風景が流れていて、彼の不安に気づかない」(S. 251f.)。

### 3. 島の外国人たち

アンドレはスペインの島に投げ込まれる。そこにはシリルやノース、画家のシャーマン、クララなどがいる。彼らも島に打ち寄せられたような人々だ。彼らはアンドレの新しい人間関係を形成する。シリルは、島への船の中で登場した、彼はアンドレを導く人である。彼はアンドレをバールに連れて行き、そこでアンドレは島にいる外国人に会うのである。そのシリルは作家らしい。だが、作家存在は、アンドレを不安にさせる。「皮膚と毛と一緒に彼はその作家の大食の頭の中に入る。その作家はすでに彼を利用し、そのために自分を憎んでいる。お前はここに座ってはいけない、とアンドレは考える。〈…〉お前は一人の作家の隣に座っている、お前は奪われる、俺は、利用できるものを持っていく、黄色い眼、おかしい癖、8

時前に8本のシャンパンの小瓶を自分の前に。すぐに俺はそれをメモするだろう。それによって俺は敵よりも泥棒だ。考えないこと。シ ril の周囲に人か座る。小説の人物たち」(S. 249f)。アンドレはシ ril の中に自分を見ている。他にニューヨークから来た、作家のノース、画家のシャーマンなどがいて、その画家の家にアンドレは数週間とどまることになる。シ ril の提案で、Santa Eulalia、それから San Carlos をみんなで訪れる。

#### 4. クララ

Santa Eulalia でシャーマンはクララを紹介する。シ ril やシャーマンが同じ仕事の間係を示すならば、クララは、愛の回路を示す。それは人間関係の中でもっとも親密な、それゆえもっとも危険な関係である。クララはパールでアンドレに紹介されるが、「後になっても彼はまだこの瞬間のテノールを覚えていた。そして彼の最初の考えは、これは、自分が知ったあるいは知りたいと思うすべての女をまとめたものだ、というものだった。彼はこの思い出からもう離れることはできないだろう、と」(S. 264)。その時アンドレは酔っていたのだが、「ノースの声は彼が手術された時のように、ゆっくりと退いていく。〈…〉彼は心地よい静寂の中に沈んでいく、雑音の皿が再び開き、騒音が増加し、ゆっくりと戻ってくるまで」(S. 265)。彼女は、「あなたは失神していた」と言う。

この「失神」はクララの出現に対する警告、防御の無意識の反応である。クララは、世界との接触のもっとも基本的なパターンである「愛」の形象としてここに登場するのだが、アンドレはその愛の回路に入ることができるかどうか、「不安」に思う。それをアンドレは世界と結び付ける道だとは認識できない。クララの話は、スフィンクスの謎のように、アンドレの愛の歩行能力を瀬踏みしているかのようだ。San Vicente へ行く途上で、「〈あなたはなにを考えているの〉と女は尋ねる。アンドレは思う、俺はなににも考えていない、俺はこの瞬間全体を自分の中に入れ、あくせく働いて自分をだめにする。これは一つの長い物語の始まりだ。そこからなにが生まれるだろうか。〈…〉女は、眠っているシ ril を見て、〈私は、すでにすこしばかりもうそこに存在していない人間たちを愛している。彼がとても酔っていると、私は、彼が死にかけていると思うのよ。でも彼は死にたくない。彼はこのおかしな、古い肉体で走り回っている。肉体！初めは少し空気、私たちの場合だから空虚。それから衣服の層。それから肉体。もし私たちが現実には存在していなければ、もしこの輝かしいあるいは老衰したものが、私たちであるところすべてでなければ。あなたは肉体が好き？〉」(S. 269)。

クララの言葉は謎めいている。韜晦さがアンドレとの距離を測っているように見える。逆



に言えば、韜晦さの形に彼女の関心が表現されている。アンドレとの関係において彼女の内的な反応が語られるのだが、彼女自身のことは不明なままである。「彼女の父親がパルチザンによって射殺され、母親と一緒に物置に隠れた」(S. 346)と彼女の過去が触れられるだけだ。物語的にはクララはアンドレとの関係においてのみ意味を持っている。

「彼女はアンドレの顔を気の抜けた灰色の光の中で向きを変え、なんどもこの顔の中のもっとも弱い箇所を探す。その顔は一人の人間あるいは愛人の顔ではない、しかしそれは彼女をひきつける、彼が名付けたような苦悩の故ではない、そうではなくてそれでもって彼が老いやデカダンスやこの媚びるような苦悶を操作する、計算する無垢の故なのだ。彼女は彼が避けようとしていること、戻ろうとし、発見されたくないことを感じる、その発見は関係の不可能性を明らかにするだろうから」(S. 325)。

アンドレの「不安」はクララという回路を通してもっとも鋭く現れる。まさにクララが彼を観察しているから。「彼女がアンドレの写真から、アンドレが気づくことなく、描いたスケッチ。すべてがこの写真の中にある、感傷性と傲慢さの結晶集合組織、彼自身がほとんど知らないが、そこで彼を破壊する憎しみ、彼を駆り立てているのは憎しみと攻撃性であることを彼が知らないから。そして彼は苦悩している、と彼女は思う」(S. 338)。

アンドレの「症状」は、クララを媒介にして顕在化する。物語的には彼女はその触媒の役目を持っている。

サン・カルロスでアンドレは教会に入る。

「観光的な午後の中に、低い前庭を持った農民教会がある。アンドレは一人で粗い漆喰の壁際に立ち、そこに額を休ませる。壁に自分をくっつけながら、アンドレは幅の広い緑色のドアの方へ行く。神の家はいつも開いていなければならない。主はそこにいる。君たちを呼んでいる。〈…〉彼はドアを開け、誰か続くか、見まわす、そして入る。〈俺は再びここにいる〉と彼は大きな声で叫ぶ。それは響く。硬直した石灰のような運動の中にとらわれているマリアは、驚いて、醜悪な儀式を見る。彼は一番遠い隅で身をかがめ、吐いている。胃腸が打ち立てる波。彼がかつて *Biarutz* で溺れかけた時のように。どの波も彼を別の方向へ突いた。ますます岸から離れて。岸の人間は、彼の手の動きを、遊んでいると思った。それは正しいと、彼は思った。彼が泣きながら聖水盤に近づき、その中に手を入れ、聖なる水でぬれた手で顔をたたいたとき。そして彼の涙のカーテンの後ろで、ピロードの祭壇の布上の刺しゅうされた文字を読んだ、*amor omnia vincit* 〈愛はすべてに打ち勝つ〉。そのとき、彼に向かってくる彼女の声、〈何をしているの?〉」(S. 272)。

クララは彼を連れ出そうとするが、「もう一度彼は振り返り、そこにろうそくが燃えているこの像を示し、言う、〈俺が生きているかぎり、このマリア像はここに立っている〉。それ

はなにを意味しているのだろうか。〈俺とは独立して、この像がここに立っている限り、俺はすこしだけより少なく一人だ〉という意味で彼はいくらかパセティックに考える。しかし彼はその考えの中に、説明されるべきいかなる現実も発見できない」(S.273f.)。

アンドレの「意識」の描写は、「意識の流れ」の手法である。イメージが、脈絡もなく、時間に関係なく浮かび、沈み、現れ、消える。その意識の混沌とした流れに対して、マリア像は彼がいなくなってもそこに立ち続けるだろう。それが現実であり、世界だ。自分に無関係に存在する世界。通常、それは自明のこととして受け入れられる。その現実を鏡として自己が形成される。ところがアンドレは、世界を他者として認めることができない。彼はあまりに自分の世界の中に閉じ込められている、「自己」に苦しんでいる。クララもおそらくアンドレに親和した存在である。しかしアンドレはそれを認識できるほど、他者を外部として見られない。アンドレの「不安」はこの自己のことである。彼は自己の中に閉じ込められている。世界は、ただその自己の中に回収される対象としてあるだけだ。

だがこの自己の世界 — 多分、「意識」の世界と言ってよいのだろう — は強力な固有の論理を持っていて、ブラックホールのように、逃走路を許さない。そこでは「距離 = 延長」の概念がない。そうして、アンドレの不安（内面）というモチーフの果てしない変奏が続く。それは同一の「不安」なのだが、それに関して文学表現の可能性の実験が行われるのである。

## 5. フラッシュバック

「意識」の中で時の流れは直線的ではない。時間のカテゴリーが有効ではない。それは物語も同様である。『フィリップと他者たち』の中でもフラッシュバックが挿入されていたが、ここでも、夜中にクララの家にいるアンドレは、彼がどのようにしてそこに達したかを振り返る。これは文学的な技法だが、意識が自分を振り返って見ているのである。ひとつの「症例」なのだ。あるいはアンドレの「夢」であるかもしれない。この小説自体が「症例」であるとすれば、それは「著者」の一つの夢である。

「始められた、そしてもう終えることができない。彼は古典的な夜の中に白く立っている。開いた窓際に、海に向いて。彼から1メートル離れて、彼女が動き、ベッドの中でうめく。彼は彼女の方へ行き、彼女を見つめる。顔は極端な未知性に歪められている。それはもう彼が寝た女の顔であることができない。彼はその顔をすこしほつれた髪のところまで上げる、それから短く彼女の開いた口の中に息を吹き込み、近い所から彼女の顔の中の斑点を観察する。彼がシーツを取り去ると、彼女はそこに裸で横たわっている。その中に人間が刺さっていない、丸められた肉体のように。一つの物故した、見知らぬ物体、すべてのものから成立する

ことができるであろうもの。彼は彼女の腕の乾いた肌をなでる」(S. 278)。

それから時間が遡られる。アンドレとクララの言葉が交互に現れるが、それは対話ではなく、交互に独り言を言っているように見える。アンドレ、「俺はますます少なくなる、どの経験によっても俺はもっと少なくなる。俺は、自分がどのように消耗するかを眺めることができる」(S. 282)。クララ、「あなたが思うことは、あなたにとって意味を持たなかった。あなたは役者よ。つねに自分だけを眺めている役者。風景と一緒に、取り巻き連中としてのそのつどの環境とともに自分を。そしてあなたはなにも知ることはない。そしてあなたがそれについて考え始めるのならば、あなたはまたあなたの役割を台無しにする」(S. 283)。

クララは、小説の構造上、他者として、「私」と同じ上位の審級である。アンドレはどんなにあがいても彼女に到達できない。

「〈地図が白く完全に空っぽなスペインの真ん中に行き、そこにとどまるのが、俺の昔からの夢だ〉。低くほとんど笑いながら彼は付け加える、〈そして苦しむために〉。女は向きを変え、丘を上る。アンドレは、彼が言ったことへの嫌悪を隠すために、彼女がそうするのを知っている。そしてそれがまた少し笑う理由だ。それでも、彼が自分の前に掲げている鏡の中でそれは悪くなかった。つまり十字架のヨハネス風の顔立ち、彼の後ろの荒涼たる風景によって強化されて、盲目の白い眼、そしてその内側で、ただ所有者にだけ見える、真理の最初の兆し、ただ苦悩によって獲得された」(S. 284)。自己の中に閉ざされている人間はナルシストである。だから他者が見えない。あるいは見たくない。見れば、自己愛的な自己が壊れてしまう。そしてクララはその苦悩するナルシストに魅了されるのである。

「自己」に囚われた人間は、自分にとっては悲劇的であるが、周囲から見れば滑稽である。アンドレが他者と触れる場面は、その悲喜劇性がうまく表現されている。クララにはスペイン人の恋人がいた。そしてクララはアンドレを選んだので、アンドレはそのスペイン人と争わなければならない。Santa Eulaliaのクララの家、Villa Gertrudis。

「女は、あなたが片づけて、という身振りをした。彼は汗が出はじめるのを感じた。彼女は歩き続けたが、廊下の真ん中で戻ってくるのが聞こえた。もちろん、彼女はそれを見逃しはしないだろう、戦いがある、彼女を求めて。彼はスペイン人に〈帰方がいい〉と言った。スペイン人は、彼女への言葉が役に立たないので、華麗なポーズを取り始めた、苦悶、絶望、懇願して天に上げられた腕、震える口髭。アンドレは、そのバカ者はどんなに彼女を喜ばしているかわかっていない、と思った。その素人芝居が続いている間(君は俺の生だ〈…〉)、アンドレは前に進み、彼に一発食わせた。男は彼の眼の動きを静止させ、アンドレを再び見つめた。すべての悪しき夜、すべてのナンセンス、彼女の軽蔑。それじゃまるで彼が彼自身の顔を見ているかのようだった、一つの綿の顔、すべての苦悩に準備した、どの屈辱も覚悟

して。なんとと言う未来の鏡が俺の前に掲げられていることか、と彼は思い、そのような怒りを込めてこの顔を殴ったので、男は後ろによろめき、泣いている装飾のように柱の脇に横たわった。彼女はとどめの一発のためにもう一度振り返った。アンドレは家に入った、手を洗いながら、彼は月に照らされた庭の道を見た。俺の人生からの一つの場面。ショット、ドアの中の彼女、庭の道の上に彫られたドアの影。後ろに黒、海、夜。そして柱に押し付けられている男、彼女に与えたお金を求めて叫んでいる。棕櫚の木。それをただ書き上げよ。彼は手を洗い終わった。彼が男に与えた打撃は、彼ほど彼女を欺かなかった、軽蔑がすでに彼女の眼の中にあっただ」(S. 290f.)。

アンドレは、女を求めて他の男と本気で殴り合うことができない。「女を求めての争い」という観念を演じているだけだ。そしてアンドレはそれを意識している。具体的な、物質的な現実、彼に拒まれている。「性」も同様である。女の具体的な肉体を前にしてアンドレが感じるのは恐れである。観念やイメージが渦巻く状態だ。

「彼は女を見る、部屋が崩れ、光の中でずれるのを見る、隅にいる鉄の顔をした彼女を見る。その隅には木の枠の鏡がかかっている。焼きつくすように書くこと Das verbrennende Schreiben。彼はそれを考え、それが何を意味しているかと思う。何度も彼女は彼の考えの中に入り込んでくる、この甘美なメキシコの詩句〈…〉と焼きつくすように書くこと。足を一ミリ動かし同時にこの燃焼を一緒に引っ張っていくこと。汽水性の、青白く焼き網の上に横たわっていてマッチのように曲がる、作家の魂。〈運命が我々を打つのだけど〉。〈…〉彼の肉体のどの空洞においても叫びながら彼は最悪のめまい感に苦しむ、今世界が彼から折れるだけではない、彼自身が自分から折れていく。そして何度も彼の言語の故障している機械が作動し、比較やメタファーを探す。しかし彼には何も思い浮かばない」(S. 292)。まさにこの観念性が、アンドレの病なのだ。具体的には「ため息をつきながら、泣きながら、彼は窓のところへ転がる。〈…〉ぬれた布で彼女は彼の目の下、口の周りの湿りけをぬぐう。震えはゆっくりと癒え、病人はベッドに行き、彼女と人形のようにセックスする」(S. 293)。

ここまでの「クララとの出会い」のフラッシュバックの内容である。その後アンドレは睡眠薬を取り、眠る。そして一種の「上級審」から「私」がアンドレに話しかける。

「君はそこに横たわっている、よき友よ。君は枕の上で転がる。とても用心深く、君は考え始める。その夜の彼の不安が戻ってくる時の苦痛が彼を一瞬間の間惑わせる、そしてこの当惑は憎しみと同時に恥ずかしさである。彼は自分を憎み、恥じる。というのは彼の不安、それは彼なのだ、そして彼はそれを知っている。彼に降りかかってきたもの、彼の不意を襲ったものは何もなかった、そこに導かなかったものは彼の人生において何もなかった、昨日の不安を作りだすことに貢献しなかった瞬間は一つも彼の人生になかった。彼はベッドのとな

りにタバコをみつけ、火をつける。女が目を覚ます、彼女は裸だ、彼は目を背ける」(S. 296)。

このパセティックな調子は美しい。ギリシャの運命劇の中の主人公＝英雄のように、逃れることのできない力によって破滅していく人間の姿は美しいのである。この比喩は唐突ではない。アンドレが「不安」と呼んでいる、精神の状況は、運命と等価である。「彼は〈いま何をすればいいのか〉と思う。そして彼は彼の人生の個々の瞬間の間をさまよう。ひょっとしたらいくらか郷愁と共に。どの瞬間も、彼がここに立っている、その仕方の一部であるからだ。しかし映画の巻き戻しは映画のための説明だろうか。いずれにせよ映画である。〈…〉世界は舞台、人間は端役、一人の共演者もなく、唯一の醜くされた観客としての彼」(S. 297)。

## 6. 迷路

アンドレは内面の迷路の中において、そこから抜け出せない。アンドレが自分の「不安」についてどんな診断を下しても、結局彼は「外部」を持たず、ココア缶の絵のように、「自己」の中に無限に退行していくだけである。だから自己からの離脱を予感するときだけ、彼は幸福の予感をもつことができる。

雨の中、アンドレは画家のシャーマンと向かい合う。「〈お前は臆病だ〉とシャーマンは言う。〈それができないから、したくない。俺はすべてを見る、でもそれは十分ではない。俺は創造することができない。不安と知性は十分ではない。俺は力がない〉。今彼に、どんなに大きな声で彼らが叫んだか、どんな喜びがその際に関与していたか、が意識される。彼らは雨の中に立っている、シャーマンは、〈働け、お前は働かねばならない〉と叫んでいる。シャーマンは話をする。(Jones Beach を散歩した。少なくとも 1 キロの長い足跡が残っていた。白い光、アメリカの光。空はすっかり朝のネオンでぬれている。ただ海だけが遠方で、色で塗られていた。その一日。私は足をこの足跡の一つの中に置く。それはぴったりと合った。しかしこの瞬間私は、海がすべての鎖を一挙に洗い流すのを見た。私はそこにいなかった、そこを歩かなかった。誰もいなかった)。〈今にモラルだ〉とアンドレは思う。しかし何もこなかった」(S. 306)。

シャーマンはその話をするだけで、そこから教訓を述べない。これは人間の足跡、仕事ははかないものだから、形あるものとして残しておけ、と言っているだろうか。でもシャーマンはその「モラル」を言わない。彼が言おうとしていたのは、その足跡よりも、Jones Beach の美しさである。その朝の「アメリカの光」の美しさである。その美は、彼が砂浜につけた足跡によって可視的になった。画家のシャーマンにとって、その足跡によるように、自然の美を可視的にすることが芸術なのである。

だがそれが見えるようになるためには人はまず歩かねばならない。足跡を残さねばならない。若いアンドレにはそれが分からない。彼は「書けない」と言うが、それは文学的な才能やスランプの問題ではない。生きることへの信頼の問題だ。だがそれは生きなければ見えてこない。書くことの意味は、書くことによってしか見出されない。その試みがこの小説そのものだが、その小説の中の主人公であるアンドレは、一步も踏み出せずに立ちすくんでいるのである。あるいはアンドレはその「不安」の底まで達しなければならぬ。

不安の極点が目指されていると言えるかもしれない。「症例」は隔々にまで記述されなければならない。クララの一晩の後では、彼の「不安」は鳥とか友人たちとかに分類されない。すべてが一緒になって、アンドレの「症例」世界、彼の内面の苦悩の世界を構成している。それは文学的表現の実験となる。

#### Pedro のパール。

「彼は緊張し白くなるのを感じる。彼の皮膚は実際に彼の顔の上でピンと張る。彼はその上をこすろうとする、少なくとも皮膚を落ち着かせようとする、しかし彼は、1分後には震えるだろう、もう話すことができないうだろう、パニックになるだろうということを知っている。彼は左手の指の根元の関節を歯のあいだに指しこみ、この詰め物をされた口でしゅうしゅうと音を立てる。俺は望まぬ。しかしそのいとわしい回転木馬は動き始めている、死と無。俺は死にたい、不安を持ちたくない。恐怖のイメージが揺らめく、そしてもちろん彼女が彼のところへ来るのだ。彼の方へ、今彼女は彼を認めるので。また、この男は狂っている、本当に狂っている、と女は思う。見てられないわ、この痙攣した顔、若きウェルテル」(S. 313)。

「〈お目にかかりましたか〉。上品な声。鋭く刻まれた顔、茶色で同時に崩壊して、海風とアルコールの間の日常的な戦い、それを越えて完全なメイキャップ、それが彼を見ている。鉄の眼。〈あなたはとても病気の人に見える〉。シ ril がクララの友人と言う。彼女はクララに、〈あなたの友人にとっても病気に見える、と言ったんですよ〉と言う」(S. 314f.)。

「ノースは、〈彼は内部に白痴を持ったローマの教皇に見える〉と言う」。老婦人の夫の「青い完全に空虚な眼が彼を見る、この男は俺よりももっと少なく存在している、とアンドレは思う。この考えの何が彼の中に言い難い陽気さを引き起こす」(S. 315)。

「動いている他者たちの中に彼女がいる。未知の女。彼の方を見ない。彼は彼女のところへ行こうとするが、後にしなければならない無限の距離がある。彼は時計を見る。14時14分。列車がこの空っぽの男からエスプレッソ・マシンのところのクララまで行く。風景は無限だ」(S. 315)。

「すべては縮小し、膨張する。ハエは歌いながら消え、冷蔵庫にぶつかる、大きな緑のピンとともに戻ってきて、彼女はそこから一杯を注ぐ。すべては縮み、膨張する、パールの隅

はいまはるか離れている。床は湾曲を見せる。どれくらい前に彼は水を Pedro から受け取ったのか。ペドロ、ハエ。アンドレは水を飲む。16時14分」(S. 316)。

ノースが来る。「〈お前は病気か〉。千回もそう聞かれた。もちろん陰謀だ」(S. 317)。アンドレはノースによって外に連れて行かれる。

「〈お前の内部の白痴〉とノースは言う。しかしアンドレの中で見張りをしている明敏な文学者が彼にブレーキをかけ始める。不安は言葉で満足させられる。ノースがバールに消えると、彼は落ち着き始める。これが書くことの代償であるなら、俺は書きたくない。彼は一つのことがらにそんなに確信していたことはない」(S. 317)。

「病気か」とアンドレは何度も言われる。それは滑稽な場面で、そこでアンドレが「やれやれ」と自分を笑うことができたならば、彼は病気から癒されているだろう。それが彼はできない。(あるいは、それを描写すること、症例の自己記述によって、それを試みている)小説の中ではアンドレは彼の「不安」の極限にまで苦しまねばならない。それは小説のロジックである。

あの老婦人、Cameron 夫人を訪れ、「他者と一緒にいることの窒息させるものが今ほど彼を麻痺させたことはなかった、午後の怠惰な溺死が始まる、気分はますます危険に空っぽになる」(S. 324)と感じる。夫人の犬を蹴飛ばし、ノースと殴り合いのけんかとなる。殴り合いは他者との肉体的な接触である。自己がいなくとも厳然として存在する外部の世界との接触である。スペイン人との殴り合いは、芝居として表象されていた。ノースとのつかみ合いは、夢として表象されている。句読点のない描写は、現実の物体が現れてきても、ただアンドレの意識の中の出來事でしかない。アンドレは「自己」の中に閉じ込められている。

## 7. カットバック

その後、クララの家で「彼は灰色の朝の光で目覚める。〈俺は死にかけている〉と彼は自分がはっきりと言うのを聞く」(S. 328)。彼は自分でそれを言うのではなく、そう言っている自分を聞くのだ。あたかも「症例」のように。それに続く、アンドレの「不安」は極限である。そしてその極限に見合った表現がなされている。それはアンドレとクララの別れを記すものだが、アンドレの精神の最終的な破綻を記している。

「彼の眼はぞっとするほど彼の活動力の後ろに後退したままなので、彼は眼を殺したいと思う。何度も眼は灰色の光の中のこの顔からこっそりと立ち去る。しかし数えることは続く。見ることはそれらを数える。盲目の、眠りの中に閉ざされた眼。彼の額、頬、口。〈…〉彼の手はそれを見る。その指は喉の皮膚の上を漂っている。これは恐ろしい誘惑である。彼は

この手を喉の上に落とさせ、締め付けさせないだろうことを知っている。しかし彼はとても自分に対する不安につかまれていたので、彼女を起こさないようにゆっくりと慎重に立ち上がり、彼女から離れる。机の上のはさみを隠す。ナイフを彼がもう見ないであろうところに置く。しかしその存在は白い実体、例えば肉を刺し、切り、穴を開け、裂く。呼吸をせず、彼はそのイメージから向きを変え、浴室へ行く。彼は眼を鏡の中のこの眼の中に置く、しかしそれらは肉と血からできた眼ではない。彼は、いつも俺は死ぬと唱えているこの男と何の関係もない。彼は心臓が全身で鼓動するのを感じる。吐く。出来るだけ多くの空気を呼吸する、まるでそれで永遠に生きるかのように。後ろでかすかな音がして彼は振り返る。彼女がそこに立ち、彼を見つめている。彼はハローと言おうとするが何も出せない。彼女の顔は格子を入れられたようで、彼を撃退している。恐ろしい静けさの中で彼の呼吸が外の木々よりもっと悪く聞こえる。彼は彼女のところへ行く—いま金切り声、叫び声。円が閉じられた。叫び声、何千もの喉からの叫び声。男は回転し、彼の服の金が動く。溶ける金の中で彼は真ん中へ行く。トランペットの響き。彼は toril (牛のいる囲い) の穴、口の中を見る。静けさが昼のように始まる。闇で盲目になって雄牛が走って出てくる—」(S. 329f.)。

初めてここを読んだとき、印刷ミスではないかと思った。読み続けると、アンドレとクララの場面と闘牛の場面が交互に現れるのがわかる。今までの文体は「意識の流れ」の手法で説明されるが、この闘牛の場面のカットバックは斬新である。映画のカットバックは、ショットを交互に見せ、それらのショットの同時性を表すが、ここでは同時性はない。そもそも何の関係もなく、読者は何かの因果関係を見つけだそうとして当惑する。

主語は「闘牛」の段落の前の段落の最後の文にある。「彼は」,「手を伸ばし、彼女の胸を捕まえる、彼女は以前にまして彼を憎む。彼女は彼を突き離す。破局の伝令。唇を噛みながら彼は影に支えを求める。彼女は弱さを、感動を—」(S. 320)。

「電光石火の動きで彼は capa (ケープ) を空中に振る。数千人の声は不在である。彼は紫を輝かせる。雄牛は向きを変える。男は変化し、ひざまずくものとなる。彼の顔は、死を予言する危険な仮面のままだ—」(320)。

「を耐えることができない。彼らは二人とも手首の時計の音を聞く、古風な戦争からの大砲の射撃。彼は思う、砂時計は逆さにされた。俺は空転し始めている。彼女は強すぎる。不安が俺を囲んでいる。誰もその場にいることはできない、それは無だから、あるサロンにおける扇子への不安。しかし俺は俺の武器を手に取りねばならない。彼女が俺を—」。

「動物は向きを変えた、角が capa を捉える、武器なしに彼は一人で立っている。砂との出会い。群衆は犠牲のにおいをかぐ、彼は barrera (柵) に逃げる、影は彼の金の上に落ちる。光が肉体の眼の中に大きな針のように立っている—」(S. 320f.)。



「〈…〉女は、どのように昆虫が何かを言うために脚を上げるかを見ている、そして言う、私は望む、あなたが—」(S. 331)。

「屠殺の兵士たちが馬で登場。馬上の男が雄牛の黒い皮に、首に槍を突く。血—」(S. 331)。

「あなたが出て行くことを。うまく行かない。私は再びここでひとりになりたい。彼女は口を開く、彼を咬んだ口を。しかし何も言わない。彼は、ここでそんなにも見知らぬ女と一緒にいることへの嫌悪のあまり叫ぶのが一番いいのだが〈…〉—」(S. 331)。

〈…〉

「剣は雄牛の中に突き刺さり、骨に当たる。空気の銀色の部分のように剣は高く輝く。そのすべては生と言うもので、そして生は死にかけている。〈…〉見ろ、その肉体はよろめく、倒れる、そして生と死と一緒にこの肉体の中でする小さな猛獸的な跳躍、一つの致命的な流れの打撃、とっくに彼はひっくりかえていた、太陽—」(S. 335f.)。

「〈…〉〈悲痛に泣きなさい〉。彼はばねのように飛び上がり、彼女の手には噛みつく、驚いて彼女は手を上げ、その血を見つめ、彼にキスをし、その際に血を少し彼の顔の上に垂らし、言う、〈私たちは始めるべきではなかった〉。しかしこの弱さは他のすべてよりももっと破壊する、いま生まれる、率直さと同情に耽る状況—」(S. 336)。

「〈…〉太陽は闘技場を離れる。影の翼の中を彼は行く、彼は消える。彼は描写不可能な疲れが彼の中に巣くっているのを感じる。〈…〉水が彼の手から血を洗い流す、血は消える、もうない—」(S. 336)。

「同情、彼女が獲得した勝利、今なにも必要ではない。彼は彼女を放し、極端な絶望とともに廊下に逃げる。今まだ芝居を演じなければならない。彼女は言葉でもって彼を追う、彼らが互いに注ぐ、滑稽な対話を心配しながら、それはもう存在しないものの単なる延期でしかないのを知りながら」(S. 336f.)。

映画では、脈絡とは無関係なショットをつなぐモンタージュがある。その意外性がショット自体を強化するのだ。この「闘牛」のショットは、たぶん「島の人々、土着性」の文脈に分類できるが、スペインだから闘牛というのはいかにも安易な発想である。(アンドレの姓は、Sreenkamp である。私はオランダ語を知らないが、ドイツ語で闘牛は Stierkamp である。ジョイスの言葉遊びは多言語に渡っていた。闘牛のショットの登場も、この名前にも関係すると思う)。だがこの闘牛士は違う。闘牛の起源は分からないが、宗教的な犠牲の儀式であるように思う。それを行う司祭が闘牛士だ。観客は共同体としてその儀式に熱狂とともに参加する。しかし闘牛士=司祭はそうではない。少なくともこの闘牛士は近代人である。自分が血の儀式を司る司祭であると意識している。そこには陶醉はない。共同体の制度として牛の殺害を行うもの、その虚無をノーテボームは近代の芸術家の中にも見ていたのかもしれない。

大胆な表現手法だが、それが成功しているのかどうか私は十分判断できない。意識の流れにはどのようなものも登場可能なのだから、それが段落の形で交互に現れても、不思議ではないし、別にその文脈に論理的な合理性を求める必要はない。文学表現としては、この「カットバック」の手法は、『フィリップと他者たち』で述べた「枠構造」の延長にある。また後の『オランダの山の中で』や『存在と仮象』の中の、作家と、彼が書いている小説が交互に章として現れる構成にもつながる。これも「誰が書いているか」という語りのテーマにかかわる問題である。とにかくこれは、クララが彼を拒否し、アンドレが最終的な敗北を認める場面である。もう彼には逃げ道はない。彼は闘牛士ではない（彼は刃物を隠した）、殺される雄牛である。

## 8. 死

物語の力学は終わりとして「死」を指している。ノースがシシルの心臓発作を告げ、アンドレに会いたがっていると言う。「〈ロンドンを離れたとき、死者として戻るだろうと思った。私がそれを欲するからだ〉。シシルはゆっくりとクッションに身を沈ませ、横向きになった。その周りにガラスがあれば、彼はスペインの大聖堂の蠟のような挑発的な聖人の一人となるだろう。神の冷凍庫の中で永遠に見世物とされて、不妊や精神的な混乱に抗して」(S. 342)。彼は自分の人生について語り、アンドレは、告解のように、それを聞く。「アンドレはこの流れ出ていく生を新しい衣服のように身にまとう、自分の不安をあたたかいままに保つために、同時に彼は死の床での聞き手を演じている。できるだけ静かに坐り、鏡を演じている。老人は鏡を自分の前に保ち、彼の人生全体を描き入れる。彼、鏡はそれを吸収し、もう書かないことが残念だと思う。というのは俺はもう書くつもりはないからだ。離れて行きたいからだ」(S. 343)。

アンドレは、シシルが自分を映す鏡となる。そしてアンドレにとってこの「症例=小説」は自分を映す鏡である。同じものを映しているのだから、そこには「外部」がない。ココア缶の絵のように「自己」が無限に後退していく。

「医者が来て、アンドレは連れ出され、両者がドアのところにいるとき、シシルは死んでいた。私たちの主人公は、そのガラスのチドリの卵を閉じることを拒否する」(S. 344)。

シシルはアンドレが島に来た時の船にいて、アンドレを島に導いた。そして死者としてアンドレを島から連れ出す。「アンドレは、彼がトランクの奥深くに詰め込んだ粉末のことを思った、二人の mozo (若者) がシシルの遺体を飛行機に詰め込むのを見た」(S. 345)。

飛行機からアンドレが見る「風景」は美しい。

「高いところから彼は自分の肖像をじっと見つめる。貨物室の棺の死体はもういちど人間となって、ツイードに包まれ、手すりのところに立ち、彼に話しかける。というのも時が何の意味を持つだろうか。すべてが常に、不斷に起こる。彼は糸のように彼の運命の針の穴に通される。飛行機は船に挨拶するために短く下降する、それは本当に島に来た時と同じ船だ。下降によって押しのけられた空気が彼の体の中で力強く上る、めまいが彼の目の後ろで渦巻く。しかし彼は船が消えてしまうまで眺める、それからは海以外に見るものは何もない。ピカピカ光る板、その上に彼らの影、小さな前進する影。その中に彼とシリルがいる。その影は騒音を出す。(彼はタバコをつける、考えはまとまらない) オランダの家に。同時に比類のない悲哀。シャーマン、彼女、そして島に関しての悲哀、彼は健康になろうとした、岩の上に横たわり、明るいブルーの服を身につけ、褐色になろうとした、子供っぽいこと、願望、その後ろに災いが隠れている。飛行機が編むゆっくりとした曲線の中に彼はもう一度島がそこに横たわっているのを見る。今もちろん無限に遠くに去って、一つのヴェールの中で向こうに流されて。これが彼の過去の現実と関係があるということは真実でありえない。ただイメージ、イメージがいやおうなく浮かびあがる。ますます洗練されて、壁の一部、植物の葉、彼女の浴室のタイル、一枚の紙の上の名前、手の中のグラス(誰の手だったか)。島は海と一つになる、離れていく、しかし彼らはそこにいる。彼はここにいる。彼がそこに戻りたいと大きな声で言う、と思う。でも低く言うだけだ」(S. 348 f.)。

来たときは船から島が見られた。出るとき飛行機から島が鳥瞰される。その美しい風景はアンドレが最後に見た生の美しさの姿である。

マドリッド。空港の遺体。「泥色の、四角のブロックの形に彫刻された都市が飛行機の方に来る。彼は湯気を立てている光の中、階段を降り、泳いでいるコンクリートの地面に立つ。彼は、作業員が棺を地面に降ろすのを見る。彼らはシリルを知らなかった、シリルはひとりの死者に格下げされた。だれもアンドレのところに来ない。彼は島でイギリス領事に、棺がイギリス行きの飛行機に乗るように配慮することを約束したのだった、作業員は去る、彼はゆっくりと棺から離れる、それは静かにたいそう孤独に銀色の飛行機の下に立っていた。〈さよなら、シリル〉と彼は言い、走り去る。コンクリート平面の最後で彼はもう一度振り返る。彼は口を開いて一人の男に何かを言おうとする、しかし言葉は出てこない。何の指令もない。恐ろしい渴きが彼の舌の上、歯の間にある。無力に彼はその男、棺、彼がその中に横たわっているのを見る遺体を見る。彼がいま後ろ向きにする歩みは、ながく続く。誰も棺のところへ行かない、誰が棺のことを気にかけるのだろうか。彼は速く数歩後ずさりする。彼は化学的な温かさの中にたれていた手を差し出す。ノー、ノー。滑走路には人間はいない。飛行機だけだ。一機の飛行機も棺のところへ行かない。彼は逆を向き、口の前に手を置いてタクシー

まで行く。運転手は何も聞かずに、都市へ出発する。涙を通して、彼は死んだように静かにコンクリートの上に立っている棺を見る。そのとき一つの道路のカーブがそれを切断する、そして新しい罪が彼の中に押し寄せてきた」(S. 349f.)。

アンドレが島で見た葬列の棺の死者は笑った。飛行場に孤独に置かれたシ ril の沈黙した棺はそのままアンドレの姿である。アンドレはマドリッドのホテルで死ぬことになるが、それは描写されない。飛行場の無機的な空間の中の孤独な棺ほど鮮明にアンドレの姿を表しているものはない。シ ril はアンドレを島に導き、死体として島から連れ出した。そして今、死の世界へ導くのである。

そして最後に「私」が「症例」についてのメタテキストを書く。これは症例に関するとりあえずの「診断」である。アンドレは、遺稿の中では、Louis Couperus の小説のヒロイン、Eline Vere のように死ぬことになっていた。Elise Vese は眠れない。「〈神よ、私を眠らせてください〉。その時ある考えが頭を走った。ブリュッセルから来た医者が処方したよりももう一滴多く飲めば」(S. 353)。しかし「私」はそのようにアンドレを「死なせなかった」。「私」はその部分を引用しながら、自分はそれを用いないと書いている。表現が二重底になっている。ココア缶の絵のように、無限に後退する感覚をこの小説は描いているのである。それがアンドレの「不安」の正体なのだ。

最後に「私」は書く。

「騎士は死んだ。〈…〉彼は死んだ。残りを他の人たちが引き受けなければならない。私が何を試みようとも、私は同じ本を書くだろう。この本は終わらないから。〈…〉彼は彼の原稿の中に幽霊となってさまよっている。自分を見ない盲目の男。彼は自分を認識しなかった、私は彼のための鏡をつくらなかった。彼は死なせられることを拒否している。英雄たちの国に送られることを拒否している。しかし私は義務を果たした。私は終りにいるので、不安と嫌悪、ひよっとしたら憎しみ以外のなにも残されていない。〈…〉私は彼を死なせなければならなかった。そのために、私は彼をホテルにおいやり、彼を殺し、棺のふたを閉じる。それは私には成功しなかった。私は彼が誰であるのか知らない。しかし友よ、誰か別の男に君を君の死の中で飾らせたまえ。〈…〉私はもうしたくない。私は君の死の抱擁から自分を解放し、君をそこに置く。それは起こらなかった、私は逃げるところの者である。Aquí depositado el cadáver de Andre Steenkamp 〈ここにアンドレ・ステーンカンプの遺体が仮安置される〉」(S. 354f.)。

私はこの小説を、ノートボームの「症例」の自己記述として読んだ。彼がアンドレと同様の「不安」を抱えていたと言うのではない。「不安」は、人間を構成する、カテゴリー的条件の一つである。そして彼はそれを描写するのに、文体のレベルではラディカルな「意識の

流れ」の手法を用いた。構成のレベルでは、悪循環（ココア缶、「鏡」のメタファー）を用いた。「私」、「クララ」もアンドレの alter ego あるいは「超自我」の役割を持つ。つまり彼らもアンドレの内面の中の存在である。その全体がアンドレの自我の世界なのだ。アンドレはそこに閉じ込められていた。そこには「他者」も「外部」もない。その内面の世界は、青春の謂いである。「ウェルテル」とクララは言った。それはまた抒情詩の謂いである。青春、抒情詩をノーテboomは「殺さ」なければならなかった。彼はこの時、果てしない世界の旅に出ている。「外部」を、「他者」を探し、それに身をさらしている。そして同時に今ここで彼は、青春の肥大した「自我」（それはヨーロッパ近代の、フーコー的な意味で人間主義的な「自我」である）を殺さねばならなかった（「騎士は死んだ」＝「人間は死んだ」）。全体に流れるパステリックな、ナルシズム的な調子は、自らの青春を葬るためである。この小説は、詩人の「歌の別れ」である。

『騎士の死』 — Der Ritter ist gestorben — は全集版による。Cees Nooteboom: Gesammelte Werke Band 1. Romanen und Erzählungen 1. (Aus dem Niederländischen von Helga van Beuninger und Hans Herrfurth). Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2002. ここからの引用は、本文中にページ数を記した。

#### 注

- 1) Nooteboom, Cees: Tumbas. Gräber von Dichtern und Denkern. In: Gesammelte Werke Band 9. Poesie und Prosa 2005 – 2007. (Aus dem Niederländischen von Andreas Ecke). Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2008. S. 263.
- 2) ジグムント・フロイト：分析技法の前史に向けて（須藤訓任訳）。In: フロイト全集 17。（岩波書店）275 ページ。

Cees Nooteboom lesen 2

„Der Ritter ist gestorben“

André Steenkamp, ein junger Dichter aus den Niederlanden, kommt auf eine spanische Insel. Er leidet an der Angst und geht daran zugrunde. In dem Roman geht es vorrangig um diese Angst. Was die Struktur des Romans betrifft, vollendet der Ich-Erzähler die Manuskripte, die sein verstorbener Freund unvollendet hinterlassen hat. Es bleibt jedoch unklar, inwiefern er dessen Manuskripte ergänzt hat. Im Text findet sich das Beispiel von einer Droste-Kakaodose, auf der eine Krankenschwester abgebildet ist, die eine Droste-Kakaodose in der Hand hat, auf der

eine Krankenschwester usw. Das Bild der unendlichen Regression entspricht der Struktur des Romans und gleichzeitig der Angst von André. Was die Literatur betrifft, so geht es um die Person des Erzählers. Die traditionelle Form des Erzählens (die literarischen Konventionen von „Autor“, „Held“, „Erzähler als Gott“, „Handlung“ usw.) ist nicht mehr gültig. Die Schwierigkeit oder Unmöglichkeit des Fabulierens wird vorgeführt.

Ich habe diesen Roman als Selbstbeschreibung der Symptome im Sinne der Psychoanalyse betrachtet. Nootboom schreibt später einmal, es sei „ein pathetisches Buch, das ich schreiben mußte, um weiterzukommen“. Literarisch ist damit ein Versuch gemeint, den oben erwähnten Sachverhalt festzustellen und darüber hinweg zu gehen.

Lebenshistorisch ist damit ein Prozess gemeint, die eigene Angst zu bewältigen. Nootboom hat in der Form des Romans die Angst „simuliert“. Er hat André alle Phasen der Angst durchleben lassen, woran dieser schließlich untergehen mußte. Um alle möglichen Symptome zu beschreiben, wird vom Autor die Technik des Bewußtseinsstroms radikal eingesetzt. Das sensible Bewußtsein von André stößt mit den Anderen und der Welt zusammen. Es schwillt grenzenlos in die Welt, was aber nicht gleichbedeutend mit seiner Korrespondenz mit dem Weltall, sondern die Ausdehnung des Gefängnisses seines Bewußtseins ist. Der Strom des Bewußtseins ist nicht einheitlich. Er zeigt Chaos, Labyrinth, Spirale, Anschwellen und Schrumpfung, die Gesetze des Raums und der Zeit gelten nicht mehr. Dafür sind die filmischen Techniken von Flashback und Cutback verwendet. Und die Angst des Protagonisten ist auch ein Zustand des Europäischen Geistes nach dem Krieg. So wie André stirbt, muss auch Nootboom seine Jugend töten. Der Roman ist ein Abschied von der Jugend und von dem Lyriker-Ich.

# The Dao of Clamming

貝  
採  
り  
道ダウ

Scott Watson

At age twelve, some other boys and I learn to clam from Harry Kreutzberg, who had learned this way of clamming from his brother-in-law whose last name was Griffenberg. It is Memorial Day weekend and we are at Harvey Cedars, Long Beach Island, New Jersey. Five families of us. There are thirteen or more children — elementary school or younger — in one two-storied house. The year is 1966, it is a Saturday and it is damp and chilly. Where the bay (Barnegat Bay) ends and the island begins cannot be distinguished in this thick fog. You can't see much beyond your arm held out, houses are but a faint presence, insubstantial, ghostly, almost nonexistent. To walk we have to follow the road's edge under us.

There is no chance for the hoped for boating that day, nor for much else outdoors. Being able to see so little is our entertainment for a while. Soon though we're down fishing off a dock at the bay half a block down the end of Harry's street. Blowfish — puffers — bite on our frozen squid. There are so many of them, as if an entire school has entered the bay with a huge appetite. Out of bait, they come at bubblegum stuck on our hooks! They attack our bare hooks even! One hour we count over 50 caught.

There're many more than enough. We're told to stop. They're not bad eating.

What we find to do in the fog after that is forgotten. Once the fog diminishes a bit, some of us walk a couple blocks to the island's ocean side where there is a sand beach and we go in water that is 50 degrees (10 degrees celsius). Body surfing.

Next day things clear up. We are going out in Harry's runabout with its Evinrude 35 horsepower

engine. Our life vests are on. We each have a pair of sneakers to clam in if we want but we're told we don't really need them. They are old sneakers and it is okay if they get wet.

There's a fairly strong head wind ; the bay is choppy, the engine gargling and humming. It is quite a ride because we first we have to cross the bay to the mainland side to pick up Griff (Griffenberg), Harry's brother-in-law. Lips get chapped in the sun, wind, and salt air. "Use this," Harry tells us. "Smear some your face too. You'll get windburn. Rub it in good, son." Harry calls me son, calls all of us son.

Just off these shoals we anchor ; "Keep your eye on that marsh island." "You're going have to take off your life jacket." "Face this way ; just swing your legs over the boat side. Butt too. Then lower yourself down with your arms." The water might be up to your chest about.

It's cold at first ; we don't mind it. "Holler if you turn blue," one of the adults jokes. Then let go of the boat. Make your way on in where it's waist deep. No, there are no sharks in this bay.

You can clam better with nothing on your feet. At times blue claw crabs can be seen as well as helmet crab carapace. Once every so often you come across an empty soda or beer bottle, usually unbroken. Oyster crackers can get under foot and are slippery. I'm told these can bite off a toe. Who knows if that's true. They crack open oyster shells so their jaws must be strong.

On the bottom too are shell pieces from dead clams. Worm-rock vermicelli is a meshwork of skeleton worm-tunnels veined all over an arc shells' outside. There is slimy gunk and seagrass undulation. Where you come across patches of clear sandy bottom you feel safe as if coming to a small oasis, but there are no clams there.

Afternoon sun is reflected all over. Treading a quick rhythm keeps a body warm. Keep moving. It's a good feeling being a foot clammer, barefoot, no rakes like professionals use. A clam's bed and garden is gunk on the bottom. When you bring up a clam with its muddy darkness still clinging it has the odor of sulfur. Clamming this way means moving through sea grass roots, decaying matter, liquid black earth. Fetid slime feels good once you're over being scared not knowing where it is you're stepping.



There's a vitality that comes into you from just being outdoors, but there's a certain calm that comes into you from being in this bay. It's different from the surge in the ocean surf the other side of the island which effervesces a spirited joy into your entire being. The bayside doesn't make you want to shout for joy, but it is wonderful in its own quieter way.

It's not a working thing, this clamming ; it needn't be called work in the sense of labor. Nor is it play. Feeling for these semi-smooth shelled living things under foot and ducking under digging them out by hand is not work. It grows through you. It's a passion, this clamming.

You're going to take these home and eat them (chilled raw with cocktail sauce or steamed or barbecued or in chowder, depending on their size) ; that's another scene.

After washing them off good you're going to crack two together right here and now where you're standing waist deep, suck down the raw animal alive along with its juices.

They tell me I'm a good clammer : there are many in my shirt. Looks like I'm pregnant. The usual way would be to put each clam in a basket set inside an inflated inner-tube, but we have none and have no clamming license either so just make a basket of our T-shirts and when that is full take what we have back to the boat, cover them with a wet towel, and go get more. If the marine police come around we can easily drop what we have back into the bay. Griff tells us there is a fine for clamming without a license. Something like fifty dollars for each clam taken!

\*\*\*\*\*

Maybe clamming is something I can naturally do. It feels as if it's in me, of me. What is there I can do well at that age? I am not very good at sports. A fly ball drops almost right in front of me in my right field position. It is my first year in midget league baseball ; this is my first time off the bench and in a real game. A couple kids my age are in the games regularly.

Coach puts me in right field I guess to see how I do. Probably I don't pay much attention during practice and during the games probably sit on the bench picking my nose and looking at butterflies or lightning bugs. I can't remember a desire to play or a fascination with the game. My father wants me to play. He has me out in our back yard and he is tossing a ball to me. When I take no interest in it — I am supposed to get excited because I'm a boy and this is an activity boys are supposed to be

interested in — or when I shrug and say “not really” when he asks me if I want to have a catch he gets angry. Why do I not want to “be a boy,” he yells. What am I “a sissy,” he wants to know. Do I want to “play with dolls like a girl,” he asks. Maybe I just don’t feel like playing ball. I don’t know. You learn not to be honest.

In midget football — also something I do at my father’s insistence — the boy across from me knocks me down every play. The coach puts me on defense. On the line. I am eight years old. The opponent is David King. He is four years older. I am below the age limit, which is 10, but since I am big for my age my father wants me to start early. So every play Dave King, who later becomes an all-American linebacker at Syracuse, knocks me flat on my ass.

I don’t know what to do, don’t know how to stop being flattened each time, time after time. The coach steps in after each play to encourage me. He tells me what I am doing wrong, tells me what to do. Tears well up in my eyes. It is so frustrating, so embarrassing. It is made into an ego thing about being able to hold up.

On the baseball field when the ball plops down right in front of me I can hear coach Burt Gill yelling something at me. My father is watching. Maybe he is assistant coach by then. I don’t remember. So embarrassed he must be of me. My teammates who are mostly a bit older know what they are supposed to do even if they make mistakes doing it. They are furious and some call me names: Stupid! Dummy! I am confused. I know I am supposed to catch the ball if it comes to me. But I take it too literally. If the ball comes directly to me I must catch it. That is what I thought. Never does it occur to me that I have to move to catch the ball!

The football coach, Mr. Osa Meekins, would come to me after each punishment from Dave King and tell me what I am doing wrong. Weight distribution. Keep my weight under me. Stay low. Move your legs, drive with your legs. Don’t stand straight up.

It is a sour experience until, finally, by lunging forward while continually pushing on with my legs I manage to not get knocked backwards onto my butt. The downside is that, doing so, I lose all sense of what is happening in the game. By standing up I can see, at least for a brief moment, before Dave King knocks me over. I can know what is going on. Being this low down near the ground makes

no sense at all. What fun is there in that ? You can't see anything. You don't know what's going on. Just spiked shoes and legs. A guy's jersey in front of me. Big deal ! What's the thrill in doing this ?

Eventually you get better at it. You become able to sack quarterbacks, cause fumbles. As a blocker open holes for running backs. Knock people around with a forearm jolt. At times flatten people, knock them into the middle of next week.

In high school the team members and coaches elect me along with two others as team captains. During my senior year a regional committee selects me as South Jersey Scholastic Lineman of the Year. Organizations select me for the All County Team, the All South Jersey Team, and The All State Team. Recruiters from universities come pester me at school and at home. Please come to their university.

In baseball come to be able to hit home runs. Coaches select me for an all-star team. I hit two home runs in an all-star game. You can get good at it even though you didn't really want to do it to begin with. You learn to enjoy it because this is what there is to learn to enjoy.

You develop some capacity for it, for this illusory and artificial dimension of life, something that is not necessary for our survival but which is a game we humans make up and dump all sorts of merit on. It's an artificial turf upon which our lives take place, complete with all the commentary, all the awards, and the idea that how we perform in this environment means something, means something about how we are as individuals.

Put me at linebacker at least ! I can develop a capacity to play linebacker too, and at least in that position can see what is going on !

\*\*\*\*\*

The others are not getting clams. They seem engaged with other things. Horsing around mostly, the young ones. Something or other they come upon. Clamming, it should be noted, is not a traditional "boy" thing where I am from. No kids I know have ever done it. It isn't fishing or baseball or whatever with the built-in cultural associations and acceptability. Maybe that's why the other kids seem inattentive.

Neither are the adults doing well with their clamming though they are concentrating a bit more than are the kids on getting clams. Going at it in a rational, logical way ; wanting to use their brain in a situation that does not call for brainpower. They're at a loss it seems.

Treading along off to myself, being part of all this, in tune with its goings on and going on with it, into its going absorbed, forgetting that the goal is to get clams is the best part of clamming.

It's almost like a gentle trot or a light jog or even a mild form of dance this clamming with your feet. Connected with all that is vibrating in me, being let into it and being as it all is, the many clams are incidental.

If clamming were made an Olympic sport — and who knows these days — I wouldn't be any good at it I think ; probably I wouldn't want to do it.

Scott Watson  
Sendai, Japan

# 強磁場による荷電ベクトル場不安定と カオスパターン

## II 散逸系

高 橋 光 一

強磁場中の荷電ベクトル場は、摂動論的な真空の不安定の原因となり、磁場とともに弦状の構造を自発的に形成する。保存系の場合、その運動は（準）周期的かカオス的で、フラクタル構造をも合わせ持つ。ベクトル場のエネルギーが大きいときは電弱相互作用による場の減衰を通して軽い粒子の生成が可能で、このことにより散逸効果が生じる。電弱標準理論と強磁場摂動法に基づいてこの散逸効果を絶対零度において（すなわち有限温度効果を入れずに）定量的に見積もり、場の運動が保存系の場合からどのように変化するかを調べる。この種の現象は、宇宙誕生後約  $10^{-10}$  秒後における放射とニュートリノおよび反ニュートリノの生成に寄与することが示される。

### 1. 序論

誕生後  $10^{-36} \sim 10^{-4}$  秒の宇宙初期では、非常に強い磁場が生成されたかもしれない (Savvidy 1977; Matinyan, Savvidy 1978; Enqvist, Olesen 1994)。十分に強い磁場の中では、磁場と磁気モーメントを通して相互作用するベクトル場は真空の不安定を引き起こす。その結果、静的には磁場と W 場による弦 — 電弱弦と呼ぶことにする — の結晶状の配列がエネルギー的に安定な状態として実現すると考えられる (Skalozub 1983; Sogut, Havare, Acikgoz 2002; Skalozub 1985; Ambjørn, Olesen 1989)。他方、エネルギーの高い状態から始めてその時間発展を見ると、ベクトル場と磁場はしばしば非常に複雑な動的振る舞いを示す (Takahashi 2010)。エネルギーが高い状態は、相転移時に系がしばらく偽の真空上に置かれることで実現するので、後者の場合は宇宙の初期の歴史と直接関連すると期待できる。

ベクトル場は、大統一理論 (GUT) であれば電弱統一理論であればより軽いフェルミ粒子と結合し、真空中では直ちに崩壊する。話を電弱統一理論に限れば、ここでの荷電ベクトル場は質量  $m_w \sim 80$  GeV の W ボソンであり、それはクォーク、レプトン、ニュートリノとそれらの反粒子に崩壊する。(現在の宇宙の真空中では、 $W^-$  はほぼ 10 パーセントの確率で電子-

反ニュートリノ対, ミュー-反ニュートリノ対, タウ-反ニュートリノ対に, また約 70 パーセントの確率でハドロン (クォークや反クォークからなる粒子) に壊れる (Particle Data Group 2008)). このことは, W ボソンが質量殻上のレプトンやクォークと結合することで, 図 1 の Feynman 図に示された自己エネルギーが虚部を持ちうることを意味する。強磁場中でカオス的に変動するベクトル場不安定モードには, 質量殻上のレプトンやクォークを生成するに足る高エネルギー成分がある (Takahashi 2010) ので, 相転移の進行過程では不安定 W 場はレプトン-反ニュートリノ対 (または反レプトン-ニュートリノ対, またはクォーク-反クォーク対) を生成し, 自身は減衰するであろう。従って, 前稿 (Takahashi 2010) で導いた W 場の古典的運動方程式は, 現実的には崩壊による減衰を表す散逸項を含むように変更されなければならない。

本稿では, 高いエネルギーのベクトル場がレプトンやクォークとの結合を通してエネル

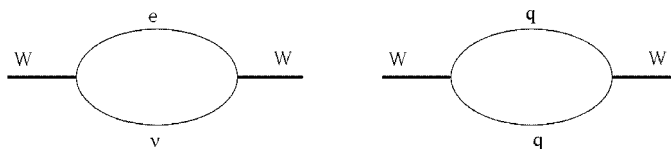


図 1 W ボソンの 2 次の自己エネルギーを表す Feynman 図。(a): レプトン・反レプトン中間状態, (b): クォーク・反クォーク中間状態。

ギーを散逸させる時に, 系がどのように振る舞うかを調べる。考慮する Feynman 図は図 1 に示してある。

通常の摂動法との違いは, 荷電粒子が強磁場下で運動するという点である。伝搬関数も, この点を考慮して構成しなければならない。そのもととなる波動関数の形は多くの研究者によって見つけられているが, ここでは Takahashi (2006) で与えられた表示形式を用いる。それは, 対称ゲージ (たとえば Ezawa 2000 を見よ)

$$\mathbf{A} = \frac{1}{2}(-By, Bx, 0), A^0 = 0 \tag{1.1}$$

での調和振動子演算子による調和関数として与えられる。それらの積の和として表される伝搬関数は, 計算上他の表示よりも扱いやすいという利点がある。第 2 節と第 3 節で, それぞれ図 1 (a) と 1 (b) の自己エネルギー補正の虚部がこの表示形式の下でどのように計算されるかを見る。第 4 節で, 第 2 節と第 3 節の結果を取り入れた散逸力学系を構成しその数値解を求める。

## 2. 不安定モードとレプトンとの結合

はじめに、W の不安定モードとレプトンとの相互作用を特定しておく。レプトンとして電子と電子ニュートリノを考える。相互作用ラグランジアンは

$$L^{(e)} = \frac{g}{2\sqrt{2}} [\bar{\nu}\gamma^\mu(1-\gamma_5)eW_\mu^+ + \bar{e}\gamma^\mu(1-\gamma_5)\nu W_\mu^-] \quad (2.1)$$

で与えられる (Weinberg 1967, Salam 1968)。 $e$  は電子場、 $\nu$  は電子ニュートリノ場、 $W_\mu^\pm$  は  $W^\pm$  ボゾン場である。結合定数  $g$  は Weinberg 角  $\theta_w$  によって電子の電荷  $-e$  と  $g=e/\sin\theta_w$  の関係にある。強い磁場  $\mathbf{B}=(0, 0, B_z)$  のもとでは、磁場に直交する成分 (横成分) に不安定モード  $-\phi$  で表す  $-$  が現れる。我々は、 $\phi$  を次のように定義する：

$$W_1^+ = \frac{1}{2}(W_s + \phi), \quad W_2^+ = \frac{1}{2i}(W_s - \phi) \quad (2.2)$$

ここで  $W_s$  は安定モードである。または

$$\phi = W_1^+ - iW_2^+ \quad (2.3)$$

である。

Dirac 行列のカイラル表現

$$r = \begin{pmatrix} -\sigma \\ \sigma \end{pmatrix}, \quad \gamma^0 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \quad \gamma^5 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \end{pmatrix} \quad (2.4)$$

を用いると、(2.1) の  $\gamma^1 W_1^+ + \gamma^2 W_2^+ = \frac{1}{2}(\gamma^1 - i\gamma^2)W_s + \frac{1}{2}(\gamma^1 + i\gamma^2)\phi$  に現れる Dirac 行列の組み合わせは

$$\gamma_- \equiv \frac{1}{2}(\gamma^1 - i\gamma^2)L = \begin{pmatrix} 0 \\ -1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ -1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \quad (2.5a)$$

$$\gamma_+ \equiv \frac{1}{2}(\gamma^1 + i\gamma^2)L = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \quad (2.5b)$$

( $L=(1-\gamma_5)/2$ ) という形を取る。明示的に書かれていない要素はすべて 0 である。

ここで定義した  $\gamma_\pm$  には次の性質がある。

$$\gamma_-\gamma^0\gamma_+=\gamma_-\gamma^3\gamma_+=\begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix} \equiv C \quad (2.6a)$$

$$\gamma_-M_{diag}\gamma_+=\gamma_-M_{\overline{diag}}\gamma_+=0 \quad (2.6b)$$

(2.6b) で、 $M_{diag}$  は任意の対角行列、 $M_{\overline{diag}}$  は任意の

$$\begin{pmatrix} a \\ b \\ c \\ d \end{pmatrix}$$

の形の行列である。この  $\gamma_{\pm}$  を用いると、横成分の相互作用は

$$\begin{aligned} L_{\perp} &= \frac{g}{2\sqrt{2}} \sum_{\mu=1}^2 [\bar{\nu}\gamma^{\mu}(1-\gamma_5)eW_{\mu}^+ + \bar{e}\gamma^{\mu}(1-\gamma_5)\nu W_{\mu}^-] \\ &= \frac{g}{\sqrt{2}} [\bar{\nu}(\gamma_0 - W_3 + \gamma_1\phi)e + \bar{e}(\gamma_0 W_3^* + \gamma_1\phi^*)\nu] \end{aligned} \quad (2.7)$$

となる。

### 3. 不安定モードのレプトンによる真空偏極

ここでは、不安定モード  $\phi$  の力学系における散逸効果を見るために、 $\phi$  のレプトンによる真空偏極  $\Pi^{(i)}$  の虚部を摂動の 2 次のオーダーで求める。それが  $\phi$  の減衰率を与える。図 1 において、初期状態を  $W^-$  とする。すると (2.7) より電子とニュートリノからの寄与は

$$\begin{aligned} TLi\Pi^{(e)} &= -\text{Tr} \int d^4x d^4x' \frac{ig}{\sqrt{2}} \phi(x) \gamma_+ iS_e(x, x') \frac{ig}{\sqrt{2}} \phi^*(x') \gamma_- iS_{\nu}(x', x) \\ &= -\frac{g^2}{2} \text{Tr} \int d^4x d^4x' \gamma_+ \phi(x) S_e(x, x') \gamma_- \phi^*(x') S_{\nu}(x', x) \end{aligned} \quad (3.1)$$

と表わされる。系の時間長と  $z$ -方向の長さをそれぞれ  $T, L$  とした。一様磁場  $\mathbf{B}$  のもとでの電子とニュートリノの伝搬関数  $S_e(x, x')$ 、 $S_{\nu}(x', x)$  は

$$S_e(x, x') = \sum_{\mathbf{n}} \int \frac{d^2\tilde{p}}{(2\pi)^2} \frac{e^{-i\tilde{p}\cdot(\tilde{x}-\tilde{x}')}}{\tilde{p}^2 - 2eBn_a - m_e^2 + i\epsilon} \left( \tilde{p}\cdot\tilde{\gamma} + \sqrt{2eBn_a} \gamma^1 + m_e \right)_{\mathbf{n}, x, x'}^{-1} \quad (3.2a)$$

$$S_{\nu}(x', x) = \int \frac{d^4q}{(2\pi)^4} \frac{e^{-iq\cdot(x'-x)}}{q^2 - m_{\nu}^2 + i\epsilon} (\mathbf{q} + m_{\nu}) \quad (3.2b)$$

で与えられる。 $\mathbf{n}=(n_a, n_b)$  は 0 以上の整数の組を表す。括弧の右上の指標  $-1$  は、 $e$  を単位としてはかった電荷  $-1$  の粒子に対する  $4 \times 4$  行列表示を用いることを意味する。これにつ



いては補足 A を参照のこと。

問題は、いま考えている系では磁場は空間的にも時間的にも一様ではないということである。Takahashi 2010 によれば、磁場弦の中心部分では磁場は強く無限遠で減少して一様になる。また、中心部分の磁場は時間的に  $O(m_w^2/e)$  程度変動する。そのような変動する外部磁場の影響で、一般には伝搬関数も図 2 によって補正される。しかし、磁場が非常に強く、荷電粒子は最低 Landau レベル状態のみが物理過程に寄与する場合は、粒子の内線・外線とも状態の空間波動関数は空間反転対称であるので、空間反転非対称なベクトルポテンシャル (1.1) とは結合しない。われわれは  $e, 1/eB$  の最低次のオーダーの寄与のみを考えるので、荷電粒子は、弦が形成される以前の一様磁場のもとで伝搬するという近似を用いることができる。

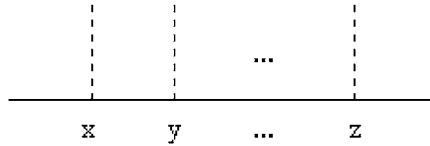


図 2 伝搬関数の外部磁場による補正

(2.6) より

$$\gamma_-(\boldsymbol{q} + m_\nu)\gamma_+ = (q^0 - q_z)C \quad (3.3)$$

となるので、ニュートリノ伝搬関数については

$$\gamma_- S_\nu(x', x)\gamma_+ = \int \frac{d^4 q}{(2\pi)^4} \frac{q^0 - q_z}{q^2 - m_\nu^2 + i\epsilon} e^{-iq \cdot (x' - x)} C \quad (3.4)$$

を得る。したがって、 $\Pi^{(e)}$  の計算では、電子伝搬関数の分子に現れる行列と C との積を求めればよい。それは簡単に実行できて

$$\begin{aligned} \gamma_{n,x,x'}^0 C &= \begin{pmatrix} & |\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & & \\ & & & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \\ |\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & & & \\ & & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & \end{pmatrix} C \\ &= \begin{pmatrix} 0 & & & \\ & 0 & & \\ & & 0 & \\ & & & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \end{pmatrix} \end{aligned} \quad (3.5a)$$

$$\gamma^3_{\mathbf{n},x,x'}\mathbf{C} = \begin{pmatrix} & -|\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & & \\ & & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & \\ |\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & & & \\ & -|\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & & \end{pmatrix} \mathbf{C}$$

$$= \begin{pmatrix} 0 & & & \\ & 0 & & \\ & & 0 & \\ & & & -|\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \end{pmatrix} \quad (3.5b)$$

となる。Cは2,4成分のみが非ゼロであるが、 $\gamma^1_{\mathbf{n},x,x'}$ は4,2成分を持たないので(3.2a)の $\sqrt{2eBn_a}$ を含む項はTrには寄与しない。

(3.1)のトレースを取ると次式を得る：

$$TLiH^{(e)} = -\frac{g^2}{2} \int d^4x d^4x' \phi(\mathbf{x}_\perp) d(x, x') \phi^*(\mathbf{x}_\perp') \quad (3.6)$$

ここで $d(x, x')$ は次のように定義される：

$$d(x, x') \equiv \text{Tr} S_e(x, x') \gamma_- S_\nu(x', x) \gamma_+$$

$$= \text{Tr} \sum_{\mathbf{n}} \int \frac{d^2\tilde{p}}{(2\pi)^2} \frac{d^4q}{(2\pi)^4} \frac{e^{i\tilde{p}\cdot(x-x')}}{\tilde{p}^2 - 2eBn_a - m_e^2 + i\epsilon} \left( \tilde{\mathbf{p}} + \sqrt{2eBn_a} \gamma^1 + m_e \right)^{-1}_{\mathbf{n},x,x'}$$

$$\mathbf{C} \frac{q^0 - q_z}{q^2 - m_\nu^2 + i\epsilon} e^{-iq\cdot(x'-x)}$$

$$= \sum_{\mathbf{n}} |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \int \frac{d^2\tilde{p}}{(2\pi)^2} \frac{d^4q}{(2\pi)^4} \frac{\tilde{p}^0 + \tilde{p}_z}{\tilde{p}^2 - 2eBn_a - m_e^2 + i\epsilon} \frac{q^0 - q_z}{q^2 - m_\nu^2 + i\epsilon}$$

$$e^{i(\tilde{p} - \tilde{q})\cdot(\tilde{x} - \tilde{x}')} e^{iq_\perp\cdot(x' - x)_\perp} \quad (3.7)$$

$\mathbf{x}_\perp = (x^1, x^2)$ は横座標である。(2.6b)より、分子の質量項は $d^{(l)}(x, x')$ に寄与しない。初期状態の負電荷不安定モードを無次元振幅 $f$ を使って

$$\phi(x)^* = e^{-i\omega t} \sqrt{2} \frac{m_w}{e} f \sqrt{\frac{2\pi}{eB}} |\mathbf{m}, x\rangle \quad (3.8)$$

のように表す( $\phi$ はプラス電荷の場として定義されていることに注意)。Takahashi (2010)によれば、不安定モードは、その実角振動数 $\omega$ が

$$\omega \lesssim m_w \sim \sqrt{eB} \quad (3.9)$$

のものが主要成分になる。(3.6)で、座標の縦成分 $\tilde{x}, \tilde{x}'$ に関する積分を先に実行すると

$$\begin{aligned}
 TLi\Pi^{(e)} &\equiv -\frac{g^2}{2} \int d^2\mathbf{x}_\perp d^2\mathbf{x}'_\perp \int d^2\tilde{x} d^2\tilde{x}' \langle \mathbf{m}, x | d(x, x') | \mathbf{m}, x' \rangle \\
 &= -\frac{g^2}{2} (2\pi)^2 \delta^{(2)}(0) \left( \sqrt{2} \frac{m_w f}{e} \sqrt{\frac{2\pi}{eB}} \right)^2 \int d^2\mathbf{x}_\perp d^2\mathbf{x}'_\perp \int \frac{d^4q}{(2\pi)^4} \\
 &\quad \times \sum_{\mathbf{n}} \langle \mathbf{m}, x | e^{-i\mathbf{q}_\perp \cdot \mathbf{x}_\perp} | \mathbf{n}, x \rangle \langle \mathbf{n}, x' | e^{i\mathbf{q}_\perp \cdot \mathbf{x}'_\perp} | \mathbf{m}, x' \rangle \frac{q^0 + \omega + q_z}{(q^0 + \omega)^2 - q_z^2 - 2eBn_a - m_e^2 + i\epsilon} \\
 &\quad \frac{q^0 - q_z}{q^2 - m_e^2 + i\epsilon} \tag{3.10}
 \end{aligned}$$

(3.10) で  $(2\pi)^2 \delta^{(2)}(0) = TL$  である。したがって (3.10) の右辺の実部の符号を変えたものが  $TL\Pi^{(e)}$  の虚部を与える。また

$$\begin{aligned}
 &\int d^2\mathbf{x}'_\perp \langle \mathbf{n}, x' | e^{i\mathbf{q}_\perp \cdot \mathbf{x}'_\perp} | \mathbf{m}, x' \rangle = \langle \mathbf{n} | e^{i\mathbf{q}_\perp \cdot \mathbf{x}'_\perp} | \mathbf{m} \rangle \\
 &= e^{-|\eta\mathbf{q}_\perp|^2} w_{n_a, m_a}(\eta q_\perp) w_{n_b, m_b}(\eta q_\perp^*) , \quad q_\perp \equiv q_x + iq_y, \quad \eta \equiv 1/\sqrt{2eB} \tag{3.11a}
 \end{aligned}$$

$$w_{n', n}(z) \equiv \langle n' | e^{-z^* a^\dagger} e^{za} | n \rangle = \sqrt{\frac{n!}{n'!}} (-z^*)^{n'-n} L_n^{(n'-n)}(|z|^2) \tag{3.11b}$$

に注意する。この等式の最初の等号の右辺は、 $\mathbf{x}'_\perp$  を演算子とみなした時の、調和振動子状態  $|\mathbf{n}\rangle$  と  $|\mathbf{m}\rangle$  に関する  $e^{i\mathbf{q}_\perp \cdot \mathbf{x}'_\perp}$  の行列要素であるので、その値は梯子演算子の簡単な代数で求められる。 $L_n^{(a)}(x)$  はラゲールの多項式である。すると

$$\begin{aligned}
 TLi\Pi^{(e)} &= -TLg^2 \left( \frac{m_w f}{e} \right)^2 \frac{2\pi}{eB} \int \frac{d^4q}{(2\pi)^4} e^{-2|\eta\mathbf{q}_\perp|^2} \sum_{n_b} W_{m, n_a}(|\eta\mathbf{q}_\perp|^2) \\
 &\quad \times \frac{q^0 + \omega + q_z}{(q^0 + \omega)^2 - q_z^2 - 2eBn_a - m_e^2 + i\epsilon} \frac{q^0 - q_z}{q^2 - m_e^2 + i\epsilon} \tag{3.12}
 \end{aligned}$$

となる。ここで  $W_{m, n_a}(|z|^2)$  を

$$W_{m, n_a}(|z|^2) \equiv \sum_{n_b} w_{n_a, m_a}(z) w_{n_b, m_b}(z^*) w_{m_a, n_a}(-z) w_{m_b, n_b}(-z^*) \tag{3.13}$$

で定義した。後の便宜のためにこの関数の  $n_a=0$  の形を与えておく。

$$\begin{aligned}
 W_{m, 0}(|z|^2) &= \sum_{n_b} |w_{0, m_a}(z)|^2 |w_{n_b, m_b}(z^*)|^2 = \frac{(|z|)^{2m_a}}{m_a!} \sum_{n_b} |w_{n_b, m_b}(z^*)|^2 \\
 &= \frac{(|z|)^{2m_a}}{m_a!} e^{-|z|^2} \tag{3.14}
 \end{aligned}$$

虚部を求めるには、伝搬関数を実部と虚部に分けて、全体の虚部だけを知り出す方法もあるが、ここでは、途中までは振幅を解析的に求める方法を取る。(3.12) の  $q$ -積分を実行するために、よく知られた Feynman の方法で非積分関数を変形する：

$$\begin{aligned}
 i\Pi^{(e)} &= -g^2 \left( \frac{m_{wf}}{e} \right)^2 \frac{2\pi}{eB} \int \frac{d^4 q}{(2\pi)^4} e^{-2|\eta q_\perp|^2} \sum_{n_a} W_{m,n_a}(|\eta q_\perp|^2) \\
 &\quad \times \int_0^1 du \frac{(q^0 + \omega + q_z)(q^0 - q_z)}{[(q^0 + \omega)^2 u - q_z^2 u - 2eBn_a u - m_e^2 u + (q^2 - m_e^2)(1-u) + i\varepsilon]^2} \\
 &= -TLg^2 \left( \frac{m_{wf}}{e} \right)^2 \frac{2\pi}{eB} \int \frac{d^4 q}{(2\pi)^4} e^{-2|\eta q_\perp|^2} \sum_{n_a} W_{n_a}(|\eta q_\perp|^2) \\
 &\quad \times \int_0^1 du \frac{\tilde{q}^2 + (1-2u)\omega q_0 - \omega q_z - u(1-u)\omega^2}{[\tilde{q}^2 - (1-u)\mathbf{q}_\perp^2 + u(1-u)\omega^2 - u(2eBn_a + m_e^2) - (1-u)m_e^2 + i\varepsilon]^2} \\
 &= -TLg^2 \left( \frac{m_{wf}}{e} \right)^2 \frac{2\pi}{eB} \int \frac{d^2 \mathbf{q}_\perp}{(2\pi)^2} e^{-2|\eta q_\perp|^2} \sum_{n_a} W_{n_a}(|\eta q_\perp|^2) \int_0^1 du \\
 &\quad \times \int \frac{d^2 \tilde{q}}{(2\pi)^2} \frac{\tilde{q}^2 - u(1-u)\omega^2}{[\tilde{q}^2 - (1-u)\mathbf{q}_\perp^2 + u(1-u)\omega^2 - um_e^2 - (1-u)m_e^2 + i\varepsilon]^2} \quad (3.15)
 \end{aligned}$$

二つ目の等号では、 $q^0 \rightarrow q^0 - \omega u$  の置き換えをしている。また、三つ目の等号では、 $q_0$  と  $q_z$  について奇数次の項を落としている。

次に、 $\tilde{q}$ -積分を次元正則化法（例えば Itzykson Zuber 1980）を用いて実行するのであるが、我々の関心は分極の虚数部にあるので、それに寄与する非積分関数の部分を次のようにして引き出す：

$$\begin{aligned}
 &\frac{\tilde{q}^2 - u(1-u)\omega^2}{[\tilde{q}^2 - (1-u)\mathbf{q}_\perp^2 + u(1-u)\omega^2 - u(2eBn_a + m_e^2) - (1-u)m_e^2 + i\varepsilon]^2} \\
 &= \frac{1}{\tilde{q}^2 - (1-u)\mathbf{q}_\perp^2 + u(1-u)\omega^2 - u(2eBn_a + m_e^2) - (1-u)m_e^2 + i\varepsilon} \\
 &\quad + \frac{(1-u)\mathbf{q}_\perp^2 - 2u(1-u)\omega^2 + um_e^2 + (1-u)m_e^2}{[\tilde{q}^2 - (1-u)\mathbf{q}_\perp^2 + u(1-u)\omega^2 - u(2eBn_a + m_e^2) - (1-u)m_e^2 + i\varepsilon]^2} \quad (3.16)
 \end{aligned}$$

(3.16) の右辺第 1 項が、 $\tilde{q}$  積分で紫外発散を生じ、正則化によって  $\Pi^{(e)}$  に虚部を生じさせる部分である。(3.6), (3.7) より  $d_m$  の実部が  $\Pi^{(e)}$  の虚部に対応するのでそこだけを取り出すと、

$$\begin{aligned}
 \text{Im}\Pi^{(e)} &= \text{Re}g^2 \left( \frac{m_{wf}}{e} \right)^2 \frac{2\pi}{eB} \int \frac{d^2 \mathbf{q}_\perp}{(2\pi)^2} e^{-2|\eta q_\perp|^2} \sum_{n_a} W_{m,n_a}(|\eta q_\perp|^2) \int_0^1 du \\
 &\quad \times \int \frac{d^2 \tilde{q}}{(2\pi)^2} \frac{1}{\tilde{q}^2 - (1-u)\mathbf{q}_\perp^2 + u(1-u)\omega^2 - u(2eBn_a + m_e^2) - (1-u)m_e^2 + i\varepsilon} \\
 &= \text{Re}g^2 \left( \frac{m_{wf}}{e} \right)^2 \frac{2\pi}{eB} \pi \int_0^\infty \frac{dt}{(2\pi)^2} e^{-2\eta^2 t} \sum_{n_a} W_{m,n_a}(\eta^2 t) \\
 &\quad \times \frac{i}{4\pi} \int_0^1 du \ln \left( (1-u)t - u(1-u)\omega^2 + u(2eBn_a + m_e^2) + (1-u)m_e^2 + i\varepsilon \right) \quad (3.17)
 \end{aligned}$$

最後の等号では  $2 \rightarrow \tilde{d}$  次元での次元正則化法を使い, また,  $|\mathbf{q}_\perp|^2 = s$  と積分変数の変換を行った。

(3.17) の右辺は,  $\ln$  の中

$$u(2eBn_a + m_e^2 - (1-u)\omega^2) + (1-u)(s + m_\nu^2) \quad (3.18)$$

が負のときに非ゼロとなる。これが可能なのは  $\omega^2 \sim m_w^2 \sim eB$  の領域では  $n_a = 0$ , すなわち電子が最低ランダウレベルにある場合のみである。以後, 議論を  $n_a = 0$  の場合に限ることにする。このとき (3.18) が負になるのは

$$0 < u_- < u < 1 \approx u_+ \quad (3.19a)$$

$$u_\pm = \frac{1}{2\omega^2} \left( s + \omega^2 - m_e^2 + m_\nu^2 \pm \sqrt{(s + \omega^2 - m_e^2 + m_\nu^2)^2 - 4\omega^2(s + m_\nu^2)} \right) \quad (3.19b)$$

においてであり,  $\ln$  関数部分から  $-i\pi$  の虚部が生じるので

$$\begin{aligned} \text{Im} \Pi^{(e)} &\approx g^2 \left( \frac{m_w f}{e} \right)^2 \frac{2\pi}{eB} \pi \int_0^\infty \frac{ds}{(2\pi)^2} e^{-2\eta^2 s} W_{m,0}(\eta^2 s) \frac{i}{4\pi} (-i)\pi(1-u_-) \\ &= g^2 \left( \frac{m_w f}{e} \right)^2 \frac{1}{8eB} \int_0^\infty ds \frac{(\eta^2 s)^{m_a}}{m_a!} e^{-\eta^2 s} (1-u_-) \end{aligned} \quad (3.20a)$$

$$1-u_- = \frac{1}{2} \left( 1+x-y \pm \sqrt{y^2 - 2(1+x)y + (1-x)^2} \right), \quad x = m_e^2/\omega^2, \quad y = (s + m_\nu^2)/\omega^2 \quad (3.20b)$$

(3.20a) では,  $W_{m,0}(|z|^2)$  に対する式 (3.14) を用いた。電子とニュートリノの質量は  $\omega$  に比べて非常に小さいので  $x \approx 0$ ,  $y \approx s/\omega^2$  と近似すると,

$$1-u_- \approx (1-s/\omega^2)\theta(\omega^2-s) \quad (3.21)$$

である。これを (3.20a) に代入して, (3.6), (3.10) より

$$\text{Im} \Pi^{(e)} \approx \left( \frac{m_w^2}{4e^2} \frac{2\pi}{h_0} \right) \frac{g^2}{2\pi} h_0 \frac{(\eta\omega)^{2m_a+2}}{m_a!} H^{(m_a)}(\eta^2\omega^2) f^2 \quad (3.22a)$$

$$H^{(m)}(x) \equiv \int_0^1 ds s^m (1-s) e^{-xs} \quad (3.22b)$$

ここで, 外部磁場を  $B_0$  として,  $h_0 \equiv eB_0/m_w^2$  である。(3.22a) 式の括弧の中は, Takahashi (2010) で与えた 0 次の摂動での有効作用の前にかかる因子と同じものである。レプトンからの全寄与は, レプトン質量が W ボゾンのそれに比べて非常に小さいことから, (3.22a) に単に世代数  $N_g = 3$  を掛けて得られる。図 3 に関数  $H^{(m)}(x)$  の  $x$  依存性を図示する。

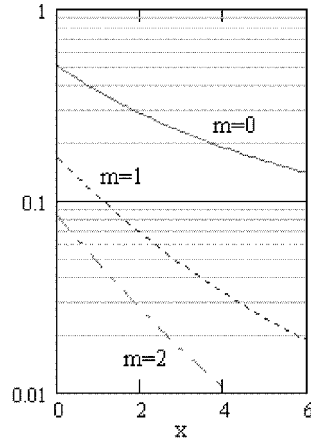


図3 関数  $H^{(m)}(x)$  の  $x$  依存性

#### 4. 不安定モードのクォークによる真空偏極

ここでは、図 1b に対応するクォークループからの寄与を求める。荷電カレント  $j^{+\mu} = \bar{u}_{Li}\gamma^\mu V_{ij}d_{Lj}$  ( $V_{ij}$  は小林益川行列 (Kobayashi and Maskawa 1972), 指標  $i, j$  は世代を表す) と W ボゾンとの相互作用は

$$L_q = \frac{g}{\sqrt{2}}(j^{+\mu}W_\mu + j^{-\mu}W_\mu^*) \quad (4.1)$$

である。u クォークと d クォークの伝搬関数  $S_u(x, x')$ ,  $S_d(x, x')$  とすると

$$\begin{aligned} TLi\Pi^{(q)} &= -\text{Tr} \int d^4x d^4x' \frac{i\tilde{g}}{\sqrt{2}} \phi(x) \gamma_+ iS_d(x, x') V^\dagger \frac{i\tilde{g}}{\sqrt{2}} \phi^*(x') \gamma_- iS_u(x', x) V \\ &= -\frac{\tilde{g}^2}{2} \text{Tr} \int d^4x d^4x' \gamma_+ \phi(x) S_d(x, x') V^\dagger \gamma_- \phi^*(x') S_u(x', x) V \end{aligned} \quad (4.2)$$

前節と同様に

$$\begin{aligned} d^{(q)}(x, x') &\equiv \text{Tr} S_d(x, x') V^\dagger \gamma_- S_u(x', x) \gamma_+ V \\ &= \text{Tr} \sum_{\mathbf{n}} \int \frac{d^2\tilde{p}}{(2\pi)^2} \frac{e^{-i\tilde{p}\cdot(\tilde{x}-\tilde{x}')}}{\tilde{p}^2 - 2e_d Bn_a - M_d^2 + i\epsilon} \left( \tilde{p} + \sqrt{2e_d Bn_a} \gamma^1 + M_d \right)_{\mathbf{n}, x, x'}^{-1/3} V^\dagger \gamma_- \\ &\quad \times \sum_{\mathbf{n}'} \int \frac{d^2\tilde{q}}{(2\pi)^2} \frac{e^{-i\tilde{q}\cdot(\tilde{x}'-\tilde{x})}}{\tilde{q}^2 - 2e_u Bn_{b'} - M_u^2 + i\epsilon} \left( \tilde{q} + \sqrt{2e_u Bn_{b'}} \gamma^1 + M_u \right)_{\mathbf{n}', x', x}^{+2/3} V \gamma_+ \end{aligned} \quad (4.3)$$

により、クォークループの  $d$ -関数を定義する。カレントクォークの  $3 \times 3$  質量行列は  $M_d = \text{diag}(m_d, m_s, m_b)$ ,  $M_u = \text{diag}(m_u, m_c, m_t)$  の非ゼロ成分を持つ。 $e_d \equiv e/3$  および  $e_u \equiv 2e/3$  はそれぞれ  $d$  クォークと  $u$  クォークの電荷の絶対値である。括弧の右上の指標  $-1/3$  と  $2/3$  は、 $e$  を単位としてそれぞれ  $-1/3$  電荷と  $+2/3$  電荷の粒子に対する  $4 \times 4$  行列表示を用いることを意味する。これについては補足 A と B を参照せよ。前節同様、分子の

質量項は  $d^{(q)}(x, x')$  に寄与しない。(2.6b) より  $\gamma^1$  項からの寄与もないので

$$d^{(q)}(x, x') = \text{Tr} \sum_{\mathbf{n}} \int \frac{d^2 \tilde{q}}{(2\pi)^2} \frac{e^{-i\tilde{q} \cdot (\tilde{x} - \tilde{x}')}}{\tilde{p}^2 - 2e_d B n_a - M_d^2 + i\epsilon} (\tilde{q})_{\mathbf{n}, x, x'}^{-1/3} V^\dagger \gamma_- \\ \times \sum_{\mathbf{n}'} \int \frac{d^2 \tilde{q}'}{(2\pi)^2} \frac{e^{-i\tilde{q}' \cdot (\tilde{x}' - \tilde{x})}}{\tilde{q}'^2 - 2e_u B n_{b'} - M_u^2 + i\epsilon} (\tilde{q}')_{\mathbf{n}', x', x}^{+2/3} V \gamma_+ \quad (4.4)$$

となるが、(2.6a) と同様に  $\gamma$ -行列のトレースについては

$$\gamma_- (\gamma_{\mathbf{n}, x, x'}^0)^+ \gamma_+ = \gamma_- (\gamma_{\mathbf{n}, x, x'}^3)^+ \gamma_+ = |\mathbf{n}, x\rangle \langle \mathbf{n}, x'| \text{C} \quad (4.5a)$$

$$\text{tr} \left[ (\gamma_{\mathbf{n}, x, x'}^0)^- \text{C} \right] = -\text{tr} \left[ (\gamma_{\mathbf{n}, x, x'}^3)^- \text{C} \right] = |\mathbf{n}, x\rangle \langle \mathbf{n}, x'| \quad (4.5b)$$

が成り立つので

$$d^{(q)}(x, x') = \text{tr} \sum_{\mathbf{n}} \int \frac{d^2 \tilde{q}}{(2\pi)^2} \frac{e^{-i\tilde{q} \cdot (\tilde{x} - \tilde{x}')}}{\tilde{q}^2 - 2e_d B n_a - M_d^2 + i\epsilon} | \mathbf{n}, x\rangle \langle \mathbf{n}, x'| V^\dagger \\ \times \sum_{\mathbf{n}'} \int \frac{d^2 \tilde{q}'}{(2\pi)^2} \frac{e^{-i\tilde{q}' \cdot (\tilde{x}' - \tilde{x})}}{\tilde{q}'^2 - 2e_u B n_{b'} - M_u^2 + i\epsilon} | \mathbf{n}', x'\rangle \langle \mathbf{n}', x| V \quad (4.6)$$

ここでの  $\text{tr}$  は世代の指標についてのトレースである。

$iII^{(q)}$  を求めるには、初期状態の負電荷不安定モードの状態関数 (3.8) で (4.6) を挟み、必要な積分を実行すればよい。

$$TLiII^{(q)} = -\frac{g^2}{2} (2\pi)^2 \delta^{(2)}(\tilde{p}_i - \tilde{p}_f) \frac{4\pi}{eB} \left( \frac{m_W f}{e} \right)^2 \sum_{\mathbf{n}, \mathbf{n}'} | \int d\mathbf{x}_\perp \langle \mathbf{n}, x \| \mathbf{n}', x \rangle | \mathbf{m}, x \rangle|^2 \\ \times \text{tr} \int \frac{d^2 \tilde{q}}{(2\pi)^2} \frac{q^0 + q_z}{\tilde{q}^2 - 2e_d B n_a - M_d^2 + i\epsilon} V^\dagger \frac{q^0 - \omega - q_z}{(q^0 - \omega)^2 - q_z^2 - 2e_u B n_{b'} - M_u^2 + i\epsilon} V \quad (4.7)$$

$| \mathbf{m}, x \rangle$ ,  $| \mathbf{n}, x \rangle$ ,  $| \mathbf{n}', x \rangle$  はそれぞれ電荷  $-1, -1/3, 2/3$  の粒子の状態関数である。そこで、公式

$$| \mathbf{n}, x \rangle = (-1)^{n_a - n_b} \langle \bar{\mathbf{n}}, x |, \quad \bar{\mathbf{n}} \equiv (n_b, n_a) \quad (4.8)$$

(Takahashi 2008, 2010) を使って、 $\mathbf{x}_\perp$  積分の非積分関数を  $(-1)^{n_a - n_b} \langle \bar{\mathbf{n}}, x | \langle \bar{\mathbf{n}}', x \| \mathbf{m}, x \rangle$  と書き換えると、これは電荷  $-1/3$  と  $-2/3$  の 2 粒子状態を電荷  $-1$  の一粒子状態に射影したものに他ならない。そこで状態積の Clebsch-Gordan 係数による展開公式 (Takahashi 2009)

$$| \mathbf{n} \rangle_q | \mathbf{n}' \rangle_{q'} = \sqrt{\frac{|qq'|}{|q''|}} \frac{B}{4\pi} \sum_{r=0}^{r_{\max}} \sqrt{\frac{(n_a + n_a' - r)!(n_b + n_b' - r)!}{n_a! n_b! n_a'! n_b'!}} \\ \times C_r^{n, n'} | n_a + n_a' - r, n_b + n_b' - r \rangle_{q''} \quad (4.9a)$$

$$r_{\max} = \min(n_a + n_a', n_b + n_b') \quad (4.9b)$$

を用いる。 $(q'' = q + q')$ 。各状態関数の指標  $q$  などは、同じ符号の電荷  $q$  等の粒子の DHO 関数である。座標  $\mathbf{x}$  は書かないことにする)、(4.7) の  $\mathbf{n}, \mathbf{n}'$  に関する和と  $\mathbf{x}_\perp$  に関する積分の部分は次のようになる (補足 C を参照):

$$\sum_{\mathbf{n}, \mathbf{n}'} \left| \int d\mathbf{x}_\perp \langle \mathbf{n}, x | \mathbf{n}', x \rangle | \mathbf{m}, x \rangle \right|^2 \quad (4.10a)$$

$$= \frac{|qq'|}{|q''|} \frac{B}{4\pi} \sum_{\mathbf{n}, \mathbf{n}_b} \frac{m_a! m_b!}{n_a! n_b! n_a'! n_b'!} (C_{n_a+n_b', -m_a}^{\mathbf{n}, \mathbf{n}'})^2 \Big|_{n_a'=n_a-n_b+n_b'+m_b-m_a}$$

$$0 \leq n_a + n_b' - m_a \leq r_{\max} = \min(n_a + n_b', n_b + n_a') \quad (4.10b)$$

我々は  $\text{Im} \Pi^{(q)}$  の虚部を求めたいので、前節と同じ理由で  $n_a = n_b' = 0$  の項だけを残す。すると (4.10b) より

$$m_a = 0 \quad (4.11)$$

(W ボソンは最低 Landau レベルにある) なので、CG 係数で必要なのは  $C_0^{0, n_b, 0, n_a'}$  である。これは Takahashi (2009) で与えた公式を用いると

$$C_0^{0, n_b, 0, n_a'} = \left(\frac{1}{3}\right)^{\frac{n_b}{2}} \left(\frac{2}{3}\right)^{\frac{n_a'}{2}} \quad (4.12)$$

となる。結局 (4.10) は

$$\sum_{\mathbf{n}, \mathbf{n}'} \left| \int d\mathbf{x}_\perp \langle \mathbf{n}, \mathbf{x}_\perp | \mathbf{n}', \mathbf{x}_\perp \rangle | \mathbf{m}, \mathbf{x}_\perp \rangle \right|^2 = \frac{2e}{9} \frac{B}{4\pi} \sum_{n_b} \frac{m_b!}{n_b! n_a'!} \left(\frac{1}{3}\right)^{n_b} \left(\frac{2}{3}\right)^{n_a'} \delta_{n_a', -n_b+m_b} = \frac{eB}{18\pi} \quad (4.13)$$

となるので、これを (4.7) に代入し (3.15)～(3.17) の結果を用いて

$$\text{Im} \Pi^{(q)} = \delta_{m_a, 0} \frac{g^2}{9} \left(\frac{m_w}{e} f\right)^2 \sum_{ij} |V_{ij}|^2 \frac{\theta(\omega - M_{d,ii} - M_{u,jj})}{4\omega^2} \sqrt{(\omega^2 - M_{d,ii}^2 - M_{u,jj}^2)^2 - 4M_{d,ii}^2 - M_{u,jj}^2} \quad (4.14)$$

(4.14) の導出については補足 D を参照されたい。  $m_i \sim 2m_w$  のトップクォークは (4.14) に寄与しないので、 $i$  については  $d$  と  $s$  と  $b, j$  については  $u$  と  $c$  に関する和をとる。これらのクォークは  $\omega$  に比べて非常に小さくすべて等しい質量  $m_q$  を持つとして、(4.14) の根号の中の質量項を無視すると、 $\sum_{ij} |V_{ij}|^2 = 2$  および色数  $N_c = 3$  を考慮し

$$\text{Im} \Pi^{(q)} \approx \left(\frac{m_w^2}{4e^2} \frac{2\pi}{h_0}\right) \delta_{m_a, 0} N_c \frac{g^2 h_0}{9\pi} f^2 \theta(\omega - 2m_q) \quad (4.15)$$

を得る。因子  $\delta_{m_a, 0}$  は、強磁場の下では中間状態のクォークは二つとも最低 Landau レベルにあることによる。

## 5. 力学系

2 次の摂動で、不安定モードの虚部は (3.22a) と (4.15) の和である。これを、Takahashi (2010) で得た有効作用に加えると、全有効作用が得られる。話を簡単にするために、Takahashi (2010) と同様に Landau 量子数  $m_a = 0$ 、角運動量  $l = 0$  の場合に限ると



$$S_{\text{eff}}^{(0,0)} = \int dt \left[ \dot{f}^2 - d_M(\omega) |f|^2 - d_1 h |f|^2 - d_2 h^2 |f|^2 - \frac{d_3}{2} |f|^4 + \frac{1}{8} \dot{h}^2 - \frac{h_0}{4} h^2 \right] \quad (5.1a)$$

$$d_M(\omega) = \frac{2}{h_0} - 2 - i \frac{g^2}{9\pi} h_0 \left( N_c \theta(\omega - 2m_q) + \frac{9}{2} N_g \eta^2 \omega^2 H^{(0)}(\eta^2 \omega^2) \right) \quad (5.1b)$$

$$d_1 = -2c_1 + 4sc_2, \quad d_2 = c_3, \quad d_3 = c_4 \frac{G}{e_W^2} \quad (5.1c)$$

ドットはスケールされた無次元時間  $m_W \sqrt{h_0/2} t = \sqrt{eB_0/2} t \equiv \tau$  に関する微分を表す。 $B_0$  は初めに存在した一様外部磁場である。 $l$  は W ボソンの角運動量,  $e_W$  は W ボソンの電荷,  $s=1$  は W ボソンのスピンである。関数  $H^{(0)}(x)$  は (3.22b) で, 定数  $c_1, c_2, c_3, c_4$  の値は Takahashi (2010) で与えてある。Weinberg-Salam 理論では,  $g^2 = (e_W/\sin\theta_W)^2 \approx (4\pi/137)/0.232 \approx 0.395$  および  $G = g^2/2$  である。

(5.1b) より,  $h_0 > 1$  すなわち  $eB_0$  が  $m_W^2$  を超えると系は必ず不安定になるのは前に述べた通りである。加えて, 相互作用による質量項  $d_M(\omega)$  の虚部の存在が, W 場の減衰という新たな不安定性の原因となる。このとき, (5.1a) に変分原理を適用して運動方程式を導くことはできない。(無理に変分法を適用すると,  $f$  と  $f^*$  の運動方程式が相互に矛盾することが容易に確かめられる。) 時間反転不変性が破れるからである。したがって,  $d_M(\omega)$  の虚部は, 散逸効果をもたらす項に焼き直すのが適当である。そのために, まず (5.1a) において単純に  $f^*$  と  $h$  に関する変分を取って運動方程式

$$\left( \frac{d^2}{d\tau^2} + i \text{Im} d_M(\omega) \right) f = -\text{Re} d_M f - d_1 h f - d_2 h^2 f - d_3 |f|^2 f \quad (5.2a)$$

$$\frac{d^2}{d\tau^2} h = -4d_1 |f|^2 - 8d_2 h |f|^2 - 2h_0 h \quad (5.2b)$$

を書き下す。 $O(g^2)$  の量

$$\bar{\Gamma} = -\text{Im} d_M(\omega)/(4\bar{\omega}) \quad (\bar{\omega} \equiv \omega/(m_W \sqrt{h_0/2})) \quad (5.3)$$

を用いて  $f$  の時間依存性を

$$f \propto e^{-(i\bar{\omega} - \bar{\Gamma})\tau} \quad (\bar{\omega}, \bar{\Gamma} \text{ はともに実数, } \bar{\omega} > 0) \quad (5.4)$$

のように仮定すると, (5.2a) の左辺は  $O(g^2)$  までで

$$\left( \frac{d^2}{d\tau^2} + i \text{Im} d_M(\omega) \right) f = \left( \frac{d}{d\tau} - \frac{\text{Im} d_M(\omega)}{2\bar{\omega}} \right)^2 f \quad (5.5)$$

と書けることに注意し, (5.2a) をさらに次のように書き換える:

$$\ddot{f} = \frac{\text{Im} d_M(\omega)}{\bar{\omega}} \dot{f} - \text{Re} d_M f - d_1 h f - d_2 h^2 f - d_3 |f|^2 f \quad (5.6)$$

(5.5) の右辺から生じる  $(\text{Im} d_M(\omega)/(2\bar{\omega}))^2$  に比例する項は  $O(g^4)$  なので (5.6) では落として

いる。 $\text{Im}d_M(\omega) \leq 0$  (等号は  $\omega = 0$  のとき) であるから, (5.6) はわれわれが期待したように  $W$  崩壊による散逸効果を取り入れた運動方程式になっている。これに (5.2b) を加えたものが求める力学系である。

運動方程式 (5.6) では,  $f$  の実部と虚部は一見独立に変動するように見える。しかし実角振動数  $\omega$  が散逸項に現れており, ここを通して実部と虚部が結合する。事実, 上で仮定した  $f$  の時間依存性に対し,  $d\omega/dt$  が十分小さいなら

$$\omega = i(f^* \dot{f} - \dot{f}^* f) / 2 |f|^2 = (\text{Re}(\dot{f}) \text{Im}(f) - \text{Re}(f) \text{Im}(\dot{f})) / |f|^2 \quad (5.7)$$

が成り立つ。

$\omega = 0$  の時は仮定した  $W$  場の配位は電荷をもたないのでレプトン反レプトン対あるいはクォーク反クォーク対に崩壊できないはずである。 $\omega = 0$  は  $f$  の位相に時間変化がないことを意味するので (5.1b) より  $\text{Im}d_M(\omega) = 0$  となり, 事実, 散逸はなく, 前論文 (Takahashi 2010) の系を再現する。次節で, われわれは条件 (5.7) のもとで (5.2b) と (5.6) を解く。

## 6. 力学系の数値解

前節で, 散逸効果が表れるのは  $\omega \neq 0$ , すなわち  $f$  の実部と虚部およびそれらの時間微分がゼロでないことが必要であることを見た。前論文 (Takahashi 2010) では保存系を扱ったが, そこでは  $f$  を実数としたので, これは実は前節の散逸項が 0 であることに相当する。すなわち, 前論文の系は, 本論文で扱う系の特殊な場合であった。

前論文では, 外部パラメータとして電弱標準理論の結合定数と  $h_0 = 1.01$ , 初期条件を  $f = 0.1$ ,  $\dot{f} = h = \dot{h} = 0$  とした場合を詳しく調べた。これを基本系とし, この節では基本系からわずかにずれた初期条件で  $\omega \neq 0$  のものを選んだ時の系の振る舞いを調べる。(5.1b) に現れるクォークの質量は  $2\bar{m}_q \equiv 2m_q / (m_W \sqrt{h_0/2}) = 10^{-4}$  と取ることにする。位相の時間依存性の効果を見やすくするために,

$$f = A e^{-i\phi} \quad (6.1)$$

と  $f$  の振幅と位相を分離する。 $A$  と  $\phi$  はともに実数である。このとき  $\phi$  の時間微分が  $\omega$  で,  $\ln A$  の時間微分が  $-\Gamma \equiv -\bar{\Gamma} m_W \sqrt{h_0/2}$  である。(5.6) からそれらの方程式を

$$\dot{A} = \bar{\omega}^2 A + \frac{\text{Im}d_M(\omega)}{\bar{\omega}} \dot{A} - (\text{Re}d_M + d_1 h + d_2 h^2 + d_3 A^2) A \quad (6.2a)$$

$$\dot{\bar{\omega}} = -2\bar{\omega} \frac{\dot{A}}{A} + \text{Im}d_M(\omega) \quad (6.2b)$$

と導いておく。ここで  $\dot{\phi} = \bar{\omega} = \omega / (m_w \sqrt{\hbar_0/2})$  を用いている。(6.2b) より

$$\frac{d}{dt} \ln(\bar{\omega} A^2) = \frac{\text{Im} d_M}{\omega} \quad (6.3)$$

が成り立つ。 $\omega > 0$  であればこの右辺は負である。他方、左辺は W 場のエネルギー（の対数）であり、(6.3) は初めに  $\omega > 0$  であれば W のエネルギーは減り続けることを表す。

微分方程式は、Bulirsch - Stoer 法 (Stoer and Bulirsch 1996) を用いて解くことにする。その利点については高橋 2010 を参照されたい。(保存系の場合は、軌道がエネルギー一定の超面上にあるべきという制約を用いて数値解の誤差を補正する考え方があるが、これは非保存系では成り立たない。そもそも、定エネルギー面のどこに真の解があるかはわからない。これに対し、Bulirsch - Stoer 法では、制約のあるなしにかかわらず、解が滑らかなときは例えば Runge-Kutta 法よりも正確に解を求めることができることが知られている。前論文 (Takahashi 2009) では、われわれのモデルについて、Bulirsch-Stoer 法が Runge-Kutta 法よりもすぐれていることを確かめている。) 外部磁場を臨界磁場より僅かに大きい  $h_0 = 1.01$  とし、まず、 $\bar{\omega}$  が小さい場合の例として、初期条件

$$A = 0.1, \dot{A} = 0, \bar{\omega} = 0.01 \quad (6.4)$$

に対する  $0 \leq t \leq 8000$  での  $A, \bar{\omega}, h$  の時間依存性を図 4 に、Poincaré 断面を図 5 に示す。ただし、結合定数は前論文に従い、ここではまず  $d_3 = 0.2$  という仮想的な値を用いた。なお、 $t = 8000$  は  $8000 \times (\hbar/m_w) \sqrt{2/\hbar_0} = 9.2 \times 10^{-23}$  s に相当する。

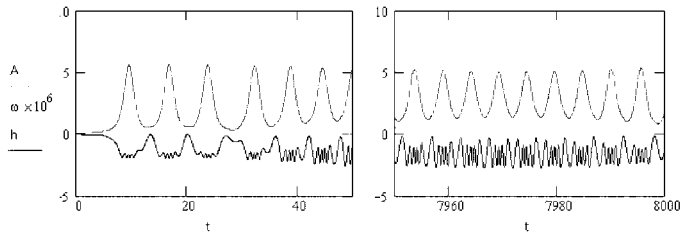


図 4  $A, \bar{\omega}, h$  の時間依存性。左:  $0 \leq t \leq 50$ , 右:  $7950 \leq t \leq 8000$ 。

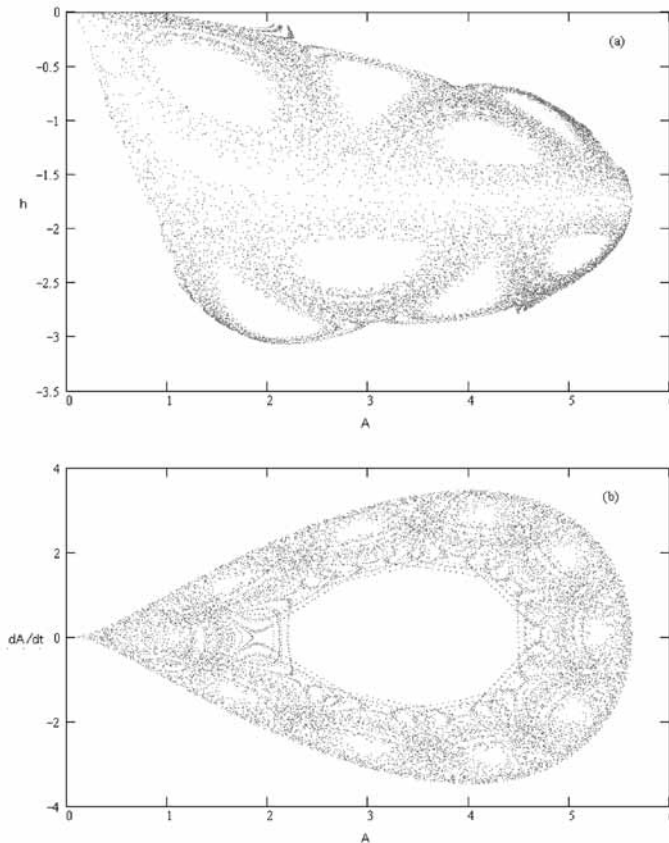


図5  $d_3=0.2$ , 初期条件 (6.4) に対する解の Poincaré 断面。(a):  $(A, h)$  プロット, (b):  $(A, \dot{A})$  プロット。

図4から、磁場がW場より周波数が大きく、短期的にはより不規則に振舞うことが見て取れる。図5に示した Poincaré 断面は、概周期性とカオスが混在していることを示しているように見える。

論文 (Takahashi 2010) の図 1,3 とこれらの図を比較することにより、散逸項があっても、初期の  $\omega$  が小さければ  $0 \leq t \leq 8,000$  という長期にわたって保存系の名残が存続し続けることがわかる。すなわち、図4の時間依存性はカオス的であり、図5の Poincaré 断面のパターンには、ほやけはあるもののそのフラクタル性がかなりはっきり認められる。最大 Liapunov 指数は 0.620 と正の値を取るが、前論文で求めた保存系の場合の 0.847 に比べて 30% 程度小さくなっている。散逸効果は  $\text{Im } f = A \sin \omega t$  として現れるのであるが、 $\omega$  が時間と共に振動しながら減少していることから、物理的な意味を離れて計算時間をさらに長くとっても、おそらくこの傾向は保持されるのであろう。

次に、(5.1c) で与えられる標準電弱理論の  $d_3=1.078$  を用いた時の解の振る舞いを図6に示す。特徴的なことは、エネルギーが急速に減少する時期 (第  $I_a$ ,  $I_b$  期) と緩やかに減少す

る時期（第Ⅱ<sub>a</sub>, Ⅱ<sub>b</sub>期）があることである（図6(c), (d)）。第Ⅰ<sub>a</sub>期では,  $t=0$  から 0.34 までの間 ( $\tau_{1a}=0.34$  秒に直すと  $3.9 \times 10^{-27}$ s) に  $\bar{\omega}$  は 0.01 から 0 近くまで減少する（図6(a)）が振幅  $A$  はほとんど変化しない（図6(b)）。このような変化は,  $\bar{\omega}$  が閾値  $2\bar{m}_c$  を越えたときに散逸効果が不連続に有限となることによる（(5.1b) 参照）。同時に, 単位長さあたりのエネルギーは  $-1.431 \times 10^{-4}$  から  $-1.442 \times 10^{-4}$  まで減少する。その差  $\Delta E_{1a}$  は  $\Delta E_{1a} = 1.1 \times 10^{-6}$  である。この時期の単位時間および単位長さあたりのエネルギー散逸率は

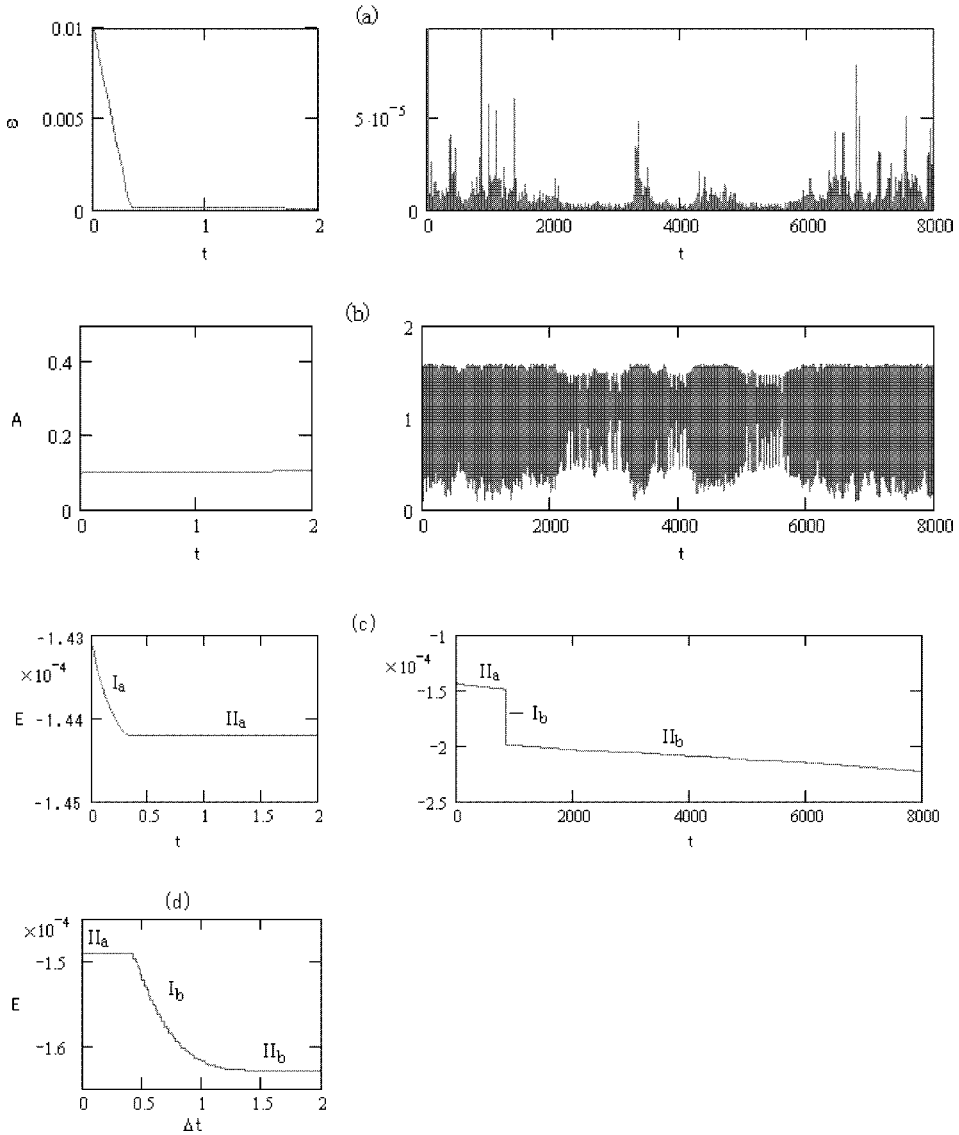


図6 力学系 (6.2a), (6.2b), (5.2b) の初期条件 (6.4) に対する解。  $h_0=1.01$ 。(a)  $0 \leq t \leq 2$  および  $0 \leq t \leq 8,000$  における  $\bar{\omega}$  の振る舞い。(b)  $A$ , (c)  $E$  も同様。(d) 第Ⅰ<sub>b</sub>期  $848.39 \leq t=848.39+\Delta t \leq 850.39$  における  $E$  の振る舞い。

$$\begin{aligned}
 L_{1a} &= 1.1 \times 10^{-6} \tau_{1a}^{-1} (m_w \sqrt{h_0/2} c^2) \left( \frac{m_w \sqrt{h_0/2} c}{\hbar} \right) \left( \frac{m_w \sqrt{h_0/2} c^2}{\hbar} \right) \\
 &= 1.1 \times 10^{-6} \tau_{1a}^{-1} \times 4.0 \times 10^{45} \left( \frac{1.01}{2} \right)^{3/2} \text{ GeV} \cdot \text{m}^{-1} \cdot \text{s}^{-1} \\
 &= 4.6 \times 10^{39} \text{ GeV} \cdot \text{m}^{-1} \cdot \text{s}^{-1}
 \end{aligned} \tag{6.5}$$

となる。この式の最初の等号の右辺で、最初の括弧がエネルギー、第二の括弧が $(1/\text{長さ})$ 、最後の括弧が $(1/\text{時間})$ それぞれの単位で、それらの積は $1.4 \times 10^{45} \text{ GeV} \cdot \text{m}^{-1} \cdot \text{s}^{-1}$ ある。

$t=848$  近辺で  $E$  は再び急に減少する。この様子を詳しく見たのが図 6(d) である。 $848.82 \leq t \leq 849.57$  の間に  $E$  は  $1.43 \times 10^{-5}$  だけ減少している。 $I_a$  期と同様にして、 $I_b$  期のエネルギー減少率として

$$L_{1b} = 2.6 \times 10^{40} \text{ GeV} \cdot \text{m}^{-1} \cdot \text{s}^{-1} \tag{6.6}$$

を得る。これは、クォークによる  $W$  の自己エネルギーの虚部に由来するものと考えられる。実際、(5.3) と (5.4) より、 $W$  振幅の減衰の程度は、初期の  $W$  振幅を  $A_0=0.1$  とすると

$$\frac{1}{A_0^2} \frac{dA^2}{dt} \sim -2\Gamma = -2\bar{\Gamma} \cdot \frac{m_w \sqrt{h_0/2} c^2}{\hbar} \tag{6.7}$$

であるが、(5.1b) と (5.3) より典型的な  $\bar{\omega} \sim 1$  に対し  $\bar{\Gamma} \approx 0.395 N_c / (4 \cdot 9\pi) \sim 0.01$  であるので、崩壊による  $W$  エネルギーの減衰は

$$\begin{aligned}
 \frac{dE_W}{dt} &\sim -2 \cdot 0.01 \cdot A_0^2 \cdot (m_w \sqrt{h_0/2} c^2) \left( \frac{m_w \sqrt{h_0/2} c}{\hbar} \right) \left( \frac{m_w \sqrt{h_0/2} c^2}{\hbar} \right) \\
 &\sim -3 \times 10^{41} \text{ GeV} \cdot \text{m}^{-1} \cdot \text{s}^{-1}
 \end{aligned} \tag{6.8}$$

程度となり、(6.6) と近い（一桁大きい）値である。その一部は磁気系のエネルギーに移るので、大きめの値になるのは当然である。

第 II 期では、 $E$  の変化はより緩やかである。 $II_a$  期 ( $\Delta t_{11a} = 848.8$ ,  $\Delta E_{11a} = 4.8 \times 10^{-6}$ )、 $II_b$  期 ( $\Delta t_{11b} = 7151$ ,  $\Delta E_{11b} = 2.4 \times 10^{-4}$ ) でのその減少率  $L_{11a}$ ,  $L_{11b}$  は

$$L_{11a} = 8.0 \times 10^{36} \text{ GeV} \cdot \text{m}^{-1} \cdot \text{s}^{-1}, L_{11b} = 4.8 \times 10^{37} \text{ GeV} \cdot \text{m}^{-1} \cdot \text{s}^{-1} \tag{6.9}$$

と、同一オーダーの値である。この値を  $1.01 \leq h_0 \leq 1.06$  の範囲で調べたが、大きい変化は認められなかった。

$A$ ,  $\bar{\omega}$ ,  $h$  の時間依存性を詳細に見たのが図 7 である。前論文で扱った保存系と比べると、振動数が低下しているのがわかる。図 8 に示した  $A$  と  $h$  のスペクトル分布にその傾向がよく出ている。すなわち、保存系（論文（Takahashi 2010）参照）に比べ、 $\nu > 1$  の高周波数領域が抑制されている。他方、周波数スペクトルに見るカオス性は、保存系と同様に散逸系でも保たれていることが図 8 からわかる。最大 Liapunov 指数は 0.366 である。

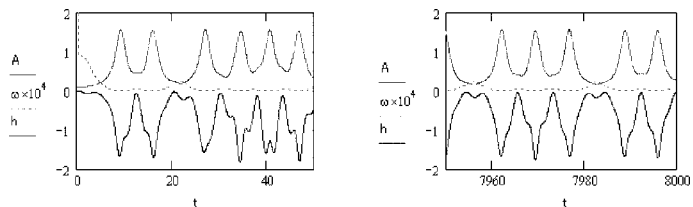


図7  $A, \bar{\omega}, h$  の  $7,900 \leq t \leq 8,000$  における時間依存性。左:  $0 \leq t \leq 50$ , 右:  $7,950 \leq t \leq 8,000$ 。

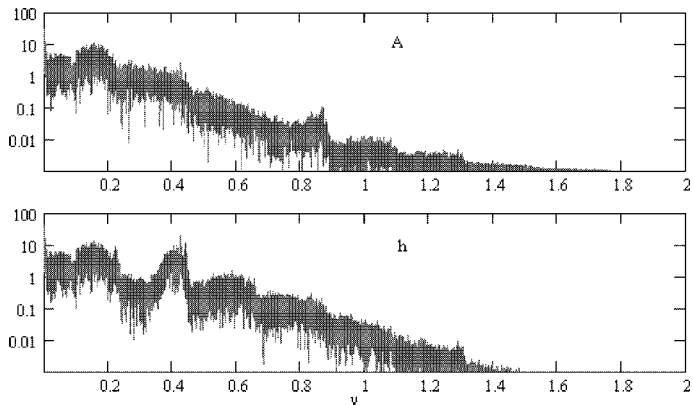


図8  $A$  (上) と  $h$  (下) の周波数スペクトル

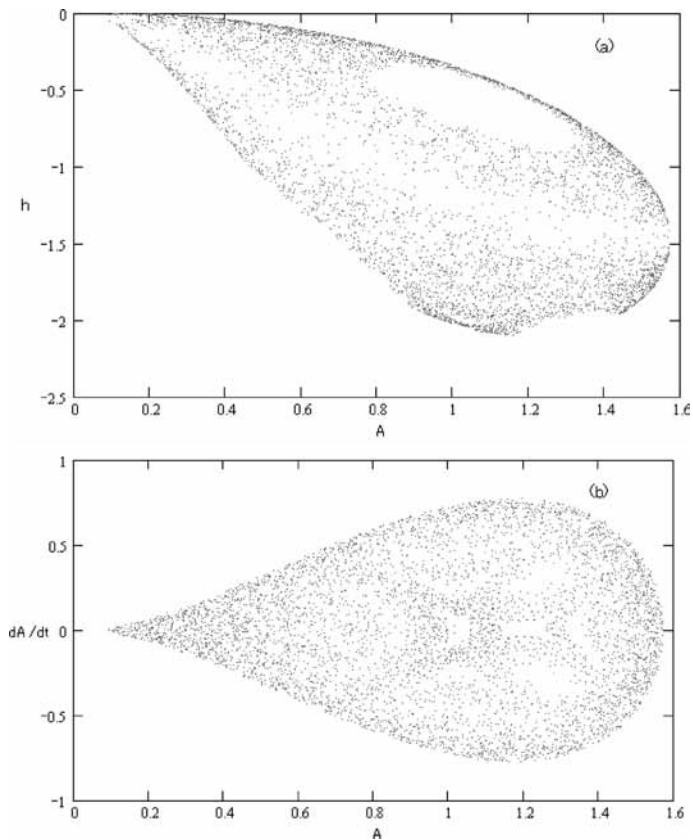


図9  $\dot{h}=0$  における Poincaré 断面。(a)  $(A, h)$  プロット, (b)  $(A, \dot{A})$  プロット。

$\dot{h}=0$  における Poincaré 断面を図 9 に示した。フラクタル性の喪失のようすは、保存系で結合定数が大きい場合に似ている (論文 (Takahashi 2010) 図 9)。フラクタル次元 (情報次元) は  $1.91 \pm 0.27$  と、二次元球面の次元数 2 に近い値になっている。

## 7. 弦の崩壊による空間の加熱

これまでに述べてきたことは、主に力学系の数値解析的な性質についてであった。そのどの部分が現実世界の物理と関係しているだろうか。力学系の基礎は標準電弱理論に置いたので、モデルの内部パラメータの値はそれほど非現実的なものではないだろう。外部パラメータとしては、磁場の強さと計算時間がある。相転移を引き起こす臨界磁場は  $h_0 = eB_0/m_w^2 = 1$  であり、計算に使用した値は 1.01 であった。これはさらに変化させてみる余地はあるだろう。計算時間は最長  $t = 8,000$  まで取ったが、これは既に述べたように約  $10^{-22}$  s に相当する。他方、インフレーション (Guth and Steinhard 1989, 佐藤 2008) を経て電弱相転移が起きる宇宙論的な時刻は、宇宙膨張開始後約  $10^{-10}$  s である (佐藤 2008)。これに比べると、 $t = 8,000 \approx 10^{-22}$  s の時間間隔はまだまだ短いように見える。それでは、弦の成長と崩壊の時間間隔をどの程度にとればいいのか。目安となるのは、初めに存在した磁場が、宇宙の膨張とともに弱まって臨界磁場を下回るようになるまでの時間である。輻射優勢の時代では、宇宙のスケール因子は  $a(t) \sim \sqrt{t}$  で増大するので、外部磁場  $B$  (すなわち磁束密度) は長期的には

$$B(t) = B_0 \frac{t_0}{t} \quad (7.1)$$

のように減衰する。標準的宇宙論では  $t_0 \sim 10^{-10}$  s なので

$$t = h_0 t_0 \quad (7.2)$$

のときに磁場は臨界磁場より小さくなり、電弱弦は消滅する。したがって、電弱弦の継続時間  $\Delta t_w$  はたかだか

$$\Delta t_w = (h_0 - 1) t_0 \quad (7.3)$$

である。たとえば  $h_0 = 1.01$  では、これは約  $10^{-12}$  s に相当する。これを越えると磁場弦そのものが存在できないのである。つまり、物理的に意味のある計算時間としては (7.3) で与えられるものをとるべきである。これは、われわれの計算時間  $8000 \sim 10^{-22}$  s に比べてはるかに長い。このときに問題となるのは IIb 期のエネルギー放出率で、前節であげた  $h_0 = 1.01$  の例では (6.9) で与えられる。その場合



$$E_{\text{Iib}} \approx L_{\text{Iib}} \Delta t \omega \quad (7.1)$$

のエネルギーが放出されることになる。これは ( $A_0 = 0.1$ ,  $h_0 = 1.01$  に対し)  $\sim 10^{25} \text{ GeV} \cdot \text{m}^{-1}$  である。

電弱弦の半径は  $r_s = 2/\sqrt{eB} = 2\hbar/(cm_w\sqrt{h_0})$  (前論文 (7) 式を見よ。ここでは Planck 定数と光速度定数を復活させている。) 程度である。第 2 種超伝導体の Abrikosov 格子に近い配列が形成されるとすると、弦の数密度は単位面積当たり

$$n_s \sim \frac{1}{4r_s^2} = \frac{m_w^2 h_0 c^2}{4\hbar^2} \quad (7.2)$$

としてよい。したがって、Iib 期の中に、単位体積当たりの放出エネルギーは

$$\epsilon_{\text{Iib}} = n_s E_{\text{Iib}} \sim 4.1 \times 10^{59} h_0 \left( \frac{E_{\text{Iib}}}{10^{25} \text{ GeV} \cdot \text{m}^{-1}} \right) \text{ GeV} \cdot \text{m}^{-3} \quad (7.3)$$

となる。弦崩壊によって生成される粒子 — 軽いレプトンと軽いクォーク — は相対論的に振る舞うので、このエネルギーによって、空間は ‘加熱’ されることになる。直ちに熱平衡状態になるわけではないが、直観的な理解のために、熱平衡状態のどのような温度に対応するかを見てみよう。それ以前に熱粒子が存在していなければ、熱平衡における対応する温度を  $T_{\text{Iib}}$  とすると、エネルギー密度に関する Stefan-Boltzmann 則

$$\rho_{\text{rad}} = \frac{\pi^2}{30} g(T) T^4 \quad (7.4)$$

の  $\rho_{\text{rad}}$  を  $\epsilon_{\text{Iib}}$  に等しいとおいて

$$T_{\text{Iib}} \sim \left( \frac{4,100}{g(T)} h_0 \left( \frac{E_{\text{Iib}}}{10^{25} \text{ GeV} \cdot \text{m}^{-1}} \right) \right)^{1/4} \times 10^{14} \text{ K} \quad (7.5)$$

$g(T)$  はスピンの自由度も考慮した相対論的粒子の種類数 (たとえば光子の種類は 2 とする) である。クォーク-ハドロン相転移後の話なので  $g(T) \sim 10$ , また  $E_{\text{Iib}} \sim 10^{25} \text{ GeV} \cdot \text{m}^{-1}$  として  $T_{\text{Iib}} \sim 5 \times 10^{14} \text{ K}$  となる。これは、初期宇宙が真空のエネルギー (ダークエネルギー) 優勢ではなく放射優勢であるとしたときに期待される宇宙の温度と同程度である。もちろん、この温度は初めに仮定した電弱弦の強度に依存する。より強い弦はより高い温度を生成するであろう。

## 8. まとめ

臨界磁場を超える磁場の中で形成される電弱弦の時間変化における散逸効果を、荷電粒子の有限磁場伝搬関数を用いて見積もった。有限磁場伝搬関数は、高橋 (2006, 2009) で構成された DHO 表示によるもので、これによりそれまでの座標表示のものに比べ計算の見通

しと能率をかなり向上させることができた。

散逸効果は、不安定 W 場とレプトン・クォークとの結合による W 粒子の自己エネルギーの虚部として現れる。本論では、これを結合定数の 2 次の次数で解析的に厳密に計算し、数値計算はその結果にほぼ従って行った。‘ほぼ’の意味は、実際の数値計算では、レプトン間の、あるいはクォーク間の質量差を無視したということである。この差を考慮することに本質的な困難はないのであるが、考えている磁場のエネルギーがこれらの粒子の質量に比べて非常に大きいので、そのような計算上の精密化は計算結果に実質的な影響をもたらさない。

力学系は、W 場の振幅と位相、磁場の強さおよびそれらの時間微分の間関係として表された。結果をまとめると次ようになる。(1) 運動はカオス的である。(2) Liapunov 指数は保存系の場合に比べ小さくなる。(3) 不安定モードの時間発展は、保存系の時に見られた特徴的フラクタルパターンははやけるものの、保存系の場合のパターンを長期にわたってほぼ保つ。(4) Poincaré 断面のフラクタル次元数は保存系の場合よりも 2 に近い。(5) 時間発展の初期、 $1/m_w$  のオーダーの時間で、電弱弦からの物質生成による最初のエネルギー放出がなされる。その後は、 $10^{-10} \cdot (h_0 - 1)$  秒という長期にわたって弱いエネルギー放出がなされる (図 10 参照)。(6) 電弱弦の生成と崩壊は、宇宙の再加熱というかたちで宇宙の歴史に影響を与える。再加熱による温度は、電弱弦が生成される直前の宇宙の温度と同程度かそれ以上にまで達しうる。



図 10 真空中における電弱弦の物質化。強い外部磁場が乱雑な向きを持っていて、電弱弦が乱雑に生成している様子を描いている。矢印はクォーク-反クォーク対 (またはメソン)、電子-反ニュートリノ対などの生成を表す。

#### 補足 A 負の電荷 $-e$ を持つ粒子の量子状態と伝搬関数

負の電荷をもつ電子や d-クォークの記述形式をまとめる。電子の場合、電荷は  $-e$  で調和

振動子モードの梯子演算子は

$$a = \frac{i}{\sqrt{2}} \left( \frac{1}{\sqrt{eB}} \frac{\partial}{\partial \zeta} + \sqrt{eB} \zeta^* \right), \quad a^\dagger = \frac{i}{\sqrt{2}} \left( \frac{1}{\sqrt{eB}} \frac{\partial}{\partial \zeta^*} - \sqrt{eB} \zeta \right) \quad (\text{A1a})$$

$$b = \frac{i}{\sqrt{2}} \left( \frac{1}{\sqrt{eB}} \frac{\partial}{\partial \zeta^*} + \sqrt{eB} \zeta^* \right), \quad b^\dagger = \frac{i}{\sqrt{2}} \left( \frac{1}{\sqrt{eB}} \frac{\partial}{\partial \zeta} - \sqrt{eB} \zeta \right) \quad (\text{A1b})$$

となる。ここで  $\zeta = (x + iy)/2$ 。d-クォークでは、(A1) の  $e$  を  $e/3$  で置き換える。 $a|0\rangle = b|0\rangle = 0$  で定義される規格化された基底状態  $|0\rangle$ —その座標表示は  $\sqrt{eB/(2\pi)} e^{-eB\zeta^*\zeta}$  (d-クォークでは  $\sqrt{eB/(6\pi)} e^{-(eB/3)B\zeta^*\zeta}$ )—の上に、励起状態を次のようにしてつくることができる：

$$|\mathbf{n}, \mathbf{x}_\perp\rangle = \frac{1}{\sqrt{n_a! n_b!}} a^{\dagger n_a} b^{\dagger n_b} |0\rangle, \quad \mathbf{n} = (n_a, n_b) \quad (\text{A2})$$

左辺の  $\mathbf{x}_\perp$  は横座標  $(x^1, x^2)$  を表す。この状態のエネルギーは量子数  $n_a$  によって、ガイド中心の位置は量子数  $n_b$  によって決まる (Ezawa 2000)。

伝搬関数 (遅延 Green 関数) は次のようにして決定される。自由空間での運動方程式は

$$iD\psi \equiv (i\tilde{\partial} + \sqrt{2eB}\gamma^0 A - m)\psi = 0 \quad (\text{A3})$$

である。ここで  $A$  は次のような行列である：

$$A = \begin{pmatrix} & a & & \\ a^\dagger & & & \\ & & & -a \\ & & -a^\dagger & \end{pmatrix} \quad (\text{A4})$$

$\psi$  の  $t$  および  $z$  依存性を  $e^{-i(p^0 t - P_z z)}$  と仮定すると (A3) は

$$(\tilde{p} \cdot \tilde{\gamma} + \sqrt{2eB} \gamma^0 A - m)\psi = 0 \quad (\text{A5})$$

と表される。この正負エネルギー解は Takahashi (2008) で与えられている。それらを用いて場の演算子  $\psi$  を展開し、伝搬関数  $S_F(x', x)$  を次のように定義する：

$$(S_F(x', x) \gamma^0)_{\beta\alpha} \equiv -i \langle 0 | \phi_\beta(x') \phi_\alpha^\dagger(x) | 0 \rangle \theta(t' - t) + i \langle 0 | \phi_\alpha^\dagger(x) \phi_\beta(x') | 0 \rangle \theta(t - t'). \quad (\text{A6})$$

これが Green 関数であることは次の性質からわかる：

$$iD_{x', \rho\beta}(S_F(x', x) \gamma^0)_{\beta\alpha} = \gamma^0_{\rho\alpha} \delta^{(4)}(x - x') \quad (\text{A7})$$

ここで  $S_F(x', x)$  の具体的な形を求める。(A6) の右辺を直接変形して

$$\begin{aligned}
 (S_F(x', x)\gamma^0)_{\beta\alpha} &= -i \sum_{\mathbf{n}, s} \int \frac{dp_z}{2\pi} \frac{M}{E} [u_{\mathbf{n}, s, \beta}(x_{\perp}', p_z) u_{\mathbf{n}, s, \alpha}(x_{\perp}, p_z)^* e^{-i\mathbf{p}(\bar{x}' - \bar{x})} \theta(t' - t) \\
 &\quad - v_{\mathbf{n}, s, \alpha}(x_{\perp}, p_z)^* v_{\mathbf{n}, s, \beta}(x_{\perp}', p_z) e^{i\mathbf{p}(\bar{x}' - \bar{x})} \theta(t' - t)] \\
 &= -i \sum_{\mathbf{n}} \int \frac{dp_z}{2\pi} \frac{1}{2E} \frac{i}{2\pi} \int d\omega \left[ \frac{1}{\omega - E + i\epsilon} (E\gamma^0 - p_z\gamma^3 + \sqrt{2eBn_a}\gamma^1 + m\mathbf{1})_{\mathbf{n}, \beta, x'x} \theta(t - t') \right. \\
 &\quad \left. + \frac{1}{\omega + E - i\epsilon} (E\gamma^0 + p_z\gamma^3 - \sqrt{2eBn_a}\gamma^1 - m\mathbf{1})_{\mathbf{n}, \beta, x'x} \theta(t - t') \right] \gamma^0 e^{ip_z(z' - z)} e^{-i\omega(t' - t)} \\
 &= \sum_{\mathbf{n}} \int \frac{dp_z}{2\pi} \int \frac{d\omega}{2\pi} \frac{1}{\omega^2 - E^2 + i\epsilon} (\omega\gamma^0 - p_z\gamma^3 + \sqrt{2eBn_a}\gamma^1 + m\mathbf{1})_{\mathbf{n}, \beta, x'x} \gamma^0 \alpha_a e^{ip_z(z' - z)} e^{-i\omega(t' - t)}
 \end{aligned}$$

を得る。ここで、 $u_{\mathbf{n}, s}(x_{\perp}, p_z)$  と  $v_{\mathbf{n}, s}(x_{\perp}, p_z)$  は、それぞれ正および負のエネルギーを持つ (A5) の解である。したがって、負の電荷を持つ粒子の伝搬関数は

$$S_F(x', x) = \sum_{\mathbf{n}} \int \frac{d\omega dp_z}{(2\pi)^2} \frac{1}{\omega^2 - E^2 + i\epsilon} (\omega\gamma^0 - p_z\gamma^3 + \sqrt{2eBn_a}\gamma^1 + m\mathbf{1})_{\mathbf{n}, x'x} e^{-i\omega(t' - t) + ip_z(z' - z)} \tag{A8}$$

である。ここで、伝搬関数の分子に現れる  $\gamma$ -行列と単位行列は次のように表わされる (以下での  $\gamma_{\mathbf{n}, x, x'}^{\mu}$  は本文での  $(\gamma_{\mathbf{n}, x, x'}^{\mu})^{-1}$  のことである) :

$$\gamma_{\mathbf{n}, x, x'}^0 = \begin{pmatrix} & |\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & \\ & & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \\ |\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & & \\ & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & \end{pmatrix} \tag{A9a}$$

$$\gamma_{\mathbf{n}, x, x'}^1 = \begin{pmatrix} & & -|\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \\ & -|\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & \\ & |\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & \\ |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & & \end{pmatrix} \tag{A9b}$$

$$\gamma_{\mathbf{n}, x, x'}^2 = i \begin{pmatrix} & & |\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \\ & -|\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & \\ & -|\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & \\ |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & & \end{pmatrix} \tag{A9c}$$

$$\gamma_{\mathbf{n},x,x'}^3 = \begin{pmatrix} & & -|\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & \\ & & & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \\ |\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & & & \\ & & -|\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & \end{pmatrix} \quad (\text{A9d})$$

$$\gamma_{\mathbf{n},x,x'}^5 = \begin{pmatrix} |\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & & & \\ & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & & \\ & & -|\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & \\ & & & -|\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \end{pmatrix} \quad (\text{A9e})$$

$$\mathbf{I}_{\mathbf{n},x,x'} = \begin{pmatrix} |\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & & & \\ & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & & \\ & & |\mathbf{n}-1_a, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_a, x'| & \\ & & & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \end{pmatrix} \quad (\text{A9f})$$

ここで、明示していない行列要素は0である。また $\mathbf{n}-1_a \equiv (n_a-1, n_b)$ である。

### 補足 B 正の電荷 $e$ を持つ粒子の量子状態と伝搬関数

陽子や  $u$ -クォークのような正の電荷を持つ粒子の記述形式をまとめる。調和振動子状態をつくる梯子演算子は、陽子では電子と同じで、 $u$ -クォークに対しては (A1), (A2) の  $e$  を  $2e/3$  で置き換える。規格化された励起状態を (A2) のように表すが、このとき  $n_a$  と  $n_b$  の意味が交換される。すなわち、Landau レベルは  $n_b$  で指定され、ガイド中心が  $n_a$  で指定される。

伝搬関数は (A8) の形を持つが、その  $\gamma$ -行列等は、 $|\mathbf{n}, x\rangle$  は  $|\mathbf{n}-1_b, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_b \equiv (n_a, n_b-1)$  に、 $|\mathbf{n}-1_a, x\rangle$  は  $|\mathbf{n}, x\rangle$  に置き換えられる。例えば (以下での  $\gamma_{\mathbf{n},x,x'}^{\mu}$  は本文での  $(\gamma_{\mathbf{n},x,x'}^{\mu})^+$  のことである)

$$\gamma_{\mathbf{n},x,x'}^0 = \left[ \begin{array}{cc} & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \\ & |\mathbf{n}-1_b, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_b, x'| \\ |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & \\ & |\mathbf{n}-1_b, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_b, x'| \end{array} \right] \quad (\text{B1a})$$

$$\gamma_{\mathbf{n},x,x'}^1 = \left[ \begin{array}{cc} & -|\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_b, x'| \\ & -|\mathbf{n}-1_b, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \\ & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_b, x'| \\ |\mathbf{n}-1_b, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & \end{array} \right] \quad (\text{B1b})$$

$$\gamma_{\mathbf{n},x,x'}^2 = i \left[ \begin{array}{cc} & |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_b, x'| \\ & -|\mathbf{n}-1_b, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \\ & -|\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_b, x'| \\ |\mathbf{n}-1_b, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & \end{array} \right] \quad (\text{B1c})$$

$$\gamma_{\mathbf{n},x,x'}^3 = \left[ \begin{array}{cc} & -|\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| \\ & |\mathbf{n}-1_b, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_b, x'| \\ |\mathbf{n}, x\rangle\langle\mathbf{n}, x'| & \\ & -|\mathbf{n}-1_b, x\rangle\langle\mathbf{n}-1_b, x'| \end{array} \right] \quad (\text{B1d})$$

という風である。

### 補足 C 式 (4.10) の導出

求めるべき振幅を、公式 (4.8) を用いて次のように書き換える：

$$\sum_{\mathbf{n},\mathbf{n}'} \int d\mathbf{x}_\perp |\langle\mathbf{n}, x|\mathbf{n}', x\rangle\langle\mathbf{m}, x|^2 = \sum_{\mathbf{n},\mathbf{n}'} \int d\mathbf{x}_\perp |\langle\mathbf{n}, x|\langle\bar{\mathbf{n}}', x|\mathbf{m}, x\rangle|^2 \quad (\text{C1})$$

この式の右辺の  $\langle\mathbf{n}, x|\bar{\mathbf{n}}', x|$  に、状態積の展開公式 (4.9) を適用し状態  $|\mathbf{m}, x\rangle$  との内積をとると求める結果を得る。すなわち

$$\begin{aligned}
 & \sum_{\mathbf{n}, \mathbf{n}'} \left| \int d\mathbf{x}_\perp \langle \mathbf{n}, x \parallel \mathbf{n}', x \rangle \mid \mathbf{m}, x \rangle \right|^2 \\
 &= \sum_{\mathbf{n}, \mathbf{n}'} \left| \sqrt{\frac{qq'}{|q''|}} \frac{B}{4\pi} \sum_{r=0}^{r_{\max}} \sqrt{\frac{(n_a + n_b' - r)!(n_b + n_a' - r)!}{n_a! n_b! n_a'! n_b'!}} C_r^{\mathbf{n}, \mathbf{n}'} \delta_{n_a, n_b' - r, m_a} \delta_{n_b, n_a' - r, m_b} \right|^2 \\
 &= \frac{|qq'|}{|q''|} \frac{B}{4\pi} \sum_{\mathbf{n}, \mathbf{n}'} \left| \frac{m_a! m_b!}{n_a! n_b! n_a'! n_b'!} (C_{n_a, n_b' - m_a}^{\mathbf{n}, \mathbf{n}'})^2 \right|_{n_a' = n_a - n_b + n_b', m_b - m_a} \quad (C2)
 \end{aligned}$$

$$0 \leq n_a + n_b' - m_a \leq r_{\max} = \min(n_a + n_b', n_b + n_a') \quad (C3)$$

ここで  $\langle n_a + n_b' - r, n_b + n_a' - r \mid \mathbf{m} \rangle = \delta_{n_a, n_b' - r, m_a} \delta_{n_b, n_a' - r, m_b}$  を使った。

#### 補足 D 式 (4.14) の導出

まず, 2 次の摂動公式により

$$\text{Im} \Pi^{(q)} = \delta_{m_a, 0} \frac{g^2}{9} \left( \frac{m_w f}{e} \right)^2 \text{Retr} \int \frac{d^2 \tilde{q}}{(2\pi)^2} \frac{q^0 + q_z}{\tilde{q}^2 - M_d^2 + i\epsilon} V^\dagger \frac{q^0 - \omega - q_z}{(q^0 - \omega)^2 - q_z^2 - M_u^2 + i\epsilon} V$$

である。  $M_d$  と  $M_u$  が対角行列であることより, 右辺は

$$\delta_{m_a, 0} \frac{g^2}{9} \left( \frac{m_w f}{e} \right)^2 \sum_{ij} \text{Re} \int \frac{d^2 \tilde{q}}{(2\pi)^2} \frac{q^0 + q_z}{\tilde{q}^2 - M_{d,ii}^2 + i\epsilon} |V_{ij}|^2 \frac{q^0 - \omega - q_z}{(q^0 - \omega)^2 - q_z^2 - M_{u,jj}^2 + i\epsilon}$$

となる。  $\tilde{q}$  積分は正則化して

$$\delta_{m_a, 0} \frac{g^2}{9} \left( \frac{m_w f}{e} \right)^2 \sum_{ij} |V_{ij}|^2 \text{Re} \frac{i}{4\pi} \int_0^1 du \ln(-u(1-u)\omega^2 + uM_{d,ii}^2 + (1-u)M_{u,jj}^2 - i\epsilon)$$

この式は, Feynman 変数  $u$  が

$$\frac{1}{2\omega^2} [\omega^2 + M_u^2 - M_d^2 - D] < u < \frac{1}{2\omega^2} [\omega^2 + M_u^2 - M_d^2 + \sqrt{D}]$$

$$D \equiv (\omega^2 - M_u^2 - M_d^2)^2 - 4M_u^2 M_d^2$$

にあるときに実部が非ゼロであることに注意すると,  $u$  積分から (4.14) の最後の式を得る。

#### 参考文献

- Ambjørn J and Olesen P, 1989 *Nucl. Phys.* **B315** 606 ; 1990 *ibid.* **B330** 193.  
 Arnold V J, 1964 *Sov. Math. Dokl.* **5** 581.  
 Berry M V, 1978 in *Topics in Nonlinear Dynamics* ((ed.) Jorna S, Am. Inst. Phys. Conf. Proc. **46**)  
 Enqvist K and Olesen P, 1994 *Phys. Lett.* **B319** 195.  
 Ezawa Z F, 2000 *Quantum Hall Effect* (World Scientific) p160.  
 Fermi E., Pasta J. and Ulam S. 1955, *Los Alamos Scientific Laboratory report* LA-1940.  
 Fujimoto Y and Fukuyama T, 1983 *Z. Phys.* **C 19** 11.  
 Guth A and Steinhard P, 1989 *The inflationary universe in New Physics* (Cambridge University Press, Cmbridge) p34.  
 Itzykson C and Zuber J-B, 1980 *Quantum Field Theory* Chap. 8 (McGraw-Hill, New York)  
 Kobayashi M and Maskawa T, 1972 *Prog. Theor. Phys.* **49** 652.  
 Matinyan S G and Savvidy G K, 1978 *Nucl. Phys.* **B134** 539.

- Particle Data Group, 2008 *Phys. Lett.* **B667** 386..
- Salam A, 1968 in *Elementary Particle Theory* ed. Svartholm (Almqvist and Forlag).
- Savvidy G K, 1977 *Phys. Lett.* **B71** 133.
- Skalozub V V, 1983 *Sov. J. Nucl. Phys.* **37** 283.
- Skalozub V V, 1985 *Sov. J. Nucl. Phys.* **45** 665 ; 1986 *ibid.* **43** 1045.
- Sogut K, Havare A and Acikgoz L, 2002 *J. Math. Phys.* **43** 3952.
- Stoer J and Bulirsch R, 1996 *Introduction to numerical analysis*, third edition, (Springer, New York).
- Takahashi K, 2006 *J. Phys. G: Nucl. Part. Phys.* **32** 1131.
- Takahashi K, 2008 *J. Phys. G: Nucl. Part. Phys.* **35** 035002.
- Takahashi K, 2009 *Faculty of Liberal Arts Review*, Tohoku Gakuin Univ. **154** 21  
[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo\\_154/index.html](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_154/index.html)
- Takahashi K, 2009 *Faculty of Liberal Arts Review*, Tohoku Gakuin Univ. **155** 109  
[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo\\_155/index.html](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_155/index.html)
- Takahashi K, 2010 *Faculty of Liberal Arts Review*, Tohoku Gakuin Univ. **156** 109  
[http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo\\_156/index.html](http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/gakujutsu/kyoyo_156/index.html)
- Weinberg S, 1967 *Phys. Rev. Lett.* **19** 1264.
- 佐藤勝彦 2008, シリーズ現代の天文学 2 宇宙論 I (日本評論社) 第 1 章.



# Context Dependent Linguistic Development:

## Notes from an Elementary School English Program

Tomoko WATANABE<sup>1</sup>      Manabu WATANABE<sup>2</sup>

The process of language learning is difficult to study because one can neither directly observe it as it happens, nor look at what really has been learned and stored in the learner's neural system. All we can see is what input has been given to the learner, and what output s/he has produced : there exists a black box, for what happens between the input and the output is not available for direct observation. However, researchers may be able to make informed guesses from careful analyses of the input and the output, and that is what we attempt to do in this paper.

The rest of the paper proceeds as follows. First, we describe the English program we are studying, and some theoretical issues pertaining to the program, in Section 1 and 2 respectively. Then, we report our classroom observations from our visits in October 2009 and February 2010 in Section 3. Section 4 states some concluding remarks.

### 1. Ogata Program

Ogata Program is an English language program offered at Ogata Elementary School in Ogata Village, Akita Prefecture in Japan. The program is the school's official "English Activities" class that is allowed within the current National Curriculum, and is run by a private language school<sup>3</sup> on the contract-basis with the village. The language school provides course designing, teaching materials, coordination among involved parties, and the native English-speaking instructors for the classes from the 3<sup>rd</sup> graders through the 6<sup>th</sup>. The class meets every week for one hour. The homeroom teacher attends all the sessions, and assists the language instructor. From both pedagogical and administrative points of view, thus, Ogata Program is different from most elementary-school English Activities classes, which Japanese homeroom teachers plan and teach.

Significant differences are found in the class content, too. A typical foreign language class

---

<sup>1</sup> Ph.D. in English and Applied Linguistics, Associate Professor at Tohoku Gakuin University.

<sup>2</sup> Ph.D. in Linguistics, part-time lecturer at Tohoku Gakuin University and Tohoku University.

<sup>3</sup> Ahlstrom and Associates Incorporated. 5-14-1 Sanno, Akita, 010-0951, JAPAN

in Japan is structured around targeted expressions or grammar points. The learner will first receive as input a spoken text (often in written form) that contains those targets. Then, the words and grammar that constitute the input are explained to the learner in their native language, i.e., Japanese. In this approach, the input the learner gets in class always comes with word-by-word explanation, as well as ample chances for repeated listening (through playbacks of the recorded speaking). We call this approach the “traditional”. In real life, however, the spoken words disappear as we hear them, and we will never be given detailed explanation of what each word means, nor many chances to hear them repeated, under normal circumstances. The learner will never develop skills for this “realistic” listening, unless the teacher stops both explaining everything in Japanese and repeating the recording multiple times in the classroom. Ogata Program takes this challenge.<sup>4</sup>

## 2. Top-down comprehension, and listening skills

One may wonder, then, how the instructor can be sure that the beginning learners understand what is explained to them in English, if all instructions are done in English. The key is top-down comprehension. Top-down comprehension (i.e., *gestalt* understanding) is a type of understanding process that is achieved by assembling pieces of information from various contextual sources such as i) one’s pre-existing knowledge (long-term memory), ii) situational information (physical environment/circumstances), and iii) linguistically-coded information (text). On the contrary, bottom-up comprehension is a type of understanding that is typically achieved by decoding pieces of linguistically-coded information (text) one-by-one. To give examples, learning how to play baseball, or to play the trumpet, typically requires top-down comprehension, while learning how to use a new electric appliance from the accompanying manual involves bottom-up comprehension. Usually, top-down comprehension is more intuitive (heuristic), while bottom-up comprehension is more linguistic (compositional). Bottom-up comprehension, thus, tends to be more difficult, and it requires stronger linguistic skills.

In Ogata Program, top-down comprehension is encouraged, and facilitated. A key teaching

---

<sup>4</sup> The authors are aware of another English program that takes the same challenge. It is the program for kindergarten children, which is extended for elementary school students, offered at Meysen Academy in Sendai. The program emphasizes learning English through experience, not explanation in Japanese. For more information, contact Timothy Broman, the curriculum developer. For more detailed descriptions of the programs developed by Ahlstrom and Associates Incorporated, see 渡部 (2006), Watanabe & Watanabe (2007) and Watanabe (2007).

technique for successful top-down comprehension is to make the content “visible” when the instructor speaks. Typically, visible content includes physical objects and movements, pictures, and facial expressions. If the learners can see these as they listen to the instructor (for example, if the instructor says “Point to the window” as s/he actually points to the window), they can understand what the instructor means without explanation in Japanese.

The learners’ knowledge and experience can also make the content “visible” in a more extended sense. For example, many card games are in the children’s shared knowledge. Therefore, the learners will understand the instructor’s explanation of the rules in English without much problem. Look at how the instructor explains the rules of a new card game to a class of the 3<sup>rd</sup> graders in Ogata Program. The excerpt below is taken from our October 2009 visit. The whole interaction takes 5 minutes. The main instructor, Brian, begins his talk, holding a set of cards. One letter is printed on each card. Another instructor, Darren, is present in the room, as well as the homeroom teacher, Mr. Sugo.

Brian : We are going to play a *Gimme* game. It’s a new game. And for this game, we are going to use these cards. [Showing one card] This is … /h/, right? [Showing another card] And this one is … /k/. [Showing another card] And this one is …/s/. [Showing another card] This one, I don’t know. [Looking confused] Oh, /d/. And what else we have here? [Showing another card] This is …/n/. And for this game, you have one card. For example, if I give Darren a card…

Darren : [Receiving the card] Thank you.

Brian : And if I give Sugo-sensei a card…

Mr. Sugo : [Receiving the card] Thank you.

Brian : And I have one card. I ask a question, “DO YOU HAVE blah-blah-blah.” I have /k/, but don’t show it. [Asking one student] Do you have /k/? No? [To Mr. Sugo] Do you have /k/?

Mr. Sugo : No.

Brian : [To Darren] Do you have /k/?

Darren : Yes.

Brian : If he says YES, and I have /k/, we’ll do paper-rock-and-scissors. [B and D do *jan-ken*.] Darren wins, so I give him the card. “HERE.” “THANK YOU.” He’s got one point, two cards. [To Darren] And, you put them on your desk.

Darren : [Putting his cards on the desk] My desk.

Brian : And, come to me, and say, “Brian, give me a card.”

Darren : Give me a card.

Brian : [Handing a card to D.] Here you go.

Darren : Thank you.

Brian : And one more time. [A few more demonstrations of the rule.] A couple of more rules, and we can play. [Showing a pair of capital H and small h] Is this one point? [Students say YES.] [Showing a pair of the same letter in different colors] Is this one point? [Students say YES.] Now, if you get one point, what do you do? In your pocket?

Students : No! Desk!

Brian : [Walking to Darren with two cards] Is this okay? No! Put the cards on your desk. And, please keep your card secret. Don't go like this. [B. walks showing everybody his card]. We'll help you. "Darren, help! What's this?" Okay?

In the above example, the linguistic input from the instructor contains grammar that may be considered too advanced for the beginners : for one, if-clauses are used a few times. However, the learners can reach the understanding of the game rules explained because they supplement their lack of linguistic knowledge with their so-called world knowledge (in this case, procedural knowledge of card games in general), and with the context knowledge (in this case, the instructor's physical demonstration accompanying the verbal explanation).

### 3. Some characteristics of English learning in Ogata Program

Ogata Program emphasizes top-down comprehension, and thus, assumes top-down listening skills that accompanying it<sup>5</sup>. The teaching method encourages the learners to use whatever clues available to them to understand the input. One may fear, then, that this top-down approach may discourage, or worse, prevent, linguistic development, because the learners can easily grasp the meaning of the oral input without decoding the input linguistically. We shared such view, too, at first. However, our answer to the question now is "no", after we observed the learners' behaviors in class carefully. We report some of the characteristics that lead us to such a conclusion.

#### 3.1 Comprehension

The children in Ogata Program are encouraged to engage in top-down comprehension. For

---

<sup>5</sup> We also would like to point out the fact that, in our real life, we perform quite a lot of top-down processing when we listen to someone speaking, by taking in facial expressions and other physical clues, as well as visual aids presented. Only a few forms of communication deny access to non-oral clues : telephone and radio. Besides, these forms of communication are difficult even for advanced learners, and for native-speakers sometimes. Therefore, we believe that incorporating top-down listening in beginning learners' class is realistic in both senses.

example, the instructor gives them directions that require TPR (Total Physical Response), such as “Touch your nose,” “Jump,” or “Point to the window,” and they perform the action physically. They connect the verbal cues to the physical actions, initially by looking at the instructor’s demonstrated movements. They are never explained what “touch” means, or that the sentence structure is imperative : it is sufficient if they can understand that a certain action is demanded, and what action is demanded. Classroom instructions are extended forms of TPR : “Make groups of 4,” and the children move their desks immediately; “Volunteer?” to solicit help, and some raise their hands to assist the instructor. The learner learns to comprehend these routine instructions quickly through their experience in the English classroom as well as in other classes taught in Japanese. Top-down comprehension is also achieved with more complicated verbal instructions, like the set of rules shown in Section 2.

It is often feared that too much emphasis on top-down processing can hinder bottom-up linguistic decoding. Interestingly, however, we saw some instances of bottom-up linguistic comprehension skills developing in these children during our visits to the class. For example, in the TPR session of the 3<sup>rd</sup> graders class, when the instructor said, “Point to a boy (or a girl)” without demonstrating any action, the children responded to the linguistic cue quite naturally. This shows that the children know that i) the verb phrase *point to* refers to a kind of action, ii) the terms *boy* and *girl* refer to the biological sex that each individual manifests, and iii) the whole phrase, *point to xxx* is imperative. That is, the children did not simply mimic the instructor’s movements, but demonstrated their ability to decode linguistically-encoded information.

In the TPR portion of the 4<sup>th</sup> graders class, when the instructor said, “Touch the desk”, the children immediately touched the desk. But, when they were told to “Touch the ceiling”, they laughed, and some of them even shrugged. They somehow had abstracted what “touch” means from previous sessions using the same word, and they knew instantly what they were told to do was impossible to perform physically.

Another good example comes from game rule explanation. When the 3<sup>rd</sup> graders were explained how to play *Gimme game* orally, there were no demonstrations (i.e. no play-out by the instructors). But, they learned the fairly complicated rules quite quickly. These instances showed that learners started to develop their own linguistic comprehension skills (that is, bottom-up comprehension skills) in English.

### 3.2 English output

English output manifests another interesting aspect of the learners' linguistic development. The general tendency is this : As the children's grades go up, their Japanese utterances outnumber English ones drastically.

For example, in the 3<sup>rd</sup> graders class, about half the students played the *Gimme* game, asking in English, "Do you have /t/?" or "Do you have /k/?" Some got around with just "/t/?" or "/k/?" without the full form of the question. And, the shortened form of the questions was used by most of the students when they were very excited in the game at the end of the second round. Interestingly, however, questions in Japanese such as "/t/ ある?" were not heard very often throughout the two rounds. In other words, no matter how excited the 3<sup>rd</sup> graders got in the game, they never imagined they could perhaps collect the cards faster if they used Japanese in the game. The situation drastically changed in the 6<sup>th</sup> graders class. Almost all linguistic interactions among the children that one of the authors observed were in Japanese.

Increased use of Japanese is often seen as a negative sign of English development, especially in a program where all sessions are conducted in English. This, however, may be a sign of some other kind of development. Let us explain below.

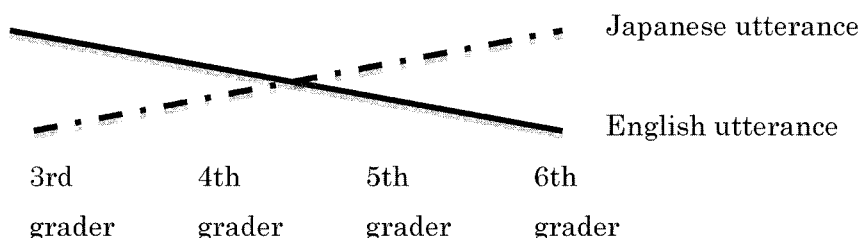
As the children proceed in grades and become older, their linguistic skills in Japanese develop accordingly. By the time they are the 6<sup>th</sup> graders, their command of Japanese exceeds their limited English : after all, their exposure to English has been only one hour a week for a few years, and the rest of their learning is conducted in Japanese. And they are old enough (and smart enough) to figure out the best strategy to win a card game : Use Japanese to collect cards quickly.

Another interesting phenomenon is observed in relation to this. As their Japanese outputs increase, the number of spontaneous (i.e. unconscious) Japanese translation by the students increases, too. There were some 6<sup>th</sup> graders (for some reason, they were all outspoken boys) who verbalized in Japanese what they understood in English, probably unconsciously. In fact, those instances looked like automatic responses to the stimuli : they simply reacted to English instructions in their own language reflexively. And surprisingly, the translations were all correct. This automatic translation reaction rarely occurred in the 3<sup>rd</sup> graders : when it did, it was sporadic, and at word level. We speculate that their Japanese skills are not yet strong enough to overtake their English outputs in the English class.

We should point out, however, that the translation older children produce always comes from top-down comprehension. For example, a student heard the instructor ask "What time did you go

to bed?” and uttered, “寝た時間?” S/he is not likely to produce bottom-up, or word-by-word translation like “何時にベッドに行ったか?”. In other words, the oral translation observed in Ogata Program is based on the idea expressed in the utterance as a whole.

To summarize, the general trend in language development observed in Ogata Program is, as their grades go up, fewer English utterances are observed while playing the games, and more desire to express themselves in their stronger language, i.e., Japanese in this case. On the contrary, younger children utter more English phrases in games, and (probably) no desire to translate them. The general tendency is shown as in the following X schema figure :



Coinciding with more Japanese translation output, it should be noted that Japanese-accented English pronunciation, which is not observed among younger children, is pervasive among the 5<sup>th</sup> and 6<sup>th</sup> graders. Our speculation that the stronger language suppresses the weaker one seems to apply to the phonology as well. In fact, decreased English output, emergence of automatic Japanese translation, and Japanese-accented English pronunciation all seem to take place around the same time. Such loss of “good” pronunciation in their spontaneous utterances as they grow is somewhat disappointing. Introduction of explicit articulation training may be an alternative approach to the later stages of the program.

### 3.3 Repeating, and phonological development of grammar

In contrast to some negative behavior described above, we also noted instances of positive behavior among the older children : namely, repeating. The 6<sup>th</sup> graders often repeated what the instructors said to them in English, and this repeating behavior was not limited to a word. They repeated a phrase, such as “on the desk”, and even longer phrase such as “Don’t play with the card.” Moreover, phrasal units, or chunks, were perfectly conceived, and articulated as

phonological units. That is, they stress so-called content words (such as *don't*, *play*, and *card*), and they don't put unnatural breaks between words.<sup>6</sup>

We consider this repeating behavior is another instantiation of automatic reflexes that stem from their top-down comprehension processes. When in conversation, the listener indicates to the speaker that s/he understands what s/he hears in various ways such as nodding and interjections (e.g. *uh-huh*, *yes*, *I see*). Repeating is one such tool. For example, in the exchange below,

A: Put the card on the desk.

B: On the desk.

A: Yes, on the desk.

Person B is indicating that s/he understands where s/he must put the card by repeating the phrase.<sup>7</sup> Older learners in Ogata Program seem to be doing this naturally, as they listen to the instructor's explanation. At the same time, they are beginning to grasp the phrasal structure of English and be able to reproduce it.

#### 4. Some concluding remarks

Top-down teaching is often feared to suppress bottom-up language development. In one sense, the students are "tricked" into believing they understand English, when their understanding is heavily assisted by non-linguistic information, such as visual clues, world knowledge, experience, and context. Some teachers even say they don't learn the language in this approach.

We, however, believe that the learners' behaviors as described above DO suggest that they learn the language, although the learning processes involved are somewhat untraditional: the knowledge they gain and the way they gain it through top-down learning is qualitatively different

---

<sup>6</sup> We have found a similar instance in a junior high school English class before. (The students at this school all learned English at elementary school in a program similar to Ogata Program.) A female student was asked to stand up and read the text aloud. She stumbled at a prepositional phrase "in the park." The last word was blanked out in the worksheet, so she had to recall it from her memory. After a few attempts, she remembered the word, and she repeated the entire prepositional phrase, not just the missing word. This indicates that this student has a rudimental grasp of phrase structure. Most Japanese learners of English would only say the missing word in a situation like this. Even when they read aloud after a model provided by the teacher or the CD, they tend to ignore the chunking and read word-by-word. For more descriptions of this phenomenon, see Watanabe (2007).

<sup>7</sup> If the phrase is spoken in raising intonation (i.e. *On the desk?*), it would indicate that you don't understand, or you are not sure if your understanding is correct.



from the knowledge gained and the learning processes observed in the traditional approach. We also believe that this alternative approach may supplement what the traditional approach may lack.

Before we go further, let us show some of major contrasts between Ogata Program and the

Table 1. Characteristics and assumptions in Ogata Program

|  |  |
|--|--|
| What the students learn with explicit instruction    | Phonics <sup>8</sup>   |
|  | Recognition of individual sounds   |
|  | Recognition of individual alphabet letters   |
|  | Sound-letter correspondence (matching a letter with a sound)                         |
|  | Segmentation of sound sequences  |
|  | Spelling convention (from left to right)   |
|  | Total Physical Response  |
| What the students learn without explicit instruction | Words and expressions used   |
|  | Top-down comprehension skills in English   |
|  | English phonological phrase structures such as prepositional phrase, and verb phrase |
|  | Basic English sentence structures, and their associated functions                    |
| What the students don't learn                        | Enjoyment in English communication   |
|  | Word meanings in Japanese  |
|  | Grammatical terms and their notions  |
|  | Bottom-up translation skills   |
| What the students don't learn                        | Articulation skills (How to say something correctly)                                 |

Table 2. Characteristics and assumptions in the traditional approach

|  |  |
|--|--|
| What the students learn with explicit instruction    | Word meanings in Japanese  |
|  | Grammatical terms and their notions  |
|  | Bottom-up translation skills   |
|  | Articulation skills  |
| What the students learn without explicit instruction | Trainings in academic thinking   |
|  | Intellectual enjoyment? — maybe  |
| What the students they don't learn                   | Top-down comprehension skills in English   |
|  | English phonological phrase structures such as prepositional phrase, and verb phrase |

<sup>8</sup> Teaching of phonics is not described in this paper, but it is a major part of Ogata Program. In fact, the cards used in the games are intended to teach phonics.

traditional approach in the tables above. The list is not intended to be comprehensive of all the aspects of the programs.

Interestingly, characteristics and assumptions in Ogata Program, and those in traditional English classes in Japan may seem to distribute complementarily. This, in fact, leads us to believe that the approaches taken in Ogata Program and traditional English classes may supplement each other to facilitate the learners' successful learning experiences. We need both top-down and bottom-up teaching. There are situations where you must listen carefully for details expressed by individual words. At some point, grammatical rules need to be explained so that they can put the words in the correct order in their speech, and their collective word knowledge must be sorted by category like nouns, and verbs. Also, some specific training may help improve the learners' pronunciation.

Currently, none of these bottom-up assistances is provided in Ogata Program. We believe, as we argued earlier, that the natural development of language learning should begin with top-down processing as bottom-up comprehension requires higher linguistic skills, but we also believe that that program can be fine-tuned, and enhanced by bottom-up instruction too if incorporated into the program appropriately. Here, we see a two-tier approach in elementary school English education.

As an endnote, we are fully convinced that games, or any such activity that manifests some "game" characteristics, are the greatest tool throughout our learning. Game characteristics include opponents, rules, winners, and losers, probability, opportunity, thrill, unpredictability, and so on. Those characteristics fascinate even the 6<sup>th</sup> graders who are not "children" anymore in their developmental stages. Many teachers fear that the older children might lose interest if the game is too simple or too difficult. What we saw in the 6<sup>th</sup> graders' classes, however, indicates that there is no such need to worry. If the game was too simple, they tried to make it more complicated by negotiating the rules with the instructors (using their limited English). If the rules were too complicated, they enjoyed "learning" the rules by playing the game. We believe that "game" has some intrinsic nature that could facilitate successful foreign language learning experience. Language teachers should be encouraged to utilize the teaching method to achieve their pedagogical goals.

**References :**

- 渡部友子 (2006) 「入門教育としての小学校英語教育のあり方 — 中学校で英語を学びやすくするために」富山県立大学紀要第 16 巻, pp. 73-80.
- Watanabe, T. (2007) 'Psychological effects of learning English at elementary school : From a follow-up study at the junior high level.' *The Annual Review of English Language Education in Japan*, Vol. 18, 231-240.
- Watanabe, T. & M. Watanabe (2007) 'A pseudo-immersion approach for children starting to learn English as a foreign language,' *NCYU Inquiry of Applied Linguistics : The 2006 Issue*, 359-377.



# 社会学はなぜ応用されないのか

—— 公共政策における社会学利用の一研究（部分訳前半）

ロバート・スコット，アーノルド・ショア共著 久 慈 利 武 訳

## 序文

社会学の領域内には、社会学的知識は社会を望ましいやり方で変容させるのを助けるために使用できる、という見解への強いコミットメントが存在する。本書執筆の萌芽は、このコミットメントをどうやって現実にするかに限定して理解するときに抱く不満に由来する。数年の間個人でも共同でも、我々は応用社会調査に従事してきている。年長の執筆者 Scott はアメリカの盲目の人に奉仕する組織の研究を指揮してきた。年少の執筆者 Shore は試験的な所得維持プログラムの行政による実施に付随する社会学上の問題の考察に2年費やしてきた。われわれはともに、ニュージャージー・ペンシルバニア州負の所得税実験の一端で働いてきた。上記の研究のすべてのねらいは、基本的には同じである。つまり重要な政策問題に関わる社会的に有意義な問いを同定し、リサーチすることである。いずれのケースでも、結果は基本的に同じであった。つまりアカデミックな社会学者の興味をひく理論的な問いに照射するのを助けるが、存在しない、些細な、曖昧な、把握できない、夢想的な政策含意を運ぶように思われる知見群の産出がそれである。

いわゆる政策に関係した他のリサーチ結果に馴染みの読者は、貧困、福祉、ソーシャル・サービス、精神衛生、教育、犯罪、薬物濫用、人口、法律、医学、ビジネス、国際的事柄、軍事の応用研究を行っている多くの他の社会学者がしばしば我々と同じ体験をしているので、フラストレーションを感じているのは我々だけでないということを知っている。彼らは何度も政策に関係しているように見える問題に関する社会的リサーチに着手してきたが、彼らの職業的同僚に興味を惹きつけそうな理論的争点にアドレスするもののはっきりとした政策に役立つ含意を何ら持つように見えない結果を生み出したただけであった。本書は、これがどうしてそうならなければならないのか理由の一端を理解しようという試みを代表する。

我々はこの問いに対する回答を最初探し始めたとき、応用社会学に関する一冊の本を書くつもりはなかった。我々の希望は公共政策に学問的な知識を応用することについて社会学者その他が書いた基本的著作を読むという謙虚なものから始まった。……我々は今日の応用社会学の実践の現状について啓発とその特有の形態、その遂行の記録を我々が理解するのを助

ける議論を求めてこれらの出版物を勉強した。確かに興味深く、ときには啓発的であるものの、この探索の結果は総じてがっかりするものだった。というのは、明晰さを得る代わりに、我々は以前よりもっと混乱する自分に気づいたから。

我々は我々が読んだ文献の大半が学術的視点からのみ書かれていることに気づいた。あまりにもしばしば、社会学的知識助言が提供される政策過程と政策作成集団は活動の付随的側面として扱われていた。コンテクストは無視される傾向があり、社会学者によって政策に関連しようとする努力が真空の中ないしはまったく学問的関心事からなる世界で起こっている印象を与えた。社会学を政策に応用しようとする努力と結びついた帰結に与えられる説明は、アドホックで断片的である傾向があると思った。彼らは成功の理由にはまったく未考察のままに放置し、失敗にのみ注目している。彼らは政策全体に社会学的知識と方法を適用する活動と結びついた要因には考慮を払わず、特定の一連のリサーチと結びついた一つか少数の個別的問題だけを取り上げる傾向があった。最後にこれらの議論から到来した社会学の政策との関連を改善するための勧告の多くは、活動の支流全体にほとんど考慮が払われず、特定の問題に対する漆反射反応（条件反射反応）であるように思われた。要するに、この文献群の勉強から、大半の著者は社会政策に社会学的知識を応用する最近の試みは、しばしば作動してきていないことに気づいているものの、それがなぜなのか納得のいく説明を与えたものが一人もいないと感じるに至った。実際の応用社会学についての鋭い分析が欠けているのである。そのような分析を手にしたというニーズから本書執筆の考えが生まれた。

本書で提示される分析は今日の応用社会学の実践を十分に説明分析するために必要とされるそれではないことを断っておく。現時点ではトピックもあまりに貧弱に理解されているのでそのような分析が可能でない。いずれにせよ、そのトピックはあまりに複雑なのでたった一冊の本で提示したり開陳することはできない。我々の著作は政策作成集団が個々の社会問題を扱う際に従う択一的アクションコースの範囲を同定し、狭めるのを助けるために、社会学的知識とリサーチ方法を用いるプロセスのほんの一端にだけ注目するものである。我々が取り上げることになる問題の個々の側面は社会学を政策に関連したものにしようとする試みの成果の理解に肝要なものであると信じている。我々の領域の文献で論じられるような学問的仕事のこの側面についての既存の議論では無視されている上記の考慮は、今日の応用社会学の実際に十全な説明を与えるものではない。しかしながら、我々がこれから論じようと思っている問題にまったく有意な役割を与えることなしには、学問的仕事のこの側面の説明は検討し得ないと我々は思っている。それは社会学を現時点で政策に適用する試みに随伴する帰結の十分な説明を獲得するために考慮されねばならない事柄の範囲を冒頭で指摘しておくなら、本書の中で我々が意図していることを読者が理解するのを助けるであろう。

政策における社会学の役割を説明するために学問的仕事実践活動にどのようにインパクトを持つか理解することが必要である。これは非常に難しい問題である。それを理解するには、最低限次のことが考慮されることが必要であろう。

- ・実践活動としての政策作成の性質、政策決定に到達する際アイデアが果たしうる役割。知的な仕事がどのように完成され、その最終産物の性質はどんなものか。
- ・知識人、科学者がまず最初に政策に関連した仕事に関わる仕方——誰が契約を開始し、リサーチを支援し、関係の条項を定めたか。
- ・アメリカ社会におけるエキスパートのシンボリックな役割とエキスパートの助言に与えられるウェイトにとっての意義。
- ・エキスパートの産物は従うべき択一的アクションコースを同定するのに責任を負う者にどのようにまたいつ伝えられるか。
- ・社会的価値、個人的価値、イデオロギーが、エキスパートが所与の問題に関して考慮する択一的アクションコースの範囲を限定する際に果たす役割。
- ・エキスパートの知識がパッケージされる形態と実践活動の指針としてそれを利用しようとするそれが被る変形。
- ・エキスパートのクラフトの状態、政策作成集団が直面する様々な問題を研究したり説明するのへの適合性。
- ・政策作成集団が実在的、実用的とみなす択一的アクションコースの範囲に政治、経済、社会、文化的要因を持つインパクト。
- ・エキスパートが問題に有効に対処するために何がなされねばならないと感じているかではなく、ある問題に何がなされうるかを決定する際に政治的要因が果たす役割。

あらゆる種類の制約が応用リサーチの試みに降りかかり、知識人と科学者が政策に及ぼすインパクトの強さ、形態、最終的性質を決定する。上記の制約の一部は助言を与えるために召喚される個々のエキスパートの保有するクラフトの習得の程度、理論状態、方法論、知識の蓄えのような学問に内在する要因と関係する。社会学の外部にも制約が存在する。アイデアシステムに、価値システムに、政府に、政策過程そのものに。社会政策形成と相俟って社会学を活用しようとするこれまでと目下の努力と連動した結果を説明するために、上記の要因が考慮されねばならない。

本書はそれらのほんの一部だけ取り扱う。本書は、公の事柄に社会学を使うプロセスのある側面を批判的に考察する試みとみなすのが最良である。本書はプロセスのすべてを提示するものではないし、社会学が政策に影響を及ぼす仕方のすべてを取り上げようというものでもない。その代わりに、我々は序論で説明されるように、集中的に扱うためにプロセスの若干

の側面を抽出することを選択した。

取り扱うために我々が選んだ個々の問題は、応用社会学の実践の全局面で傑出した要因とは限らない。それらは他の者よりあるタイプの政策関連活動にとって有意味である。このため、我々は問題が個別な関連を持つように思われる応用社会学の局面に我々の分析を限定することを選んだ。特に、本書は主として基本的には国内レベルの政府の政策作成努力を取り扱うことになろう。たまに他の領域に社会学的知識やリサーチ方法を利用する試みに言及することがあるが、我々の分析の焦点はそこにはおかれたい。これは、我々が応用社会学の基本的部分と通常見なされるもの——医療、法、他の専門職スクールでの社会学の教授、企業、私的組織、財団、施設における社会学の利用——のかなりを周辺的にしか扱わないことになることを意味する。その上、政府のドメインでは、我々は政府による意思決定体による社会学のすべての利用には関心がなく、政策の努力と直接関連して、社会学の知識とリサーチ方法を用いようとする試みを含むものにだけ関心を向ける。つまり、我々は択一的アクションコースを同定し、その中から選択するために特定の知識群とリサーチ方法を活用するためになされる努力に主として関心を払う。「利用」によって、我々は政策作成者が我々の前の問題を理解に努める際に社会学のリサーチと用いられる社会学の概念と理論に思慮深い注意を払うことを意味する (J. Weiss 1976: 238)。我々は、これが応用社会学のほんの一局面にすぎず、多くの人々が社会学が政策に対してできる最も重要な寄与と見なすもの<sup>1</sup>を除外していることを認識している。我々はこの点で社会学の重要性に気づいているものの、それを計量化したりその強さを測定することがほとんど無理であるために、政策に対するそのインパクトを実際に研究することは難しいことに気づいている。最後に我々は社会科学のただひとつ、つまり社会学の周りの我々の分析に焦点をおく。これは他の社会科学が無視されたり、我々の分析は社会学だけにリバントを持つことを意味しない。社会科学一般よりむしろ社会学という一領域だけを扱うという決定は、議論を包摂し、それを手におえられる範囲に留めるといふ我々の関心に由来する。

ある者は、我々が社会学を構成する学問スタイル、方法スタイルの範囲と多様性に無頓着と見なすので、社会学についての我々の議論は端折られていることに気づくであろう。我々は今日のアメリカには単一の社会学が存在せず社会学は多元的であることに気づいているということだけいふことができる。その多元性は我々のタスクを大いに複雑なものにし、それを御すために、社会学が実際にはより一枚岩であるかのように装うことによって事柄を単純化しなければならなかった。この分析では、あらゆる事柄に一度に注目することは不可能な

<sup>1</sup> 人間性、社会、社会問題の性質に人文学、社会科学の視点に基づいた教育体験を通じて一般的なやり方で政策作成者に敏感にさせることによって、問題に注意を喚起し、啓発すること。



ので、一定量の単純化は必要で避けがたい。政策の中の社会学を見るために、我々は二つのことを単純化する必要があった。我々がせいぜいできることは、我々自身と読者を、我々がこのことをしていることを知っている事実気づかせることである。

一層難しい我々が直面するもう一つの問題がある。この著作の大半は政策に関するものであるが、我々を狼狽させることには、我々は政策が何であるか、どのように作成されるのかエキスパートの中の誰一人として確信するものがないことを発見した (C. Weiss 1976b : 226, Uliassi 1976 : 241)。

「政策」というタームによって我々は何を意味するのか。政策科学者、社会学者、政治学者、政治家はこのタームにひとつの有意義な定義を与えようと長らく努めてきているが、我々はその定義がかぎられた価値しか持たないことに気づいた<sup>2</sup>。一部は曖昧すぎないしは多義的すぎる。他の定義は充分明確に思えるが、政策が政府によってどのように行われるかよりも政策は何であるべきかに傾斜しすぎているように思われる。我々は様々に定義された政策というタームのメリット、デメリットをめぐる長い論争に関わりたとは思わない。これを避けるために、我々は我々の議論を始めるのに充分な単純で名目的な定義を提示するつもりである。進行するにつれて、我々は政府における政策作成の数多くの事例を詳細に述べるつもりだが、そこから我々は読者が我々が「政策」という語を用いるときに念頭に置いているものの観念を獲得できることであろう。本書では、「社会政策」という用語は、ある目的を達成するために我々の社会の特定の社会状態を取り上げる責任を持つ政府内の個人と集団によって採用される意図的な強制的方策を指す。「政策作成」の用語によって、追求されるアクションコースの選択肢を同定し、そのなかから選択するプロセスを指す。

第3章から第6章までで我々が行う分析の大半は、政策に社会学的知識とリサーチ方法を適用する試みが起こる（政治的、社会的、歴史的）コンテキストの考察が含まれる。社会学が政策のために利用されるコンテキストを説明するために、我々は社会学の境界を踏み外すことを余儀なくされた。例えば、第4章では、19世紀末から20世紀初めのアメリカ社会の社会史、知性史、政治史の目立った側面を詳細に論じている。その時期は科学的プランニングとの関わりで社会科学のエキスパートを活用するというアイデアが生じた時期である。第3章と第5章は、今日の応用社会学との関連を証明するために政治学の概念と方法を分析している箇所がある。第5章の数節は私的福祉と公共財についての経済学者の研究を引いている。その章の他の節では、我々は連邦政府の様々なブランチでの政策作成ベンチャーの素材を提示している。我々がこれまで馴染みのない領域にベンチャーに乗り出すことはそのハザードがないわけではなく、我々が出会う落とし穴のいくつかとそれをどう迂回しようと努

<sup>2</sup> 提案されてきた「政策」の定義の一部は第3章でレビューされている。

めたかコメントするなら、読者が我々の議論を評価するのを助けるであろう。

我々の分析のために他の分野や学問から引かれた素材の重要性を認識することとそれらを批判的に評価する能力を持つことはまったく別である。多くの場合、我々は我々の議論にとっての特定の系譜の歴史リサーチ、政策に関する論評、大統領ないし議会の研究のレリバンスについて知ることができるが、歴史学、政治学、政治に通暁しないので、我々は上記の研究がいかにか妥当するのか判定しかねた。それゆえ、我々は問題を明確にし、レリバントなりサーチを解釈し位置づけるよりも我々よりその資格がある人々に助けを求めることを選んだ。我々はある分野、問題についての一人もしくは少数の者の見解に依拠することの危険性に気づいているが、実際のところ、我々は案内を選択し、我々が精通していないテリトリーを彼らの先導で進むことを求めるしか選択の余地がなかった。結果として、本書で提示される分析の部分は、これらの領域についての公刊された文献を査定する資格を有する様々な人々の助言に大きく頼っている<sup>3</sup>。

提起される必要があると我々が感じる問題についての既存のリサーチの不十分さは、我々の進む道に立ちはだかるもうひとつの障害である。我々が答えを欲した問いの多くはまだ充分にリサーチされておらず、最終的には答えられてきていないことに気づいた。ここでは我々の学問と同様もっと多くのリサーチが必要である。不可避的に、我々は複雑であることを知っている問題に敢えて推測を代置したり単純なアイデアを押しつけざるを得なかった。重要な問題がしばしば見過ごされ、未回答の問いにおそらくの回答を推測しなければならなかった。文字通り推論と憶測が適用された。要するに、いくつかの分野の文献に依拠するコンテキストの分析を提供するために、不可避的に一定量の単純化と推論に依拠せざるを得なかった。信頼の置けるアドバイザーの助けを借りて、我々はこれをたまたま行った。

他の研究分野から引いた素材を信用して利用する難点は我々が直面した唯一の難点ではない。もう一つの難点は、その議論に焦点を維持し続け、それがスプロールするのを阻止することの困難である。主要な困難は、「コンテキスト」という用語の意味を定義する困難である。ある見地からは、今日のアメリカ社会で実際に起こっているものが応用社会学が実践されているコンテキストである。そのタスクはレリバントなものからレリバントでないものを抽出する、つまり後者から灰色の日陰を検出することである。これを行うために、人は応用社会学が何をもたらし、応用社会学は何に関するものか明確な考えを持たねばならない。コンテキストについての我々の分析は、全国政府によって国内政策に社会学を直接使用することの結果を扱う応用社会学の側面に固有と考える主要概念の議論に限定される。我々は次の発見

<sup>3</sup> 我々は彼らのカウンセルにしばしば従っているものの、我々が提示する素材の解釈のすべての責任は我々にある。

に努めた。

これらの概念がどのように開発されたのか、なぜ開発されたのか。

政治の世界でそれらの概念はどのように働くのか。

それらの概念を政治的、イデオロギー的に魅力的と見なしたのは誰か。

それらの概念をおぞましいものと見なしたのは誰か。

上記の問いは、我々の分析をリーズナブルな範囲内にとどめるのを助ける。同時に、我々は、応用社会学の今後のリサーチは我々が無視してきたコンテキストの問題を取り上げることができることを承認する。

ここでは、我々は突き放した分析的態度を採用しようと努めた。我々は自覚的にアドボカシー（唱道）のスタンスを回避しようと努めた。我々は社会学者が我々がここで取り上げる応用、政策に関連したりサーチをどのように概念化し実行しているかを理解し、これらが彼らの努力のもたらす帰結に持つ意義を同定しようと努めたに過ぎない。政策への社会学の寄与を実質的に改善するために取られる方策を我々が提示している第6章でさえ、我々は社会学者が実際にそれをするように説得することなく何がなされうるか指摘することによってアドボカシーのスタンスを意図的に回避している。我々がこの突き放した態度を取るの、それがなければ今日の応用社会学の実践を理解したり説明することができないと信じるからである。

最後に、我々は主として公共政策に社会学的知識とリサーチ方法を適用する試みを扱うけれども、読者は応用の仕事をする専門の社会学者だけに限定されない。そのほかに、一般の社会学者、社会学者にも我々のいうことに興味や関連を見いだしてもらいたい。我々がこのようにいうのは、ここで取り組まれる問題の多くは彼らの学問の目的の核心をつくからである。社会の事柄と関連のある議論は、社会学者が彼らの正当性を主張し自らの学問への金銭的支援を要求する主要な基盤である。究極的には、本書が取り組む問題はこれらの主張の妥当性に関してである。

## 各章のアウトライン

本書は6章からなる。我々が分析する問題の導入の最初の短い3章とその分析が提示される後半の長い3章からなる。我々の課題を扱いやすくするために、我々は20世紀のあいだの国内問題に関する政策イニシアティブに社会学を適用する試みに限定するつもりである<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> 我々は問題の存在に注意を喚起するため社会学の利用に関心を払うのではなく、むしろ既に存在することが承認されている問題を取り扱うための政策とプログラムを開発実施するために、学術的知識、理論、方法を活用することに関心を払う。

第1章では、社会学が国内問題の公共政策にどれだけ役立ってきたかを尋ねる。実践家の著述をレビューすると、国内政策に社会学を利用しようとする試みが完全には成功を収めてきていないという実に曖昧な判定を見いだす。今日アメリカでの公共政策への社会学の利用を研究してきている社会学者の分析と注釈に基づけば、政治的に実行可能な政策とプログラムの定式化に関連する社会学上の問いを同定し研究するという目標は、成功を収めていないと判定される。彼らの分析は二つの主要な結論を指摘する。

- (1) いわゆる応用研究は興味深い社会的問いを照射するものの、いかなる種類の政策勧告をもほとんど生み出していない。
- (2) 勧告が提示されている少数の例でも、連邦政府の政策作成者によって、非現実的、行政では扱えない、実用的でないとしてしばしば拒絶されてきている。

上記の応用研究の状態についての明白なコンセンサスを所与とすれば、このような状況なのはなぜか。ご承知のように、この帰結を招く二つの要因が存在する。ひとつは社会学の出発点と関係し、もう一つは社会的に引き出された研究に対する政府の受容としてまとめられる政治的要因である。明らかに問題の一端は理論状態の弱さ、リサーチ方法の未熟さ、社会学の大学院の養成課程の知識の不完全さとプログラムの不十分さにある。これは社会学を政策に適用しようとする問題に対する学術志向の強い社会学によって育まれている見解である。学術志向の強い社会学の問題は第2章で扱われる。この立場は完全に誤りだというわけではないが、誤解を買うものである。というのは、それは一面的で、知識貢献の効用を決める政治・行政的要因の役割を考慮していないから。

この争点を明瞭にするために、この地点で議論を一步後戻りして「政策に志向した応用の仕事に対する社会学者の学術視点に潜在する政策、政策形成の考えが一体存在するのか」を尋ねる。社会学者が政策に関連した仕事において政治的要因が果たす役割にめったに注意を払わないのは事実だが、ここで用いられる学術的視点が政策の発想を欠いていることを意味しない。実際我々はこの視点が統治の完全理論を隠し持っていることを知っている。その理論がフローする視点と同様、この理論は述べられないし承認もされておらず、学術的関心事の周りに組み立てられている。その理論が政策について投射するイメージは、政策作成者でなく、学術的知識と方法の付される用途についての社会学者見解に合致する。社会学者は自分たちの研究の因習性にふさわしい政策イメージを發明してきている。

政策形成のこれらのイメージはどんなものか。この問いを扱うために、我々は「政策形成過程は社会学者が政策形成に寄与するためにすることとどんなに似る必要があるか。」と尋ねる。社会学は科学に基礎をおいたプランニングのシステムと呼ばれるもの最もうまく寄与できるだろう、ということを述べる。このフレーズは集合財に関心を払う政策作成者（彼は

理性に進んで耳を貸し、事実によって説得される)のイメージを喚起する。社会学者が関与するのは、論理的で段階を踏んで実施される包括的で長期的プラントプログラムの形で問題を解決し解答を表現するために何が必要かを発見することである。そこには正確で共有される手続きの言外の意味が存在する。社会学者は問題の性質を明確にすることから初めて、社会政策の目標を述べることによって進める。これらの目標は、序列だって組み立てられる。目標に到達する仕方が同定され、リーズナブルに後続する継起全体に演題が立てられる。推計コストを勘案してオプションに優先順位がつけられる。理に適った決定がなされるように政策討議集団にこの情報を束ねる手続きが存在する。アクションコースがひとたび決定されると、プログラムを評価しその結果を政策過程にフィードバックする試みがなされる。これは予期されなかった問題を是正し、プログラムの実効性全体を向上させる方法である。

これは、学術志向の応用社会学の仕事を補完する政策過程の一理想型モデルである。後続の章で我々が答えようとするいくつかの問いをそれは示唆する。第4章では、「この政策モデルはどこからやってきたか、どのようにして応用社会学の一部となったのか」を尋ねる。第5章では、「どんな条件下で政府はこの社会学に基礎をおいた政策へのプランニングアプローチを受け入れるのか、それはいつで、実際にそれはどれだけうまく働くのか」を尋ねる。第6章では、「今後、政策問題の社会学的研究を政府がもっと受け入れることを確保するために、社会学の研究者内の出発点と手続きをいかにしたら定義し直すことができるか」を尋ねる。

本書を通じて、我々は学術的視点と政策的視点を対比し、前者を批判し、後者に脚光を浴びせている。今日の応用社会学の多くは学術的視点に立っているので、政策への社会学の理論と方法の適用に関して社会学者が今日まで著してきたほとんどすべてが無駄で通用しないものとして我々が拒絶する様に受け取るかも知れない。これは正しくない。他者がこの主題に関して述べねばならなかったことを拒絶するのは我々の意図ではない。この仕事の大半は我々の議論にとってあまりにも貴重であるので、傲慢に葬り去ることはできない。我々のねらいは、他者の仕事の中に含まれる洞察の残滓を保存し、少しばかり広い枠の中に投入し直すことである。ここでさえ、我々は文献に多くの恩恵を受けている。というのは、これをしてほしいというニーズの実現はこのトピックに関して著した他者の洞察に接したおかげである。我々が批判する既存の見解を完全に無視することではなく、より大きな視点を開発するための基礎としてそれらを活用するに我々の意図があることをもう一度述べておく。

## 第2章 応用社会学の中の学術的志向

### はじめに

我々が広げようと思っているテーゼは、社会学者が、社会学が政策のためにいかに利用可能かを考えるとき、社会学者が個別の問題にこれらの利用を採択しようとするとき、社会学者がそれについてベターなジョブをどのようにするかを考えるとき、政策からでなく社会学から始める傾向があるというものである。まずガイダンスのために社会学に対して社会学者は次のように問う。

「政策形成者が取り組んでいる問題について、我々社会学者はどんな知識を持っているか」。  
「仕方を我々が知っていることを所与すれば、リサーチや研究のプログラムを通じて、これらの問題について我々は実際に何を学ぶことが期待できるか」。

「我々の理論的視点、概念、経験的考察の技法のいずれがこれらに新しい洞察を提供したり、それらのついで新しい情報を生み出すためにこれらの問題に適用されるのか」。

もちろんこれらの質問はまったく適切である。しかしながら、適用の仕事をする過程で、その質問が発せられたときに、そのプロセスがどのように働くかに重要な影響を持つ含意を持つことを理解することが重要である。学問的な問いをまず発し、政策的問いを少しも発しないか、後で発することによって、適用のための仕事をどのように行うかに関する最も基本的な考えが、我々の後続の思考とアクションを形作る構造を獲得する。そして社会学がこの構造の礎石であるがゆえに、適用のための仕事についての我々の考えの大半は、それに由来し、それを反映する。事実政策に対する関心が少しでもわき起こるなら、たいていの場合、それらはリサーチの仕事が完了した後でようやく生じるのである。その地点で、我々の研究から得られた結果と洞察は、プログラム開発と実施に対して持つかも知れない含意が呼び出される。

### 第1節 政策のために社会学を利用する

社会学者と他の人々は政策のために社会学が利用されうる仕方について広範にコメントしてきている<sup>5</sup>。社会学的知識、理論、経験的考察の方法は、次の5つの仕方で政策を形成し、実行する際に有益であると主張されている。

- (1) 社会の状態について政策作成集団を啓発する
- (2) 特定の政策の問いに関する討議に向けて、実質的なアイデアを寄与する
- (3) 個別の問題に関して政策作成者が意思決定する際に、助けとなる情報を提供する

<sup>5</sup> この問題の非常に有益な概念化として、次を参照。  
Janet A. Weiss 1976 "Using Social Science for Social Policy"

- (4) 実施されているプログラムを評価する
- (5) 社会過程としての政策に関する理解を増進する

### 1.1 啓発のために社会学を利用する

Nathan Glazer は、社会学者たちが誰をも騙さない公然たる幻想にとりつかれていると指摘している（1967：76）。学問的な知識を社会政策に関係づけようと努めることに関わっているすべての社会学者が一致しているわけではない。彼らの多くは、社会学が公的事柄において果たすことができる重要な役割は既存の政策ないし企図されている政策がたまたま基礎をおいている神話と幻想を一掃すると述べている。例えば、国民生活の領域群とりわけ教育、労働、法律、医学、公的事柄、の社会学者によるリサーチや著述を通じて、社会学の研究は信念と実在の乖離の存在を明らかにした。この文脈でしばしば引き合いに出されるのは不平等に関する社会学の研究である。それは我々の社会がすべての人々が成功の機会に等しいアクセスを持つ自由で開かれた社会であるという幻想を一掃するのを助けてきていると主張される。

まさにどんな点でそのようなリサーチが政策に寄与しているといわれるのか。人々を啓発する一つの効果は我々の社会状態についての政策作成者、政治家、一般大衆によって抱かれている態度と思考様式を変更することであると主張される。この意味で、社会学的知識は彼らが社会の状態について抱いている誤った理想から人々を目覚めさせることによって、他者が単純さしか見いださないとともに、複雑さを解きほぐすことによって、他者が単純な因果の観点から眺める事柄を皮肉を明らかにすることによって、既成の慣行の潜在的機能ないし予期せざる帰結を暴露することによって、政策作成者が社会とその主要制度の内部の働きをよりよく理解するのを助けることによって、政策に貢献するといわれる。上記の仕方や他の仕方で、社会学者は政策作成者や彼らとその支持に依存する集団を啓発するのを助けることができると感じている。それは我々の社会のリーダーが彼らが扱わねばならない社会状態の入り組んだ多面的性質を認識することを保証する。かくして、不平等に関する研究に戻るなら、機会の平等の幻想を払拭し、官吏に不平等の帰結に精通させることのいわゆる効果は、立法者と一般の人々にさもなければ存在しないマイノリティの教育その他の機会を改善するプログラムの必要の自覚を作り出したことであった。

応用社会学の主題に関して著してきた者でこの点の社会学の価値を疑ったものはほとんどいないし、多くの者は一般の啓発は社会学の重要な実用的な利用であることを疑わない。この見地の一人の忠実な提唱者は Morris Janowitz（1972）である。彼は政策に関連したリサーチに関わる社会学者の仕事は彼のいう啓発モデルによって先導されるべきであると信じてい

る。彼の説明では、「このモデルは、社会的コンテキストの重要性を仮定し、政策作成者と専門人によって利用される様々な知識タイプを開発することに焦点をおく。それが個別の回答を求めるときにも、その力点は問題解決の知的条件を作り出すことに置かれ、その目標は制度建設への貢献にある（1972：5）。」このモデルが追随されるとき、社会学の社会政策に対するインパクトは間接的なものであるが、それは潜在的にはきわめて浸透できるものである。彼は次のように書いている。「インパクトは、限定的な任務と限定的な勧告からではなく、それが引き起こそうとするより広い知的なムードから測定判定される（1972：3）。」

Janowitz は、これが社会学が社会政策において果たしうる唯一の正統な役割であるという見解を述べた唯一の人であるが、彼は啓発を社会学が公的事柄に対してなし得る貢献の一つであると見なした多くの社会科学者の一人である<sup>6</sup>。

社会学への被爆を通じての政策作成集団の啓発は、様々な形をとる。特に二つが定例的に言及される。第一の形態は、政策決定がそれに基づく仮定を明確にして批判的に検討するために社会学を使用することを伴うものである。その主題に関する Lane の論文は、この見解を例示する。「社会科学の政策分析は我々の愛顧する仮定の一部の検討と時によっては拒絶を強制すべきである（1972：83）。」Merton/Devereux はこれに呼応するかのよう、「社会的リサーチの機能は、既に知られている問題を軽減するのに役立つ情報を提供するだけでなく、（未知の）問題を知らせることもある」と述べている（1964：21）。第二の形態は、政策作成者が問題を取り扱う択一的やり方を挙げるのを助けるために学問的知識を利用することである。政策についての Etzioni の定義は、この見解を例証する。彼が述べるところでは、「それは択一的アプローチを地図に示し、様々なプログラムの意図、結果、費用の潜在的違いを特定することに関心を払う営為である（1971：8）。」<sup>7</sup>

<sup>6</sup> Herbert Gans は、社会学の政策研究者は、彼の社会理解を引きながら、社会過程と社会過程での故意の介入の効果は政策設計者に援助を与える貴重な貢献を行うことができると述べている（1971：19）。Herbert Kelman は、社会システム、文化システムの働きと変化を支配する基礎公準を探求する必要性について語る時、社会科学のこの利用について語っている（1972：198）。Elizabeth Crawford は、社会学他の社会科学は社会において啓発機能を遂行する、つまり一般的には社会の思考過程、個別には政策の基底にある価値、基本概念を現出させるのに適していると述べている（1971：9）。

政策科学の分野の次の人々は、社会科学が社会政策にできる貢献として啓発を認めている。Klaus Lompe は、社会科学が政策に行わねばならない最も基本的な貢献は、一般的文化の水準と社会的宇宙の理解を上げることにあると信じている（1968：164）。Yahezkel Dror は、政策形成者に彼らの仕事の社会的側面に敏感にさせることによって、一般教育的貢献を含む政策形成に多くの貢献をしていると述べている（1971b：147）。最後に、『科学国家』という著書の中で、Donald Price は、科学の目的は、彼らが思案する新しい問いを提起することによって、政策形成者をより広く教育することにおかれるべきと述べている（1965：107）。

<sup>7</sup> 他者もまた社会学のこの利用に言及している。Robert Lane は、次のように書いている。「あるグループないし目的の提唱者に耳を貸すことによって統治はしばしば進むがゆえに、彼が応用社会学がその一部であると考えた政策分析に固有の代替的、競合的利点におく引き続きの力点は有用な矯正物である（1972：80）。」Merton/Lerner は、「社会学者が新しいタイプの達成可能な目標と設定された目標を実現するのにより効果的な手段に敏感にさせるために政策リサーチを発議すると述べる」ときそ



応用社会学，政策に関連した社会学に関する膨大な文献から選択的に引かれた上記の引用は，政策形成者を教育するため，複雑さと代替肢への自覚を高めるため，政策に関連した国民生活の諸側面の働きをもっと理解するようにかれらを啓発するために，学問的知識を利用することに関する社会学者の基本的趣旨を伝えている。

Carol Weiss は，社会学がこの様式でその効果を発揮しうる仕方を実にうまく把握している。「迂回的ルートを通じて，時間が経つにつれて，それは情報通の公衆の言説に入り込む。それは，知的な雑誌言論誌，メディアカバー区域，大学学部専門学校の教育を通じて，専門職団体，エリートクラブの後援する講習会の中で表紙をつける。そのうち，リサーチがパブリックの争点に新しい形式，形，方向を与えるにつれて，それは世論に影響を發揮することができる。かつて承認された仮定が挑戦され，かつては遠ざけられた結論が馴染みになる。実施しながら，リサーチは受け入れられるアイデアの範囲を拡げる（1976b：228）<sup>8</sup>。」

正確に提示された社会学的知識が社会の状態を力強く照射することができることには誰も異議を挟まない，それゆえそれに曝されるものをもっと啓発されると信じることは故のないことではない。これに関しては私はなんの喧嘩も持たない，しかしながら，我々は社会学のいわれている利用が社会学者が社会の状態に関して自分が知っていると感じているからすべて派生する，ことを指摘したい。限定的には，それは啓発された人物が彼らの新たに発見された知恵で何ができるか，政策に関する決定にたどり着く際に彼らがそれをいかに利用することができるのかという重要問題に取り組むことを無視する。ここでの我々の要点は，啓発が社会学の利用の結果では決してなく，むしろ社会学のこの利用法は，政策がどのように作られるかに関して考察することによってよりも，政策決定を必要とする我々の社会の中の生活状態について社会学者が知っている（知っていない）と感じているものによって示唆されるのである。社会学のこの利用が政策の関心事でなく，学問の関心事を反映すると我々が述べるのはこのためである。以下で見るように，同じことは社会学の他の指摘される利用にも当てはまる。

## 1.2 実質的なアイデアを寄与する

2 番目に提案された社会学の利用は 1 に比べて限定的である。それは望まない社会状態を

---

のことをいっている（1951：303）。代替政策を示すために社会学を利用することは，C. West Churchman の論文にも登場する。彼はこれを政策における科学的知識の主要な利用の一つとして引用している（1967：29）。Klaus Lompe は，応用リサーチに従事する社会学者による決定主義的モデルの利用を分析するとき，そのことを述べている。このモデルのねらいは，いくつかの行為の代替コースを指摘することであると述べている（1968：163）。Austin Ranney は，社会科学者の専門職としての知識と技能は，政策形成者が競合する政策提案を同定し，比較し，評価するのに役立つであろう，と書いている（1968：18）。

<sup>8</sup> Janet Weiss（1976：236-237），Pio D. Uliassi（1976：241）も参照。

解決したり緩和するのを助けるソーシャル・アクションの限定されたプログラムを考案するのを支援するために、社会学の理論、概念、視点から得られたアイデアや洞察の利用である。あるもの (Janowitz1972) によって「社会工学」と呼ばれるこれは、最適な学習環境、都市場面を設計する、リハビリ施設との中で暮らす人々の福祉に伝導力のある制度的プログラムを考案する、既存の社会的サービス・プログラムの代替肢を設計するのを助けるという目的に社会学を利用するものである。ここでは、社会学者は政策作成者が社会政策の開発と実施と関連した基本的問題や技術的問題を解決するのを助けるため、社会調査の知識と技法群に依拠するものとして描かれる。

政策のために社会学の様々な種類の利用が試みられる範囲に関して正確なデータは手に入らないものの、今日応用社会学と見なされているものの多くは、この仕方で社会学の知識を利用する試みを含んでいる<sup>9</sup>。きつと応用社会学を著す著者の大半はそれに言及する。そのひとり、Herbert Kelman は、社会学の最も重要な利用の一つは、新しい政策とアクションプログラムの実施を促進するために設計された調査であると述べている (1972: 198)。もうひとり、Elizabeth Crawford は、テクニカルな問題解決に関与するために社会学を広範に利用すると述べている (1971: 9)。3番目、Herbert Gans は、政策に志向した社会学の主要目的として、政策設計者に特定の実質的な政策の分野に関する詳細なデータを提供する目的でなされた特定のリサーチを提供することを挙げている (1971: 22)。彼はさらに、そのようなリサーチは、政策設計者が扱わねばならない具体的な集団、組織、制度を可能なら分析できる高度に限定的な理論と概念に基づくべきだと述べている (1971: 4)。最後のもの、Miller/Reissman は、専門職者の最も重要な貢献は社会変動の問題に彼のスキル (分析、リサーチ、概念化) の適用にあると書くとき、同じ見解を言わんとしている (1968: 72)<sup>10</sup>。

社会学がこんな風に利用されることに全員が必ずしも同意するわけではない。例えば、著書『最大限起こりうる誤解』のなかで、Daniel Moynihan は、社会学をこんな風に利用する試みは、彼が社会学の最大弱点と見なすものに基づいている。彼はあるインプットを制御することによって、マス行動を引き起こす可能性を提起する個人ないし社会行動論を提供するよう求められたとき、そのような知識は今は一切存在せず、証拠は断片的で、矛盾し、不完全であるから、社会科学は最悪、最弱の状態にあると信じている (1969: 191)。Morris

<sup>9</sup> この種の社会学利用の例として、Lazarsfeld et al.によって編集された『社会学の利用 (1967)』と Demerath et al.によって編集された『社会政策と社会学 (1975)』がある。

<sup>10</sup> 5つめとして次も参照。Dror は、経験的ケーススタディを社会学者が政策において社会学を利用することに取りうる二つの主要なアプローチの一つと見なしている。他の一つは抽象的分析である。彼は、経験的ケーススタディのねらいは、特定の問題を扱うために敏感な政策・プログラムに到達するために、社会学の理論的方法論的知識を利用することにあると述べている (1971a: 141)。このようにして、社会学は、政策形成者が手順の大きな指針を選択するのを助け、具体的に詳細な争点に適用できる限定的な英知とアイデアを提供することによって政策に貢献できる (1971a: 147)。

Janowitz もまたこのアプローチを別な理由からであるが、通用しないものとして退けている。彼は、社会学は社会科学のほんの一つに過ぎず、今度は社会科学は政策決定を行うために要求される知識のほんの一つのタイプに過ぎないから、政策営為が基づくことができる確定的な回答を与えることができないと述べている (1972: 4)。それゆえ、彼は自分だけが政策に何らかの決定的なインパクトを持つことができると信じるのは社会学者の傲慢であると感じている。その上、彼は社会学は政策作成者が社会政策を設計するのを助けるのに必要な知識や情報を持ち合わせていない、永遠に持ち合わせることはないだろうと思っている (1972: 3)<sup>11</sup>。

上記の見解にも拘わらず、社会学における支配的な立場は、社会学は政策に実質的寄与をしている、というものである。社会学的知識が政策過程に滋養として取り入れられる正確な仕方、この活動で役立つ社会学の知識群はもちろん問題ごとに異なるが、そのような営為のコアには、政策形成過程は社会学的アイデアと方法をその中に取り込むことによって促進されうるという想定がある。この点に関しては、合意はかなり広がっている。

この見解は特定の政策問題に社会学的アイデアと方法を直接関わらせる努力を引き起こすという意味で、一番目のものより政策により密着した社会学の利用である。だが、一番目のものと同様、それはまた性質上主として学術的である関心を反映している。我々がこのように述べるのは、利用形態が政策作成者が政策を作成するために知る必要があることによって以上に、社会学者が問題について知っていると感じていることによって指摘されているからである。つまり、今まで、社会学者は我々の社会状態について十分に研究してきているので、他者によって広く知られていない事柄について知っていると言胸を張って主張できる。それゆえ、これらの状態が政策討議のターゲットとなる時、社会学者がこの特別の知識が政策決定を行う責任あるものの注目を引きたいと思う当然の傾向がある。実際には政策決定者にまで彼らの思考のためにこの知識が届くことはほとんどない。哀しいことに、その知識が政策にどのように利用されるか気づくことを政策作成者にゆだねている。Carol Weiss が言うように、研究者はそれ以外にどこかで、自分たちの研究の潜在的な利用が存在すると思こんでいる (1976b: 226)。我々の見解は、社会学の利用の背後の主たる芽は、一学問として我々は社会状態についてある事柄を知っているという認識に由来する、というものである。政策とは何か、どのようになされるか、どんな仕方でパッケージされたどんな種類の情報が、政

<sup>11</sup> 社会学の利用に関して他の否定的意見がある。Coleman は、社会政策における社会学の目標は、活動の領域に関する理論を一層展開することではなく、リサーチを行うことである (1972: 1)。社会心理学者 Cook は、教育における社会科学の利用について書きながら、教育の刷新は発達についての社会心理学理論を取り出して、学校に適用することはできない。我々のほとんど十分にテストしていないフォーマル理論の抽象的優雅さと複雑なセッティングの中で変革を実施する具体的な問題を積載した実在にあまりにギャップがありすぎる (1975: 1-2 of ch. III)。

策目的に潜在的に順応しうるか、にかんする特別に深い認識にはそれは派生しない。

### 1.3 情報の提供

第3の社会学の利用は、情報の提供である。これは第2の利用と類似しているの、簡単に取り上げる。それは政策が作成されねばならない問題と状態について情報を集めるために、社会学者がリサーチで利用する経験的考察の技法の利用を伴うものである。このポイントは十分に明白である。それは、政策作成者に個別の状態に関して基礎的な記述情報とデータを提供することである。

社会学のこの利用はしばしば引かれる。その代表的な主唱者 James Coleman は『社会科学における政策調査』(1972)で「社会学の主たる貢献は経験的調査法の利用にある」「政策のなかの社会学の目標はソーシャル・アクションに情報ベースを与えることである(1972: 2)」と述べている。政府における応用社会科学についての Elizabeth Crawford によるレビューは、社会学の利用が今日広く普及しているだけでなく、社会のデータ収集技法の提供も社会学によって果たされている重要な伝統的役割である(1971: 9)。」Janowitz もまた社会工学の提唱者によって推奨されている社会学の主要な利用の一つとして、記述データの収集と趨勢の図示を引いている(1972: 4)<sup>12</sup>。

近年社会学のこの利用の広く公開されている事例は、アメリカ社会の様々な状態に関するデータ収集を制度化し、これらを年に一回『社会指標』誌として公刊する試みである。ここでのねらいは、人口増加、健康、公共の安全、教育、雇用、所得、住宅、余暇等のアメリカ人の生活の重要な側面の測定を与えることにある(Horowitz/ Katz 1975: 32)。

我々が言及してきた他の利用と同じく、この利用は、学問としての社会学が何をできるかについての検討から派生している。我々の長い経験的伝統のゆえに、社会学者が大半の人より正確で効率的に情報の集め方を知っているという事実であり、この事実は、政策のために社会学を一つの可能な利用として指摘するように導いた。我々はこれを社会学的スキルの政策への潜在的に有用な適用であることを疑わない。我々が行った指摘は、それを勧告する際に、我々社会学者は、我々の調査によって彼らに提供された情報で政策作成集団が何を行う

<sup>12</sup> 他のもも社会学のこの利用にコメントしてきている。社会学と社会政策に関する論文の中で、Merton/Lerner は、言及されたりサーチの3機能の二つは、性質上情報に関係するのである。政策作成者の視点からは、リサーチの機能は、(a) 説得、客観的データが自分の立場を支持する助けとして求められる。(b) 政策作成者がわかりやすいアクションのための十分な情報を持たないと考えるために、リサーチを要求するとき(1951: 302)。いずれかのケースで、彼らは、社会調査を行う従来の方法が政策形成過程において有益な経験的データを収集するために利用されることを勧告している。Howard Freeman は、応用調査のコアは行動科学の技法手続きと概念的発想であったしこれからもそうであろう(1963: 144)」と述べている。Yehezkel Dror は、具体的に詳述された 이슈ーに適用される特定の聡明さを提供することによって、社会学者が社会政策に対して行うことができる巧みな貢献について語っている(1971a: 147)。

かの問いに非常にわずかの注意しか払わないことによって、政策関心事に鈍感という裏切りをしてきている。

我々の指摘は、連邦政府のエグゼクティブ間での知識利用に関する Caplan のリサーチによって例証される。彼は回答者の 10 人中 9 人は、社会的ウェルビーイングの尺度はいいアイデアであり、それは社会科学が政策の定式化に重要な貢献をした主要な機会であったことに同意した (1976 : 231-232) が、社会指標データがどんな利用がされるか説明を求めると、回答はまちまちでコード化できないほど曖昧であった。彼は書いている。「社会指標調査はおそらくもっと効率的に進められるだろう。もしデータ収集がそのような指標によってどんな目的が奉仕されているかという考えに対するこれまでの合意に基づいているなら、政策への利用は大いに増加しよう。しかし、その代わりに、我々は、このプラグマテックだが目的を欠いた努力から、何がよい生活で責任ある政府がそれを達成するためにどうにか助けしてくれるだろうという発想が生まれることを期待してずさんなデータ収集をしばしば目にする (1976 : 232)。」

#### 1.4 評価するために社会学的方法を利用する

社会政策における社会学の利用の第 4 のものは、ソーシャル・アクションプログラムを評価するために社会学的研究法を用いるものである。Daniel Moynihan はこのアイデアの強い提唱者である。「公共的事柄における社会科学の役割は社会政策の定式化になく、社会政策結果の測定にある。……必要なすべて、社会科学が提供できるすべては、何と何が関連するかに関するラフな理解の集合（絶えず洗練されるのが望ましいが）である (1969 : 193-194)。」Herbert Kelman は、社会政策に対する社会学の主要な貢献の一つは、新しい政策とアクション・プログラムの効果と含意を査定するために設計されたりサーチであると信じている (1972 : 198)。彼はそのようなりサーチが取りうる二つの主要な形態（ソーシャル・アクションの特定のプログラムに関する従来の評価リサーチ、政策ないしプログラムのより長期的ないし分析的な査定）を区別している (1972 : 198)。Harold Orlans は、評価を社会学が社会政策に行いうるいくつかの貢献の一つとして引き、社会調査は評価と連邦政府のプログラムの改善に不可欠である」と結論している (1968 : 152)<sup>13</sup>。

政策分析における社会調査の利用は今まで、非常に一般的であったので、専門化した全領域が評価調査を行うための方法と手続きを開発してきた。この主題に関する著作も書かれて

<sup>13</sup> 評価を社会政策における社会学の適切な利用とみる他の人々に、Charles Glock (1961 : 3), Howard Freeman (1963 : 144), Yahezkel Dror (1971a : 147), Klaus Lompe (1968 : 163)。

きている<sup>14</sup>。それは、児童向けのテレビショー・セサミ・ストリート<sup>15</sup>とニュージャージー・ペンシルバニア州の負の所得税実験<sup>16</sup>の二つのプロジェクトのスポンサーをしたラッセル・セージ財団でプログラム全体の焦点であった。評価リサーチは、教育、更正、ソーシャル・サービス、統治、医学、法、公衆衛生、法の執行などの様々な領域でルーチンとなった。

最近まで、大半の評価調査は一つのタイプであった。プログラム活動が提案され、実行されてきた。それらが実行されてしばらく後によく、社会学者は望んだ結果を産出するプログラム活動の有効性を査定しようと努める。近年になって、それらが全国ないし地区単位で広く採用される前に、提案されている社会政策ないしソーシャル・アクション・コースを評価するために、この連鎖を修正することに関心が集まってきた（Campbell 1969, 1972）。このリサーチは社会実験の形態を取っている。目立った事例は、ニュージャージー州、ペンシルバニア州の負の所得税研究（Watts 1969: 463-472）、インディアナ州のガリー、ワシントン州のシアトルの負の所得税研究（Horowitz/Katz 149-142）である。他の実験は、保健、住宅、保育の領域で全国プログラムのコストを推計するためと、プログラムが広く実施されるかあるいは公式に制度化される前に、問題点を発見したり、是正するために提案された。

社会学的知識の他の利用の大半と同様、ここでもまた評価リサーチが政策作成集団に役立つのに十分に迅速で正確にソーシャルプログラムに関する情報を生み出すことができる。だがそのようなりサーチのねらいは、それらが解決するために設置された問題に持つインパクトを査定することによって、進行中のソーシャルプログラムの有効性を改善するのを助けることにある。

評価リサーチは、我々がレビューしてきた社会学の他の利用タイプよりも、プログラム上政策に関連した活動に直接的な結びつきがある。それゆえ、この特定の社会学の利用が他の利用タイプと同じ批判を受けると述べるのは不正確である。しかしながら、この印象はミスリーディングである。よく観察すると、この社会学の利用は、幾分異なった種類にも拘わらず、社会学的視点にルーツを持つように思われる。我々が論じてきた他の利用タイプともそれは結びつきがあるので、その社会学との結びつきは、ユニークなものではない、ことを付言する。それらは他の事例におけるよりも、この事例において明白であるに過ぎない。評価リサーチの学問的な源泉は、次である。つまり評価リサーチの結果が少しでも役立つには、政策形成者が特定の仕方でも政策プログラムを引き出し実行することが肝要である。第3章で明

<sup>14</sup> C. Weiss 1972 *Evaluation Research: Methods of Assessing Program Effectiveness*. Englewood, Rossi, P/H. Freeman/S. Wright 1972 *Evaluation: A Systematic Approach*. Sage publications.

<sup>15</sup> Cook, Thomas D. et al. *Sesame Street Revisited: A Case Study in Evaluation Research*. Russell Sage Foundation.

<sup>16</sup> Rossi, Richard H./Katherline Lyall 1976 *Reforming Public Welfare: A Critique of Negative Income Tax Experiment*. Russell Sage Foundation.

らかになるように、評価が有弊な活動であるのに要求される政策形成の方法は、政治の意思決定の実世界にではなく社会学に由来する。

### 1.5 政策研究に社会学を利用する

これまで描かれてきた社会学の各々の利用に課せられた意図は、社会政策を定式化し、実施し、評価し修正することであった。これらは、有力なものではあるが、社会学の知識が付される利用の唯一のものではなかった。多くのものは社会政策を理解し、改善し、完成するためにも社会学は利用されると信じている。ここでの目標は、社会学的知識をある特定の実質的な政策争点に関係づけることよりも、社会過程としての政策形成を理解するために社会学の方法と知識を利用することである。利用が志向において主として学問的である。というのは、今まで述べてきた各々のアプローチで、社会政策は独立変数で、社会学的知識やリサーチ方法は従属変数であったから。この最後では、対照的に社会政策が従属変数だから (Lane 1972 : 71-78, Ranney 1968 : 14)。目標は、社会政策の理論の開発を許す社会政策の理解を獲得することにある。これと並んで、政策作成者は、彼らが従事する活動を支配するプロセスを完成することができるだろうが、まったく偶然ではなく、社会学者はこの過程に彼らの知識を適用させる手続き開発することができるだろう。

この社会学の利用は、Herbert Gans の著作の中に例示される。彼は応用社会学の基本的ねらいを社会政策の性質、様々な制度的コンテクストの中での政策設計者の役割、政策と進行中の社会的・政治的過程の関係、その過程の中での介入の性質と問題点のような、一般的争点を取り扱うリサーチの営みと見なしている (1971 : 29-30)。独立のコンテクスト、従属のコンテクスト、介入のコンテクストの政策類型の重要な違いを理解する意味で政策の理論を展開する必要を強調する (1972 : 17) とき、コールマンも同じことを言っている。

他の社会学者は社会政策に関する理論を開発することの重要性に気づいているものの、このトピックの議論の大半は政策科学の文献に登場する。政策科学の受け入れられた定義は政策形成の理解に焦点を置く。例えば、Yehezkel Dror は政策科学の目的を政策形成の向上と描いている (1971b : 3)。政策科学の近代の創設者と一般的に認められている Harold Lasswell の語を借りれば、「政策科学は公的および市民秩序についての知識と決定過程に関心を払う (1971 : vii)。」Lewis Froman もまた政策科学について次の描写を与えている。「政策科学は、公共政策の違いに関する理論的に興味深い命題とこれらの違いに関連する変数を開発するために、どんな個々の事柄がどんな個々の政策と結びついているかを見つける努力である (1967 : 95)。」

かくして、政策科学のねらいは、政策形成を理解するために社会学を用具的に利用する

ことと調和する。大半の政策科学者と多くの社会学者はこれらの目的を実現するための不可欠な出発点——政策タイプを区別するためのカテゴリースキームの開発——に同意する。Lewis Froman は説明する。

我々が複数の政策領域を包摂する公共政策の理論を開発しようとするなら、必要なのは、ある政策を他の政策から区別する一組のカテゴリーである。政策理論リサーチで答えられる主要な問いは「ある政策が他の現象とどのように関連しているかに関して我々が何かを述べることができるように、多様な種類の政策が多様な種類の環境変数と関連があるか」である（1967: 95）。

Froman が要求した類の多くの多様なカテゴリースキームは社会政策を分類するために提案されてきている<sup>17</sup>。上記の分類スキームは、政策過程が当該の政策タイプに応じて推移するという前提に立って提案されている。上記のカテゴリー化スキームの各々の有用性が何であれ、おのおの目標はそれを完遂するために政策過程をもっとよく理解することにある。指導的な政策科学者 Dror は彼が抽象分析と呼ぶ理解と完遂の過程を次のように要約している。

それは、一方で組織理論と決定科学に基づいて、他方で社会学的知識の分析に基づいて政策形成における社会学者の活用についての選好されるモデルの演繹的構築、好まれるモデルの観点からの政策作成機関の実際状況の評価、選好可能性の近似性を阻害する主たる障害の同定、好まれるモデルに向けて現実を動かすためにこれらの障害を克服することが意図された提案を含む（1971a: 141）。

その目標は、社会学のスキル、知識、視点を利用することによって政策過程そのもののテクニカルな側面を向上させることである。ねらいは政策形成の完遂であって、実質的な政策の開発にはない。

## 1.6 小括

我々がたった今引いた社会学の5つの利用の基底にあるひとつの考えは、社会学者が社会学的技能の提供に責任があり、政策形成者が政策形成に責任があるだろうというものであ

<sup>17</sup> Froman は伝統的な分類スキームの中で用いられる基準のいくつかをリストしている。内容的なもの（労働、教育）、制度的なもの（議会政策、第三世界政策）、ターゲット（農民、労働者階級、黒人）、時間（戦前、恐慌以後）、イデオロギー（資本家、リベラリスト）、価値（善、悪、危険）、支持（同意、不一致）、政府水準（全国、ローカル）（1968: 48）。社会学者によって提案された他の分類スキームには、スタイルとポジションの区別（Berelson et al. 1954: 199）、政治過程を区分する基礎としての物質的満足と象徴的満足の区別（Edelman 1960: 695）、軍事的意思決定の戦略的争点と構造的争点の区別（Huntington 1961: 4-6）、仲間と稼働システムと政策システムに基づく社会政策のカテゴリー化（Freeman 1963: 145）がある。Theodore Lowi は分配政策と規制政策と再分配政策の3分類を提案した。「分配争点はものを譲渡するそれであり、……規制争点は利用できる選択肢を制限するそれであり、……再分配争点は人々のある集団から取り上げ別の集団に与えるそれである（1964: 678）」。Lewis Froman はエリア都市政策と隔離的都市政策の区分、つまり異なった時代の人々に影響する政策と対照的な、国全体、圏域全体に影響する政策を提案している（1967）。



る。しかしすべての社会学者がこの分業を受け入れるわけではない。一部の社会学者は実質的政策問題に学術的知識を適用する試みは、政策作成者が社会学的視点によって付加されるものを理解できないか、理解できても無視するので失敗が宿命づけられていると信じている。社会政策により大きなインパクトを獲得するため、彼らは政策形成機構のコントロールを獲得するために社会学者自身が政策ポジションに直接移ることを提案している。意思決定ポジションにいる社会学者は学術的知識と立案されたソーシャルアクションのプログラム制定の責任を組み合わせるだろう。そのような経験は彼らが政策を開発し実施する問題をますます理解するのを助け、政策形成における社会学の利用をもっと現実的に称賛するだろう。

このアプローチの多数のバリエーションが提案されてきている。Herbert Kelman によって提唱されたものは、社会学者がアクションプログラムの開発と実施に直接参加するアクションリサーチの努力を増やすことを要求した(1972: 198)。たった今述べた内容的利用のケースでは、政策作成者や行政官が実際に政策を立案しイニシアティブを取る。もちろんこれはまさに Myrdal (1968) が推奨したアプローチである。

社会学を利用するこのアクションアプローチのもっとラデカルな変種は Albin Gouldner によって提案されている。Gouldner はラデカル社会学の役割を古い秩序を転覆するのを助けることにあると定義している。彼は政策目的に学術的知識と方法のこれまでの利用——啓発、評価、情報面の寄与、内容面の寄与——を、社会学者と現在の福祉・戦争国家の共同の事例として厳しく批判する(1970: vii)。彼は社会学者がリベラル・エスタブリッシュメントの片棒を担いでいると非難する。そのような社会学者を彼は、貧者と労働者階級を国家装置と民主党の政治マシンにつなぐ働きをする情報と理論を生産するリベラル・テクノロジーと呼んでいる(1970: 500)。

これらは社会学者が社会学が政策のために利用されると信じている主要な仕方の一部である。これらのうちのどれが適切なあるいは可能な社会学の利用か、それらを引き起こすのに社会学者がどんな役割を果たすべきかに関しては、明らかに意見の違いが存在する。だが、この議論の基底にあるのは、政策の中の社会学の位置を政策が何を要求するかでなく、社会学者が知っているもののできるものの観点から定義する強い傾向である。社会学から始まるこの傾向は、政策に志向した仕事のもう一つの側面、つまり応用リサーチを実施する際に従う手続きを社会学者が扱う際にも明白である。

## 第2節 応用的、政策関連のリサーチを行うための手続き

社会学者は政府のために彼らが行う国内問題に関する政策リサーチをどのように行ってい

るか。生憎なことに、この問いへの明確な回答は応用社会学の文献にはめったに提示されない。従って、このトピックを分析するために、応用のためになされた社会学的なリサーチを研究することから我々が得た印象に依拠せざるを得ない。そのような印象は様々なトピック<sup>18</sup>に関する議論から拾い集めた。時には、社会学者が政策関連リサーチをどのように考え実施しているかについてのやや明確な印象が得られることがある。また時には、人が受ける印象は曖昧で不正確なことがある。このため、我々はそれに関する結論的な言明はほとんど不可能であることに気づきながら、試論的にこのトピックの議論にアプローチしなければならない。

応用の仕事の中で政府のために政策に関連した仕事をする社会学者によって採用される実際のリサーチスタイルは、ルーチンの学術的リサーチを行う人々によって従われるリサーチスタイルと同じくらい多様である<sup>19</sup>。社会学への異なった問題意識は異なったりリサーチスタイル、異なった手続き、異なった聴衆を引き起こす。これらの違いは重要なものの、それらを貫くものはリサーチの価値の判定基準、採用された手続きの価値を評価する基準の一定の公分母である。

社会学者にそのような政策に関係したリサーチに関わるように導いた経路は多数のものがある。社会学者は多くの理由で応用領域でリサーチを行うことに魅力を感じる。それらのなかには、個人的な関心、社会問題を制圧することへの関心、キャリアの機会、金銭のためというものがある。研究する問題がいったん決まると、その後辿られる手続きは基本的には類似している。仮説を開発しそれを検証するためのリサーチ設計するという任務、質問をたて、データを処理し、分析することに関わる任務はほとんど必ず学術的な基準、関心、訓練、考察手続きによって先導されている。かくして、リサーチのための問いが設定されると、人はリサーチの具体的なプランを立てる際に、指針を求めて過去のリサーチと理論の文献に目を向ける。社会学の理論、概念、リサーチ方法がいわば関心事の争点に向けられる。もちろん政策的考慮が念頭に置かれるが、通常はこれは政策リサーチャーがまず研究することを決めた問いが何らかの仕方で政策問題と関係していることを意味するに過ぎない。通常、リサーチ知見の政策関連性の問いに直接取り組むのは、研究がなされ、結果が編纂された後である。かくして実際には、多くの研究を政策に関係したとか応用的とブランド化するものは、リサーチへのアプローチではなく、フィールドと研究問題の選択である。政府の政策のために社会

<sup>18</sup> 応用の仕事のための社会学者の訓練、政策関連リサーチを行う場所の選定、このリサーチを実施する社会学者の選定、良きあるいは悪しき政策リサーチの事例分析。

<sup>19</sup> Kathleen Archibald は、応用的で政策に関連した社会科学リサーチへの3つの基本的なアプローチを同定している。学術的、臨床的、戦略的。3つのスタイル、各々の多様な下位スタイルに関しては、Archibald (1970) 参照。

学者によってなされたりサーチの多くは、実際には、応用的な仕事の分野で実際の問題に対する従来通りの社会的リサーチと変わらないものである。このリサーチの目的は、これらの領域の問題と実践の社会的側面に関する知識を増進することにある。もし社会学者や他の社会学者がその問題についての基礎的社会的理解を増進ことに成功すれば、官吏が問題に取り組むのにもっと良い政策を考案するためにこの理解を使用することができると期待される。

キャロル・ワイスが次のように述べているのは正しい。

大学の研究者は彼らの学問の状態とその理論的發展から引き出された根拠に基づいて自分自身の問題を選ぶのが常である。彼らは自分が知っていて気に入っている方法に合致する問題を選ぶ傾向がある。彼らは、彼らの同僚の称賛を浴びる、著名な雑誌に掲載される記録を残すために、リサーチを行うのに時間を割きたがる (C.Weiss 1976a : 224)。この研究スタイルに、Archibald は学術志向の応用社会科学という名称を与えている。それについての彼女の描写は多くの点で我々のものとパラレルである。

そのようなエキスパートは彼の応用関心の観点から自分の問題領域を選び、仮説や設計についての彼の選択は、実世界の問題の需要によってよりも彼の学問的関心によって決定される。……彼はある特定の政策問題を直接わしづかみしないしそれを自分の中心的焦点とはしない (1970 : 8)。

Archibald は、社会学者は政策形成に本当は貢献したいのかも知れないが、彼は政策作成者を幾人かの聴衆の一人としてしか見ていない。学術志向の社会学者は依然として学界の同僚を主要な聴衆と見なしている (1970 : 11)。

彼は社会学者は自分の知見を頒布するなんらかの責任があると感じている。それが各社会学者の責任の一端であるか、社会科学共同体全体の一部がこの責任を引き受けるべきのいずれか。……彼が集めたデータ、彼のリサーチ設計や方法、というのは、彼はこれらを自分の学問の基準に頼るから (1970 : 12)。

Archibald は、学術志向の社会学者は自分のリサーチを政策と関連する彼の関心事と明確に区別すると述べる。

リサーチをしているときには、彼の問題意識は純粋な科学者のそれである。リサーチが完了すると、彼の政策関心が再び首をもたげ、彼の知見を意思決定者に伝達することに関心を持つようになる。彼は、自分の知見はレリバントであるというのではなく、レリバントなものにされうると信じ込み、問題は知見を政策作成者にどうしたら最善に伝えられるのかを解決することであると信じている (1970 : 12)。

かくして、学問のエキスパートはクライアントが誰であるか、このクライアントに材料をど

うやって手に入れさせるか、クライアントに対するエキスパートの影響については曖昧である傾向がある。

社会学における応用的で政策に関連した仕事へのこの学問タイプの問題意識の嗜好は、社会学者が訓練される仕方によって大いに強化されている。彼らのほとんどが大学に基盤をおいた学術的社会科学系の学部で養成されていること、彼らの教育が学問的争点の研究に大いに顔を向けていることに気づくのに、今日のアメリカ社会学者の教育と訓練についての詳細な研究は一切必要ない。もちろん、社会学におけるアメリカの大学院教育の基本的なねらいは、学識、教授、リサーチに関わるキャリアを通じて、基礎的な学問的知識を増進し、人間社会の理解を増進する職務のために、学者を訓練することにあった。すべての社会学院生がもっぱら伝統的なその学問領域で仕事をすることは想定されていないものの、結局一部の大学院部門は院生に直接の社会的関わりを持つ問題に関わるように鼓舞奨励しているが、彼らの訓練の多くは、院生に有能な学術的仕事をするのに必要なスキルを提供することが意図されている。理想的には大学院のプログラムが効果的であれば、この訓練は院生が学界で教師と研究職の準備をしたり、学術雑誌の掲載に適した学識を身につけるのに備えるのを助けるであろう。彼が将来学会に加入し、主要な準拠集団として自分の分野の他者を念頭に置くであろうと想定されている。

もちろん、政策に関連したりリサーチが鼓舞される院生の養成プログラムも存在する。だが、ここですら、そのような仕事の価値は学問の卓越性という従来の基準によって判定される。Gouldner は、この点で支配的なテーマを表明した。それは、政策リサーチをするために選出されたものは、それを評価し利用する政策作成者という聴衆に認められる前に、その学術的価値の観点からそれを検討する専門的学問志向的同僚という聴衆にまず認められねばならないということである（1957：93）。Howard Freeman も同意見である。「社会リサーチ分野によって採用される姿勢は、基礎的応用的を問わず、研究の価値を査定する際に主に考慮するのは、理論的レリバンスと方法論的有能さである（1963：145）。」

要約すれば、今日行われている大半の応用リサーチ研究は、学術的な社会学リサーチの方法と手続きを用いている。それらのねらいは、その学問の学術的翼から借用したりリサーチ方法を通じて限定された政策領域内の問題の社会的側面に関する基礎知識を増進することにある。実際に、このリサーチの多くは政策を変更するために活動できる人よりも他の学界人の視線が向けられている。その上、政策の審議への限定された知見のインパクトについての関心は研究者の心では二次的なものである。我々が応用的で政策に関係した仕事の実施における学問的焦点を主張するのは、この理由である。

特別に強調するに値するこのトピックの別の側面が存在する。我々が描いてきた手続きは、

社会学者と政策作成者の分業と、両者が政策形成のプロセス全体にどのように寄与するだろうかに関する仮定を含んでいる。この考えに従えば、社会学者は政策作成者が社会状態の厄介を緩和したり規制するプログラムを考案するために利用する科学的理解と技術的専門性を与える。しかし、この分業は単一の仮定の真実性にかかっている。その仮定は、社会や制度に適用された社会学の理論と方法は、計画された社会変革の長いレンジのプログラムを開発するための効果的な基礎となりうる情報と知識をもたらすであろう、というものである。要するに、それらは政策に対する社会学のレリバンスを高めるための多くの提案が基づくのとまったく同じ仮定に基づいている。

社会学者は必ずしもこの仮定を注意深く検討してきていない。支配的な見解の公正なサマリーは、研究者が政策に関連したリサーチの若干の特別の問題に注目すれば、厳密な学問的基準に従って彼のリサーチを行い、自分の仕事が政策に関連すると期待する、というものである。しかし、社会問題に学問的理論やリサーチ方法を適用することから生じる類の知識が社会政策を定式化するための適切な基礎であるという仮定が立てられなければ、我々がこのリサーチを行うために描写した手続きは無意味である。もしそれが信頼できる社会調査に基づくなら、社会学的知識の貯蔵への何らかの有意な追加は、政策作成者にそれらの代替肢をもっと明確に理解したり、もっとベターでもっと合理的な政策を定式化したり、彼らの意思決定の帰結をもっと明確に評価することを可能にする点で政策作成者に役立つ洞察を生じるであろう。この仮定が認められないと、構想されている社会学者と政策作成者のほぼ調整された分業はほとんど無意味になる。

多くの社会学者は純粋なりサーチと応用リサーチの違いの存在を認めるが、これらの違いを重要視するものはほとんどいない。つまり、違いは実在するものと認められるが、その違いは純粋リサーチの手続きを応用目的にふさわしくなくさせない。この信念は専門職に大いに好都合であることは強調に値する。それは社会学者にこのため彼らが使い方を知っている唯一の手続き（学術的な種類のリサーチを支配するそれ）を正当化することによって社会に関連した争点に関する応用リサーチを行うことを可能にしてきた。彼らの学界同僚が承認できる、尊重できると見なすりサーチを生み出す一方で、社会学部の学者が現実世界と強い結びつきを維持することを許している。これ以上に、それは基礎的な学問研究と訓練のプログラムを支援する公的資金を要求することに公認を与える。もしその信念が承認されるなら、つまり従来の学問研究の手続きに従うことが歓迎せざる社会状態を緩和したり解決することを助けることに役立つ研究結果を与えるなら、我々はこれまでできてきたことをし続けることが正当化される。しかし、知識群が政策目的に役立つために保有せねばならない品質は学問的理論、リサーチ手続きによって生じない類のものであれば、また前者を後者に翻訳す

る障害が我々が想定するよりも手強いものならば、政策作成集団がコントロールしようと求めている社会的状態に関して我々が今保有している知識のかなりの部分は、実用的見地からは無用のものであろう。それゆえ、上記の手続きに従って、もっと政策に関係したリサーチを行うことは、もっと無関係な知識に導くだけである。その上これがそうであれば、社会学の理論と方法を単に強化することによる、政策に社会学のレリバンスを高めるためになされてきている（次節でみる）提案の多くは疑わしいものである。というのは、知識が増えることが必ずしももっと役立つ知識をもたらすわけではないから。

我々が上記の争点を提起するために選択した事実は、これらの事柄を検討した後で我々が到達した結論を示唆している。これらの結論は、純粋なりサーチと応用リサーチの関係は複雑で問題を積載している、というものだ。多くの場合、学術的理論とリサーチ手続きはそれを変革しようとする努力と容易に合致しない世界に関する知識をもたらす。この事実は、今日社会学でなされる多くの応用リサーチが社会政策に何ら顕著な含意を持たないのはなぜかを説明するのを助ける。実際、我々は、「大半の純粋リサーチは何らかの実用的な効用を持つ、大半の応用リサーチは興味深い理論的含意を持つ」という一部の人によって述べられる意見をミスリーディングなものとして拒絶する（Appendix A 参照）。

結論として、我々は政策に社会学をどのように利用するかについての社会学者の考えは、政策のために社会学を利用する仕方についての彼らの考えに情報を与える同じ学問的視点から派生している。どちらも彼らの構造を学問的関心事から獲得しながら、社会学に始まり、社会学に終わっている。これが正しいなら、彼らがしようと努めていることをどうしたらもっと良く行えるのかを考慮するとき、社会学者が社会学という学問に依拠していることを知っても驚くべきではない。

### 第3節 政策への社会学の有用性を高める

第1章で、我々は社会学を政策に適用する試みの現状をレビューし、応用研究はいかなる種類の政策勧告も生み出すことはめったにないことと、政策勧告を生み出すときにも、それらは政府の政策作成集団によって、役に立たず、現実的でなく、政治的に実行ができないとして拒絶されているという結論に到達した。社会学者はこの事実に気づき、一部のものに、これがどうしてそうなのか、社会学の政策との関連性を改善するためにどんなステップがとられるかを検討するよう促した。数多くの提案がなされてきているが、基本的には二つのアプローチを引き起こしている。一つは、社会学を強化しようとするもの、他は社会学者に政策がどのようになされるかに精通させようとするもの。どちらの提案も、特に前者は、我々

がこれまで語ってきた一勧告されつつあるものを眺めたとたん明らかになる事実—学問的偏向を反映している。

### 3.1 社会学を強化する

多くの社会学者は、アメリカ社会に関する社会学的知識は全国的国内問題を緩和するための手がかりを与えるものの、これらの手がかりはより多くの知識とよりよい知識が入手できないうちは明確に現れない、と感じている。これは応用社会科学の文献に定期的に登場し、政府の運用に関する委員会のリサーチと技術的運用下位委員会に出席した社会学者、社会学者によって与えられた口述書によって例証される。プレゼンターたちは各領域の純粋ないし基礎的研究が行われた後でようやく自然科学は政策にレリバントで有用となると述べた。それゆえ、彼らは社会学におけるレリバンスへの一つのルートは政府が社会科学の基礎的研究を行う一連の国立研究所を設立することと、純粋リサーチの大学に基礎をおくプログラムを支援するのに資金が充たされることを述べた。例えば、議会は新しい未開拓な分野の研究ユニットを作るように口説かれた。概念形成、論理的問題解決、思考と意思決定のような問題を研究するための長期的リサーチプログラムを検討するよう口説かれた。社会変動の理論開発、将来の社会趨勢の予測に社会統計学の利用を鼓舞する方法を見つけるよう口説かれた（House of Representatives 1967: I: 207）。まさにまったく同じ考えがNSFの最終報告書『知識の活用』に示されている。それは20いくつかの社会問題研究所の創設を勧告している。その各々は別々の全国的な社会問題に関する研究に資金を給付する（National Science Foundation 1969）。両報告書において、基礎的研究を完遂するための時間と資金が与えられなければ、社会学その他の社会科学は全国的な問題の解決にたどり着くことは期待できないと述べられている。このため、政府はアメリカ社会の問題と状態に関する広範な基礎的研究を行うために要する金銭的資源を承認しなければならない。

これに関連して、社会学者は社会と人間行動についてより良い理論を開発するために働かねばならないと指摘される。それは政策に対する社会学のインパクトの不在のもう一つの原因は、その理論が弱く、未開発で、不十分である事実に由来するという指摘である。前述のリサーチと技術の運用に関する下位委員会に提出された提案のいくつかは、NSFの最終報告書『知識の活用』と同様この考えを端的に反映している。その上、そのアイデアは他のコンテキストでMerton/Devereux (1949), David Easton (1972: 98-99), Herman Stein (1968: x), Joseph Spengler (1969: 457), Albert Reiss (1970: 290), Harold Orlens (1968: 153), Otto Larsen (1975: 17)のような人々によっても述べられた。彼ら全員は、社会学が公的事柄にもっと大きなインパクトを持つことが期待される前に、社会学理論が改善されねばなら

ないことで一致している。しかしながら、各々は異なった点を強調する傾向がある。例えば、SteinとSpenglerは、社会学理論そのものの重要性を強調する傾向があるのに対して、Merton/DevereuxとEastonは社会科学の諸学問の理論的統一に力点を置く。ReissとLarsenは、政策に志向した社会の一般理論の開発を要求するのに対して、Orlensは社会学者に学際的社会科学の総合を達成するために、社会問題に関する理論と知識の断片を結び合わせ始めることを説いている。力点の違いにも拘わらず、そのような提案は真に政策に関連した社会学の開発はもっと力強い学問的理論の開発にかかっているという共通の前提に立っている。

大学院での養成にも注意が払われてきている。社会学理論の開発や基礎的リサーチの営為は連邦政府の資金をリサーチにつき込むことによって高められる一方で、他のステップもとられねばならない。これらのステップの中には、社会学における大学院養成のプログラムの開発と一層の支援が含まれている。このアイデアは議会に提出された口述書で取り上げられている。そこでは、数人の社会学者が、政府は大学院養成のプログラムへの支援を増やすべきことを述べている。彼らは、長期的にはそのようなステップが政策形成における社会学のレリバンスを大いに改善するだろうと主張している。Merton/Lernerは、応用的仕事に関心のある社会学者は、個別の問題に取り組むために社会科学を超越したりサーチチームが築かれるように、マルチ学問的教育が施されるべきだと勧告した(1951)。David Trumanは、政策の形成に社会科学をもっと効果的にするために学際的社会科学への関与が設定されるべきだと述べて、同意している(1968a: 510)。その上、彼はまた行政官が広範な社会科学の訓練を受けることを要求している。Lucian Pyeは、社会科学において理論を実践に変換するのを促進する最も迅速なやり方は、人々を社会工学士として働けるように訓練することだといっている(1968: 260)。最後にHarold Orlensは、既に応用調査をしている社会学者にもっと良い訓練をするだけでなく、有能な人物を大学院教育のうちに政策リサーチに引き込む涙ぐましい努力を要求している(1968: 153)。

上記の提案は社会学が政策形成において効果的に機能しようとすれば、社会学を強化するためにとられねばならないと彼らが信じるステップを例証する。そこには、社会についての知識が増大するにつれて、社会学者は政策の指令を通じて社会の問題の処理の仕方についてより良い考えを獲得できるようになる、という思いこみがある。しかしそのような提案は、社会学の政策に対する比較的無意味なインパクトという暗黙の診断を伴っている。この診断によると、このインパクトの欠如に主たる責任があるのは、社会学の未熟とその知識の不十分さにあるとされる。そこに暗黙に主張されているのは、我々が社会問題を処理するために有意義な政策の発議を提案するのを可能にする知識を持たないので、政策に対する我々の効果は大きくない、というものである。社会とその制度について知識が多く集まるほど、我々



は政策発議を通じてこれらの問題の扱い方法についてますます明確な考えを獲得できるようになる、という思いこみもある。この診断は、応用社会学の仕事をどのように把握し実行するかに関する考えを彼らの学問に対して内向きに転じる社会学者の強い性向を裏切るものである。その上、診断そのものに疑念を挟む理由もある（J. Weiss 1976：234）。特に、我々はもし実行に移されると、それが生み出す提案が彼らが取り組むことを意図している問題に有効な長期的解決を提供できるかどうかを疑問視する。今から我々の疑念を述べていくことにしたい。

(1) まず上記の提案はフィールド問題の他のものによりも、あるものにより関連があるように思える。明らかに、学問的知識の適合性は我々がたった今論じたばかりの最初の問題、つまり、かくも多くのいわゆる政策に関連したリサーチが国内問題にはっきりとした政策的含意をもたらさなかったのはなぜかの理解にとって重要な問題である。確かに、これは唯一の理由ではないが、考えてみることは重要なものである。だが、我々は上記の提案が問題の他の側面をどのように処理するのか知ることは難しい。具体的にいえば、それは適切な知識が存在しているところで、この知識が政策の実施ではなく、政策勧告しかもたらさないし、なぜなされた勧告の多くが政策作成集団によって、非現実的、実行が無理、政治的に役立たないと拒絶されるのか、という事実に取り組むことに失敗している。社会学の基本的強化が社会学の政策へのレリバンスを高めることはできなくても、高めるのを助けることは信じているものの、社会学の公共政策へのインパクトの（存在ないし欠如している）理由は社会学の内部にだけあるのではないと確信している。実際、人は、社会学の能力を高めるために提案された方策のすべてが実施された後で、政府が我々の助言を受け入れないという状況を容易に想像できる。社会学と政府との関係に関するもっと包括的な視点は、政策に対するインパクトの存在ないし欠如を理解することを要求する。それは現行の視点よりも我々が政策にどんなインパクトを及ぼしているかを確定する際に我々の知識の消費者により大きな役割を認める視点である。これは今日の政策関連の社会学の問題に対する認められている診断と我々が基本的に意見を異にするものであるが、異にするのはそれだけではない。

(2) 我々がいらいらするのは、それが社会学がインパクトを持つ事例に等しく絶対的な説明を与えるかどうかを検討することなく、社会学者がレリバントであることに失敗した事例を説明する関心から診断が生じている事実である。この基準によると、診断は不適切である。それは失敗（成功の不在）しか説明できないように思われる。我々は社会学が社会政策の開発に奉仕可能であることが判明している事例で、その理論が適合的で、その基礎的リサーチが完璧で、大学院養成のプログラムが適切で、その実践者が政策作成者と定期的で密なコミュニケーションを持っていると信じられるのか。この主張は疑わしい。

まずこれまでなされてきた提案のいずれも学問的知識の適用が成功していると思なされるケースから学んだ教訓に基づいている痕跡がほとんどない。実際、我々はそのような事例に言及している例を知らない。次に、我々が楽観と絶望の相対的な根拠を述べたときに引いた事例の一部は、失敗と思なされるプロジェクトで用いられたり引かれていた理論とリサーチのある群を社会学者が引いているリサーチプロジェクトに言及している。最後に、上記のことが当てはまらないときでも、学問的知識とリサーチ方法を社会政策に適用しようとする試みの欠陥の説明が、成功と思なされる努力にどのように照射しているかを知ることは難しい。かくして、この分野の実践の状態についての流布している診断の厄介な側面は、社会学者が成功を正当に主張できる事例と、社会学者が失敗を認める事例の双方を納得のいくように、同時に説明することができないでいる。

(3) 問題点についての上記の診断の妥当性に疑義を挟むもう一つの理由は、Janet Weissが指摘する(1976: 234)ように、提案されている事柄の多くが性質がアドホックであるように思われることである。人は提案の多くが嘗て全体の個別な包括的な把握からではなく、時々生じる個々の限られた批判問題点への一種の条件反射から生じている印象を持っている。あまりに頻繁に、なされている提案の広い長期的含意に何ら思いがめぐらされていない。基礎的リサーチへの擁護の提案は社会政策への社会学の直接のレリバンスに関する議論に含意を持っている。応用的仕事に最も有能な社会学者を関与させるようにという嘆願は、基礎理論の開発と基礎的リサーチの上首尾の達成に含意を持っている。大学院教育の既存のプログラムの変更の提案はマンパワーには短期的な含意、分野の発展に長期的な含意をもつ。より多くのお金の訴えの中では、資金が限られているので、一つのプログラムへの投資の増額は他のプログラムに利用できる額が減額されることを意味する事実ほとんど認識が払われていない。換言すれば、社会学者の診断に欠けているのは、提案されている個々の方策が自分の分野にとってもつ完全な範囲の含意について認識(承認)するという一貫した感覚である。

(4) 我々が提示してきた診断のあるつながりが触れられずに残されている。社会学者は基礎理論を展開するために、そして大学院教育のプログラムを上げるために基礎リサーチへの資金の拡大を要求してきている。しかし、彼らは上記のステップのいずれかが分野内の問題をどのように処理するのか必ずしも説明してきていない。限定的には、我々はより多くの基礎的リサーチとベターな理論が社会政策に対する社会学のレリバンスを高めるだろうと仮定するどんな根拠が存在するのか知らねばならない。その問いはめったに尋ねられず、答えられることはもっと少ないが、それは、含意と語られない仮定によってだけでは扱うことができないあまりに重要であまりに基礎的な争点を含んでいる。

また、我々は批判がどうであれ、既存の診断が無価値であると思なすことを意味してい

ると受け取るべきではない。我々はそれを限られた不完全なものを見なしている。社会学の助言とカウンセルを政府に受容させることにウェイトを置く政策にレリバントな社会学に向かう視点で豊穰化されねばならない。我々はそのような視点がどちらか一方だけでなく、学問的関心事と政策関心事の双方に真剣な注意を向けるに違いないと信じている。この意味で、我々は我々が提案しようとしている視点を、政策に対する社会学のインパクトないしその欠如の競合的説明としてでなく、既存の説明の拡張修正と考えている。

### 3.2 政策形成者との意思疎通

社会学者は彼らが政策に与える影響を確定する際の因子として、政府による社会科学の受容の意義をまったく無視してきているわけではない。争点は公共の事柄における学問のレリバンスを高めるためにとられる他のステップを議論する際に時たま起こっている。多くの政策に関連したプロジェクトでは、両当事者がリサーチが終了するまで政策問題を議論しないといわれる。これは、起こっている落胆の一部に責任があると思われる。結果として、リサーチプロジェクトが定式化されてから完了するまで、たくさんの人々が学界の社会学者と特定の政策領域で働く人々のもっと密な協力を要求してきた。

Walter Williams は強くこのアイデアを推奨している(1971: 65)。彼の著書『社会政策リサーチと分析』で、彼は社会政策にレリバントなリサーチをすることを願っている社会学者とアドバイスを与えてくれる社会学者を捜している政策作成者のコミュニケーションチャンネルをどうやって改善するかという問題にかなりの注意を払っている<sup>20</sup>。社会学者と政策作成者の密な意思疎通が社会学者がどんな政策問題を研究すべきかに気づかせ、このリサーチから到来する政策勧告を実施に移す際の政治的実際的障害に理解を持たせるのを助けるであろうという感覚が感じられる。

我々は上記の提案を正しい方向の重要なステップとして歓迎する。だが、同時にそれらの提案はコミュニケーションを切り開くために具体的に何がなされねばならないかの考えをほとんど搭載していない。社会学者と政策作成者は彼らがまだ知らないその方策を通じて何を学ぶことが期待されているのか。両当事者の協力は何を引き起こすのか。それは社会学者が仕事をする仕方をどのように変更するのか。上記の問の答えは、明白でもないし簡単でもないが、反応は政策の関連した仕事が構想され実行される仕方に有意な含意をもたらす。我々の分析は、この提案が何を引き起こすか、それが社会学にどんな意義を有するかを指摘することである。

次号に続く

---

<sup>20</sup> 同じ考えはOrlans (1968: 153), Merton/Lerner (1951), Coleman (1972: 18), Reiss (1970: 290), Larsen (1975: 17), Lazarsfeld et al. (1975: 40-46, 138-145)によっても強調されている。



## 東北学院大学学術研究会

|                      |   |
|----------------------|---|
| 会 長                  | 星宮 望  |
| 評 議 員 長<br>編 集 委 員 長 | 吉田 信彌   |
| 評 議 員                |   |
| 文 学 部                | 遠藤 裕一 (編集)<br>佐藤 司郎 (編集)<br>辻 秀人 (編集)         |
| 経 済 学 部              | 越智 洋三 (会計)<br>細谷 圭 (編集)<br>郭 基煥 (編集)          |
| 経 営 学 部              | 菅山 真次 (会計)<br>目代 武史 (編集)<br>折橋 伸哉 (編集)        |
| 法 学 部                | 黒田 秀治 (編集)<br>白井 培嗣 (編集)<br>木下 淑恵 (庶務)        |
| 教 養 学 部              | 吉田 信彌 (評議員長・編集委員長)<br>野村 信 (編集)<br>柳井 雅也 (庶務) |

### 東北学院大学教養学部論集 第156号

2010年7月15日 印刷  
2010年7月22日 発行 (非売品)

編集兼発行人 吉 田 信 彌  
印刷者 笹 氣 幸 緒  
印刷所 笹氣出版印刷株式会社  
発行所 東北学院大学学術研究会  
〒980-8511  
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号  
(東北学院大学内)

---

---

# FACULTY OF LIBERAL ARTS REVIEW TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

No. 156

July, 2010

---

---

## CONTENTS

### Articles

- Labor-Market Entry of Moratorium Man .....Kazuo KATASE..... 1
- Status Identification in the Rapid Economic Growth Era:  
Note on Social Identification in Postwar Japan (I)  
.....Hiroshi KANBAYASHI..... 25
- Tilesius und Japan (3. Teil)  
Allgemeine Bemerkungen zu Japan und Bibliographie seiner Schriften  
.....Frieder SONDERMANN und Günther STERBA..... 55
- (Apparent) Counterexamples to Template-Matching Model  
.....Naohiko TAKAHASHI..... 95
- Observations on the Chinese Labour Market (2) .....YANG Shi Ying..... 105
- Cees Nooteboom lesen 2) — „Tropische Erzählungen“ und „Der Ritter ist  
gestorben“.....Yoshimochi SENJI..... 119
- The Dao of Clamming .....Scott WATSON..... 163
- Instability of Charged Vector Field by a Strong Magnetic Field and Chaos  
Patterns II Dissipative System .....Koichi TAKAHASHI..... 169

### Study Note

- Context Dependent Linguistic Development :  
Notes from an Elementary School English Program  
.....Tomoko WATANABE & Manabu WATANABE..... 197

### Translation

- Robert A. Scott & Arnold R. Shore  
Why Sociology Does Not Apply: A Study of the Use of Sociology in  
Public Policy (The First Half) .....Toshitake KUJI..... 209

The Research Association Tohoku Gakuin University  
Sendai Japan

---

---

---